我が 国及び各国に対する参加招請

26 昭和3年3 H 田中外務大臣宛(電報) 長より 長ぶり本ーヴ佐藤(尚武)連盟事務局

盟理事の会談について 不戦条約に関する日・英 仏 • 伊・独五国連

ネ 省ヴ 3月8日後着

仏国 安達理事 Ŧ リタリト信スルヲ以テ自国ノ立場ヲ説明シ諒解ヲ求ムトテ 五国理事参集シ理事会日程中ノ主要問題ヲ内議 三月六日夕刻 「ブリアン」ヨリ所謂不戦協定ニ関スル米、仏間公文往復 件ニ 認 ルメシムル カ今次 トシテハ米国ノ 様ナ 関シ仏国以外 ルノミナラス玖馬汎米会議ノ決議ナルモノヲ引ノ米国公文ヲ見ルニ其ノ真意米国側ニ徹底シ居ル要アリト思考シ曩ニ対米回答ヲ発シタル次第 「ブリアン」ノ宿舎ニ 立場ヲ認ムル 、ノ四国ニ対シテモ米国ヨリ何等交渉ア ト同時ニ連盟国 英、 伊 シ 1 タ · 義務ヲ ル Ħ 際

> シタリ ヲ引受ケムコト 三国会議ニ於テモ然リト 達ヲ希望スル英国トシテハ甚タ痛心シ居ル処ナリ由 シ 用 ハ先ツ自己ノ成案ヲ作リ之ヲ他国ニ強フル傾アリ ノ意見ハ連盟存立ノ根本ニ触ルル大問題ト思考シ連盟ノ発 ・ミナル 対仏公文写ノ送付ヲ for consideration ト 仲裁裁判問題ニ関シ申込ヲ受ケタ カラムト思考スル旨ヲ述ヘタルニ対シ英国外相ハ米国 セ ノ点ニ 処(独、伊両理事モ同様ナリ 関シ申入 ニ於テ鮮 ヲ望ミ独外相亦仏国 ル カラサル ル積リナル 述へ差当リ仏国ニ於テ米国 誤解ア ルカ右ハ余 ル ル ノ対米交渉継続ヲ希 ト言 ヲ確 モ本件協定 リ急カ カ ヘリ)右米国側 シテ受ケタ メ タ サル 昨 ル = 年寿府 来米国 関 ŀ = シ 方宜 折 ル \exists

目下攻究中ナル旨ヲ内話シタ ク 国ノ態度ヲ非難シ本問題ヲ重大視ス 英外相ハ五 、スルコトナク而モ米国ニ満足ヲ与フル 日 理事会席上本使ニ対シ前記同 IJ ル 旨並連盟ノ基礎 如キ案ヲ得ム 様 ノ意味ニ アカ テ ŀ テ

独 仏 伊 へ転電セ

IJ

27 昭和3年4 月(5)日 田中外務大臣宛在英国松井大使 (電報)

バ レンとの会談につい し不戦条約問題その他に関する Ť

着 発

4月5日

第四八号

往電第四五号ニ

軍縮及不戦条約問題等ニ付談話ノ次第左ノ通何等御 三日本使暇乞ヲ兼ネ「チエンバレン」ヲ訪 表ス 話合ヲ著ケ得 感シ居り 的確ノ見据ヲ付ケ難キモ予テ屢々述ヘタ 支那問題ニ関シ本使ヨリ支那時局ノ対策ニ付テ ル シ 一致ハ時ニ困難ノ場合アリタ (ノ行動ヲ必要トスル旨ヲ語リタ タ コト ルカ英支間 又南京事件ニ付米支間交渉妥結ノ旨ハ昨 通り ハ 出来難 ヘキカ 支那 ト思考シ居リ条約改正ニ付テ 羊 ニ於テモ砲撃ニ付正 正当ナ モ 米支間ノ如 ル 希望ハ充分認ムル ルモ自分モ其必 キ様 ルニ「チ」ハ 式ニ ピ支那問 式ニテ何等 ル通リ日 遺 後感ノ 日英米間 夜電 変み痛 参考迄 意向 八一昨 、ハ何等 題 カララの

> 察セラ ハ 外相自 質問 前顕「ウ」ノ言フ処ニ比シ幾分ノ開 第四五号「ウ」ニ対スルト同様ノ質問ヲナシタル 考へ居ル訳ナリ 確立シタル後初メテ前記覚書ノ通交渉ヲ開始シ得 モ具体的問題ニ付テハ容易ニ解決ヲ見サル カ之カ廃止方保障取付ケ様無シ要スルニ曩ニ駐日大使ヨ ノ忍耐ヲ要ストノ貴国政府ノ意向ニハ同感ナル リ報告アリタルカ支那問題ニ付テハ容易ニ纒メ難ク充分 チ」ハ全然同感ニシテ殊ニ不法課税ハ困ツタ問題ナル ニ対シ「チ」ハ英国トテモ大体米国同様支那 3 ノ条約改正ニ付テハ各国共寛大ノ態度ヲ表明シ居 リ貴国公使ニ披露済ナル ニ対シ常ニ同 カ妥結ヲ見得ヘシ 身 ノ立場ト ト述へ次テ本使ヨ ーノ 政治上ノ関係ヲ 言明ヲ繰返ス訳ニモ行カ ŀ 思 ヘシト述ヘタ ハ リ関税問題ニ関シ往電 ル 顧慮 尤モ右 キア ル様認 ス カ如シト云へ ルニ付本使 ハ既 ル カ パニ在支公 ノ政府 為ナ メラ スト カ 議会ノ ニ対シ ヘシト ル右 述へ IJ

モ英国ニ於ケ 対露関係ニ付テ フ」ト接洽シタ ル ŀ /\ 同様ノ行動ニ出テ居 ルモ何等ノ結果ヲ得ス露 「チ」 ハ過般寿府 ル = 於 由 八仏国ニ = テ テ今 リ 卜 於テ ウ 1

覚書ノ

29

昭和3

年

4

貞

(16)

В

田英外国

務大臣利

|宛(電報) |臨時代理大使より

等局面 展開 ミナシト

三、次テ不戦条約問題ニ言及シタ 難キ次第ナレハ右ノ諒解ヲ付ケル ウ」主義ニ反スル第三国ノ行動ヲ黙視シ得サル 約ハ戦争廃止ニ関スル各国ノ希望ヲ表明スルニ過キサ 渉成立ノ上ハ我方ニモ提議シ来ル 意ヲ迎ヘテ総選挙ニ備ヘントスル 果大規模ノ海軍拡張案出テ之ニ平和論抬頭 態度ヲ決メ居ラサルモ米国トシテハ三国会議不成 ハ埃及問題モアリ或ハ「ロカル ノナル故之ニ応シテ可ナリト思ハル尤モ米ハ ハ単ニ米仏間往復文書ノ写ヲ送付シ居 ン 努メ居ル事情ナレハ不戦条約ニ依リ平和論者 ノ」条約 ル ルニ「チ」 要アリト思フト ヘキ様思ハル 意向モアル ジノ違反ヲ黙視 ルノミニ シ大拡張 ヘクク 本問 ト同様英 「モンロ ル カ右条 米仏交 労ノ ·述へ テ 題 何等 ヺ = 緩 シ ル 1

海陸空ノ各問題ニ付意見ヲ異ニシ居ルニ付二日 キ多数国ノ会議ニテハ成功困難ナリ現ニ英仏間 ン」ニ面会ノ際何 セハ頗 終リニ軍縮問題ニ関シ「チ」ハ ノ話トセハ比較的容易ナランモ同時ニ三国間 B会ノ際何トカ話合ヲ付クル事必要ナリト語リタッ各問題ニ付意見ヲ異ニシ居ルニ付二日「ブリアIIノ会議ニテハ成功困難ナリ現ニ英仏間ニ於テハペル困難トナル況ンヤ「ゼネバ」準備委員会ノ如 ル 本問題ハ日英々米等二 ノ話 合

> 覚束ナカル 頓 未タ何等具体的進捗ヲ見スト述ヘタ タ ウンス」提督過般来「ゼネバ」ニ出張シタ ナ ニ付公式非公式ト謂ハス何等カノ話合アリタルヤ ラ 必要アルコト勿論ナ 会議ニ依ル会議アル筈ナルカ打合セナシニ ルニ何等話合ナシト答へタルニ付一九三一年ニ = /ムト述 「ブ」モ同感ニテ自ラ之ヲ考慮 ヘキ旨ヲ指摘シタルニ「チ」ハ会議前話合 \sim タ ij ルカ米国 ラ 総選挙アリ リ本使 ス ヘシ 八米国 ル ト 一開クモ成 今年ハ カ海軍 ハ華盛 「ジ 卜 タ · 尋 ネ 軍縮 困 ル E 功 ∄

28 和3 年4 Ā (15) 日 田中外務大臣宛在米国松平大使

日 • 米国各紙論調につい 英 独・伊政府へ の米国案提議に関

ン

省 亨 15 日

紐牒 ・戦条約問題ニ関スル ハ四月十三日公表セラレタルカ今日迄ノ新聞論調左ノ通 「タイムス」ハ右通牒中ニ防衛戦争其ノ他本問題 米国政 府 ノ対日、英、 独 伊同文通

反対ア 又費府 大国間 本条約案ニ応諾ノ見込少ク 昧ナル行動ヲ明瞭ナラシメタル上ナラテハ加入セ 加 ん他ノ ナシ尚日、英、独、伊ノ回答ハ相当手間 入ノ場合ニハ之カ修正ノ要アルヘク現ニ「ニカ 一層然リト述フ ルヘキ而已ナラス其ノ 「ラテン・アメリ ノミニテハ今次条約案ニテ可ナリト 「レッヂャー」ハ右四国ノ回答中ニ ニ付何等言及シ居ラサ カ」諸国ハ近来米国ノ 殊ニ 他ノ 六大国以外ヲ ル / 反対ヲ " ŀ ヺ 指摘 含 ハ仏国 ・スル ムヤモ知レ 取 **ルヘシト** セル 加 んそ他ノ 執 入 (ラガ サ ŋ 上仮 セ `**** - 同シキ シ タ ル ムステ 述 ヘシ ル 諸 ニ六 其 国 ~ 曖

伊、 白 = 郵送セ IJ (前電郵送)

不戦条約米国案に関する英国各紙論調につ

τ

ンド

省 月 16 百 前着発

第五七号

四日新聞 ハ 孰 $\dot{\nu}$ モ 米国側ノ戦争否認条約案提出ヲ報道シ

> 之ニ関シ論説ヲ掲 一、本案ト連盟及 盾スル 国策遂行ノ手段トスルモノト云フヘカラス若シ此ノ点了 米仏間ニ意見ノ一致ヲ見サル セラレナハ米国提議ノ受諾ハ是等ノ 手段トシテ戦争ノ可能性ヲ認ムト雖モ之ヲ以テ戦争ヲ 関係ヲ有ス連盟モ「ロカルノ」条約モ平和維持ノ最後 モノニ非ス ヘ「ロカル ケタ (タイ ル カ (ノ」条約 ·ムス) 主ナル意見左 カ本件ハ英国ノ態度ニ至大 ŀ ノ関係ニ付テ 玉 1 加 際約束ト何等矛

約ニ付同様ノ虞ナキヤ 提議シナカラ後ニ至リ之ニ加入セサリ スト雖モ英又ハ仏ハ之ヲ黙視シ得サ 又ハ波蘭ヲ侵シタル場合右侵略国 戦争ヲ一般的ニ否認スルコト (モーニング・ポ ハ困 「ハ本条約ノ当事国 ルヘシ又米ハ連盟ヲ 難 ショ ナリ ス <u>۱</u> トアル 独逸 カ カ本条 7.白耳義 ニ非

三、連盟ハ本条約成立ニ対スル重大ノ障害ニ非ス真 ハ欧州諸国間 1 軍事協定ヲ含ム特殊条約 ナ IJ p 7 困 =

加 米国ト連盟ト 連盟 ヘム J ハ トヲ希望ス 玉 - ヲ結 1 加 フモノナリ政府カ最モ同情ア 入 ナ (デ ク 1 シ ij テ平和ヲ 1 = 確保 ュ 1 シ難 ろ) + ル考量 処 本案 ヲ

Homme Libre 等)

非締約国ヲ侵略セムトスル場合防

止

1 を途った

シ

(Voix,

条約案カノニアル

ノミ然ラスム

ハ締約国ノ一国カ他ノ

ノ網羅ス

三、米国案ハ意義不明且制裁条項ナク斯ノ如キ条約カ連盟

規約

ノ上ニ存在スル

コトハ却テ国際関係ヲ紛訌

ロセシムル

ノミ

(所謂

Instrument of

National Policy

ノ提議不明

ヲ指摘ス) (Debats)

四

ノ際列国カ今次米国提議ニ応スルコト

ハ曩ニ

_ ウィ

・去ラ

ル

ソ 此

ン

提唱セル連盟規約カ米国上院ニ於テ葬リ

五、戦争否認ノ道義的効果ハ数年来建設シ来タル平和保障 ナ IJ 実際的制度ヲ放棄セシムルニ足ルノ効アリヤ否ヤ問 題

(テレグラフ)

コト ナリ 着カシムルニ至ル 議セムトスル時ハ米国ヲシテ連盟国タル仏国ノ見解ニ近 ヘシ 二 止 的警察ノ為ノ兵力使用モ不法トナル約束ヲ有効ナラシム トス此ノ二者ヲ欠ク時ハ約束ハ単ニ空漠タル平和ノ保障 ルモノトヲ区別スルコト及紛争ノ平和的解決機関ヲ必要 為ニハ戦争ヲ提議シ又ハ否認 ルモノニシテ之ヲ弱 「ブリアン」ノ欲スル 戦争ヲ避クル為米国ト連盟ト |マリ多少ノ効果アリトスルモ之ト同時ニ危険ヲ伴フ コソ現下ノ最モ緊要且実際的ノ事業ナリ War as instrument of national policy ヲ明確ニ提 ヘシ米国ノ連盟加入 ム ムルモノニ 留保ト条件 セラルヘキ戦争 非ス米国案ニテ ノ間ニ妥協点ヲ見出 -ハ条約ヲ ハ最早架空ノ問題 明 (ガー 確 - 然ラサ ハ ナ ジア 玉 ラ 際 ス シ

仏 独 = 郵送 セ 1)

昭和3年4月17 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使 (電報)

不戦条約に関する米国の対四国提議に対する 仏国各紙論調について

46

本パ 省リ 4 4 月月 718日前着 17日後発

不戦条約

ル

等)二種アリ又今後ノ仏国政府ノ対案トシテハ要スルニ三 (1)米国政府カ仏国側ノ 依ルモノト評スルモノ頗ル多数アル処今後ノ観測トシテ 云フニ一致シ居ル一方之ヲ以テ「ケロッグ」ノ選挙政策 論調ハ大体ニ於テ米国政府カ仏国留保ノ四項ヲ全然無視 リヤ疑問ナリト悲観的口調ヲ洩スモノト(Volonte Oeuvre 英独伊モ結局仏 断シ難ク米国ノ提案ニモ修正ノ余地ヲ存シ居レリ而シテ日 ルモノニシテ米国政府ノ立場ハ毫モ拘束セラル モニ三アリ)提議ハ米国政府独自ノ責任ニ依リテ為サレ ノ裁定ニ付セラルル事ト (Temps Matin 等) ヲ不満トシ(米国ニ背負投ヲ食ハサレタリト慨スル 戦条約ニ関 スル米国政府 国ト (四今ヤ米仏両国ノ主張ハ他ノ四大国 同 様ノ立場ニアリト論ス 留保ニ真向ヨリ反対ナリト ナリタル ノ対四国提議ニ カ果シテ仏国側ニ勝味ア 対 ス ル ル ル事無シト 当地新聞 ハ未タ即 モ ノト モ ハ タ

Gaulois) タル 1 事例 ヲ繰返サ 厶 1 ス ル モ 7 ナ = (Echo de Paris

英、 米、 独、 伊 ^ 、郵送セ

尚其ノ他重ナル論評左ノ通@

観測アリ

(Petit Parisien Echo

de

Paris ・スル

モノナ 等)

ル

^

シ

ŀ

一、客年六月「ブリアン」当初ノ

対米提議ハ

軽率

ナ

(Debats)

月二十六日付対米公文ノ趣旨ヲ基礎ト

31 昭和3年4月19 H 在米国松平大使宛田中外務大臣より (電報)

マクヴェー駐日米国大使による米国の不戦条

記 三六号 (英文) 昭和三年四月十三日付駐日米国大使書翰第三

同和訳文

二、仏国ノ受諾シ得ルハ侵略戦争ノミヲ禁止スル六国条約

テ初メヨリ何事モ為ササリシニ如カス(Avenia) 講シタルモ未タ成功セス遂ニ今日ノ事態ニ至レル 過キサリシニ意外ニモ問題重大化ノ惧生シ種々骨接策ヲ

次第ニ

約案の手交について

其ノ真意ハ単ニ文字上ノ成功ヲ得ムトスル

= IJ

案カ或ハ無条件ニ戦争ヲ禁止スル代リ一切ノ国

Ξ 米国の不戦条約案に関する田中外務大臣と駐 日米国大使との会談録

本 省 4月19日後発

提議スル不戦条約案ヲ手交セル後初メ本条約案提示ニ当ツ Ξ テハ米仏協同ニテ之ヲ為スノ諒解ナリシカ其ノ後仏国政府 国政府ノ日、 条約問題ニ関シ米仏間ニ往復セラレタル文書ノ写ト 四月十三日午後米国大使本大臣ヲ来訪 IJ. 右ハ先ツ米国政府ノミニテ各国ニ提議セラレ度ク仏国 英、米、 仏 伊、 独六国間ニ締結センコトヲ シ昨年六月以来不戦 共 ご米

第七八号

47

唯提議ノ内容ニ付テハ篤ト考量ヲ加ヘタル上何分ノ ラサル テ六大国間ニ該条約締結セラレタル暁ハ米国政府ハ更ニ其 議ハ全然米国政府ノミノ責任ヲ以テ之ヲナスモノナリ而 及フヘシト答へ置キタリ 之ニ対シ本大臣ハ戦争終止ノ為ニハ御互ニ努力セ 回答ヲ得ンコトヲ希望スル次第ナリト述ヘタリ 如何ナル点ニ修正ヲ加フヘキカニ付キ可成速ニ日 ヘキ地位ニアル旨回答ヲ得度ク若シ然ラサル場合ニ於テ 素ヨ 他ノ各国ヲモ加入方勧誘スル意向ナリト説明シ米国政府 日本政府ヨ 各国ニ申送ルコト リ該案ノ大綱ニハ異存ナキモ其ノ意見ハ別ニ仏国 ハ勿論ニシテ本提議ノ趣旨ニ リ本条約締結ノ為好意ヲ以テ考量ヲ加 トスヘシトノ申入アリタル為今回

|本政

府

ラハ

題ニ関シ関係国ニ提議スヘキニ付其レ迄米国ヘノ回答ヲ見 超ヘテ十六日午後仏国大使出淵次官ヲ来訪シ今回 合セラレムコトヲ希望スト 案ハ同国政府限リノモノニテ仏国政府ヨリ ノ希望ハ之ヲ諒承セル旨答へ置ケリ 申入レタ ルニ付次官 ハ近日別ニ本問 ハ仏国政府 ラ 米国 提

独、

伊ニ転電アリ

度シ

付 記

3

[ノ提

シ

EMBASSY OF THE

UNITED STATES OF AMERICA

Tokyo, April 13, 1928

No. 336

Excellency:

ヘラ

ル

been clearly set forth in the correspondence of war. the question of a possible international renunciation and the United been exchanged between the Governments of France As Your Excellency is aware, there has recently The views of the States a series of notes two Governments dealing with between have

ハ主義ニ於テ賛成ナリ 御互ニ努力セサルヘカ

回

答

=

open to subsequent adherence by and Japanese Governments a single multilateral treaty conclude with the French, institution of in its note of The Government of the United war abolished and stands ready February 27, 1928, desires to British, any and States, German, all as stated see , Italian other the

Governments binding the parties thereto not to resort of the would have tremendous moral effect and ultimately pacific settlement of international controversies

war with one another.

of the world. lead to the adherence of all the other Governments

and to cooperate with other nations in any practical

less eager to promote the cause The Government of the French

of

world

peace

Republic,

while

movement towards that end, has pointed

out certain

considerations which in its opinion must be borne in

by those Powers which are

members of

the

League of Nations, parties to the treaties of Locarno

ð

other treaties guaranteeing neutrality

point where it seems essential, if ultimate to be attained, that the British, German, Italian success and

of your Government the text of M. Briand's original me formally to transmit herewith for the consideration French Republic as to this procedure, complete agreement with the Government Government of the renunciation ticipation with the its existing commitments constitute a Japanese France and the United States portunity formally to decide to what The discussions which have taken place between Governments of war. United United In these circumstances should States in States having have thus reached each have an unqualified bar extent, has instructed to its parreached an Ħ; any, -do the the

Great Britain, Germany, Italy, Japan and the United

a treaty solemnly renouncing war

Ħ.

favor

proposal of

last June,

together

with copies

of

the

of

the entire family of nations, join in such

moreover, that

the

execution

bу

France,

a treaty.

Ιt of

for its own interests, as well as for

the interests

every nation in the world can, with a proper regard

for a multilateral treaty, and is of the opinion erations necessitate any modification of its proposal My Government has not conceded that such consid-

that

Ħ. identical with that of the corresponding articles sideration a preliminary draft of a treaty representing ed by my Government to transmit herewith for confor the renunciation of war. I have also been instruct-United States on the subject of a multilateral treaty the treaty which M. Briand proposed to Articles disposed. Governments with the French, British, German, Italian and Japanese Government of the United States is prepared to notes subsequently exchanged between France and the general way One and Two of this draft treaty is practically It will be observed that the language and any other the form of treaty which the Governments similarly the United sign of

The Government of the United States would be pleased to be informed as promptly as may be convenient whether Your Excellency's Government is in a position to give favorable consideration to the conclusion of a treaty such as that transmitted here-

with, and if not, what specific modifications in the text thereof would make it acceptable.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurances of my highest consideration.

signed: Charles MacVeagh

His Excellency

Baron Giichi Tanaka

His Imperial Japanese Majesty's

Minister for Foreign Affairs,

etc. etc.

Draft of Pact of Perpetual Friendship

between France and the United States The President of the French Republic and the President of the United States of America,

Equally desirous of affirming the solidarity of the French people and the people of the United States of America in their wish for peace and in their

renunciation of a recourse to arms as an instrument of their policy towards each other,

And having come to an agreement to consecrate in a solemn Act these sentiments as much in accord with the progress of modern democracies as with the mutual friendship and esteem of two nations that no war has ever divided and which the defense of liberty and justice has always drawn closer,

Have to this end designated for their plenipotentiaries, to wit,

The President of the French Republic (name)

The President of the United States of America

Who, after having exchanged their powers, recognized in good and due form, have agreed upon the following provisions:

Article :

The high contracting powers solemnly declare, in the name of the French people and the people of

the United States of America, that they condemn recourse to war and renounce it respectively as an instrument of their national policy towards each other.

Article 2

The settlement or the solution of all disputes or conflicts, of whatever nature or of whatever origin they may be, which may arise between France and the United States of America, shall never be sought by either side except by pacific means.

Article :

The present Act shall be ratified. The ratifications thereof shall be exchanged at......as soon as possible and from that time it shall have full force and value.

In witness whereof the above-named plenipotentiaries have signed the present Act and have thereunto set their seal.

Done at.....in two copies (each drawn up both in French and English and having equal force), the (date)

nineteen hundred and twenty-seven.

Reply of the Secretary of State to M. Briand's Proposal. Washington. December, 28, 1927.

Excellency:

I have the honor to refer to the form of treaty entitled "Draft of Pact of Perpetual Friendship between France and the United States," which His Excellency the Minister of Foreign Affairs was good enough to transmit to me informally last June through the instrumentality of the American Ambassador at Paris.

This draft treaty proposes that the two powers should solemnly declare in the name of their respective peoples that they condemn recourse to war, renounce it as an instrument of their national policy towards each other, and agree that a settlement of disputes arising between them of whatsoever nature or origin they may be, shall never be sought by either

party except through pacific means. I have given the most careful consideration to this proposal and take this occasion warmly to reciprocate on behalf of the American people the lofty sentiments of friendship which inspired the French people, through His Excellency M. Briand to suggest the proposed treaty.

The proposed treaty extends the scope of that contake the place of the arbitration convention of 1908. posed in my note to you of December the form of the arbitration treaty which I have promaterially advances the cause of world peace. My opinion that every every opportunity for joining with the other Governviews on the subject find a concrete expression in resort to arms for the settlement of justiciable disputes, tration, and every treaty repudiating the idea of a anew its faith in arbitration. ments of the world in condemning war and pledging The Government of the United States international indorsement of arbi-It is firmly 28, welcomes 1927, to of the

vention and records the unmistakable determination of the two Governments to prevent any breach in the friendly relations which have subsisted between them for so long a period.

France instrument of national policy. of the world to a declaration renouncing war contribution to world peace by joining suggested by M. Briand, might make a more themselves with a bilateral declaration of the between them, which is recorded in the draft arbitratlement of such controversies as may possibly arise the two nations never to resort to arms in the engagement and in view pily is not dependent upon the existence of any formal obtain the adherence of all of the principal powers ln treaty just referred to, it has occurred to the two Governments, instead of contenting and the United States a friendship which hapview of the traditional friendship between of the common desire Such a declaration, if ij. an nature as signal effort setan of

States to into an appropriate multilateral treaty, I shall be happy is willing to join with the Government of the United international disputes. national policy in favor of the pacific with the Government of France with a view the United States is prepared, therefore, France and the United States. an arrangement heretofore suggested only as between thus perfecting among all the powers of the but be an impressive example to all the other nations executed by the principal world powers, could not demning war and renouncing it as an conclusion of a treaty to subscribe in engage at once the world, open to signature by all nations, conthe world, and might conceivably lead such nations and the other principal in this endeavor, and to enter with the United their turn to in conversations looking to among the principal powers If the Government of France powers of the the same The Government of settlement of instrument of to instrument, to concert the

sug- policy between France and the United States.

54

According to Your Excellency, the two Governments, instead of limiting themselves to a bilateral treaty, would contribute more fully to the peace of the world by uniting their efforts to obtain the adhesion of all the principal powers of the world to a declaration renouncing war as an instrument of their national policy.

Such a declaration, if it were subscribed to by the principal powers, could not fail to be an impressive example to all the nations of the world and might very well lead them to subscribe in their turn to the same pact, thus bringing into effect as among all the nations of the world an arrangement which at first was only suggested as between France and the United States.

The Government of the United States, therefore, would be disposed to join the Government of the Republic with a view to concluding a treaty between

gested by M. Briand for submission by France and the United States jointly to the other nations of the world.

Accent Excelleney the renewed assurances of

preparation of a draft treaty following the lines

Accept, Excelleney, the renewed assurances of my highest considoration.

AN ENGLISH TRANSLATION OF A NOTE DATED JANUARY 5, 1928, FROM THE FRENCH AMBASSADOR TO THE SECRETARY OF STATE

Mr. Secretary of State:

By a letter of December 28th last, Your Excellency was kind enough to make known the sentiments of the Government of the United States concerning the suggestion of a treaty proposed by the Government of the Republic in the month of June 1927, with a view to the condemnation of war and the renunciation thereof as an instrument of national

the principal powers of the world which, open to the signature of all nations, would condemn war, would contain a declaration to renounce it as an instrument of national policy and would substitute therefore the pacific settlement of disputes between nations.

Your Excellency added that if the Government of the Republic agrees thus to join the Government of the United States and the other principal powers of the world in an appropriate multilateral treaty, Your Excellency would be happy to undertake immediately conversations leading to the elaboration of a draft inspired by the suggestions of M. Briand and destined to be proposed jointly by France and the United States to the other nations of the world.

The Government of the Republic appreciated sincerely the favorable reception given by the Government of the United States to the proposal of M. Briand. It believes that the procedure suggested by Your Excellency and carried out in a manner agree-

able to public opinion and to the popular sentiment of the different nations would appear to be of such nature as to satisfy the views of the French Government. It would be advantageous immediately to sanction the general character of this procedure by affixing the signatures of France and the United States.

of all states and invite them to adhere. employ all pacific means. ever nature which may arise between them they declare that for the settlement of differences of whatties shall renounce all war of aggresstion and shall present time by France and the United States ties will engage to bring this treaty to under the terms of which the agreement by all nations a treaty to be signed at the Government of the United States in proposing for ment of the Republic is disposed to join with the I am authorized to inform you that the Govern-The high contracting high contracting the attention parwill and

The Government of the Republic is convinced

that the principles thus proclaimed cannot but be received with gratitude by the entire world, and it does not doubt that the efforts of the two Governments to insure universal adoption will be crowned with full success.

Pray accept (etc.)

..... Claudel

TEXT OF A NOTE FROM THE SECRETARY OF STATE TO THE FRENCH AMBASSADOR AT WASHINGTON, DATED JANUARY 11, 1928.

Excellency:

In the reply which your Government was good enough to make to my note of December 28, 1927, His Excellency the Minister of Foreign Affairs summarized briefly the proposal presented by the Government of the United States, and stated that it appeared to be of such a nature as to satisfy the views

ences that might arise between them all peaceful means for the settlement aggression and should declare that they would employ high contracting parties should renounce all wars of and the United States, under the terms of which the treaty to be States in proposing for acceptance disposed to join with the Government of the United he added that the Government of the Republic was of the French Government. signed at the present time In these circumstances by all nations a $^{\text{of}}$ any bу

The Government of the United States is deeply gratified that the Government of France has seen its way clear to accept in principle its proposal that, instead of the bilateral pact originally suggested by M. Briand, there be negotiated among the principal powers of the world an equivalent multilateral treaty open to signature by all nations. There can be no doubt that such a multilateral treaty would be a far more effective instrument for the promotion of pacif-

ic relations than a mere agreement between France and the United States alone, and if the present efforts of the two Governments achieve ultimate success, they will have made a memorable contribution to the cause of world peace.

my note of December 28, 1927. the Government of the United States had in mind when it submitted to you the proposition outlined an interpretation not in harmony with the idea which note of January 5, posed treaty is concerned, the language of M. Briand's accord so far as the multilateral feature of the proernment of While the Government of the United 1928, States is in two respects open to France and the Govare now closely Ħ. Ħ.

In the first place, it appears to be the thought of your Government that the proposed multilateral treaty be signed in the first instance by France and the United States alone and then submitted to the other powers for their acceptance. In the opinion of

of their purpose great be willing to jeopardize the ultimate accomplishment United States are too deeply interested in the success be acceptable liminary discussions and a text devised which would cerned could be accommodated through informal preto suppose that the views of the Governments form of treaty, since it is by no means unreasonable definitive approval by any Government of a proposed disagreement as to terminology This unhappy result come into force and the for some reason be unacceptable to one of the other acceptable to France and the United is open to the objection that a treaty, even though the Government of the their endeavors for the advancement of the United States would be powers. In such event the treaty could not to them by incurring unnecessary would not necessarily follow a all. United States this procedure present efforts of France Botharising prior to the rendered abortive. France States, and riskmight conof. ð

tirely agreeable to joining with the Government of the I have no doubt that your Government will be endraft treaty submitted by M. Briand last June should ernment of the United States would be unacceptable to them. As indicated below, fronting the other powers with a liminary agreement as to the language to be used in ers concerned for the purpose of United States and the Governments of the other powdisagreement with the other powers concerned, and made the basis of such preliminary discussions. proposed treaty, thus obviating all danger of con-Government of France would agree that the definitive treaty reaching a pleased if the Govpre-

In the second place, and this point is closely related to what goes before, M. Briand's reply of January 5, 1928, in expressing the willingness of the Government of France to join with the Government of the United States in proposing a multilateral treaty for the renunciation of war, apparently contemplates

that the scope of such treaty should be limited to wars of aggression.

The form of treaty which your Government submitted to me last June which was the subject of my note of December 28, 1927, contained no such qualification or limitation. On the contrary it provided unequivocally for the renunciation by the high contracting parties of all war as an instrument of national policy in the follwing terms:

Article :

The high contracting powers solemnly declare, in the name of the French people and the people of the United States of America, that they condemn recourse to war and renounce it respectively as an instrument of their national policy towards each other.

Article 2

The settlement or the solution of all disputes or conflicts, of whatever nature or of whatever

origin they may be, which may arise between France and the United States of America, shall never be sought by either side except by pacific means.

your Government to suggest this modification of for the purpose of reaching a tentative agreement preliminary discussions with the othor great powers instrument of national policy be made the subject of envisaged the unqualified renunciation of all war as an the original formula submitted by M. Briand which United States in proposing, as suggested above, itself unable an indication that the particular significance and that it is not to be taken as original proposal, but I earnestly hope that it is of no the I am not informed of the reasons which have led language to be used in the proposed treaty. to join with the Government of France will find Government of that the its

If your Government is agreeable to the plan outline above and is willing that further discussions of

> the United States in a communication to the British, Government of France join with the Government of Briand last June, I have the honer to suggest that the upon the original proposal submitted the terms of the proposed multilateral treaty be based ernments pending the conclusion of a definitive treaty their consideration and comment, it being understood, Governments of France and the copies of the subsequent correspondence between the mitting the text of M. Briand's original proposal and German, Italian, and Japanese no way commit any of course, that these Accept (etc.) preliminary the participating Gov Governments United States for discussions would to me trans-

Frank B. Kellog

AN ENGLISH TRANSLATION OF A NOTE DATED JANUARY 21, 1928, FROM THE FRENCH AMBASSADOR TO THE

60

SECRETARY OF STATE

Mr. Secretary of State:

your note of the 11th instant, of are in agreement upon the essential principles of which they apparently cerning the best method of accomplishing a project satisfaction at the harmonizing, thanks to your excel-My Government has asked me to express to you its swer to your suggested to you by my letter of January 5 of. the views excellency was pleased communication of December 28, 1927. of the two Governments the considerations to inform me in ancon-Ħ.

relations between the two Republics both desirable and feasible by reason of the historical templating an act confined to France and the United The original French proposal of June 1927, conappeared to the French Government to bе

The to embody the declaration proposed by the American Government was only willing,

> other powers would be invited to participate to make it the subject of a separate act in which the portune to breaden this manifestation against war and not failed to take into account, that it would be sons on its own which the French Government has renewal, and considered on the other hand, for American arbitration convention now in process of French Government in the preamble of the Franceop-

more complex and likely to meet with various that the new negotiation as proposed would be could not but realize, and it felt bound to point out posed to this expansion of its original plan, but it The Government of the Republic was not opdiffi-

of the principal powers of the world and then the United States, or else first elaborated by certain tite nature, signed in advantage in having such an instrument, of a multipar-The question as to whether there would be any the first place by France and

sented to all for their signature, is essentially one of

practicable. cur in any method which may appear to be the most This is tantamount to saying that it is ready to which it seeks in common with the United States, more speedily and more surely to achieve the result gestion upon this point only because The Government of the Republic offered a sugof its desire con-

ticular attention. Government has requested me to draw your There is, however, a situation of fact to which par-

on within the framework of the League of Nations. They are already bound to one another by powers, are making the organization and strengthen the world, and among them most of the of the fact that the great majority of peace the object of common efforts The American Government cannot be unaware of the powers principal ຍ carried coveof

> cannot contravene engagements impose upon them duties which they tions relative to guarantees of neutrality, all of which well as by agreements such as those signed at Lonant placing them under reciprocal obligations, in October 1925, or by international conven-

whatsoever, which might arise ployed for the settlement of differences, of any nature sive war and that all peaceful means must be tion the powers were led to specify reciprocal rights and duties war, certain principles based on the respect for the at Geneva in the month of September last, adopted, states members of the League of Nations represented be condemned as an international crime is aggres-In particular, joint resolution tending to the condemnation of your excellency of each. between knows that that the action In that resoluthe several

This is ы condition of affairs which the United

States, while a stranger thereto, cannot decline to take into consideration, just as must any other state called upon to take part in the negotiation.

bilateral compact, had been drawn up in the light of posal of enant of the League of Nations. participate therein. take into consideration the relations existing among has never altered on the same conditions and on the same basis. United States; the French Government still stands various be century-old relations between France and the Furthermore, the United States would not in any to negotiate with Ħ. confronted by bound thereby June proposing a multipartite covenant, it had to powers which last looking to the conclusion of a its the initiative of the United attitude in that respect. to the previsions of the the would be American Government The French called upon to procov-But It

This it has done, with the object of assuring the

success of the treaty contemplated by the United States. Its suggestions of January 5 as to the terms of the multipartite treaty are inspired by the formula which has already gained the unanimous adherence of all of the states members of the League of Nations, and which for that very reason might be accepted by them with regard to the United States, just as it has already been accepted among themselves.

This is the explanation of our proposal of Janary 5.

of its sincere desire to respond to the same. Your excellency may therefore be assured in its sentiments in that respect: its position preventing or repressing it. There has been no change and to set up international sanctions susceptible of any declaration tending to denounce war as a crime mental reservation under all circumstances, very The Government of the Republic declared its clearly readiness to join the idea and without has always, of remains Ħ.

American Government and to second its efforts to the full extent compatible with the situation of fact created by its international obligations. It is this preoccupation which inspired the formula proposed on January 5, a formula which does indeed seem to be the most apt at this time to assure the accomplishment of the American project. The Government of the Republic accordingly cannot but hope that the American Government will share this view.

Subject to these observations, the Government of the Republic would, moreover, very gladly welcome any suggestions offered by the American Government which would make it possible to reconcile an absolute condemnation of war with the engagements and obligations assumed by the several nations and the legitimate concern for their respective security.

Pray accept (etc.)

Claudel

Text of a Note handed by the Secretary of State

to the French Ambassador at Washington or February 27, 1928.

Excellency:

Our recent discussions of the question whether the United States and France could join in suggesting to the other principal powers of the world the conclusion of a Treaty prescribing war as an instrument of national policy in their mutual relations have been brought by your note of January 21, 1928, to a point where it seems necessary, if success is to be achieved, to examine the problem from a practical point of view.

It is evident from our previous correspondence that the governments of France and the United States are of one mind in their earnest desire to initiate and promote a new international movement for effective world peace, and that they are in agreement as to the essential principles of the procedure to be followed in the accomplishment of their common

unqualified acceptance purpose. As I understand your note of January 21, Excellency's last national obligations under those treaties. powers not to resort to with the United States and the other principal world treaties and a party doubt whether as a member of the League of Nations 1927, and January 11, 1928, which I submitted 1928, the only substantial obstacle in the way of the consideration. without ipso facto violating her present guaranteeing neutrality, France can to the treaties of Locarno note Ħ. my notes of December 28, bу this question war in their mutual rela-France of the proposals ıs: your was Government's and other suggested In Your agree inter-

Without, of course, undertaking formally to construe the present treaty obligations of France, I desire to point out that if those obligations can be interpreted so as to permit France to conclude a treaty with the United States such as that offered to

qualified renunciation of war as an instrument of States in offering to conclude an equivalent multilattice so as to permit France to join with the United suppose that they can be interpreted with equal note of January 21, 1928, it is not unreasonable to me last June by M. Briand and offered again in your anti-war treaty with the United States alone, will be perceives no bar to the conclusion of an unqualified therefore, that your Government, something they cannot do together. League of Nations are in a position to do separately it is hardly to be presumed that members come a party to an identical multilateral treaty such a bilateral treaty should be no less able to tional policy, seems to me to be one of degree and tilateral form of treaty having for its object the world. The difference between the bilateral and muleral treaty with the other principal powers substance. Þ Government free which admittedly I earnestly hope, to of the of the unbe-

unqualified condemnation of war as an instrument of instrument of their national policy, expressing in the name of the American Republics Sixth International Conference institution of war. Of no little interest in this connecdiscuss either bilateral or multilateral treaties unreservernment of the United States to renounce war as without violating the terms of the Covenant of the ent with membership in the League of Nations. If, League of Nations in a common effort to abolish the cooperation of the United States and members of the League of Nations really however, that the provisions of the Covenant of the however, members of the League of Nations able to satisfy itself that an equivalent treaty among principal world powers would be equally consistrenouncing war. the recent adoption of a resolution by agree among themselves and with the Gov-I am reluctant to stand in the way of the of American it seems idle cannot, believe, States an ð

national policy in their mutual relations. It is significant to note that of the twenty-one states represented at the Conference, seventeen are members of the League of Nations.

definitions of the word "aggressor" and by exceptions however, such a which the League itself has so closely at heart? instrument for promoting the entire family of nations, would be a most effective the principal powers, and ultimately, I trust, by the engagement of this character entered into by all of purpose of the League of Nations. On the contrary, violates the specific obligations imposed by the Covtion of war as an instrument of national policy either decide that an unequivocal and unqualified renunciaother member of the League of Nations will finally it not entirely reasonable to conclude that a formal I trust, therefore, that neither France or conflicts with the fundamental declaration were great ideal of accompanied by idea and nor peace If,

I cannot avoid the feeling that if governments should Ьy of peace virtually destroyed. The ideal which inspires impotence, to the keen disappointment of mankind deavours, they would be in effect only recording their destroying the true significance of their common enthis ideal in a technical spirit and must insist upon publicly acknowledge that they pealing just because of its purity and simplicity; and the effort so sincerely greatly weakened and its positive value as a guarantee justified in going to war, its effect would be very and qualifications stipulating when nations would be your Government and mine is arresting and apadoption of reservations impairing, and so hopefully put forward can only deal with if not utterly

From the broad standpoint of humanity and civilization, all war is an assault upon the stability of human society, and should be suppressed in the common interest. The Government of the United States

of France join with the thereto not to resort to war with one another. stands ready to conclude with the French, British, desires to see the institution of war abolished, and as a basis for preliminary discussions looking to respandence between France and the United States posal, together with copies of the and comment the text of M. Briand's original pro-States in transmitting to the British, Italian, German my note of January 11, 1928, that the Government mination of the parties to abolish war among themas it clearly and unmistakably sets forth the a matter of indifference to the United States so long precise language to be employed in such a treaty is any and all other governments, multilateral treaty open to subsequent adherence by Italian, German and Japanese Governments a single Japanese I therefore renew the suggestion contained Governments for their Government of the binding the parties subsequent consideration United deter-

conclusion of an apprepriate multilateral treaty prescribing recourse to war.

Accept, Excellency, the renewed assurances of my highest consideration.

Frank B. Kellogg.

TRANSLATION OF THE NOTE
HANDED FROM THE FRENCH
AMBASSADOR TO THE SECRETARY
OF STATE OF MARCH 30, 1928.

Mr. Secretary of State:

In reply to your note of February 27th last regarding the proposal for a multilateral treaty prescribing war, I have the honor to inform Your Excellency that M. Briand has been pleased to find in the observations which you have submitted for his consideration a new and cordial affirmation of the common inspiration which animates our two governments equally anxious to cooperate in an international move-

the discussion may upon analysis be reduced. tions of terminology not affecting the substance ing thereto these differences of form to which quesmust be preserved in this discussion, disposition to adhere our two governments, if on both sides there is a of views which has taken place up to now between acceptable formula may well result from the exchange pursuit of an identical purpose, M. in the world. convinced, as does Your Excellency, that a mutually ment toward the effective establishment of Assured of such to those essential realities which ы solidarity in the Briand remains by subordinatpeace of

That is to say, that the French Government at this point of the discussion, when all the aspects of the problem have been examined, proposes to adopt as practical a point of view as possible and to facilitate as far as it can the effort of the American Government in the direction of an immediate deci-

impart thereto the unconditional character desired gation of the signatories it was not possible, In order to pay due regard to the international oblispired by a very sincere desire to facilitate in a pracť taining the unanimous adherence of all the existing Your Excellency as it became a question of a multilateral treaty, ties which would assuredly be encountered in practice. American plan was concerned those serious difficulin the form of a multilateral rather than a bilateral limit to necessary. The French wording, therefore tending to conditions best adapted to bring about the consent contemplated multilateral treaty by pointing out the tical manner the realization of the proposal for the offer in support of his last suggestion were in-The observations which M. Briand has ventured was intended of all the governments war of aggression the prescription proposed without facing the necessity of ob-ಕ obviate in so whose agreement far as as the soon bу ð is:

reservations were formulated. treaty of arbitration with regard to stituted only a kind of preliminary tending toward a not appear in another resolution to lateral treaty. was requested to sion" which the French Government felt compelled resolution limited to the very terms of "war of aggresdifficulties which led the American Government at the states of the of the contracting states. exposed to the possibility of a conflict with any to say, those which by reason of their situation are states, or at least, of all the interested states, that is cellency referred in your note of February 27th but it to use in characterizing the renunciation to which it Pan-American Conference observed that this American Continent there To be sure, the same reservation does bind itself In the relations between the at Havana to bу resolution in itself means of which which Your are approve numerous ಶಾ similar multi-Ex-

Your Excellency appears to have been surprised

France and the United States morally united as they and since furthermore, tions of various powers with regard to one another, ridical difficulties the signatories, as would a multilateral treaty, to entered into, since that agreement would not expose limits an absolutely unconditional agreement might be those relations in law resulting from intercourse bestrictly the mutual undertakings which it contained to last June fact that the project of a treaty. My Government believes that it has explained with the United States in the same treaty which she offered to conclude separately that France should not be the powers in the form of a point with sufficient clearness between France and the United States proposed the two signatory was drafted in such a resulting from the respective posias regards two countries states treaty of perpetual friendable to conclude with multilateral treaty the alone. form of a bilateral way in recalling the Within such as to limit like Ë

are by ties of time-honored friendship, other contractual engagements concluded by one or the other power could never constitute in fact anything but purely theoretical obstacles.

obligations, Without in any way losing sight of its international ernment originated and for which it ment would hesitate a treaty worldwide in its scope, which it involves, especially the necessity of attaining found include an unconditional pledge. If Your Excellency in the multilateral form the proposed treaty should and you have deemed it necessary to insist that even lency has in view, you have considered it preferable adhere to the In order to attain the result which Your Exceladherence to a plan which the in this formula in spite of the believes that greater chances of success may be both as a member of the League of conception of a multilateral treaty, to discuss longer the question the French ıs. American consequences responsible. Govern-Na-

templated new treaty. ciling previous obligations with the terms of the conforthcoming with respect to the possibility of recongest immediately to the German, British, Italian and pose of finding a common basis treaties guaranteeing neutrality, France, for the purtions and as a party to the treaties of Locarno or spirit and in the letter of the last American note, proposals formulated by Your Excellency, to adjustments which in the last analysis may is wholly disposed, after a new examination of Governments that they join in seeking, for initial negotiasugbe Ħ.

ticipation in that treaty of all the other governments of the world. the Government of the United States treaty binding the signatories not to among the satisfaction The French This conception accords with a reservation that governments specifically mentioned while Government notes advocating the conclusion admits the resort to at once of a with war, par-

> among sibility of grave controversies thereto unless the other States exposed to the operate in respect of one also signatories thereof. States and not only upon the equality of certain States among themselves of all States with respect to complete equality dangers and misunderstandings unless based upon the controversies may arise. engagement among all powers among whom political the establishment of peace actually necessary for obtaining a real instrument for fact involve the risk of exposing the signatories them. The treaty contemplated could not Ħ. the Such an engagement would power application of the by means of a formal with that party which is a other were

At the same time it is clear that in order not to turn an instrument of progress and peace into a means of oppression, if one of the signatory States should fail to keep its word, the other signatories should be released from their engagement with respect to the

offending state. On this second point, as on the first, the French Government believes itself fully in accord with the Government of the United States.

My Government likewise gathers from the declarations which Your Excellency was good enough to make to me on the first of last March, the assurance that the renunciation of war, thus proclaimed, would not deprive the signatories of the right of legitimate defense. Such an interpretation tends to dissipate apprehensions, and the French Government is happy to note it.

If such is the attitude of the American Government on these three fundamental points, and if it is clearly understood in a general way that the obligations of the new pact should not be substituted for, or prejudice in any way, previous obligations contained in international instruments such as the covenant of the League of Nations, the Locarno agreements or treaties guaranteeing neutrality whose character and

scope can not be modified thereby, then the differences of opinion which have appeared in the course of previous phases of the negotiation have to do more with words than with the reality of the problem facing the two Governments today.

partite form desired by the join with the changes draft agreement essentially corresponding same time for the assent of the four Governments, a respondence exchanged between France and the Unitsubmitting for the consideration of the Governments French Government would be prepared forthwith to newed in your note of your note of January 11th, which you kindly the original proposal of M. Briand, in the multi-Germany, Great Britain, Italy, and Japan, the cor-States since June 1927, and Hence, in accordance with the proposal contained of wording made Government of the the 27th of February, United States necessary in proposing at the United States bу in the with the purpose new

tions. tained in the treaty. contracting powers would be automatically relieved, should happen to contravene the treaty, the with respect to that power, of the obligations upon its coming into force, despite certain absten-Finally, in case one of the contracting powers

other

72

con-

with the greatest chances of success. tiation of a plan for a multilateral pact such as conceived by the American Government could be pursued It is in this form, it would seem, that the nego-

the effective solidarity of the nations in undertaking tending to ensure, strengthen or extend ambiguity or reservation, with any solemn and formal which is and most complete collaboration of my Government the conduct of this negotiation of the most sincere Your Excellency may be assured, in any always ready to associate itself without the cause case, in of

In responding to these ideas, whose happy inspi-

singed this treaty

or acceded thereto

should

agree

ceived to say, that the treaty, open to the accession of all powers, would only come into force after having could only exist for the signatories in the event that within the framework of existing treaties, should make arise between them save by pacific means. It would, conflict of whatsoever nature or origin which might independent policy as a means of carrying out their own spontaneous, an instrument of national policy, or in a solemn declaration condemning recourse to war as while not prejudicing their rights of legitimate defense concept; the signatory powers of such an instrument, engagement were contracted by all states, that is They would specifically undertake, among themto seek the settlement of any difference or universal acceptance, unless the powers having to refrain from any be clearly understood that an obligation attack or invasion, and other words

ideal of peace which the League itself has so closely at heart." Your Excellency has said, in "promoting of that nature, that she was and, faithful to her previous international engagements never ceased to apply herself in her foreign policy, that she was continuing the work to which she has ration cannot be gainsaid, France would feel confident contributing nobly, as the great

Pray accept et cetera.

DRAFT OF SUGGESTED TREATY.

King of Italy, His Majesty the Emperor of Japan, President of the German Empire, His Majesty The Dominions beyond the Seas, Emperor of India, the King of Great Britain, Ireland and the British The President of the French Republic, The President of the United States of America, His Majesty the

Deeply sensible that their high office imposes upon

them a solemn duty to promote the welfare $^{\rm of}$ man-

prevent war among any of the nations of the world; pily subsisting between their peoples petuate the peaceful and friendly relations now Inspired by a common desire not only but also to happer-

settlement of international disputes; national policy and renounce it in favor of the pacific witness that they condemn war as an instrument of Desirous bу formal act to bear unmistakable

nunciation of the civilized nations of the world in a soon as it comes into force, bring their peoples within endeavor and by adhering to other nations of the world will join in this humane scope of its beneficient provisions, Hopeful that, encouraged by their example, all the war as an instrument of their the present treaty common rethus uniting national

Have decided to conclude a treaty and forthat

purpose have appointed as their respective Plenipotentiaries:

The President of the United States of America:
The President of the French Republic:

His Majesty the King of Great Britain, Ireland and the British Dominions beyond the Seas, Emperor of India:

The President of the German Empire:

His Majesty the King of Italy:

His Majesty the Emperor of Japan,

Who, having communicated to one another their full powers, found in good and due form, have agreed upon the following articles:

Article I.

The High Contracting Parties solemnly declare in the name of their respective peoples that they condemn recourse to war for the solution of international controversies and renounce it as an instrument of national policy in their relations with one another.

Article II.

The High Contracting Parties agree that the settlement or solution of all disputes or conflicts of whatever nature or of whatever origin they may be, which may arise among them, shall never be sought except by pacific means.

Article II.

of treaty the world. Every instrument evidencing the adherence necessary for adherence by all the preceding when it has come into effect as have been deposited at as all their several instruments of ratification ments and shall take effect as between them as soon cordance with their respective Contracting Parties named in а The present treaty shall be power shall immediately upon such deposit become paragraph, remain open as long as may shall be deposited atand the constitutional requirethe ratified other powers of prescribed in the This treaty shall, preamble β the High Ħ. shall

effective as between the power thus adhering and the other powers parties hereto.

be. ly to notify such Governments immediately upon the strument of ratification or adherence. with a certified copy of the treaty and every Government subsequently adhering to this treaty furnish each Government named in the preamble and or adherence deposit with the duty It shall be the duty of the Government of of the Government of ····· telegraphicalit of each instrument of ratification of It shall every also 'n. ð

In faith whereof the representative Plenipotentiaries have signed this treaty in the French and English languages, both texts having equal force, and hereunto affix their seals.

Done at … the … day of … in the year et cetera (付 記二)

昭和三年四月十三日付在本邦米国大使書翰

第三三六号訳文 (仮訳)

書中ニ明瞭ニ開示セラレ居候ノ書翰ノ交換有之候両国政府ノ見解ハ両国政府間ノ往復文及合衆国政府間ニ於テ戦争ノ国際的否認問題ニ関スル数次以書翰致啓上候陳者閣下ニ於テ御承知ノ如ク最近仏蘭西国以書翰致啓上候陳者閣下ニ於テ御承知ノ如ク最近仏蘭西国

各自国ノ利益並ニ世界国家全体ノ利益ニ対シ正当ナル考慮 修正ヲ必要トスルモノト認メス而シテ世界ノ凡テノ国民 同政府ノ思考スル数個ノ考慮事項ヲ指摘致シ候合衆国政府 約国又ハ他ノ中立保障条約締約国カ留意セサルヘカラスト 於テ均シク熱心ナルモ国際連盟国、「ロカルノ」諸条約締 右目的ニ対スル如何ナル実際的運動ニモ協力セントスルニ 仏蘭西共和国政府ハ世界平和ヲ促進シ且他ノ諸国民ト共ニ 多数国間ノ条約ヲ締結スルノ用意ヲ有スルモノニ有之候 其ノ締約国カ相互ニ戦争ニ訴ヘサルノ義務ヲ負フヘキ単一 於テ述へタル如ク戦争ナル慣行ノ廃止セラレンコ 合衆国政府ハ其ノ千九百二十八年二月二十七日付書翰中ニ ヲ払ヒツツ斯 ト将来他ノ諸国政府ノ孰レニ依リテモ加盟セラレ得ヘク且 シ且仏蘭西国、英吉利国、独逸国、伊太利国及日本国政府 ハ斯ノ如キ考慮事項ノ為メ其ノ多数国間条約 ノ如キ条約ニ加盟シ得ルモノト思考致候加之 ノ提議ニ何等 トヲ希望

認ス 約二加盟セシムルニ至ルヘキヲ信シ候 二甚 本国及合衆国 合衆国政府 大ナル精神的効果ヲ及ホシ終ニハ右諸政府ヲ ル条約ヲ締結ス ハ仏蘭西 カ国際紛争ノ平和的 ルニ於テハ他ノ世界ノ凡テノ国ノ政府 英吉利 国、独逸国、 処理ノ為厳粛ニ戦争 伊 太利 シ テ 国 ゥ 本 否 日 条

独逸国、 旨余ニ正式 慮ニ付スル為客年六月ノブリアン氏原提案ノ正文並其ノ後 政府ト完全ナル意見ノ一致ニ達シタルヲ以テ貴国政府ノ 事情ノ下ニ於テ合衆国政府ハ此ノ手続ニ関シ仏蘭西共和国 到達致候即チ若シ終局ノ成功ニ到達セント 仏蘭西国及合衆国間ニ交換セラレタル戦争否認ヲ目 仏蘭西国、 ル多数国間条約ノ 一ノ機会ヲ有セシムルコト緊要ナリト Ŋ ŀ ノ意向ヲ -共同スル シテ仏蘭西国及合衆国間ニ行ハレ セハ如何 伊太利国及日本国政府ヲシテ其ノ現存義務カ 有ス 英吉利国、 ニ訓令越候余 コト N !ナル程度迄戦争ノ無条件的否認ニ関シ合衆 問題ニ関スル文書ノ写ヲ玆ニ伝達スヘキ 他国政府 ノ障害ト 独逸国、 八又合衆国政府 ナルヘキヤヲ決定スル為正式ニ 伊 ニ署名ス 太利国及日本国政府並 タ ノ点ニ有之候此等 ル ヨリ ル 交涉 セハ英吉利 用 合衆国政府 意ヲ た左ノ 的 若 国 点 1 ス 考 ル 同 カ ス ノ シ

> 約 認メラル セ 条約ノ形式ヲ 草案第一条及第二条ノ文言ハ 考慮ニ付スル為茲ニ伝達スヘキ旨ノ訓令ニ接シ候 ル条約ノ当該条文ノ文言ト ヘク 一般的ニ 表示セ 実際上同 ル ブリアン氏 予備的条約草案ヲ貴 <u>ー</u>ノ カ モ 合衆国 1 ナ ル 此 国 コ = 提議 ノス条 _政 ŀ ヲ

条約正文ハ之ニ如何ナル特殊修正ヲ加ヘナハ受諾シ得 シ好意的考慮ヲ与フヘキ地位ニアリ 合衆国政府ハ貴国政 欣快ニ御座候 トナル ヘキヤ = 関 シ 府 出 カ 来得 余 ノ兹ニ伝達 ル 限 リ速 ヤ若シ然ラスト ニ通報ニ セ ル 条約 接ス 1 ·締結 セ ル ヲ得 ハ右 ル = Ŧ 関

此段申進旁々余ハ玆ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

敬具

十九百二十八年四月十三日

チャールス・マクヴェー

外務大臣男爵 田中義一閣下

均シク仏蘭西国人民及亜米利加合衆国人民カ平和ヲ贸仏蘭西共和国大統領及亜米利加合衆国大統領ハ仏蘭西国合衆国間恒久友好条約案

ス

セ フ ムコト ルヲ否認ス 一方 ヲ冀望シ ル コト 他方ニ対ス = 関ス ル ル 政策 右両国人民ノ 1 一手段 連帯関係ヲ ト シテ兵 カ 確 二訴 認

此等ノ 意シ ラシメラレタ 且近代民主主義ノ進歩ニ合致ス シ ダ ル 感念ヲ厳粛ナル コト ル両国民相互間ノ友好及尊重 ナク却テ自由及正義 文書ニ依リ神聖ナラシ ル シノ防衛ノ ŀ 共 Ξ 戦 ||一/ 念ニ合致ス 為常 争 ムル Ξ 三二益緊密 因 コ リ曾 ŀ 一合 テ 乖 ル ナ

此ノ目的ノ為其ノ全権委員トシテ

仏蘭西共和国大統領ハ

亜米利加合衆国大統領ハ

ヲ任命セリ

ロットのでは、そのでは、 因テ各全権委員へ互ニ其ノ全権委任状ヲ示シ之カ良好妥当

ナルヲ認メタル後次ノ各条ヲ協定セリ

第一条

訴フ ヲ 他方ニ対スル 粛ニ ル 玉 ハ仏蘭 コトヲ罪悪ナリ 宣言 西国人民及亜米利加 ス 其 八国家 ŀ 認 **%ノ政策ノ** メ 且. 斯 カ 合衆国人民 ,一手段ト ル戦争ヲ否認 シテ 1 名 ノ戦争 ス Ξ 於 ル コ テ

第二条

紛議又 \exists __ 仏蘭西国阿米利 ŀ 於テモ平和的手段ニ依 ナキモ ハ紛争ハ其ノ性質又ハ起原 ノトス 加合衆国間 ル ニ発生ス 外其ノ 1 決定又 如 ル 何ニ コト 拘ラス孰 ア ハ解決ヲ ル \sim 丰 V __ 1 切 ム ル 側

第三条

交換 効力ヲ発生スヘキモノ 本条約 セラルヘシ而シテ批准 ハ批准ヲ要ス批准書 トス 党換ノ時 ハ 成 ル H \exists ク IJ 速 本条約 __ ハ (完全ナル テ

右証拠トシテ前記全権委員ハ本条約ニ記名調印ス

仏英両文ヲ以テ作成シ且同等ノ効力ヲ有ス) 千九百二十七年 日巴里ニ於テ本書二通ヲ作ル(各

以書翰啓上致候陳者本官ハ去ル六月外務大臣閣下カ巴里ブリアン氏提案ニ対スル国務長官ノ回答

駐

述スル 在米国 西国 ノ光栄ヲ 合衆国間恒久友好 大使ノ手ヲ経 有シ候 デ非公式ニ本官宛送付 2条約案」 ト 題ス ル 条約 1セラレ 案 Ξ タ 関 ル 仏 シ

該条約案ハ両国カ夫々其ノ人民ノ名ニ於テ一方カ他方ニ対

何 セ ル シテブリ 有之候本官 ス 崇高ナ 意ヲ表シ度存候 三拘 ム 悪 ル ナリ 4 コ ኑ ル ラ 1 コト 、ス孰 ル友好ノ感念ニ 及両国間ニ発生スル 国家 アン閣下ヲ通シ ハ該提議ニ最モ慎重ナル考慮ヲ 認 レノ ジン政 ナ メ且斯カル戦争ヲ否認スルコ カル 策 側ニ於テモ平和 ヘキヲ合意セ 1 一手段ト 対 該 シ 条約案ヲ提議 紛議 玆 ・シテ = 案ヲ提議セシムルニ至リタナル考慮ヲ加へ仏国人民ヲセムコトヲ提議スルモノニ和的手段ニ依ルノ外其解決蔵ハ其ノ性質又ハ起原ノ如 米国 ノ戦 [人民 争ニ ŀ Ĭ - ヲ厳粛ニ 為 ラ ニ衷 ル 心 コ 宣 同 ١ 言 ヲ

卜

百二十七年十二月二十 ル 合衆国政府 ル 裁 ヲ得 判条約案ニ 実際上世界平和ノ増進ニ貢献スル 1 ス 数判条約 念ヲ ル 決 裁判ニ対スル ハキ凡 モ ノ為兵力ニ訴 改 ノニ有之候而 Ź ハ戦争ヲ罪 二代 、テ誓約 ユル 於テ具体的 一切 機会ヲ歓 ル ヘムト スルコ ヘキモ 悪 八日付閣下宛拙翰中ニ千九百 シテ本件ニ関スル ノ国際的確認及裁判 ナ ニ表示セラ 迎スル ŀ 1 スル思想ヲ否認ス 1) ኑ ヲ ኑ シテ 世界 認 モ メ ^本官ノ が所大ナル レ居候該条約 ノニ有之候同 ラ 仲 他 裁 本官ノ見解 ノ諸 裁判 、提議シ ドニ付 モノ ル一切 政府 当対 !シ得 ナリ 案 タ 国 } シ 共 ハ ル 八 八千 ノ ヘキ 政 依 従前 仲 年 条約 府 頼 = 紛 裁 Ż. ハスズ

府

テ =

条約 ル 心ヲ記載ス 友好関係 1 範 囲 ルモノ :ノ破綻ヲ阻止セム ヲ拡張シ且 、ニ有之候 久シ 丰 間 ŀ 両国 ス ル 政府 両国政府 ブ間 = 卵白 存続シ ナ

否認シ且 国民ヲシテ順次同宣言ニ参加セシム 思考致サレ候若シ世界ノ主要国カ斯 シテノ戦争ヲ否認ス 裁判条約案所載ノ両国民 ハン氏ノ 仏 於テハ世界平和ニ対シ一層顕著ナ 代リニ世界ノ主要国ノ総テヲシテ国家ノ政策 ア 存在 [蘭西国合衆国間ノ伝統的 主要国間 **輒チ世界諸国民ニ対シ好個** ハ国家ノ政策一手段 ノ国ニ亘 (米間 ル こ基ク ヘキ紛議解決 国際的紛争ヲ平和的ニ 提議セラレタ ノミノ協定トシ = リ完成セシム コト 締結シ更ニー ナキ ル ノ為兵力ニ訴 - 友好 宣言ニ加盟セシ ጉ ル 7共通 ルニ至 テ提案セラレ シテノ戦争ヲ罪 カ如キ二国間 切 友好 1ノ範例 近ノ願望 、国民ヲ 解決 ルヘク = こへサラ 鑑 セ ル ヲ怡スノミナ カ ル 3 ニ鑑ミ両国政 幸 タルモ ル 貢献 候仍テ玆ニ合衆国政 コ 且 シテ署名 A ノ宣 A ٤ Á ١ 惠 トヲ得ヘク以テ曩 宣言ヲ為ス ル 両 = いヲ為シ得 為共ニ 言ヲ以 何等形 ス ナ ト 玉 ノヲ ル IJ ス 民 ['] シ得 条約ヲ世界 1 ル 間 / ラス右諸 /式的 世界 努力ス がテ満足 認 府 前記仲 一手段 二起 ジメ之ヲ = セ ^ カ テノ総 於テ シト シ ブ ル 約 メ ル ト ス ij \supset

=

ル 7

ハ

意向ア 条約 他ノ 府 7 為仏蘭西 他 案起草ノ ハ ニシテ合衆国政府 兹二 じノ諸国ニ ,ルニ於テ 主要国ト [国政府 重 ノ目的ヲ以 テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 提出ス 、八本官 ・剴切ナル多数国間 ጉ 協議 テ直チニ商議ヲ為スノ光栄ヲ ル為ブリアン氏ノ ጉ ハ仏蘭西国及 此 セ 厶 ノ努力ヲ共 ŀ ス N ノ条約ヲ 合衆国 モ (ニッ ノ ,提案ノ ニ有之候仏蘭 ^締結セラ 合衆国 敬具 [ヨリ 趣旨 共同 並 有 三 従 シ ル = 世 西国 テ シ ル 候 世ノ 界 ヒ

百二十七 年十二月二十八日

九

フ ラ ン ク • ピ 1 • ヶ P ッ グ

千九百二十八 年 一月五日 付 国務長官宛在米仏国

メ ハ 政府カ提議 仏米間 之ヲ否認ス 書翰致啓上候陳者客年十二月二十八日 大使書翰英訳文 三於 シ ダ ル ケ ノ目的ヲ以テ千九百二十 ル ル国策ノ一手段トシテ戦争ヲ罪悪 条約 ジャ (仮訳 出 = 関シ 合衆国 ロ付貴翰ヲ 七 年六月仏 [政府 1 意向 以 ナ 蘭 IJ テ 西 1 閣 ヲ 表 国 認 下

満足 下 ス Ì 御 ル 意見 代 IJ = = 世界 依 V 1 ハ 主要国 両国政府ハニ国間 7 総テヲ シ テ 1 其 3 ノ 条約 国家 ヲ 1 以テ 政 策

致

+

V

候

.一手段ト ニ努力スル ク シ = テノ 於テ 戦争 ^ (世界平和 ラ否 認ス ル = 対 1 宣言 シ __ 層 = 加盟 大 ナ ル セ 貢 シ 献 A ヲ ル 為 為

米間 総テノ 世界 シテ順 国ニ亘リ ラ 1 ミノ 主要国 国ニ対シ好個 次同宣言 有 協定ト 効ナラシ カ Ξ 加 シ 力 A テ提案セラ 盟 ノ範例ヲ示ス ル 宣言ニ ルニ至 セ シム ル 加 ル ヘク候 ν コ 盟 タ ኑ ノミナラス ス ル ヲ得 ル モ = 1 於 \sim ヲ ク テ 世界 が斯クテ 右 ハ 総 輒 テ 1 チ 総 始 世 1 国ヲ テ メ 14

名シ得 セ ヲ平和的ニ処理セム ナリト認メ之ヲ否認 仍テ合衆国政府 ム トス ル モノ ル 1 御意向 ア締結 /\ 国家ノ政策ノ スル ス ŀ ニ有之候 ル ス ルノ宣言ヲ ノ目的 ル 条約 , 一手段 ヺ ニシ 包含シ以 以 テ仏 テー 1 蘭 切 シ テ テ 西 ノ 諸国 玉 玉 1 [カ自 政 戦 府 間 争ヲ罪 1 由 ノ 紛議 協力 = 署

言致 国 閣下 セ ハ 心セラ ラ 進 剴切ナ ν A ハ テ直 更二 仏 ル 蘭 ル ル = 西国及合衆国ヨリ チ 多数国間 至 Ξ | 蘭西国 一商議 ル ^ 政府 ク ヲ 開 条約 1 始シ以テブリアン氏ニ依 条約ヲ締結 ニシテ合衆国 案 ,共同シテ ノ審議 ヺ ス 世界 為ス [政府並 ル ルヲ承諾ス 1 1 他ノ 意向 二世界 諸国 ナ IJ ル テ ル Ξ 1 発議 旨付 於 主要 = デ

キ性質 ν v 三 対 蘭 シテ該手続 タ 且輿論及諸 西 国政 ル フ シ深甚ノ謝意ヲ表シ候同国政府ハ閣下ニ依リ た右手続い ・モノ タ 1 ハブリアン氏 ル 国民一般ノ 一般的特質ヲ ヘシト 仏蘭西国 信 コシ候仏蘭 ノ提議 政府ノ見解ヲ 人気ニ適合スル 速カ = 三対 承認 西 スル 国及合衆国 満足 ス 方法ヲ 合衆国 ル ハ有利 セ シ ノ以テ取運 政府ノ快 [ノ署名 A 提議 ナ ル カ ル 如 ^ ヲ セ

以テ迎 報ス 総テ 処理 条項 本官 採択ヲ保証 家ノ注意ヲ喚起シ以テ之ニ加盟セシ 西国政 生ス 合衆国 ル ノ国ノ合意ヲ求ムル ノ為ニハ凡コル平 ノ下ニ締約国 *>* ナ ^ ノ権利ヲ与ヘラレ ラ ル コト コ セ ル 府 1 西 ムトス ŀ 国 ヘキヲ確信ス ハ前記宣明ノ = 依リ ァ 政 ヲ ,信シテ ル カ総テノ侵略的戦争ヲ 府 テ署名 ル ヘキ紛議ハ其性質ノ ハ 両国 合衆 和的手段ヲ用フヘシト) 候締約国 た為提議ス 疑 ~綱領ハ必 国政 ル セ 政府ノ努力ハ必スヤ ハ ラル モノニ ス 府 ヘキ ハ該条約ニ対シ総テ ル 1 A シテ又右綱領 ス外交界ニ於テ感謝 共 ノ意向ア 条約 同 ル為メ努力可 如 不認 シ ・テ差当リ 何 = シテ該 ナス シ且 ル = 旨 大成功ヲ贏 拘 (ノ普遍 締約 閣 1 ラ 条約 致 下 ス 条 仏 侯 -- 通 其 約 1 国 蘭 的 ヲ 玉 ヲ ノ 間 ノ西

1

本官 ハ こ重ネ テ 閣 下 = 向 テ敬意ヲ 表シ 敬具

1 デ ル

ク

Ħ

大使 九百二十八 ニ手交セ 年 ラ レタ 月 + ル 書翰 日午 後国 仮仮 [務長官 \exists 1) 駐 米

セラレタ 言セラレ スル 総テ 府提出ノ 同様 満足 諾ノ為提議ス 合衆国トノ 下ニ同大臣 · ヲ深 ス 対 書 ル \tilde{j} 為一切ノ平和的方法ヲ用 ノ侵略的戦争ヲ否認シ且 セシムヘキ性質 ス 翰致啓上候陳者千九百二十七年十二月二十 多数国 米国 ク感謝 ル 貴国 ル二国間ノ条約ニ代へ 候合衆国政府 提案ヲ簡単ニ 間 1 ハ共和国政府 提案ヲ仏国政府カ主義上受諾ス 間 ル 二締結 [政府 ス N ノ意向ニシテ同条約 1 Ŧ 条約締結方ヲ主要国間 ノ回 セラ シモ 答中 要約 八最初 = ル 1 有之候単ナ ハ合衆国政府ト共同シ現在 ヘキ ノ如シト陳述セラレ候右事情 シ且右提案ハ仏国 ニ於テ外務大臣閣 一両国間 \neg ユヘキ旨宣言スヘキ 総テノ , ブリア 一ノ条約ヲ総テ 日生スヘキ ノ条項ニ依 ル シ 国ノ 仏国及合衆国間 ニ於テ交渉 /署名ニ付 氏ニ [政府 ル 下 依 ・紛争ヲ IJ 1 = ハ 八 締約 以リテ提案 ,国民 合衆国 至 \exists ノ見解 日 1 仏国 付拙 レ ス ス ヲ付 解決 ブノ受 国 ル \sim ^ \exists シ 丰 カ ŀ Ŧ 政 ノ

諸国 二点ニ於テ千九百二十七年十二月二十八日付拙翰中 モ千九百二十八年一月五日付 為更ニ一層有効 国政 及 性質 t ル 提議ヲ 解説ヲ容ル 候此 斯 合衆国 カ如 条約 J. 両政府現在 一受諾 且 世界平和 ノ 由 フモ 府及合衆国政府ハ本件条約カ多数国 = 仏国及 加 ナ 1) = ク被存候合衆国 ハ先ツ仏国及米国間 不幸ナ 三付 シタ ノタ 丰 = 半 ij 依 ル リ受諾 セラル ノ余地 ルコト 合 点 デル 米国ノ現在ノ努力 他 ル際合衆国政府カ抱懐セル見解ニ合致 ノ努力ニシテ終局ノ ノ為記念スヘキ貢 三於テ 如キ多数 ル = 1 ル手段タル 於テ右提議 主要国ノ ・ニ付テ セ ^ ア キモ ラレ得 八必 [政府 ル ハ 条約 モノニ有之候第 国 <u>・</u> ノ パノ意見ニ ノトス 八目下 ヘキコト 間 ス ノミニ於テ 「ブリアン」氏書翰 ハキモノ ハ異論 ノ条約 ハ 効 受諾 献 ハ成果ヲ得 カヲ発 ショナス ル 密 成功ヲ収ムルニ於テ 本件条約 -疑ヲ容 拠 接ナル 1 ス コ ハ平和関係 余地 ル能 ナリ 締結 ١ ν -貴国政 生 ハ 八二本件多数 間 モ 条約 二締結 合意ヲ見居 ノト可相 サ ス ア *>*> ト シ ル サ 然 ル ル ル ス ル がんの令仏がかり 能 コ ル ij) = モ ル ル 文言 後 ハス `**** 至 ノ モ モ = セ 何 他 ラト セ略 ラ 成 ト 1 ラ ハルル候ハ且ノ 可サ被ナ等 玉 サ 述

> 幸 ト 合理 シ ル ル 本件条約 間 ス ル 非公式ノ予備的交渉及総テノ 合意ヨリ) 予備的取 カ為貴国政府カ合衆国政府及関係各国 目的ノ終局的完成ヲ危殆ナラシ ル ル ル 確定的条約ヲ持 ニ合意不成立ノ不必要ナル カ客年六月ブリアン氏ノ 党渉ノ 其ノ努力ノ成功ヲ深ク顧念スル 三非ルカ故ニ有之候仏国及合衆国 条約文ニ依リ之ヲ調和シ得ヘシ ス Æ ル ノニ有之候以下所述ノ如ク合衆国 来ル Ŧ ニ用ヒラル カ確定的 4極ヲナス 基礎 ノ ルモノニ非 = 有之候 ŀ ス シテ此等諸国ニ対スル ニ受諾 ル コトニ全然同意セラ ヘキ文言ニ関シ他ノ ハヘク コト ス 提議 = ル 、政府 火候蓋シ 同意 危険ヲ招致ス ニ先 三係 ٨ セ 1 チ ラ以テ ラ ル 受諾 生 ኑ 関係各国政府 ル - 思考スル ヲ欲 スル 条約 ハ ル 一政府ト 危険ヲ 諸国 共 [政府 シ得 ル ル ル 他ノ (三平和 案ヲ セ = \sim 丰 於 ラ ス コ ル ハ若シ 関係諸国 様考慮セラ 行 受諾 悉 而 ト Ŧ テ コ 三シテ予 増進 決シ トヲ疑 動ヲ ク ジ見 1 = ハ 之ヲ 除去 仏 依 如 シ ス ルキ予 テ不 共 得 解 玉 ij ル = 女 プ 政 = ス サ ^ 対 ハ

R11 = 千九百二十八年一月五日付ブリ 1 テ ノ 合衆国政 点 /\ 前 述ス 府 1 ル 共同シ戦争否認 所 1 密 接 ナ Ź ル 関係 ン氏ノ回答 1 ヺ 多数国間条約 有 ス 八仏国 ル モ 1 政 ヲ ナ

結果

シ

Ŧ

形式ヲ

何

締約 若ク 月二十 候貴国政府 ハ侵略戦争ニ限ラルヘキ 確ニ規定致候 国カ国家政策 Z ハ制限ヲ包含 ル 八日付拙翰ノ ノ意ア カ客年六月予ニ提出セラレ千九百二十七年十二 ル ラ セ コ 手段 ・主題タ ス寧ロ之ト反対ニ左ノ如 ヲ ・表明ス ŀ シテ Ŋ ・モノ シ条約ノ形式ハ 総テノ戦争ヲ否認 ナル旨ヲ明ラカニ考慮致居 ル } 共 (三斯 ジ如 が斯ノ 丰 措 キ条約 如 ス 辞 ル ヲ + 以 条件 ジノ範 コ ŀ テ

ス

他方 トヲ非議シ且斯カ Ξ 対ス ハ 仏蘭西国民及亜米利 ル 其ノ国家政策 ル戦争ヲ否認スルコトヲ各 **か** 一手段 加 合衆国民 1 シテ戦争ニ訴 プノ名 [々厳 1.二於 へ粛ニ デ フ _ ル 方 宜 言 7 ノ

同

紛議又 = 於テモ平和的手段ニ ナキ 西国亜米利加 ハ紛争 Ŧ 1 F ・ハ其 ス 后衆国間 ノ性質又ハ起原 依 ル ここ発生ス 1 外其 ラ ブ 決定又 如 ル 何 コ 三拘 ト ~ ア ラス孰 解決ヲ ル ^ 丰 求 V ---1 切 A ル 側 ノ

ハ貴国政府ニ於テ其ノ 理由ニ付通報ヲ得サ 原提案ニ対シ右修正ヲ提示セ ル モ予 ハ右カ特別ナ ル意義ヲ有セ ラ ν

> 討議 府 等拘束スルモノニ非ル 並仏国及合衆国政府間ノ其ノ後ノ交換文書ノ写ヲ 約ノ条項ヲ更ニ討議スル 依リ予ニ提出セラレタル原提案ヲ基礎ト 文言ニ関スル 考慮及批判ノ為伝達スル通牒ノ発送ニ付合衆国政 ニシテ ノト見做サル ノ予備的討議 ル セラレ 国家政策ノ手段ト ル ブリ モノ ハ最終条約 ンコ 伊及日本国政府ニ対シブリアン氏ノ原提案 上記趣旨ノ案ニ異議ナク且客年六月ブリア アン氏提示 ル ۲ 試験的合意ニ到達スル コト - ヲ提議ス ヘキ ノ締結 1 、主題ト 及仏国政府カ合衆国政府 ノ原形 Ŧ シ コト セラ ノニ非ルコト テ総テノ戦争 ・スヘシト ル ノ意アルニ於テハ予ハ仏国 ル式ヲ本件 ノ光栄ヲ有シ候尤モ之等予備的 ル 勿論ノ議ニ ル迄参加国政府 ・提議シ得 ノ目的 ヲ熱望致候若シ貴国 条約中ニ ノ無条件ノ否認 有之候 シ右多数国間 サ ヲ ኑ ル 以 用 合シ上記 パヒラ テ 何 \exists / 之等諸国 他 V ト ヲ 府ト ジェ · ヲ 示 政 ン Ī ル ヲ 氏 モ ノ条 大国 府 フ \sim 文 カ = 政 ス 丰

モ 1

右申進旁々 *>*\ 兹ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ フ ラ ン ク • ピ Ì ケ p 候 ッ

千九百二十八年一月二十一日付国務長官宛在米

仏国大使書翰英訳文(仮訳

嘱致候 テ 一日付貴翰ヲ以テ御開示相成候我政府ハ其ノ 、為採ルヘキ最善ノ方法ニ関シ閣下ノ力ニ依 ハ両国政府ノ意見合致シ居 下 ノ接近ヲ見 一月五日付拙翰カ閣下ニ抱懐セシメタル意見ヲ ハ千九百二十七年十二月二十八日付貴翰ニ対ス ル 1 満足ヲ 閣 下 「ル様見受ケラル = 対 シ 表明 セ A ルル一案ノ実現ノ根本原則ニ付 コ IJ ŀ 両 国 ヲ 本月 余 政 ル 好見 П = 依 +

七年六月 見受ケラ 仏蘭西国及合衆国ニ特殊 歴史的 ν ブ ノ仏国原案 関係ニ鑑ミ望マ 八仏国政 ナ シ ル 府ノ見解ニ依 ク且実現シ 一条約ヲ考慮 得 $\tilde{\nu}$ ^ セ 丰 ハ ル 千九 両 モ [共和国間 1 省二十 1 如 ク

共和国 仏国 目下改訂 個 争反 政 ス 政府ニ依リ 政 対ノ ル 公 2セラレ 府 ŀ 2ノ目的物 国政府 宣 同時ニ合衆国政府 ハ 斯 言ヲ拡 提議 ク 厶 シ ト ハ右理由ヲ参酌 大シ セラレ テ タラシム シ 其 ッ 且 y 7 原案 他国 タ 7 ル ル宣言ヲ記載 ル ハ他方同政府ニ [ヲシ 7 仏米仲裁裁判 伸張 必要アリ セ テ之 A セ コ Ξ ラ ト ١ 加盟セ · ヲ 欲 セ ル 思惟 ト 条約 A ル ヲ シ ij コ 、特殊ノ 見 ーセラ 候) シ ŀ 1 - ヲ単 ム 冒 ル 此 ν \sim コ 頭 候 ト 丰 ノ理 = =

> 陰蔽セス シテ諸般 且 之ヲ指摘ス 1 サ ij 困難ニ遭遇ス シモ ルノ義務アリ セ ラレタ ヘキ性質ノモノ ル ኑ 新 ナル 信 シ ナ 交涉 ル ^ ハ 丰 コ ŀ ヲ

和国政府 有利 斯ノ = 得ムトスル冀望ノ下 ハ IJ タ /以テ有利 賛同 合衆国ト共ニ其ノ追求スル結果ヲ最モ速ニ且最モ ル 1 如 ŀ ク ス ス セ ル ル 条約 ラ 多数国間 ハ其ノ何タ ヤノ問題 ノ用意ヲ有スル レ次テ総テノ主要国ヲシテ署名セ トスルヤ将又先ツ世界 カ先ツ仏蘭西国及合衆国ニ依リ署名 = 締結 ル ニ其ノ提案ヲ為 ハ全ク手続ノ問題ニ有之候共和国政府 ヲ 問 セ パモノニ候 ラルヘキ ハス最モ実際的 1 ・モノ 主要国ノ或 シタ ル ŀ 1 ニ 過 シ シム 思 テ 考慮 ハ 丰 ル 、ス即 セ ル モ ル 確 ヲ 1 ラセ ル 実ニ チサ共 方法 以 = ル ラ 依 テ ル ν

乍併玆ニ 多数及其ノ バニ 依嘱 ハシ 結 セ 知 囲 ラ 内 我政府カ特ニ之ニ対シ閣下 A シ居ラル !ニ於テ為 主要国 V ル セ __ シ ル Ŧ へ ク 1 規約並千九百二十五年十月 1 がス所 多数力 事態有之候合衆国政府 候右諸 如 丰 共同 ·条約若 平 和ノ 国 [八右諸国 努力ノ目的物ト 組織及確保ヲ 中 ノ -立保障 注意ヲ [三対 八世界各 口力 喚起 シ = 相 為 以 関 ラ 互 シ テ国 ル セ ル 1 的 国 ム 一片於 玉 義 ル ノ コ 連 \supset 大 ᅡ

奏が表務ヲ負ハシメ右諸国ハ之ニ違反スル能ハサルモノニ対シ義務ヲ負ハシメ右諸国ハ之ニ違反スル能ハサルモノニ条約ニ依リ既ニ相互ニ拘束セラレ之等約定ハ総テ右諸国ニ

テ諸国 閣下 ニ至リ 之ヵ処理ノ ト及国家間ニ起生スヘキ紛議 否認 忠実ナラムト ハ客年 セ ス ハ国際罪悪トシ ル ル 共同 為 ノ事実ヲ特ニ御承知 九 月ジュ _ - スル顧 決議中 切ノ平和的手段ヲ ネ 念ニ テ否認スヘキ行為ハ侵略戦 ・ニ於テ各連盟国ノ i ヴ 依 = 出席 ハ其ノ性質ノ如何ニ拘 リ決定セラレタ ノコト 用 セ ユ ル 総 ^ ト存候右決議 相 丰 テ 1 互 コ ル 連盟国 ア権利 ŀ 一定ノ原 ヲ 特記 争ナ 及義 中 カ ハ 戦 ラル = ス ルスコ於則 務 争

<u>ー</u>ノ ノ諸国 右ハ合衆国カ之ニ 事態ニ御座候固 ノ ト同様 条項ニ何等拘束 ニ之ヲ考慮ニ入 関 Ξ 知 ハセラル リ合衆国ハ此 セ +}-IJ ル ル シ モノ ル ト ルヲ拒絶ス 雖 ニハ無之候 ノ事実ニ依リ国際連盟 モ 該 会商 ル 能 = ハサ 参 加 ル セ 所ル ノ 他

合衆国政 西 国 候共和国 [及合衆国間 ノ一条約ヲ締結セムトスル客年六月ノ仏国提案 政府 ・交渉ス ノ百年来ノ関係ヲ参酌 ハ同様ノ条件ノ下 ル 1 用意ヲ有シ トニ且同様ノ基礎ノ上ニヲ参酌シ起草セラレシモ 此 点 = 関 シテ ハ 未タ嘗

> 約 条約 テ其ノ態度ヲ改 ヲ考慮ニ入ル ア締結 こ参加 セ ル \exists ムコトヲ要請 ノ要ア } Ź タル ヲ提案スル合衆国ノ発議ヲ見 ル コト ヲ見タル次第ニ御座 無之候然 セラレタル レ 諸国間 ١ モ 多数国 ニ存ス ル = 間 及テ右 ル 1 関係 一条

之レ合衆国ノ考慮セル 得ヘキ案文ニ 的トシテ仏国政府ノ将ニ為 如ク合衆国 ノ全会一致 措辞 Ξ 関ス 7 = 則リタルモ 対スル関係ニ於テモ右 加盟ヲ得従テ右諸国間 ル 一月五日付仏国政府 条約ノ成功ヲ確保 シュ セシ処ニ有之候多数国 諸国 \tilde{j} Ξ 一於テ承諾 発案 セ = 八八総 依 A IJ \exists 承 ŀ セ テ 諾 ラ 1 圄 ヲ 連盟 1 其 ν セ 条約 ラ タ 1 玉 目 ル

之レ一月五日付我提案ノ解説ニ御座佐

用意アル 衆国政 1 両 ハ ク 共和国政府 ヘキ国際的 立スル 変改セス又其ノ立場ハ常ニ 戦争ヲ罪悪 ス ル 共和国政府 府ノ意向ニ呼応シ其ノ国際的 総 コトヲ宣明致候此ノ点ニ関スル共和 テノ範囲 制裁ヲ設定セムトスル一切ノ宣言ニ加盟スル ハ常ニ凡ユ <u>٦</u> シテ糾弾シ之ヲ妨止シ若 ノ真摯ナル 内ニ於テ合衆国政府ノ ル場合ニ最 冀望ニ付 同一ニ有之候然レハ で明白 :義務ョ 丰 ロハ禁遏ス 確信セラル = 且 努力ヲ援助セ IJ 生スル 国政 何等 閣 府 ル 1 事態ト 下 ジ意見 = 厬 ル 足意 ヲ ハ合 A 1 ル

キ且戦争ノ絶対的否認 衆国政府 **人義務並** 当ナル 共和国政府 Ŧ ノニ有之右案文ハ米国案ノ実現ヲ現在確保スル 一月五日付ヲ以 モノ 其 (カ右ニ賛同セラレムコト ラ 相互ノ安全ヲ保持 ト思考セラル ハ如上ノ意見留保ノ下 ト諸国民 テ提議 ルモ セ ペニ依 ル案文 ノニ有之候共和国政府 セ ム ヲ冀望セサ - 二合衆 ŀ IJ 締結 ス ハ 実ニ右ノ懸念ニ基 ル 正当ナ 心セラレタ 国 政府 ル能 9 ハス ル ニ最モ 為 顧 ル 約定 ス 候 八合 念 へを

クローデル

ス

ル

ヲ

~

丰

・総テノ

提案ニ欣

然賛成可致

使ニ手交セラレタル国務長官書翰正文(仮訳)千九百二十八年二月二十七日華盛頓ニ於テ仏国大

千九百二十八 対シ其 問 関ス 蘭西国及合衆国政府 擯斥 題ヲ ル ス 致啓上候陳者合衆国及仏蘭西国カ他ノ 実際的 両国間 ル (ノ相互ノ関係ニ於テ国家政策ノ一手段トシ 一条約 年 見地 最近 一月二十 1 締結方ヲ協同提議シ得 \exists 1 ·討議 ハ 13 審査 有効 ·一 日 付 八若 チ ラ ル 貴 ル シ之カ成功ヲ期 世界平 輸っ ノ要ア 依リ 和 ij 進捗セラ ŀ ル 為新 ヤ否 世界 見 ュ セ 主要強 ル F ナ ン テ戦争 V ŀ j ル 点 国際 候 問題 マセ テハ 国

仏蘭西国 「 ロ カ ヤ否 十 ラ 居り且其ノ共通ノ目的ヲ達成センカ為執ル 運動ヲ開始シ之ヲ助 ヲ仏蘭西国 余 ヲ = 干犯スルコト 諾シ得サ ル イニ依 要スル セン 八勿論仏 二千九百二十七年十二月二十八日及千九百二十八 カニ有之候千九百二十八年一月二十一日付貴翰 一日付拙翰ヲ 原則ニ t ノ相互ノ ルノ」条約及其 } 西 シ = 関 国 ス モ 力右諸条約ニ基キ現ニ負担スル国際的義 ル 又千九百二十八年 唯一ノ 関シ一致シ居ルコト ョ ル 蘭 = 1 ス シ 許容ス Ŧ ŀ 関係ニ於テ戦争ニ訴ヘサ 西 ル貴国政府 ナクシテ合衆国及其ノ セ 以テ送付セル提案ヲ仏蘭西国カ無条件 テ ラレ 1 国 シテ閣下ノ最近ノ 合衆国 上非 力現ニ負 実質的障碍 ル タ ノ他ノ中立保障条約ノ一加盟国 成 モノ セ ル ルモ右義務 如 ノ疑義 ント熱望スル 1 担スル条約 共 ŀ 丰 一月二十一日付 -条約ヲ 解釈シ得 = ハ国際連盟 同 ノミニ有之候右ノ ハ従来ノ往復書翰 、書翰中ニ提議セラ 価値 ハ客年六月 合衆国 他ノ 上ノ 八右 点ニ於テ心ヲ ル 世界主要強国 多数国間 /協定ヲナ ノ ヘキ手続 義務 義 1 一員 締結 ヘフブ 務ヲ公式 ハ 教別当然 ۲ 同様正当 条約 IJ 点 \exists Ξ ス 年一 依リ _ = Ź v シ **}** シ 1) 7 ル > 考得ル -シ テ 且 須要 (三解 居候 コ ン 1 = 月 共 受 ŀ ス ۲

候故 蓋シ ル **总望致候然** シ Ŧ 1 ス 加 シ ラ 目 ヲ = 得 条約 盟国 = コ 明 = 国 間 的 ゥ 世 Ĵ 国 卜 余 際連盟国カ = . ケ = ル 7 **١** ጉ 思考ス 関 シ ダ 何 ハ合衆国 地位 ラ セ ナ ル 1 条約ヲ自 相 ス 家 ハ戦 加盟国相 政策 シ ク V ル 同 ル 等ノ障碍 _ 主要強国 規約 論議 シテ 締約 二国間 価 ŀ コ Ξ = 争ヲ ラ モ ŀ 値 7 シ ル 若シ国 4共同 ア実質 戦 国 ス ŀ **** IJ 一手段 Ŧ ノ 由 -単独ニ 無条件 争ヲ ジヲ認 [ノ条約 合衆国及国際連盟加 ル 互及合衆国政府ト協定ス 両 条約ハ右ト 1 夕 Ξ 強チ不当ニ Ξ 一提議 立ス IJ 締結 モ ハ思惟 シ ・テナシ得 無益 Ĵ 国 得 際連盟加盟国 メ ŀ 家政策 無条件的不 相違 シテ = ル サ ~ シ ŀ ス 否認 得ル モ 多数 カ ナ ス ル ル 貴国 (ラサ 無条件 非ラ ル 1 同 ル コ = カ 無之 政府 国間 ス 1 4 様 コ \sim 1 一手段 [政府 Ť ノ ル 解 ラ ١ カ ル ヲ _ 理由 困難 如ク被存候然 ハ連盟規約 ス 戦 ラ ヤ コ 1 = ル E ハ 之ト 盟 玉 ル サ ŀ 条 否 カ 条 = \exists 世界 国カ 間 **\rac{1}{r}** 約 無之カ 被存候 認 ト = = ナ ル 約 容 若 至ラ 依 ル シ ヲ ル \exists 同 1 ス ヲ ス 共 コ テ ij 7 締 カ ŀ ル 指 ル ハ 1 __ 主要強国 多 否認 1 · ヲ 別 同 ኑ ン 国 結 故 1 斯 ル \exists 条項ヲロトヲロアを 数 多数 能 シ V ス = ~ ノ 1 ŀ 致 1 有之 テ カ 度 1 玉 ハ ス ル 個 如 相 ヲ 1 戦 候国キ モ間 サル 違 其 = =

> 米利 家政 ス _ 極 ケ国 ル ナ メ 玉 テ興 加諸 ノ第 モ 信 Ĵ シ シ 1 ス , ニ有之候 内十 味ア 共和 尖回 ル 行 __ 手段 ヲ ヲ 七 ル 国 国 欲 撤 [際会議 ケ 廃ス \exists 1 ŀ セ 国 ŀ 名 サ シテ戦争ヲ ル カ = = ル 有之候右· 一於テ表明 力最近右 モ 為俱 \mathbf{K} 際連盟 ノニ有之候此ノ = 無条件 努力 会議 加盟国 諸国 セ ル ス 決議 間 = = ル 罪悪視 代 テ 相 コ 表 ヺ 互 点 ル ŀ 採 コ 1 ヲ セ =関係 ŀ ラ 択 ス 関 真 ν ハ セ ル シ = 注 夕 ル 亜 妨 \exists = 目 於 米利 ル コ ト ク =+ デ 7 ヲ = ル ハ 亜 玉 加 モ

否延テ 候寧口 ヲ 丰 基 故 ル ル = 手 平和 テス 為 宜]本的観念及目的ニ抵触スル 依 段 ニ余 モ全然正当ナ リテ課 ス 言 ŀ ハ全国 反 ル \exists = 1 シ ハ仏蘭 一付ス ト 大理想ヲ増進スル 対ニ右性質 テ = 戦争ヲ ・ヲ是認 於 セ ラレ 西国又 テ ル 際団体間ニ ル ハ = 「侵略者」 心セラル 断然且 其 Ŧ タ ノニ無之候 テ 正 ル 1 ハ 特殊 効果 他 締結 ル 式取 無条件 ノ 最モ有効ナ 場合ヲ規定 国 ハ ノ ナ 甚 義務 [際連盟 ス 極 モノト決定 シ ル ル ハ ヲ = 文字ノ スヤ 世界 否認 ク ハ = 弱 違 連盟自身 国 ジノ凡テ セ 然 ル 犯 カ メ ス 定義 ラ ル ν 手 セラ シ 結 ル 除 ۱ 段 若 ν 局 \exists 且 外 並 モ ナ 力 1 ル ハ ŀ 国 国家 其 例 若 ij 深 主要強国間 家 国 ^ ハ キヲ 及条件 際連 連盟規 シ ト ク 政 かか 戦争 斯 観 平 論 策 和 念ス 信 1 結 盟 ノ ヲ 加 ス シ ノ

意義ヲ 扱 シ 公然 テ 刀 ጉ 成 ス フ 有望ナ シテ = ij ル 余 \sim ・毀損 ク 1 承 JF. ハ テ 貴国 認 若 候 3 1 マ 積極 = ス ス 1) シ 3 ル 政府及合衆国政府 シ 且 両国 世ノ注意ヲ 努力ヲ鼓舞 ル ル 仮 テ 留 的 カ 令破 [政府 保事 価値 人 如 類 丰 項 壊 カ右理想ヲ _ \exists ハ 喚起 実質上破壊 般 ŀ 7 セ セ 採択 サ ル アラ = 甚 シ人心 理想 ル = 依リ = 大 ハ ヲ 技術 両 固 セ 心(実ニ其 ナ 致 三訴 国 執 \exists 也 ル 失望 的 両 T ラ カ 也 精神 実 国 ラ ν サ ル タ ヲ = ル 1 ル ラ ル ヲ得 共同努 7 純潔 与 其 処 ル コ 有之次 斯 3 ラ ラ ヲ 無 ル サ 卜 1 以 分 能 単 加 相 モ ル テ ヲ コ ノ 第 純 ク 成 ノ ト 記 ト真取ニト真 ル

安定ニ対ス 人道及文明 表明 Ξ ル シ 如 有 有之候合衆国 ス 之候 加 1 盟 政 ル ハ ル襲撃 国ヲ 府 モ 加 斯 7 盟 伊 広 ク = 国間 拘束 依 1 ナ 丰 独 政 ル 如 ij Ξ 立. シ 羊 限 加 及 ス 府 場 ニ於テ戦争ヲ 条約 IJ \sim 盟 日 テ \exists ハ 丰 戦争ナ 合衆 本政 共 セ 1) ラ 通 皃 中 ----) ラ 国 = ν 府 ν 得へク 利 使 多 = ŀ ル ハ 角 数 共 慣 益 ١ 撤 _ 1) 廃 国 = 行 切 セ 1 間 ラ 且 将 為 テ ス ノ 1 撤廃 来孰 戦 相 抑 ^ ル 条 ハ 意 丰 \sim 約 互 圧 争 決 丰 ヲ = = ν ヲ セ ^ 締結 戦 見 介 議 厳 1 ラ Y 政 ヺ 密 争 セ 2 ル 類 府 サ 眀 チ ス Ė コ 社 \sim 訴 丰 確 及 ト ル ル ル 会 判 用 ノ へ 他 ヲ モ 1

> ト 約 独 テ 正文並 敬意ヲ IJ) 締結 及日 返 間 セ [本政府 之候 ラ ^ = 1 交換 戦争 レタ 予備的討議 表 ス 故 シ モ ノ ハセラ ル = = ニ其ノ考慮並 訴フ 仏蘭西 余 = レタ 敬 有之候右申進 ^ 千九 1 ル [国政府 基 コトヲ禁止ス ル 書 礎 百二十八年 三批判 翰ノ写ヲ移牒 1 \neg シテ フラ ハ 合衆国 ラ メ 旁 其 ン 1 余 ラ 為 ク ル ___ 後仏 [政府 月 適当ナ 「ブリ • ハ 玆 七 ピ + ン = 蘭 1 1 __ 日付 重 ト ル ァ 共 西 多数 ケ テ ス 玉 ン = 英、 二氏 閣 ル 卜 p 提議 合衆国 国間 下 ッ 原案 伊 グ = 向 ヺ 条

在米仏 国大使 3 1) 米国国 務 長官 三手交 セ ラ ν タ ル

-日付

書翰正

(仮

訳

世界平和ヲ 目 見 協 考慮 関 書 ニ通報スル 出 艻 ス 翰 シ セ 三付 ル 致啓上候 二月二十 遂行 九百二十八 \neg シ 有効 L ブ セ 1 1) ラ = ル 火光栄ヲ 共通 関 ア = レ 陳者戦争ヲ 建設 ン タ シ 七 斯 ī ル Ħ 年三月三十 有シ · 感激 見解 氏 ク セ 付貴翰 ン __ ハ 排斥 候 欣 ラ新 致 ŀ 7 快 中 ス セ \neg = ブリ ル = 関 ス 1 ル = 於テ ヲ 且 玉 シ閣 セ ル 際的 ア 真 多 確 ラ 我等 ン」氏 数国 摯 信 V 下 運 居 = カ セ 確 動 間 文 両 ル ル \neg 認 ブリ カ ハ コ = 玉 1 均 故 両 ŀ ヲ 条 セ 玉 ヲ ラ シ 鼓 7 約 = ź 討 カ 締 余 V カ 司 ∟_ 結 ハ タ 埶 シ テ 氏 閣 方 ル 心

世

1

二以

干

=

下 ヲ 下

意図

セ

ラ

ル

ル

結

=

到

達

ハ

多

念ヲ

ル

ヲ 果

策

1) セ

1 ン

七 =

数 数

テ

= 1) 形 観

形式

ラ ル モ ス

変ラス

結

果

何即

チ

特

三其

1 シ 含 匆

規模 閣

ナ

}

張

ス

ヲ

必

要

ナ

IJ

·思惟

セ 1 考 為

ラ

 ν

候 ヲ ν 下

若 包 Ħ.

下 \sim 玉 玉

於 固守

デ

本件

条約 得

ハ ナ

無制

限 思 カ

誓

約 ラ 閣

ス

ニキ間間

テ

的

ナ 1 主 Ξ

ル

条約

ヲ

·完成

ス

ル

ヲ ラ }

必 如

要

}

ス

ル

結果ヲ

来

ス

= =

ル 年質ニ 得 かテ墨 式 須 丰 ハ 従 亨 ス ラ 来両国間 セ ル ヲ = 閣 意向ア 違 下 . 之ヲ = ス ŀ 同 ナ ル ,本討議 様ニ サ 丰 モ 1 V 1 モ 一確信致サ 夕 題 ŀ 1 哈保 ル意見 セ ト カ ハ シ 両 若 持 々 国 シ ν 1 セ 交換 右 居 ラ 相 候 互 実体 V = サ 結 \exists 1) 受諾 ij ル 招 両 \sim 国 シ カ セ 得 双 ラ ラ セ ラヘ 方 # ル

府 換言 ル ル 'n 努 下 カラ 促 ノ過 ハ 仏蘭 進 能 セ 程 シ 西 フ = A 限 於テ迅速ナル 国政 ル IJ 実行的 コ 府 ŀ ハ - ヲ提議致! 問 ナ 題 決定ヲ ル ノ 見解 凡 候 テ 目 1 1 局 シ 的 テ 卜 面 採 ス カ 択 ル 検 亜 討 シ 米利 且 セ 出 ラ 来 加 レ 得 政タ

ブリ 争 ス ル 排斥 希望 見解 加 Ξ ス ル IJ 凡 ア ル ン」氏 ヺ コ テ ハ 1 モ = ハ 侵略 本件 ン 関 寧 依 ト 1 ņ 1) 玉 1 ス = 依リ カ氏 ル 戦 多数国間 テ 1 多数国間 ス V 限 争 鼓 政 実行的 ノ学テ IJ = 舞 府 実際 署名 セ 7 , 同意ヲ得 条約 ラレ 限 条約提議 ・ナシタ 上 国 セ 方法ニ於テ促進 必 双 ン タ 1 形式ニ ルモ 然 方 ᅡ ニ遭遇 ス 1 ル 1 ル 国際礼譲 、実現ヲ 提案ヲ ル 1 = 一於テ提議 最モ 仏蘭 = 有之候故 セ ラ 支持 セ 適 其 西 側 ル = ン 応 1 \sim 対 1 セ 7 ス 同 シ 丰 ラ 措 シ ス ル 意 テ Ξ 重 相 辞 V \equiv 条 ヺ ル 大ナ 当 必 タ 玉 真 件 畄 *>*> プー亜 夢 ツ 間 墊 .. ル

> 拘束 使用 困難 ラ 下 語 利 ハ バ ル 家 1) *>*> ル ナ カ二月二十 ニ制限 加 ル ノ <u>_</u>= 観察 ヘキ 大陸 = 如 一致 約 ク セ セ 有之候右 タ 現レ ラ サ 丰 ŀ ル ヲ 仲 セラ 於 セ ル ル 1 セ 1 モ 居ラス 裁 ラ ヲ ヘク 国 孰 凡 去セ ケ ル 七日 得 用語 ν 裁判 V 家 限 加盟 ル ν テ 要 Ź サ ス タ 汎 間 カ ン 条約 候然レ 1付貴翰 ト感シ 求 亜 性 ル ル ラ フ ኑ 関係国 条約 ハ 仏蘭 一決議 米利 関係 質ヲ之 必 セラ 紛 \sim カラ 争ヲ 要 = 図 対ス 卜 中 タ V 西 加会議 = Ξ 家 間 於 サ ·三言及 玉 を一賛 面 モ ル タ 三与フ 起 換 題 ル 該決議 [政府 かテモ ル ル モ ル ス ス 言 <u>٦</u> Ŧ 予備 ,戦争抛 モ 1 ス = ル \sim ナ ノ セ 、ニ有之候 nカ多数国 於 ル 1 セ 亜 ル = 丰 ^ ν = ラ Ξ 的 ハ数多 デ 米利 非 可 其 有之候 = コ ル 棄 能性 *う* V 至 「 侵 ŀ ン ヤ 1 Ŧ タ = ラ 加 地 H *>*\ 特性ヲ付 同 誾 シ ノ 1 ル 政 閣 本問題 能 理 略 = ヤ現存全国 留保 様ノ 条約 戦 府ヲ = 他 メ = 下 王 過 無之候 1 タ 争 ノ サ 1 決議 留保 丰 カ i シ 希 V 理 = ル カ 規定 テ サ 依 同 ナ ス 望 由 様 家又 ル 中 *>*> ル IJ ル 亜 --セ 定 ル *う* モ 閣 為 テ 用 *>*> 米 ラ 玉

於 セ テ ン 蘭 凡 \exists 西 テ 玉 1 ヲ カ 強国 提議 三国 間 卜 セ 締結 条約 ル 卜 ス 同 1 形 様 ル 式 コ 1 条約 ŀ = 能 於 ヲ テ ハ 多数国 合衆国 サ ル コ 間 ŀ ト 条 ヲ 個 閣 約 別 下 1 的 形 ハ = 意外 締 式 =

ナ ク ハ 丰 テ ハ ヺ 夫 想 ŀ カ = 存 上記制 タ 方 故 名 起 ス 包 = A 含ス 依 ラ ル = シ ル タ = 国ヲ多数 充分明 理論 依 IJ 且. 位 法 ν ル / テ道徳的 茰 置 限 ij = ル タ 如 相互 (三仏蘭 内 上 テ 彐 ル ク見 国間 締 IJ 瞭 ゲ 7 仏蘭西国及合衆国 = 障碍 将 於テ絶対 結 受ヶ候 = ル 7 条約 説明 三結 西 来セラ 関係 約 セ 定ヲ 以 ラ 国及合衆国 合セ 外 ル 1 シ = 余 厳密 的 場 置 制 ノ政 ^ ル 1 ラル 何物 無制 丰 ル 合 丰 限 他 司 タ 1 ス = 両署名 間 限 F ル二国 法 如 ラ 1 ル ル ハ 条約 如ク E 様起 ナ モ ク モ 1 ラ. 形 各 恒 ル 1 1 国間 協定ヲ 成 永 困難ニ |人友好 Ŀ = 玉 ŀ 案 点 開互 関 信 ス 1 丰 セ = ル 歴 取 シ ラ シ 1 成 極 能 テ 曝 居 V 3 条 史 1 シ 的 関 約 立. ハ ス 候 タ 1 昨 ハ ハ 友好 該 事 __ 係 提 シサ コ ル 玉 年 得ル実方 ጉ = 協 事 交 案

神及 負 此 = 候 ヲ ル 利 ラ 対 ル ノ」条約 玉 ij ス フ 求 国 ν ス ラ 1 一条 父言ノ |及日 治 可 ダ 際 Ξ ١ ス ル 時 A ル 能性 的 方法 的 \exists 国 = ル ル 共 ナ セ 約 仏蘭西 提議ヲ新 通 義 IJ ラ 紛 政 コ 本 1 セ 国政府 形式 ヲ特 ŀ 中 務ヲ 又 且 ル = 府 = ī ス ラ 依 関 (八中立保) 同 基礎ヲ見出ス目 ル ル 1 カ = = ル スシ 最 留保 右 政府 IJ 起 国 本件新条約 ヲ ス = ル 上記 平 こ此等諸 ル 条約 [政府 同 = シ = ル 検討 和 後ノ ヺ ヲ テ 躇 カ 於 \exists セ = が忘失ス 障条約 許 建 ጉ = 諸 *>*> ン 致候国際連盟ノ 責 テ 容 設 足 世界 署 コ 研 任任 ハ仏蘭 ア 政 シ 昭政府カ最 トヲ 府間 名国 究ヲ タ .ラ成 ス 1 ル 卜 1 為真実 条件 的 ラル 致 ル ル \sim ル 1 後直 ア以テ 当事 丰 候 他 カ 衷 ナ E 功 モ 西 = ラ Л. It. 締 戦 一案ニ 1 心 シ 1 1 玉 セ 提 後 ラ 結 テ 凡 争 タ 従 = 国 政 シ = 1 チ 手段 非 一員 1 観 テ ス = 議 ル 前 7 = 閣 ጉ A iv 独 斯 訴 上提出 亜 玉 念 下 N ス 1 ル シ ハ 米利 Ĺ 義 テ仏 ヲ 政 逸国、英国、 亜 \exists \sim ル = モ ጉ 入 __ ハ 間 其 府 ŀ 依 最 米利 如 サ 1 務 シ ス 層 ル ヲ 意 加 初 蘭 テ 丰 IJ ル = 1 ル ス 1 主張 取 加 ヲ 通牒 テ 且 = 1 向 \sim 1 西 加 ナ 交涉 デ 互 丰 立 盟 調 玉 問 義 = 政 -有之 Ź 修正 案 正 1 ヲ シ 務 和 伊 *>*> p 題 府 ハ 式間許ツヲ 其 カ ス精 太 セ

本件条約 スシテ凡 F ル Ξ ヲ 1 作 適 可能性アル :用ヲナ プテノ ク 用 ハ当事国 = ス 非ン 国カ他ノ諸国ニ対ス ル上 サ ル 他 タ ハ署名国ヲ = 一於テ或 ル ノ国モ亦本件 ル 或 ヘク候 ル __ ル 危険 国家間 玉 = - 関シテハ ív 条約 ጉ 誤解 関係ニ於ケ ノ平等ニ基 1 当 1 同国 . 二 曝 事国 る恐有 ル = 1 7 完全ナ 重 非 ノ 天 3 ン ž ハ ナ =

シ署名国 違犯国ニ対 時 コ = 進步及平和 = Ĵ. <u>・</u> カ シ 其 条約ヲ遵守 アチ段 1 協定 = カ 圧 IJ セ 解放 サ 迫 ル ノ 場合 シセラ 方法 ル 三於テ 1 ^ 変 丰 セ \sim サ コ 他 ラ ŀ じノ署 ン ハ 明 カ 名 為 カ ナ 国 若

故

ハ ラ

ヲ

衆国 Ξ 政府 右第二ノ点 1 完全ニ合致致 = 関 シ テ シ ハ ・居レ 第 _ IJ 1 点同 1 信シ 様 候 仏蘭 玉 政 府 ハ 合

同様 合衆国条約 シ カヲ奪フモ 米利 テ 余 ス ハ疑念ヲ掃フニ ル ナ Ì アが快 ÷ 政府 加 政府 v ノニ非 中 八閣 タ -立義務 ル戦争抛棄ノ宣言 1 ノ態度ニシテ斯ク ス 下 ・カ三月 貢 ル ル (献致ス Ŧ コトヲ確証スル ハ 夫ニ依 1 一日余 ニ有之候上記 ヘクの面 IJ テ性質 1 = ハ署名国 如キ ナ シテ仏蘭西国 モ サ 1三基本問 ノト 及範囲 モ ν Ξ 1 タ ナ 解 IJ ル ヲ変改 IJ Ē 声 シ ,候斯 当防 題 政 期 ŀ セ = 府 = 関 禦 1) セ ハ カ ハ 右 且 ラ ス ル 1 斯

シ

ス

等代換 IJ 立保障条約 七寧 両 ル ル .国政府 ル コ p モ 文字ニ ス又 ノ ヲ ナリ カ 1 今 如 ハ夫ヲ毀 サ 関ス 田当面 ŀ キ国際条約 ル セ 国 ル ハ 際連盟規 従前 損 モ セ ル 七 ノニ有之候 サ 問 ノ交渉中現 = 題ノ ル 包含セラ 約、 \exists 実質 ト ---カ п 一般的 ル カ Ξ ハ 関係 ν ル ル 従来ノ義務ヲ何 ダ · 一条約 ス ル Ξ 意見 判然了 ル ۲ 云フ ノ 又 相 ハ \equiv 違 セ

望ス 要ナ 政府 ニ交換 ン」氏原提案ニ根本的ニ相応スル 国政府ト共ニ 実行 テ国家政 二一月 ル 以テ再ヒナ 1 範囲 様提議 ル文字上ノ訂正ヲナシタル上之ヲ上記四国政府 ル (ノ考慮ニ付スル為伝達シ且同 宣 1 如キ多数国間条約 セラレ 方法ト 内 十一日付貴翰中 ナ 策 ス ニ於テ正当防禦ノ Ŗ ス パノ 一手段 ル 千九百二十七年六月以来仏蘭 サ ル レタ ^ シ ノ ク テ戦争ニ 用意有之候斯 文書ヲ独逸国、英国、 ル 提議ニ従ヒ仏蘭西 ト シ ラ -包含セ 訴 テ換言セ 形式ニ於テ新シキ 権利ヲ フル カル条約 ラレ且 時ニ コ 協定案ヲ合衆国政府 ・毀損 ト ハ 目的 兰月 其 ヲ罪悪ト ラ セ) 伊太利国及日 国政 ラ 署名 自 ご上於テ 三十 西国及合衆国 観念ニ 発的 ル 府 認 ル 国 七 ハ ムル 独自 コ 玆 百 ブブ ハ ŀ 現存条 依 カ同意 = 厳粛 いり必 力希 合衆 7 ナ ij 本 政 ク ア 国 間

条約署名国又 数国 <u>ー</u>カ 力発 三非 ij 7 1 ^ = テ締 ヘクの面 本条約 間 式 $\widetilde{\mathcal{V}}$ V ス ル 生ニ同意 ペニ於テ亜 自動的 結 ヘキ ル 条 ハ 効 ヤウ開 セラ レト シテ如何 粉争又 案 力ヲ発 = ^ 加入国 シ v ・モ署名 違反シタル 1 = = 本条約 交涉 米 タル 放 タ ル ハ紛議 利 セ サ ナ 場合 カ或 国二 加 サ ル 肼 ル 間 ハ 政府 中ノ 性質又ハ起原タ 非 ル ル = ニ於テ攻 ル場合ニ於 ーノミ存スル 常 八此 コト 本条約 対 八平和的 ル · 義 務 スル 玉 ナ = 依 ノ限 ル カ ŀ バリテ 之ヲ回避ス 明カ 義 拿又 成 ヨリ ハ全般的受諾ヲ受 功 テ = 務 方法ノ外解決ヲ 解放 非 三了 コ 八侵 1 創 ハ ハ協定カ凡 ト換言 他 ルト Ż 案 、候最後 解被致 会ヲ 化セラ セ 入ヲナ 1 ラル 締約 · ヲ 問 ル 以レ ニモ 七 候但 ス タ テ ^ 国 Ξ ハ テ / 全国 拘 進 ク 締 ケ) 求 ス ル ハ コ 国 該 約 ラシタ国国ナスメ ż 各 如 候 ŀ メ ラキ 国 玉 ヲ 玉

カ

緊密

ル

平

和

、大理想ヲ

促

ス

 \exists ク

=

於テ

菆

極ヲ

誠

ニ守リツツ

同 右

玉 Ī

[八閣下

ノ言

ノ

如

「連盟自身

ーナル

貢 三抱

ヲ 懐 実

シッツ

7 1

ル

コト

ヲ

確

信 進

ス

ル

モ ル

ノ

<u>=</u> ŀ

有之候

メ

旁 献

々

余 ナ ス

ハ

玆

ニ重テ云

々

事業ヲ継続

シッツアリ且

,性質ヲ

有スル

ノ

国際

西

玉

八同国

カ其ノ外交政策

ニ於テ不断

ニ従事シ来リ 同国従前

> タ シ

ル

チ

ル

/ 感動ヲ拒

A

コト

能

ハ

サ

ル

此

等ノ

理想

=

応

ク 口 ル

条約草案(仮 訳

伊 亜 太利国皇帝陛下、 及 米利 大不列顛海外領土皇帝印度皇帝陛 加合衆国大統領、 日本国 仏蘭西共和 1皇帝陛下 国大統 弋 独 領、 逸 玉 大不列顛愛 |大統 領

聖 シ 其 其ノ崇高ナ 1 ナ 厶 セ 各国民間 ル ル ン 1 義務ヲ課スル ŀ 3 ス ル ナ 職分カ ル ラ ニ現ニ幸 共通 ス猶又世界 (ノ翼望 彼等ノ モ 三存 1 ナ 在 = 1 ル 感動 孰 ス コトヲ深 = ル平 人類ノ V シ 1 和 玉 友好 福祉 ク 感銘 間 | 関係 = 於 増 シ デ ヺ モ 戦久 \sim 争ナ 9 ラ

上

ラ

進

ス

丰

各 ^ 国 家 政 策 1 一手段 ŀ シ テ 、戦争ヲ 罪 惠 ጉ 認 X 且国際紛

完全ナ ンシテ

ル

協力ヲ

閣下 用

ハ

確

信

致

サ

ル

ル 1

ナ

ラ

ン

ト

存

且正

ル

企画ニ対

=

何等 又

j.

曖昧

又 ン

^

留保

ヺ 厳)

為 粛

サ = 効

協

五 式

ス ナ

ル

1

意ア

ル シ

余ノ 常 シ

政

府

最モ真摯ニシ

テ且

最

協

カヲ保

証

シ

)強固

ナラ 場合

×

ハ

拡張

セ

ŀ

ス

ル

交渉中

如

何

ナ

ル

ニ於テモ平和

1

為諸

国民

有

リテ確証センコトヲ冀望シ争ノ平和的処理ノ為戦争ヲ否認スルコトヲ正式ノ文書ニ依

盟ス 道的 其 共同ニ否認 ニ入ラシメ斯 ハノ規範 ル 努力ニ参加シ且本条約カ効力ヲ発生ス コ トニ依リテ各自国民ヲ其ノ有益ナ 二依 ス い奨励 D ル コ シ ŀ テ戦争ヲ各国ノ国家政策 ルセラレ = 関シ 世界ノ文明国民ヲ 世界 7 他 1 凡 テ 水ノ一手段 ル ル 1 条項ノ 結 ヤ速 玉 合 民 セ Ξ カ 範囲 之三 ン 1 此 コ シ 1 トテ内加人

員ヲ任命セ 玆ニ一条約ヲ 締 結 ス N コ ኑ = 決 シ ,右目 的 1 為各其 ラ 全権委 ヲ冀望シ

亜米利加合衆国大統領

仏蘭西共和国大統領

大不列顛愛蘭及大不列顛海外領土皇帝印度皇帝陛下

独逸国大統領

伊太利国皇帝陛下

日本国皇帝陛下

ナルヲ認メタル後左ノ諸条約ヲ協定セリ 右各全権委員ハ相互ニ其ノ全権委任状ヲ示シ其ノ良好妥当

第一々

ヲ有 政府 盟書力…… 沈速 ス Ξ 前記 ……国政府ニ寄託 各国政府 = 電報ヲ セラ 以 ν テ之ヲ通告 タ ル ŀ 丰 ハ ス ル 1 義 国 務

右証拠 テ 作 成 ベセラ <u>۱</u> シ テ ν · 両文共同 各締約 国全権委員 ___ 1 価値ヲ ^ 仏蘭 有 ス 西 ル 本 語 条約 及英吉利語 = 署名調 ヲ 印以

年月

日三

ニ於テ之ヲ作成

ス

(付記三)

大臣 会見録(五十八)

手交 題 来訪致シタル 上重大ナル時期ヲ画ス 四月十三日午後四時米国大使田中大臣ヲ来訪 締 共ニ更ニ日英米仏伊独ノ = ヲ ス 結 関シ米仏間ニ往復アリタル文書ノ写ヲ ルコトヲ 次 セン 丰 コト モノ 命 ヲ提議シ以テ該条約案ヲ玆ニ併 シ来タレ ナリ米国政府ハ昨 ヘキ事柄ニ就キ御話申上ク IJ 六国間ニ新 ኑ テ該文書ヲ 年六月以来不戦条約 タ チ 大臣 、閣下ニ差上ク ル <u>ー</u>ノ シ ニ手交シ セテ 本 テ閣下ニ ル Ė 為特 /\ 歴 更 ル問 = 吏

テ之ヲ 右不戦条約案ヲ各国 為ス ノ 諒 解 ナ ij ニ提示スルニ当ツテ シ カ 其後仏国政府 ハ \exists 1) 初 右 メ米仏協同 ハ先ツ 米国 =

掛

得

#

ル

ヲ

知

IJ

タ

ル

為自

分

個

1

取

計

Ξ

テ

が訓令ニ

違反

家政策 締約 ル コ 国 ۲ Ż. ヲ罪悪ト ハ各自国民 一手段 トシ 認メ且戦争ヲ各締約国相互ノ関係ニ ノ名ニ於テ国際紛争解決ノ為戦争 テ否認 ス ル = ト ヲ 厳粛ニ 声 明 ス 於 Ė テ 国 フ

第二名

決ヲ平和的手段ニ依 ハ 紛議 約 国 ハ其ノ性質又 ハ各締約国間 ル \sim = 起因 起生ス 外 他 = 1 如 求 ル 何 メ コ サ ラ 問 ١ ル ア \sim ハ ル ス 丰 ^ 其 キ凡 コ ኑ 1 処理 ヲ テ 約 ノ 又 紛 ス 争又 ハ

第三条

世界 政府ニ 前文記載ノ各国政府並将来本条約ニ加盟スヘキ凡 該加盟国ト他ノ 於テ寄託セラ カ ヲ = = 本条約 ル 発生ス本条約カ前項規定ノ如ク効力ヲ発生シタ 於テ寄託ヲ了 応シテ批准セ ヘシー国ノ ノ認証謄 ノ他ノ凡テ 対 ハ前文記載 シ ル 本ヲ交付スへ ラル 1 本条約締約国 ヘク而シテ本条約 加盟ヲ証スヘキー切 セラレタルト 返ノ " …国政府 ^ 締 加盟ノ為必要ナル期間開放 ク 約 国 而 キ義務ヲ有ス尚各批准 ハ本条約並凡 シ = テ其ノ 依リ トノ間ニ於テ効力ヲ発生ス キョリ各締約国間 ハ右寄託ノ 各自国憲法上ノ ガノ文書ハ 数 個 じノ批 テノ批准書又ハ トキ 准 書 = 書又 テ = 於 必 セラレ ル カ ノ国 IJ テ効 要条件 卜 直 牛 加 加 - フ Ξ

国ヲモ 次第ナリト述へタ カニ付キ可 ク若シ然ラサル場合ニ於テハ如 為好意ヲ以テ考量ヲ加 右様ノ次第ニシテ米国政府 間ニ該条約締結セラレ //ミノ トスヘシトノ Ξ ハ異存ナキモ其ノ意見 :ノミニテ各国ニ提議セラレ度 加入方勧誘ス 責任ヲ以テ之ヲ為スモ '成速ニ日本政 申入レアリタル為今回ノ ル意向ナリト説明シタ ハラル タル暁ニハ米国政府 府 パ別 ハ日本政府ヨリ 御 ヘキ地位ニア ノナリ 回 何 三仏国 答ヲ ナル ク仏 点二 得 而 ヨリ各国ニ申送 国 、提議ハ全然米国 「ハ素ヨリ ン シテ前記 、ル旨回 修正ヲ 不戦条約締 八更ニ \exists ル ŀ 後 ヲ 其他 1六大国 、該案ノ 希 加 答 望 フ ヲ 得 結 \sim ス 1 ル 丰 度 1 政 ル 1 \exists

手交スへ 新聞 次イ 之レ ラサル 成ナリ唯貴国今 何分ノ 発 = テ米国大使ョ 対シ大臣ハ戦 ハ /返事ニ及 キ旨ノ訓令ナリシニ拘ラス五時ニハ 勿論ニシテ米国提議ノ) 関係ョ 回提議ノ内容ニ就 リ本日 リ東京ニ於テ フヘシト答ヘラレ 争 終 ハ他ノ各国 止 一ノ為 趣旨ニ ハ ニハ御 午後五時ヲ期シ テ ハ ^ 同 篤 ハ主義ニ於テ頗 互. 三努力 時 ጉ 考量 = 閣下 提議 ヲ セ = テ シ サ 加 御目ニ 閣 ĪΠ ル \sim 下 シ タ ル ^ = テ ル 賛 カ

テ四時ニ御目ニ掛リタ 前顕文書ヲ御渡シタル ル次第ナ コト ŀ セラレタキ旨ヲ希望シ ルニ付外部ニ対シテハ五時

ハ

大臣之ヲ承諾 セラレタリ

昭和三年四月十四日 (澤田電信課長口 述

3 年4月 19 Н 田中外務大臣在仏国安達大 宛使 (電報)

日 **るブリ** 英・ 独 • アン外相の談話について 伊政府に対する仏国案提議に

4 4 月 月 20 19 日 日 着 発

意見ヲ交換セシムル ニ於テ四国専門委員ト仏国委員トヲ会合セシメ本件ニ関シ 四国政府ニ於テ政治上別ニ重大ナル反対無キニ於テハ当地 国政府ノ発表セル意見ヲ条約文ノ体裁トシタルモノナル処 国政府案ハ十九日ノ ・シテ各任国政府ニ提出セシムル筈ニテ其ノ内容ハ之迄仏 日「ブリアン」外相 閣議ヲ経タル上在日、 モ一案カト ハ本使ニ対シ不戦条約ニ関ス 思考スル旨ヲ内話シ更ニ過 英、独、 伊 大使 ル

> 国提議ニ於テ毫モ之ニ言及スルコト 上之ヲ急キタル 能ク了解セリト言明シタリシニモ拘ラス今次米国ノ対四 「ケロッ グ」長官ハ在米仏国大使(ニ対シ)仏国ノ留保 為ニシテ他意ア ル = 非スト 無カリシハ其ノ対内策 忠 ハ ル 述へ

在米大使ニ 転電シ英、 独 伊 = 暗送 セ

33 和 3 年4月 21 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使と

の会談について 不戦条約仏国案に関する仏国外務省当局者と

4 4 月 月 22 21 日 日

第九四

不戦条約 迄左ノ通申進ス 房長 「レジェー」ト ニ付二十日仏国外務省政務通商局長「コル 出アリタルコトト存セラルル処右ニ関スル = 関 スル仏国政府案ハ既ニ在本邦仏国大使ヨリ ノ会談ニ依リ得タ ル印象其ノ 仏国政府 バン」及大臣官 他御参考 ジラ 意向

仏国側 に上於テ ゝ 米国側ノ主張スル如キ六国間 1

速ナルヘシトノ報道ヲ気ニ病ムノロ吻ヲ洩シ且日本政府例ヲ引キテ明ニ之ヲ肯定シタル上独逸ノ対米回答カ存外 ニ於テハ緩リ御考慮アリタシト述ヘタリ 条件不戦条約締結ノ結果独逸カ東欧州ニ於テ自由ノ アルニ到 「レジェー」ハ本使ノ質問ニ対シ白耳義及波蘭 ルヘキニ最憂慮シ居ルカ如ク右ニ付 「コル 立場 1 バ

関スル本使ノ質問ニ対シ両人ハ此ノ点モ亦往電第九一号 研究事項トスルコト然ルヘシト述ヘタ 換骨奪胎セルモノニシテ何レノ国カ違反者ナリヤ 「ブリアン」ノ述ヘタ ハ依然トシテ存在スル 「侵略戦争」ナル条件ヲ付セムトノ嚢ノ仏国側 不戦条約違反ノ場合ニ関スル仏国案第三条ハ要スル モノ ル専門委員 ト認メラルル次第ナル 、ノ会合可能ナラ ij Ï カカ右 主張 *>*> 1 其ノ 難問 Ξ 1 =

三、諜報者ノ内報ニ依レハ仏国外務省側ニ於テハ米国 張スル如キ無条件ノ不戦条約ハ結局戦時封鎖ヲ不可 ナルカ他方当地新聞紙中ニモ海洋ノ自由 ラシメ英国ノ海上権ヲ無為ナラシムルコト ノ理由ノ下ニ英国政府側ニ難色アル 立場ニ論評ヲ を掲り ル モノ二三アリ ヘシト観測 ⁄依テ本使 ニ関スル ŀ ナル \exists シ 英米両 ヘシト 1) 居 右新 ル 能 1 趣 主 ナ

> ル 英国政府 聞記事ヲ指摘シテ試ミニ両人ノ意見ヲ尋ネタ モ左モアルヘキ ()態度ニ付テハ未タ確ナル カト思ハルト述へタ コト ヲ聞 ル 及 (ヒ居ラ = 両 人 #

セラル 如 結ハ宣戦講和ニ関スル米国上院ノ憲法上ノ権能ヲ奪 国内ノ政情トノ関係ニ付テハ相当考慮ヲ加へ居ルモノノ ヤ否ヤ疑問ナリト論スルモノアル処仏国政府ニ於テモ米 トスルモノナルヲ以テ米国上院カ果シテ之ヲ承認スヘキ 当地新聞中ニハ往電第九〇号四論評以外不戦 | ノ所言ノ如キモ此 ク仏国案第五条乃至第六条一ヶ年ノ猶予期間 頭日本国回答 ノ字句ニ関スル ノ辺ノ考慮ニ出 「コルバン」及 ツル モ 1 同ノ如キ又 カト ヘ「レジェ 条約 1 / ン

五、尚当地新聞中米国カ 考究ノ要ア 留保ヲ為シ居ルノ矛盾ヲ指摘シ居ル シツツ他方最近其ノ締結 ル問題ナル ヘシ 一方絶対無条件 セル仲裁裁判条約ニ於テ種 モ ノア 1 不戦条約ヲ ル 処此 1 主張 点又 マノ

明ス 明スレッミ・ おっしがまり 「カヴァ府ニ於テハ当初其ノ立場ヲ「カヴァー」ノ 将又「コル ル 心算ナリ バン」及「レジェ シモ斯テ ハ却テ種 々 IJ 語 誤解ヲ ング ル 処) = 生スル 1 依 ト」中ニ説 ν ハ 処ア 14 国 政

ル結果比較的浩瀚ナル条約案トナリタル次第ナリト云フ トシ閣議ニ於テ全部之ヲ条約文中ニ明記スルコトニ決シタ 独、 伊へ転電セリ

昭和3年4月23 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使

(電報)

不戦条約仏国案に関する仏国各紙論調につい

省 4月24日前着 4月23日後発

第一〇一号

二十一日不戦条約仏国案発表アリ右ニ関スル当地新聞論 中重ナル点左ノ通 調

一、今次仏国政府カ早急対案ヲ提出シタル 実状ナルヲ以テ交渉ノ相手方ヲ米国案受領国ノミニ限 如ク大ナル利害関係ヲ有セス英国政府ハ猶迷ヒツツア 本及独逸ハ不戦条約ノ条件ヲ詳細ニ定ムル事ニ付仏国 ハ仏国ノ立場ヲ困難ナラシムヘシ(「デバ」) ハ拙策ナリ 文日 ラ ル ル

条約上ノ権利ノ侵害例へハ「ライン」中立地帯ニ関スル 仏国案第一条ノ正当防衛ハ単ニ領土ノ侵害ノミナラ ス

> 三、本件不戦条約問題ハ頗ル重要且各国其ノ立場ヲ異ニ 慎重考慮ノ要アルヲ以テ速ナル回答ヲ期待ス可キニ非ス 反ノ場合ヲモ包含ス (「タン」、「エコー 「マタン」及「ジュールナル」等) (「タン」、 伊へ郵送セリ 「マタン」) ٠ ٢ パリー、 シ

35

昭和3年4月24日 在仏国安達大使宛田中外務大臣より (電報)

する仏国案同国大使より手交について 不戦条約に関し専門的協同研究の必要を提唱

記 昭和三年四月二十一日付駐日仏国大使 来翰(仏文)

本 省 **4**月 24日前発

第四五号

松平大使宛往電第七八号末段ニ関シ

ヲ出淵次官ニ手交セリ 四月二十一日午後仏国大使来訪同日付公文ト共ニ条約草案

思考スル」旨ヲ述ヘタルモノナリ 盟国タル五国間ニ専門的協同研究ヲナスコトヲ必要ナリ スルモノニ過キス仏国政府ハ条約ノ最終的起草ニ先タチ連 国際約束当事国ニ対シ当然必要トスル観念ヲ明確ニセムト 務長官宛三月三十日付仏国公文中ニ陳述セル趣旨ニ適合セ 右公文ノ内容ハ公表セサル趣ナルカ大要「本草案ハ米国国 メタル単ナル試案ニテ連盟規約若ハロカルノ条約ノ如キ ŕ

伊ニ転電アリ度シ

記

Ambassade de la

République Française

au Japon

Tokyo, le 21 Avril 1928

Monsieur le Baron, Votre

suggestion: Ce texte ne doit être considéré que comme une simple conclusions formulées dans la note française adressée lence le 30 Mars dernier au Secrétaire d'Etat des Etats-Unis. J'ai l'honneur de faire parvenir à texte de l'avant-projet de traité répondant aux destiné à éclairer et à guider la discus-Excel-

> sion, il tend à préciser, dans les termes qui ont paru des Nations ou les accords de Locarno. d'actes internationaux tels que le Pacte de Gouvernement Français, s'imposent aux signataires le mieux appropriés, les idées qui, dans l'opinion du la Société

termes qu'il conviendra d'employer pour les exprimer. étude technique tant des idées à concerter, en vue de de membres de la Société des Nations puissent se texte, les cinq Puissances se trouvant dans la position nécessaire qu'avant toute J'ajoute que le Gouvernement Français estime procéder conjointement à élaboration définitive réaliser que une

ma très haute Veuillez agréer, Monsieur le considération. Baron, l'assurance

de

(signé) Robert de Billy

AVANT-PROJET DE TRAITE

 des Etats-Unis d'Amérique, le Président de Le Président de l'Empire Allemand, le la Président Répu-

「ベルサイユ」条約第四十二条乃至第四十四条ノ規定違

blique Française, Sa Majesté le Roi d'Angleterre, d'Irlande et des Dominions Britanniques, Empereur des Indes, Sa Majesté le Roi d'Italie, Sa Mejesté l'Empereur du Japon,

fin, ont désigné respectivement pour leurs plénipotentionale, ont décidé de conclure un traité ation à l'union des peuples civilisés dans une même renoncivoudront s'associer enfin l'espoir que toutes les autres nations du monde politique nationale et d'y renoncer en faveur de règleacte solennel leur résolution, la plus formelle et la plus actuellement entre leurs peuples, mais encore d'écarter danger de la guerre entre toutes autres nations heureuses relations de paix et d'amitié qui existent également désireux, non seulement de pacifiques de conflits internationaux, de la guerre étant tombé d'accord pour consacrer dans un condamner comme instrument de politique à cet effort humain pour réaliser la guerre comme instrument de et, formulant perpétuer 82> cette nadu

tiaires:

Le Président de l'Empire Allemand,

Le Président des Etats-Unis d'Amérique,

Le Président de la République Française,

S. M. le Roi d'Angleterre, d'Irlande et des Domi

S. M. le Roi d'Angleterre, d'Irlande et des Dominions Britanniques, Empereur des Indes,

S. M. l'Empereur du Japon,

Z

le Roi

d'Italie,

lesquels après avoir échangé leurs pleins pouvoirs reconnus en bonne et due forme, sont convenus des dispositions suivantes:

nationale, c'est-à-dire comme instrument d'une action guerre et y renoncer comme instrument de politique déclarent solennellement condamner certaines de leurs dispositions notamment lorsque légitime défense dans le cadre des traités entendre porter ART. I—Les Hautes Parties Contractantes, sans atteinte à l'exercice ceux-ci assimilent la violation de مر nn de leur le recours acte hostile, existants, droit de a la

politique personnelle, spontanée et indépendante dont ils prendraient l'initiative et non d'une action dans laquelle ils se trouveraient entraînés par les applications d'un traité tel que le pacte de la Société des Nations ou tout autre traité enregistré à la Société des Nations. Elles s'engagent dans ces termes à ne se livrer l'une contre l'autre à aucune attaque ou invasion.

ART. II—Le règlement ou la solution de toute contestation ou conflit de quelque nature ou de quelque origine que ce soit, qui viendrait à s'élever entre les Hautes Parties Contractantes ou entre l'une et l'autre d'entre elles, ne seront jamais recherchés, de part et d'autre que par des procédés pacifiques.

engagements pris dans ce traité. raient de plein droit libérées vis présent traité les autres puissances contractantes ART. Contractantes III—Dans le viendrait à cas où l'une مره contrevenir Vis. des d'elle Hautes des seau

ART. IV—Les dispositions du présent traité ne portent aucune atteinte aux droits et obligations résultant pour les puissances contractantes des actes internationaux antérieurs auxquels elles sont parties.

abstentions. cord avec celles qui auront accédé, s'entendent 21gatoire qu'après avoir reçu une acceptation générale, cession de toutes les puissances et n'aura force oblimoins que les puissances ci-après décider l'entrée ART. V—Le présent traité en vigueur nonobstant certaines sera proposé à signataires, pour d'acl'ac-

ART. VI—Le présent traité sera ratifié. Les ratifications en seront déposées à dans les trois mois à compter du dépôt des ratifications il sera porté par le Gouvernement de à la connaissance de toutes les Puissances avec l'invitation d'y accéder.

Le Gouvernement de remettra à chacune des Puissances signataires et des Puissances ayant accédé une copie certifiée conforme des actes d'accès

au fur et à mesure de leur réception

Un an à compter de l'expiration du délai de trois mois prévu à l'art. VI, le Gouvernement de adressera un état complet des signatures et accessions à toutes les Puissances ayant signé ou accédé.

En foi de quoi les plénipotentiaires sus-nommés ont signé le présent traité et l'ont revêtu de leur sceau.

Dressé à en exemplaires, rédigés en français et en anglais et faisant également foi, le

仏国大使来翰訳文(仮訳)昭和三年四月二十一日付在本邦「ド・ビィー」

規約若ハ「ロカルノ」条約ノ如キ国際条約ノ締約国ノ当然ニ資スル為ノモノニシテ仏国政府ノ見解ニ依レハ国際連盟ニ資スル為ノモノニシテ仏国政府ノ見解ニ依レハ国際連盟ニアニ送達スルノ光栄ヲ有シ候本草案ハ英渉ヲ照明嚮導スルミ看做サルヘキモノニ有之候本草案ハ英渉ヲ照明嚮導スルに国公文中ニ陳述セラレタル結論ニ合致スル条約草案ヲ故仏国公文中ニ陳述セラレタル結論ニ合致スル条約草案ヲ故以書翰致啓上候陳者本使ハ合衆国国務長官宛三月三十日付以書翰致啓上候陳者本使ハ合衆国国務長官宛三月三十日付

ルヲ目的トスルモノニ有之候抱懐スヘキ観念ヲ最モ適切ナル辞句ヲ以テ明確ニセムトス

リト思考スル為玆ニ致付言候 ノ専門的研究ヲ協同シテ行ハム為一致シ得 五国カ実現スヘキ観念並右観念ヲ表明スル 仏国政府ハ正文ノ最終的起草以前連盟国 ル タ ル 為用フヘキ辞句 ル ノ地位 コ ト ヲ必要ナ = 立 ッ

此段申進旁本大臣ハ兹ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

敬具

昭和三年四月二十一日

駐日仏国特命全権大使

「ド・ビィー

外務大臣男爵 田中義一殿

条約草案(仮訳)

待スル旨ヲ表明シ、 如 争ヲ一致シテ抛棄スル文明諸国民ノ結合ヲ実現セン 書ニ於テ確認センコトニ合意シ、更ニ国策ノ手段 的処理ニ倚ルノ最モ確然且最モ明白ナル決意ヲ厳粛ナル文 グク其 ノ他ノ一切ノ国民カ此ノ人道的努力ニ参加センコ トシテ戦争ヲ罪悪ト認メ且之ヲ抛棄シテ国際紛争 ノ全権委員ヲ任命セリ 条約ヲ締結スル コトニ決シ之カ為左 ハトシテ戦 カ為世 ኑ シ平和 ヲ 期 1

独逸国大統領

亜米利加合衆国大統領

ジオガ 令罗昌 フ糸骨

仏蘭西共和国大統領

ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下「グレート・ブリテン」、「アイルランド」及「グレート

世 大 川 国 皇 行 主 下

伊太利国皇帝陛下

日本国皇帝陛下

ナルヲ認メタル後左ノ諸条ヲ協定セリ因テ各全権委員ハ互ニ其ノ全権委任状ヲ示シ之カ良好妥当

第一条

等ノ 盟ニ登録セラレタル他ノ一切ノ条約ノ如キ条約ノ適用ニ依 主的ナル政治上ノ行動ノ謂ニシテ国際連盟規約又ハ国際連 ス国策ノ手段トハ締約国ノ発意ニ係ル独自的、自発的且自 ŀ 衛権ノ行使ヲ妨ケサル了解ノ下ニ戦争ニ訴フルコトヲ罪悪 定ノ或モノノ違反ヲ敵対行為ト看做ス場合ニ於ケ 締約国ハ現存条約ノ範囲内 ノ手段ノ謂ニ非ス締約国ハ右条件ノ下ニ互ニ他方ニ 締約国カ執ルノ已ム無キニ至ルカ如キ行動ニ非サ 認メ且国策ノ手段トシテ之ヲ抛棄スルコトヲ厳粛ニ宣言 攻撃又ハ侵入ヲ為サ サ ル ニ於ケル特ニ現存条約 コ ኑ -ヲ約 ス , ル正当防 カ 、其ノ規 対 ル行 シ

第二条

因ノ如何ヲ問ハス一方又 締約国間又ハ締約国 丰 一切ノ紛争又ハ紛議ノ 求 Ż ラル ^ シ 中ノ 国ト ハ他方ニ依リ平和的手段ニ依リテ 処理又ハ解決ハ其ノ性質又ハ起 他 国 下) 間 ニニ起ル コ ኑ ア ル

第三条

免除 締約国中ノ一国カ本条約ニ ハ他ノ セラルヘシ 締 約国 ハ該締約国 違反ス ニ対シテ本条約 ル コ ŀ 7 ル 約束ョ ヘキ場合ニ於 当然

第四条

締約国 本条約 ル ^ シ = 1 対シテ生ス 規定ハ締約 ル 国 カ当事者 権利及義務ニ何等 タ ル 既存 1 国 影響ヲ及 際的 約 ホ 定 + \exists サ IJ

第五条

条約 諾ヲ得 ス 名国カ加入シタル国 本条約 7 ハー切ノ 実施ヲ決定 タル後ニ非サ 国 七 1 ル **** ν 加 コ 共ニ或国ノ加 ハ拘束力ヲ有 入ノ為提議 ١ = 合意ス セ 入セサ ラ ル セサル 場合 ル \sim 2 ·ルニ拘 ヘシ但 ハ 此 ブ限 且 全般的 ハラ シ 左記署 = 在ラ え本 受

本条約 セラル …国政府ニ依リ之ニ対スル加入招請ト共ニ一切 ル ヘク批准書寄託 ハ シ… 批准セラル ノ日 ^ :国政府 シ 其 ヨリ三月以 (ノ批准書 加入書ヲ接受スル 内 **>** こニ本条約 ノ国ニ ·// ::: 毎 ·三寄託 = 署名 通知 セ

> 右証拠 第六条ニ規定シタル三月ノ期間 作 ス 入ノ完全ナル表ヲ送付スへ ………国政府ハ一切ノ署名国又ハ加入国 ル ル 仏蘭 ŀ シテ前記各全権委員 年……月……日……… 西 語及英吉利語 ヲ以テ ハ本条約 シ 『ノ満了 作 成 · 三 於 シ日 セ ニ署名調印 ラレ テ同等ノ効力 3 タ リー年ヲ経テ ニ対シ署名及 ル 本書 IJ 二通 ヺ

加

昭和3年 $\dot{4}$ 月 24 日 田中外務-大臣(道) (電報)

36

ヲ 有

官の談話につい 米国及び仏国不戦条約案に対する伊国外務 て

本口 1 省 マ **4**月 4月25日前着 24日後発

第三七号

二十三日次官ニ面会ノ ル ニ左ノ通答 \sim タ 1) 節不戦条約案ニ対ス ル 感想ヲ尋 ネタ

伊 過 国政府 日米国大使ヨリ条約 ハ篤ト考究ス ^ 案及一件書類ヲ提出 キ旨ヲ不取敢返答シ セ 置 ル キタ カ 右ニ対 IJ

研究中ナ 案モ入手 セ ル = 依 ij 首相 ハ 見下 切 1 書類ニ 付 本問 題 ヺ

大ナ ル 云々右御参考迄 ハ 自分ノ考ト ル コト各国異論無カル 如ク状態簡単ニ非ス殊ニ本件 ル故伊国ト ル問題ナリ而 シテ ・シテ ハ 伊国 モ本件ハ至急ヲ要スル ハ充分ニ考慮シ度キ ヘキモ是ヲ如何 **>** 日 本 ト同様連盟ノ ハ精神ニ付テハ至極結構ナ ニ規定スヘキ コト モ 1 一員ニシテ米国 ŀ ・モ無 考へ居レ 丰 カ ヤ ኑ ハ 重 忠 1)

独 ^ 暗送 七 IJ

和3 年 $\dot{4}$ 貞 (25) 日 田中外務大臣宛在米国松平大使 (電り

仏国の不戦条約案に関する米国各紙の論調に

つ (1 て

本ヮ ン ŀ 省 4 月 25 耳 i後着 発

一二〇号

= = 往電第一一一号ニ 一参考ト 関シ華府発AP及各新聞社特電ハ当地官辺ノ意向 シテ交付セラレタル趣ニテ同省ハ之ヲ公表セリ右 関 シ 仏 国側不戦条約 案 二十 日日 ハ 国 該条 務 省

> ルヘシ 同長官へ正当防衛ノ為ノ戦争及一国カ本条約 尚 約案ハ米国側ニ取リ不満足ノ 多大ノ進展ヲ与フル 件不戦条約 三日ノ華府「ポスト」ハ仏国案ハ不戦ヲ約シ乍ラ戦争ヲ為 合右違反国ノ関スル限リ条約ヲ失効ト 持方ヲポムル 国カ両条約案中ノ何レニ 事行動ヲ採ラサ 的ト称スヘク現ニ米国ハ「モンロー ルカ一方同日ノ「ボ 立ヲ見ル事 ス権利ヲ留保スルモノニシテ笑止千万ナリ仏国ニシテ無条 立ノ為関係 紐育 ト報シ居レリ尚社説ヲ掲クル 「タ ij 伊 1 者当局 7 ハ世界平和ニ貢献スル処大ナルヘシト述 締結ヲ肯セサル場合ニモ英米間ニ本条約 ムス」 紐育 為日、英、独、 ル決心ア ノ忍耐 モノト ルチモアサン」ハ仏国案ハ不戦運動ニ = 郵 傾 ,リヤ兎 ト妥協 四 「ヘラルド 日 7 ハ認メ難キモ一面 伊側ト カ モ 元二角日、 ハ 紐 ノニテ国務長官ハ米国案支 慫 本問題将来ノ成行 育 モノ極メテ尠 会談スヘシ 」主義防衛ノ為ニ • 慂 「タ ŀ スル事ニハ反対セサ ・リブユー 1 ム ス ニ違反スル場 ニ於テハ実際 ጉ 報シ 半処二十 ン」等 ハ へ居 モ軍 ノ成 三英 ν

シ

国及加入国ノ各ニ対シ加入書ノ認証謄本ヲ交付スへ

38 昭和3年4月25日 田中外務大臣宛(電報)在英国佐分利臨時代理大使より

不戦条約仏国案に関する英国各紙社説につい

着発

4月25日前

不戦条約第六三号 式簡便ナルノミナラス是カ受諾ハ連盟規約及「ロカル 条約ヲ弱ムル 「タイムス」、 戦条約 仏国 コトトハナラサルヘシ是等ノ条約ハ欧州平和 提案ニ関シ二十三日ノ新聞社説要領左ノ 米国案自体ニハ何等ノ 反対有リ 得ス 其 2 ()形 通

シ平和 釈ニ付テハ尚攻究ヲ要スヘキモ欧州各国ハ米国ノ提議ニ応 ノ要素タルコト ノ為貢献シタ シテ規定スルハ適当ナラス尤米国ノ特殊事情ニ基ケル解 ノ増進ヲ図ル可キナリ ルコト大ニシテ米国案ト並行シ夫レ自身平和 証明セラレ居リ従テ是ハ米国案ノ留保条件

隙アル 「テレ 此ノ点モ特ニ考慮セサルヘカラス 米国案ニ賛成ス然レ共吾人亦平和 グラフ」英国ハ寧ロ融通性ニ乏シキ仏国案ヨ ノ保障者タ ル IJ 義務 ・モ遊

和違 ハ 両国 ノ特殊地位 \exists 1) 来 ル 仏 国

> 政 案ハ容認セ モ 府 ノナリ一九一四年ノ恐ロシキ記憶ヲ有スル英国ハ \ddot{j} 主張 ^ サ 「ロカ ヲ得 ル ス ノ」精神ノ表現ニシテ正当且常識的 仏国

ー⁽²⁾ ガ ジアン

終ラム 当リ解釈ヲ定ムルニ如カス英国ハ出来得 案ニシテ拒否セラレムカ平和確保ノ為米ノ協力ヲ得 定シ得ヘシトモ認メサルモ連盟ニ対スル義務ヲ認ム若シ米 英国ハ米仏両国ノ中間 ヲ質シタ モ シメムト欲スルモ之ハ余リニ多キヲ望ムモノ 程度迄条約面ニ表ハスカニ在リ仏国ハ総テノ点ヲ明確ナラ 認ムル戦争ニ於ケルト同様ナルヘシ問題ハ是等留保ヲ何 カ承認ハ米国始メ以心伝心的ノ留保付ナルヘク即チ米国 多年ヲ要スヘシ「ケロッグ」案ノ条項ニハ定義ヲ欠クモ之 トハ信セス又総テノ場合ニ前以テ何レ 「モンロー」主義ニ依ル戦争ヲ除外スルコト仏国カ連盟 防禦戦ノ必要ヲ飽迄認メサルニ非サル ヨリハ米案ヲ採リ漠然タル儘トナシ置キ実際問題 ル後之カ受諾ヲ各国ニ慫慂スへ 三位 シ条約 ハ総テ軍備 カ侵略国タル 丰 ル ヘシ結局不一致 ナ 限リ米国 ナリ米国 IJ ノ支持ヲ ル カヲ [ト 難 <u>ニ</u>ハ 要 ノ カ

= ズ

ノ点ニ於テモ他ノ案ノ ミ仏国ノ友邦 ノ」条約ハ仏国ノ ハ仏ニシテ米国案ニ同意スル 比ニ非サルコト 詗 座三 同意セサリ ヲ 理解セ コト シ処 シ ハ安全保障 ムヘキ ノナル 二鑑 ÷

「オブザー ヴ 7 1 __

来レリ米国案ノ原則ハ 二十二日英国当局ハ 此ノ目的ヲ達スルコト 英仏両見解ハ結局妥協シ得 細目ニ亘リ解釈ノ要アリ仏国 トナ ル ^ シ ヘシ ŀ) 解 ナ 釈 シ

伊ニ郵送セ 1)

39 和3年4 亰 26 日 長岡、在伊国な在英国佐分利路 松臨よ 田時り 各大使宛、

報強国

する仏国の意向について 連盟五力国法律専門家による予備的審議に 関

記 四月二十六日付出淵次官と駐日仏国大使と

本 省

月26日後発

合第九 一号

在仏大使宛往電第四五号二関 シ

本二十六日仏国大使出淵次官ヲ来訪シ仏国政府 ハ現存条約

> 知シ度シト申出テタリ 審議ヲ行ヒ度キ意向ナル 米国提案ト ノ関係ヲ調節スル 処之ニ対スル 為五国法律専門家ノ予備 治帝国政府 ノ態度ヲ承 的

以下在英大使宛ノ分へ追加 局ノ意向至急回電アリ度シ 1 \exists ۲

右ハ貴任国政府ニモ同様申出

テ

ダ

ル

箬

テ

ル

カ之ニ対ス

ル

当

付 記 本電参考トシテ米、

仏へ転電アリ度

不戦条約問題ニ 関シ仏国大使ト会談 ジノ件

甚タ 模様ナル ニ米国ノ スコト 専門家ヲシテ研究セシメ其ノ結果ニ依リ最終的ノ決定ヲ為 務ノ関係ヲ如何ニ調和スヘキカノ点ニ付テハ関係国ノ法律 府最近ノ申出ニ対シ成ル可ク速カニ主義上同意ノ旨ヲ回答 昭和三年四月二十六日仏国大使出淵次官ヲ来訪シ本国 スルト共ニ米国ノ不戦条約案ト既存条約ニ規定セル ヨリノ電信ニ依レハ独逸国ハ不戦条約問題ニ関ス 面 白カ ト致度旨ヲ付言シ以テ仏国側ノ顔ヲモ立テント ,提案ニ 処若シ独逸ニシテ仮令主義上ナリト (ラス ŀ 対シ同意ヲ表スルコトト 考 ヘラ ル 14 国人 シ テ ハ独逸国ヲシ ナル -モ 此 ニ於テ 1 ル テ斯 際直チ 権利義 米国政 ハ 事態 ・スル 政 カ

수 二 律専門家ヲシテ予備的審議ヲ行 係ヲ如何ニ調節スヘキ ル テ 通 訴へ仏国政府ニ於テハ過日モ書面ヲ以テ大体申上置 口 |答ヲ為 依 右 ij = 米国ノ不戦条約 ル趣ヲ申述ヘタ 対シ日本政府 サシ メサ ル様致度シト苦心 ĺ) ノ同意ヲ得度 カノ問題ハ米国ヲ除 ト既存条約ニ規定セル権利義務ノ関 ハシム キ旨特ニ シル居 ル コ ŀ + ル模様ナ 本国政 ŀ タ /ル五国/ 致度キ意見 ル 府 丰 コ 法 訓 タ

条約 承知 本側 上進 モ仏 時期如 意見 二於 中二 三対シ出淵次官ヨリ五国法律専門家ヲ スル仏国政府ノ意見ハ了解スル処右 プノ通り 国政府 ij. ンテ御相談スル考ナル ハ巴里辺ニテ会合セシメントスル趣旨ナリヤ又会合ノ テ五国法律専門家ノ会合ヲ必要ト ノ関係トヲ調節ス 至ル /回答 何ト尋ネタルニ夫レ等ノ点 ハ何等記載シアラサルニ付乍遺憾言明スルヲ得サ 1 ŀ ハ成ル可 ク シテハ成ル可 政局ニテ玆両三日ハ相当重大ナ 田 中兼任外 ク速カ ル コト パニ行フコ 相 ヘシト答ヘタルニ付次官ヨ ク速カニ主義 ニ付予備 ハ 昨 今殆 ハ自分ニ与 ŀ ト致ス ጉ 的審議ヲ行 スヘキ処仏国政府 ハ結局何レカ シテ米国 寸暇無キ状況 上ノ同意ヲ得然 ヘキ ヘラ ル 局面ヲ現出 モ昨 案 ν ハ ノ場所 タ シ <u>۱</u> リ 日 既 ル メ 今 御 訓 5 ン ル ル ル

> 以テ仏 解シ居ル旨ヲ答 到底六ケ敷カ 国政府 ル = 対 1ヘタリ ヘシト スル 告ケタ 回答 ハ 自然多少延引ス ルニ仏国大使 ハ事情 ヘク 今週 ハ好 中 ク

置カサ テ 示 右終ツテ仏国大使ハ独逸カ ン \exists 越シ余リ留保的条件ヲ付スルコト シ居ル トス IJ ト ハ最早如何ナ 華隊ヲ引揚ケサル ・ナリ従テ旧連合国側 ル ル魂胆ニ外ナラス此ノ点 理由 ヘカラスト切言セリ ハ不戦条約 ル国モ戦争ナル ヘカラサ ニシテ トシテ 米国 ハ・速カニ フ ル モノヲ期待スル 米国案ノ如 ハ吾人ニ於テ大イ ル破目ニ ,提案ニ ナクシテ本問題ヲ片付 一陥ル 「ライ 対 ク シ ッ決定スル ヘキコ 同情的 ン」占領地 必要無キ $\stackrel{\cdot}{=}$ 念頭 ŀ 態 · ヲ 見 度 = ヺ ケ \exists

対 ネテ電報ニ接シタルカ右ニ依レハ伊太利政府 会ノ席上仏国大使ハ出淵次官ニ向テ其 越へテ四月二十七日夜霞ケ関離宮ニ於 パシ単 ・ヲ通知スル意味合ノ回答ヲ為シタル趣並ニ英国政府ニ於 独逸政府カ取急キ主義上同意ノ旨ヲ米国政府ニ回 セ スル ・ニ不戦条約ニ関スル米国政府 コト · ヲ 喜 ハス私カニ之ヲ取止メ居ル模様ナル ノ書面ヲ受領シタ ブ後本国政府 ケ ル 李王殿下 ハ米国政府 \exists ノ |答セ 趣 ル IJ 晩 重 ヲ コ =

出淵次官口述速記

40 昭和3年4月の日 田中外務大臣宛(電報) 田中外務大臣宛(電報)

向について仏国の法律家予備協議提案に対する英国の意

ンドン

p

本 省 4月27日前着

第六五号

貴電合第九一号ニ関シ

二十六日 度ヲ決スル 間本件ニ付相談シタル 国ノ申出ニ対スル英国側ノ意向ヲ問ヒタ コト 外相 英国 ハ ナリ尚其ノ際次官ノ 本日亦演説ノ為地方ニ赴クコト 「チレ モ ハ不戦条約 ノト 筈ニ付其ノ上ニテ来週ノ初我方ニ内報ス -考へ居レ ル 」次官ニ面会法律家予備協議ニ関 ニ関スル ノミニテ外相帰倫ノ上英国政府ノ態 IJ 内話中注意ヲ引キ 米国 ノ提議 ŀ ル ハ 好意ヲ ナリ其 処二日前帰 タ ル /以テ考慮 ん点左ノ パノ前短時 ヘシト ス 英 ル 通 セ 仏

英国 ^ カ 八米国 ラ ス ጉ 仏国 $\overline{}$ 1 間 = 立チ テ 声 者 \bar{j} 主張ヲ 調和 セ

> 議ニ対 専門家ト 答ヲ ルニ付 シト考へ居ル 右次官ノ談話ヨリ本官 ヲ 7 催シ リト アリ 大体ノ同意ヲ表スルニ至リタル時ハ 勿論ナリト ! 「チェ コ シ速ニ スル 大使ト テ具体的ノ討議ヲ為スモ可ナル 認 分 p ッ ナ メ 回答シ カ ンバレ ヤニモ祭セラレ 居レ グ」氏 様申入レ ハ米国政府 -両者ョ ن ル 之ト仏 ヘシ と タキ希望ヲ有ス ハ 在米英国大使ト ŀ タ IJ \sim 信 ル ヨリ 成 国ノ 次官ニ於テハ ノ提議ト云フ程 シ ヲ ル ・「スト 居 以 タリ尚次官ハ独逸ハ 協議会ヲ催ス 申 ラ独逸 出 ル旨 ŀ 内話 ル ・ヲ双方共考慮ス レ 差当り モ右 ハ 1 談話中関係諸国 ゼ ヘシト _ 関係国大使ノ会合 1 セ ・モノニア 週 コ マ / 望マ と **ŀ**) 間 ·述へ 位 思 案ナ = 米国 シ 付 ハ ラ 対 カ タ 回 ጉ ル シ ラ ラ ル シ # ル = 口 提 サ テ \exists ル \sim

米、仏、独、伊へ転電セリ

41

昭

和3

年

4

月

27

日

田在

中独外国

務長

大臣宛

(電大

ŋ

答に関するストレーゼマン外相との会談につ米・仏両国の不戦条約案に対する独国政府回

いて

追

加

シ

又

ハ之カ為公文ノ交換ヲ為スヲ

以

でテ足

ル

 \sim

ŋ

特

剜

米国

本 ル ij 省 4月28日前着 4月27日後発

貴電合第九 一、米国提案手交ノ際米国大使ヨリ該提案ト独逸 約 ツテ研究ス 又米案ニ対 閣議ヲ開 右提案ニ対シ修正意見アリヤノ二点ニ ヘク要スル ニ有スル国際義務ト矛盾スルモノアリヤ独逸政 ヤ懸念セラル 他何等独逸ノ国際義務ニ違反スル所ナシトノ意見ニテ ト矛盾 ニ客ナラサ (右内送ヲ得 ・シテハ米国案ハ連盟規約(事務局側ニテモ米案ト規 ニモアリ果シテ閣議 「スト 一号ニ キテ右ニ対スル回答ヲ決定スル筈ナル セストノ見解ナリ ン格別 ニ独逸政府ハ米国案ニ対シ好意的考慮ヲ与フ ル 事然 レル ル旨不取敢回答スル所存ナリ只当国現在ノ ルカ米国政府ノ回答決定次第写内送ス 関 ハ要領電報致 ルヘシトノ議アラハ喜ンテ之ニ参加ス ノ註文ヲ有セサルモ若シ関係国委員集 ゼ マ ン <u>니</u> ニ定足数大臣ノ出席ヲ得ラ ット云フ) えへ ノ会見談話要領左 シ 「ロカルノ」条約其 関シ質問 カ独逸政 政府 ア 府 1 ij Ξ ル 本日 於 \sim デ

> 逸ノ礼譲ト思考スル旨答へ置キタリ 依然外相タ ル 大使ヨリ独逸現在ノ政情ニテ米案ニ対スル責任アル セラレサル範囲ニテ一応ノ回答ヲ為ス事米国ニ ヲ期待シ得ヘキヤ ル)不日回答ヲ為スヘシト答ヘタル ハ輿論ノ信頼ヲ得居ルヲ以テ内閣 ヘシト思 ハサルニ付 ルヘシトノ 底意ヲ ノ質問アリタ (此ノ一節ハ 表明セルモノト ル ノ更迭ニ依リ ニ付独逸ノ外交政策 行懸モアリ 「ストレー 諒解セラ 余り 対 ゼ 変更セラ 7 ス 拘束 シ 回 ル

三、五国会議ニ関シ独逸政府ハ仏案手交ノ際受ケタ 月ノ連盟理事会ノ序ヲ利用スル等角立タヌ方法ナラ ノミニテ其ノ後本件ニ付何等ノ交渉ニ接シ居ラサ ニ角米国ヲ除外シテ五国限リノ特別会ヲ開 ニ対スル手前独逸政府ト シテ到底同意シ 難 クカ如キ ル ル へ 兎 カ六 提議

伊へ転電 セ

42 昭 和3 不戦条約米国案を歓迎するとのグレ 车 ·4 月 (28) 日 田中外務大臣宛(電報)在英国佐分利臨時代理大使より イ卿の演

説について

省 4月 28 日

於テ「グレイ」卿ノ為シタ 米国不戦提案ニ関シ二十五日院内国際連盟委員 ル 演説大要左ノ 涌 会ノ 会合

於テ 過キ ヲ躊躇 ニモ武力ノ使用ヲ禁止セラレンコトヲ欲セサ 普及シ且有力ナルコトヲ証明スルモノナリ吾人ノ 大統領選挙前ニ行 盟国 ス ノ最モ懸念ス ハ言ヲ俟タス米国 ハ米案ヲ熱心且無条件ニ歓迎ス同案カ真 ル 条約 ハ条約上ノ利益又ハ保護ヲ受クルコトヲ得 ル タリ米案ニ於テハ条約加盟国ハ条約ニ違反セル 1 ~ 可 スル 自由ヲ得 口口口 キコトヲ予想ス若シ然リトスレ 加盟国カ違反国ニ対スル関係ニ於テ条約上ノ 所以ハ同案カ将来義務又ハ必要 カ ル ル処ニシテ仏案ハ之ヲ表示ス ノ」条約、 ヘキ理ナリ従テ此ノ趣旨ノ ハレタル 「ハ戦争 ハ同国ニ於テ平) 連盟規約等ノ定ム 脅威少ナキノミナラス ハ斯 和促 ラ ニ誠意ニ 生ス 一項ヲ米案ニ ル ルコト極端 ルニ在リ右 ル義務ヲ執 場合ニ於テ けル 進ノ輿論 / 米案調印 ハヘキ場合 ト共 場合ニ 本案 基キ 義務 Ξ = カ ハ カ タ

> ナラサルコト 一応ノ回答ト 案ヲ準備案ノ形 和確保ノ好機会カ逸セラル可シト 留保ヲ為スノ要ナシ斯ル ノ用意アル コトヲ示セル ヲ シテ即時ニ本案ニ好意的考慮ヲ 表示シ得 トシテ提出シ且条約ノ形式ト # ハ注目ニ値ス英国其 有益ナル ル 理由 ハ考ヘラレス米国カ該提 米案カ拒絶セラレ · 為 シ 加 ノ他ノ諸国 フ 其ノ ル = 此 調印 吝 1 カ 平 カ

独 伊 へ郵送セ IJ

43 昭和3 年 4 月 (28) 日 田在 中英 外国 務大臣利 宛臨 (電報) 時代理大使より

不戦条約米国案に関する英外相の演説につい

て

ンド

4月28日前着 発

意的ナル考量 ミンガム」英仏協会晩餐会ニ於ケル外相ノ 不戦条約ニ関シ二十六日外相及仏大使ヲ主賓ト 第六八号 和促進ノ案 ノ発案ナ ル *>*\ (most sympathetic attention) 何国 場合殊ニ然リ [ノ提案タ ルヲ問 ŀ ス 然 ν \sim ŀ ス英国政府ノ最モ好 モ各国 演説要点左ノ通 ヲ受クヘシ ハ各其 セ ル 「バ 1

ラ

仏国案受領ノ際仏国大使ニ対シ嘗テ米国案交付

各国 アリタル ヲ必要ト ν 場ヲ異ニシ義務及利害ヲ異ニス従テ其ノ憂慮スル タ貴重ニシテ之ヲ逸シ去ラシ リ仍テ相互ノ必要ヲ明カニシ其ノ困難ヲ審査ス ノ要望ス 国 スヘシ戦後欧州ノ困難ニ比較的遠サカレ リ来レ ル 解決ヲ発見セムカ為ニ鳩首凝議ス ル此ノ種発案ハ孰レノ国 ムヘキニアラ Ż 三取 ル地位ニ ハルノ機会 ル リテモ甚 処各異ナ 1 共ニ

昭和3 年 4 月 28 日 田中外務大臣宛(電在独国長岡大使より

伊へ郵送セリ

第四一号

 \exists

IJ

独国 政府の対米回答送付につい

四月二十八日付在独国長岡大使より 独国の対米回答要旨 務大臣宛第四一号 由中

第四〇号

往電第三八号ニ関

写ヲ本使宛送付シ越シタルニ付其大要別電第四一号ノ 予定通閣議終了直ニ米国大使ニ回答ヲ交付シタル趣ニ 3 通電 テ其

本 ルリ 省 ン 4 月 29 月28日後発 百 I前着

テ成立センカ正ニ此ノ理想ニー歩ヲ進ムル 排除スル事並ニ国家間ノ反目カ凡テ和解 提案ノ基調ヲナス思想ハ独逸国策ノ原則ト 関スル限リ 何ナル関係ニ立ツニ至ル可キカヲ考量スル要アリ独逸ノ ニ至ラン事ハ独逸政府ノ熱望スル処ナルカ米国提案 ノニテ仏外相ノ 此ノ種約定ニ参加セル国ハ今回ノ提議 大戦後平和保障ヲ目的トスル各種約定ノ成立セル 独逸政府ハ不戦条約商議ノ開始ヲ衷心 於テ締結セル 所見ニ依レ 此 ノ種約定トシテハ連盟規約及 「ライン」協定ノニアルノミナルカ独逸 「イニシアチブ」並ニ之 ハ此ノ二約定ノ規定スル義務 三基 カ既存約定ト如 = モノナ ヘーロカ 依リ解決ス 一致ス戦争ヲ 歓迎 ク 米国政府 ハ何等今 ル ij ス 三鑑 <u>ا</u> <u>-</u> シ ル

П 本原則ヲ強調スル所以ナリ ス 戦争禁止ノ義務 米国提案ノ予見スル義務ト抵触ス ハ却テ連盟規約及 ト確信ス ルモ 「ライ 1 ナ ン」協定ノ 牛 1 3 ナ ラ 根

三、独逸政府ハ米国提案ハ各国家ノ自衛権 合ヲ予想スルカ如キ条項ノ必要ナシト思考ス 国ハ違反国ニ対シテ防禦手段ヲ執ル事ニ付何等制限 ル モノト諒解ス一国カ本条約ニ違反シタル場合他 ハ違反国ニ対シテ行動ノ自由ヲ恢復スヘキ事自 サル ヲ以テ条約違反アリタル際之ニ依リテ影響ヲ蒙 ヘシ独逸政府ハ此ノ 種条約ニ於テハ条約 ト何等関係 1ノ締約国 違反 崩 ノノ事 ル ヲ ^ j 1 受 牛 ナ 丰

制限無条件ニテ付与セラレタ 存スト為ス事ニ於テ米仏両国政府ト其ノ所見ヲ一ニスル モノニシテ今回米国ノ提案ハ普遍的ナラシムル為ニ現実 ノ途ヲ開クモ ヲ 独逸政府ハ終局ノ目的ハ本条約ヲ普遍的ナラシ ル大国間ニ条約ノ締結ヲ見タル上ハ他ノ諸国 期待シ得ヘシ ノト謂フヘク差当リ締約国トシテ予定セラ ル 加盟権ヲ行使ス ル ^ 直ニ無 = A 至ル ル =

珏 独逸政府ハ米国政府ノ提案ヲ基礎トシ条約ヲ締結スル 並之ニ必要ナル 商議ヲ関係国政府ト開始ス ル 1 . 用意ア

> 和 完成セシムヘシ ア テ措カサル 待スルモノ 夕 ル ルヘキ国民間 ル上ハ直ニ其ノ効果ハ国際関係ノ上ニ現ハル ノ保障ハ 事ヲ声明スルモ ナル事ヲ付言セムトス即チ斯ノ如キ新ナル平 ヘク又戦争ノ 一般的軍縮ノ実行上効果アル刺戟ヲ与 ノ利害 ナル ノ衝突ヲ平和 排除 カ同時ニ斯ノ如キ条約 ハ現存及将来発生スルコト 的 = 解決ス ヘキヲ期 ル 1 方法ヲ 成立 ヘスシ

米 伊 \sim 転電 セ

45 昭和3 年 4 月 28 日 田中外務大臣宛、在伊国松田大使、 (電り

専門家会議開催に好意的態度を有すとのグラ

ジー外務次官の内話につい て

本 省 7 4月29日前着 28日後発

第四五号

往電第四三号ニ関 シ

二十八日連盟局長カ = 「グ ラン ジー L__ 次官ノ 言 ナ IJ 1 テ岡 本

国政府、 内話セル処左ノ如シ シテ ハ米国政府ノ 提議ハ好意ヲ以テ考慮セ

伊

110

取扱アリ度シ

仏

英

伊

 \sim

転電

セ

ルリ

4月28日後発

4月29日前着

尚本件回答公文ヲ当分公表セ

ル

趣

ナ

ル

ニ付其

(ノ御含

=

テ

サ

ル

欲セス (カラサルモノト思考シ居ルハ勿論ナルカ仏提議ノ専門家へカラサルモノト思考シ居ルハ勿論ナルカ仏提議ノ専門家のカラサルモノト思考シ居ルハ勿論ナルカ仏提議ノ専門家のカラサルモノト思考シ居ルハ勿論ナルカ仏提議ノ専門家

英、米、仏、独へ転電セリ

P 昭和3年4月3日 田中外務大臣宛 在米国松平大使上

不戦条約に関する演説全文送付米国国際法協会に於けるケロッグ国務長官の

別紙 同演説全文(英文)

普通公第二三二号

昭和三年四月三十日

在米 特命全権大使 松平 恒雄(印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

約ニ関スル演説全文送付ノ件米国国際法協会ニ於ケル国務長官ノ不戦条

Nations; (3) violate the treaties of Locarno;

(4) vio-

late certain unspecified treaties guaranteeing neutral-

説全部一部送付ス本件ニ付テハ往電第一二○号ヲ以テ報告シ置キタルカ右演

(別紙)

REMARKS OF THE HONORABLE FRANK
B. KELLOGG, SECRETARY OF STATE, AT
DINNER OF THE AMERICAN SOCIETY
OF INTERNATIONAL LAW, WILLARD
HOTEL, WASHINGTON, D. C.,

In discussing the French draft anti-war treaty, the Secretary of State said:

SATURDAY EVENING,

APRIL

"There seem to be six major considerations which the French Government has emphasized in its correspondence and in its draft treaty, namely, that the treaty must not (1) impair the right of legitimate selfdefense; (2) violate the Covenant of the League of

ity; (5) bind the parties in respect of a state breaking the treaty; (6) come into effect until accepted by all or substantially all of the Powers of the world. The views of the United States on these six points are as follows:

countered in any effort to define right, however, gives rise to the same difficulty impairs in any way the right of self-defense. ican draft of an anti-war treaty the world will applaud and not condemn recourse to war in self-defense. competent to decide whether circumstances require its territory from attack or invasion and it alone all times and regardless of treaty provisions to defend implicit in every right is inherent in every identical question "(1) Self-defense. recognition treaty. bу There is nothing in the Amerapproached treaty Every nation is sovereign state If it has a good case, of this which restricts or aggression. from the inalienable its free and other That at 18

side. Inasmuch as no treaty provision can add to the natural right of self-defense, it is not in the interest of peace that a treaty should stipulate a juristic conception of self-defense since it is far too easy for the unscrupulous to mold events to accord with an agreed definition.

employment of its military forces.' There bound to assure the execution of this obligation by territory of members, in what degree the member is preserving the independence and the integrity of the member to decide, in reference to the that 'it is for formally adopted owing to one adverse vote to mean resolution submitted to the Fourth Assembly but not the Covenant has, for example, been interpreted by a when deliberately accepted by a state. The obligation, if any, is secondary and attaches only poses no affirmative primary obligation to go to "(2) The League the constitutional authorities of Covenant. The Covenant Article ten of obligation Ħ. war.

opinion, no necessary inconsistency between the coauthorization and not a positive requirement. authorizing war in certain circumstances but it venant and the idea of an unqualified renunciation of construed ıs: an as obligations thereunder and free to fulfill their Locarno that all parties to the Locarno treaties should become commitments. matter of law be automatically released from their The United States is entirely

The covenant can, it is true,

be

parties signature in the first instance or by immediate accesdraft, and it will offer no objection when and if such the manner provided in Article III of the American to the treaty as to its proposed anti-war treaty either through soon as it comes into force

not informed as to the precise treaties which France a suggestion is made. (4)" Treaties of neutrality. The United States

has in mind and cannot therefore

discuss their

It is not unreasonable to suppose, however,

neutrality she has guaranteed are sufficiently and intimate to make it possible for France that the relations between France and the states whose to close per-

suade such states to adhere seasonably to the anti-war

treaty proposed by the United States.

If this

were

would other parties to the anti-war treaty would thus as a breach of the multilateral anti-war treaty and the event it would follow that resort to war by any state would not be violated by recourse to arms. anti-war treaty proposed by the United States, there Locarno treaties become parties to the multilateral not attach until one of the violation of the Locarno therefore treaties of Locarno are under any positive obligain violation of its solemn pledges thereunder. to go to (3) be a double assurance that the Locarno treaties The Treaties of Locarno. obvious that if all the war, such obligation certainly would treaties would also parties has resorted If the parties parties In to the such be ť to Ιt ы

no treaty for the renunciation of war. sion by France or any other power of a multilateral ceive, therefore, how treaties guaranteeing neutrality a party to the anti-war treaty. the treaties guaranteeing neutrality as if she were not anti-war treaty, the latter treaty would of course have states were attacked by a state obligations of the anti-war treaty. Powers in respect of the treaty-breaking state from the thereby automatically freeing France and the other neutralized states without violating done no party to the anti-war treaty could attack the bearing and France would be as free to act under be regarded as necessarily preventing the conclu-It is difficult to not a If the neutralized the treaty party to perthe and

war treaty through resort to war by one party thereto a matter of law that violation of a multilateral have already pointed would automatically 9 Relations with a treaty-breaking release out there can the other be no question as parties state from anti-As I

> their obligations unnecessary. express recognition of this principle of law is wholly to the treaty-breaking state.

the able, moreover, that a form of treaty acceptable efforts of all the other Powers. ification in of the world might obstruct agreement or the world can agree upon the text of such a force of an anti-war preferable, however, not to postpone on April 13. its application, and appropriate provision therefor war made in the draft submitted to the other Governments multilateral anti-war treaty should be world-wide British, hope cause it to be ratified. "(6) Universality. so situated as to be no menace of such French, From a practical standpoint it is clearly the United manner as to treaty until all the nations of German, Italian and Japanese From the beginning it has been States For one reason or another render abortive It is highly improbthat its the coming into to delay the proposed peace treaty to

willing

not be equally acceptable to most, if not all, of the universal or almost universal acceptance a tremendous service their observance thereof would be a practical guaranty named six Powers of an effective anti-war treaty case, however, the coming into force among the above-Governments as well as to the United States would of the proposal a second not willing of the world. world war. force which it has to jeopardize to humanity and the United ofEven were this not the This in itself would be the the treaty made by condition practical sucand

47 昭和3年5月(1日 田中外務大臣宛(電報)

びこれに対する米国各紙論評について仏国留保条件に関する米国国務長官の演説及

本 省 5月1日後着ワシントン 発

第一二五号

往電第一二〇号ニ関シ

スル米国側意見トシテ左記要旨ヲ演説セリ際国務長官ハ不戦条約ニ関スル仏国側ノ所謂留保条件ニ対四月二十八日華府ニテ開カレタル米国際法協会年次大会ノ

- スルコトハ狡猾者流ニ対シ援助ヲ与フル惧アリル侵略ヲ防守スル自由ヲ有ス但右趣旨ヲ条約文中ニ確認ナク総テノ国ハ条約規定ノ有無ニ拘ラス其ノ領土ニ対スナの総テノ国ハ条約規定ノ有無ニ拘ラス其ノ領土ニ対ス
- ルモ此ノ原則ヲ確認スル必要全然ナシノ締約国カ自動的ニ不戦義務ヲ免除セラルルコト勿論ナ、締約国ノ一本条約ニ違反セル場合該国ニ関スル限リ他
- 三、連盟規約ハ連盟国カ戦争ヲ為スコト サル 合ヲ定メタルニ止マ ニアラスト解ス従テ右規約ハ絶対的不戦ノ観念ト一致 モノニアラス ル戦争ヲ為ス義務ヲ要求シ居 ヲ 許与 セ ラ ル ル モ ル セ 1
- 題ナシヘク又非加入国ナル場合ニハ初メヨリ不戦条約適用ノ問ベク又非加入国ナル場合ニハ該侵略国ハ右口ノ取扱ヲ受ク戦条約加入国ナル場合ニハ該侵略国ハ右口ノ取扱ヲ受ク、「ロカルノ」条約及所謂中立条約ニ付テハ侵略国カ不

那

他ノ国ヲ参加セシムルコト実際的ナリト為ス次第ナリ望シ居ルモ先ツ六大国間ニ効力ヲ発生セシメ其ノ上ニテ六、米国ハ初メヨリ不戦条約カ世界一般的ナラムコトヲ希

リビューン」華府通信亦同様ノ意見ヲ述へ居レルカ一方費国務長官ハ仏国側留保条件ヲ一蹴シ去レリト述へ紐育「ツ右ニ関シ今日迄社説ヲ掲クルモノ少キ処華府「ポスト」ハ

務長官ノ演説ハ本件交渉ノ前途ニ寄与スル処大ナリト述 和的態度ヲ多トストノ趣旨ヲ述ヘ又紐育 件ヲ明記スルコトヲ断念スルヤ疑ハシキモ兎ニ角長官ノ ナキコトヲ信セシムヘシ尤モ仏国側カ之ニ依リ直 米国カ本条約締約国ノ行動ノ自由ヲ不必要ニ束縛スル意図 府「インクアイアラー」ハ国務長官ノ演説 ノ上ニテ留保 ノ際最良ノ方法ハ先ツ米国案ニ依リ条約ヲ成立セシ 条件ニ関ス ル公文ヲ交換ス ル ハ仏国側ヲ \exists イムス」 卜 三留保条 = 7 ハ国 シテ ル メ 調 \sim

仏ニ転電シ英、仏、伊、白へ郵送セシム

48

昭

和

3

年5月

1日

田在

中外務大臣宛(電報)

のチェンバレン外相の談話について法律家専門会議後に外相間討議を行うべき旨

本 省 5月2日前着ロンドン 5月1日後発

第七一号

往電第六九号ニ関シ

相ハ本件ヲ取纒ムル方法トシテ左ノ如ク述ヘタ シ 確保ノ運動ニ進テ参加シ来レル此ノ機会ヲ逸スヘカラスト 非 ニモ言及シ説明スル処有リタルカ要スルニ米国カ ル \sim 英国政府ノ最終的意見ハ「ドミニオン」ト 日 ハサレ テ極メテ熱心ニ本件成功ヲ期待スルノ意ヲ示セリ 趣旨ヲ敷衍シ又独逸ノ対米回答及「ケロ ハ昨日下院ニ於ケル答弁及過日「バーミンガム」ニ 演説ニ述ヘタル処ニテ推察セラルヘシトテ右両者ト 「チェンバレン」ニ面会不戦条約 ハ決定シ得サル ハ申迄モ無キ事ナル = 関シ質問 ッ カ目下自分ノ考 協議シタ グ IJ 」氏ノ演説 7一般平和 シ 次 ル タ 後二 同様 於ケ = ル処

他ノ 諸国ハ 連盟規約及

表明シ居ラサルカ如ク 又英国其ノ

カ

ル

」条約

規定ハ完全ニ確保セサ

ル

^

カラサ

ル

ヲ

米国提案ハ米国自身ヨ

リ云フモ充分ニ其ノ目的ト

ス

ル

処

ヲ

定ヲ為ス事適当ナルヘシト思考シ居ル旨ヲ述ヘタ 事有リ依テ彼是考慮ノ上結局「ロカルノ」条約ニ付踏ミタ 国ノ疑惑ヲ招クヲ以テ同国ノ法律家ヲモ参加セシメサ 事必要ナルモ仏国申出ノ如キ審議ヲ五国ノ間 以テ法律家ヲシテ是等ノ関係及条約ノ字句ヲ攻究セシ 攻究ヲ為サシメ其ノ上ニテ外相間 ル順序ニ依リ仕事ヲ二段ニ分チ先ツ法律家ヲシテ専門的 スルニ於テハ自分ハ仏国ニ出向クモ可ナリト ニ対シ若シ「ブリアン」氏カ不戦条約ニ調印セン事ヲ希望 カラス而シテ「ケロッグ」氏ハ曩ニ在米英国大使館参事官 ノ討議ニ移シテ最終ノ ニ限ル ノ意ヲ漏セル IJ 事 ル 八米 ム 決 ^ ル

49 昭和3年5月 1 日 田中外務大臣宛在米国松平大使 (電報)

伊

へ転電セリ

官補の談話について 米・仏両案は妥協可能とのキ ャ ッスル国務 次

本 ワシント 省 ン 5月1日後発 5月2日前着

一二六号

往電第一二五号ニ関シ

筈ナラムト述へ居リタ 約ト矛盾セストノ事ナルカ右 等ニ修正ヲ加フルニ吝ナラサル次第ナリト述ヘタルニ依リ 同国条約案ハ二、三ノ場合ニ於ケル戦争ハ正当ナリ ナリト答へ尚連盟側専門家ノ意見ニ依レハ米国案ハ連盟規 ルニ同氏ハ右見込アリト思考ス「クローデル」大使亦同様 本使ハ結局両国案間ニ妥協出来得ヘキ見込ナリヤト尋ネタ テ苟モ平和ヲ目的トスル条約ノ趣旨カ明ナルニ於テハ字句 テ差異アル処米国ハ必シモ自国案ヲ固執スル 地ヨリ起案シアルニ反シ米国案ハ戦争ヲ不法化スル点ニ於 聞紙ニテ承知セルノミナリト淡白ナルロ吻ヲ以テ述へ次ニ セル処同氏ハ仏国申出ノ五国専門家会議ノ事ハ米国側 五月一日「キ 考ナリ要スルニ米国側ノ態度ハ右往電国務長官演説ノ通 + ッ ス ル」次官補ト面会ノ節不戦条約ニ言及 ハ「ブリア ン」モ諒解シ居 モノニ非スシ トノ見 ハ新 118

仏ニ転電シ英、 伊、 独ニ転電セシ

50 昭和3年5月2日 田中外務大臣宛在英国佐分利臨 (電報)(電報)

開催したい旨のチェンバレンの意向在英仏国 不戦条約関連の外相会議を連盟理事会の際に

大使より内話につい

本 p ン ۴ ン 5月3日前着 5月2日後発

往電第七一号ニ関 シ

ラサル 仏国側ハ法律家ノ審議ニ米国専門家ヲ加フル 適当ナル キモ「チェンバレン」氏ノ案ノ如ク外務大臣ノ会合ヲ催 行シ帰倫後巴里 仏国大使ハ過日 ンバレ 仏国政府ヨリ之ヲ提議セ 要ト認メ居レリ尤モ右ハ表立タサル方法ニ依ラサ ナル場合ニモ此ノ前ニ連盟関係五国間ニ協議ヲ為ス事 . ヲ以テ来月開カルヘキ連盟理事会ノ際ニ之ヲ行フヲ ン ヘシト思考シ居ル趣ナリ尚大使ノ話ニ依レ 仏 氏ハ此ノ際考へ居ル法律家及外務大臣 へ転電セリ ニ赴キタルカ二日其ノ内話 「チェン ム事ヲ希望シ居ル レン」ト 「バ ーミンガ セ 趣ナリ 事ニハ異存無 ル処ニ依 A ル ᆫ ノ会合 ハ ヘカ ν = 「チ ス 同 *>*>

> 大使 へ回答につい Ť

本 省 5月2日後発

第五〇号

ダ 議無キニ於テハ帝国政府ニ於テモ之ニ同意セラレ度旨申出 国政府ヨリ仏国政府ノ提唱ニ係ル法律専門家会議ニ参加方 本二日仏国大使来省本国政府ノ訓令ニ依ル趣ヲ以テ今般米 往電合第九一号ニ関 固ヨリ之ニ異議無キ旨答へ置キ 申出テタル処関係諸国ニ於テ米国ヲ加ヘ本件会議開催ニ異 ル ニ付関係各国ニ於テ同意ノ場合ニ シ ダ 1) ハ 帝国政府ニ於テモ

田中外務大臣宛在独国長岡大使

英

米、

独、 伊

ニ転電アリ

度

52

昭和3年5月2日

(電報)

聞論評につい 不戦条約に関する独国の対米回答に対する新

7

ルリ

本べ 省ン 5月3日前着

第四三号

51

昭和3年5月2日

在仏国安達大使宛田中外務大臣より

(電報)

米国参加の法律家委員会開催に異議なき旨仏

三十日不戦条約対米回答公表セラ ル ルヤ従来本件ニ付仏

議ヲ試ミサ 点左ノ通 米諸国 ラ シ当国各新聞ハ挙テ論評ヲ 論調ヲ仔細ニ観測報道スル以 加 上立入 ヘタル カ其 'n タ į. ル 要 論

不戦条約実現ノ スハ不当ニシテ今回ノ回答ニ依リ ツ」ハ仏カ其ノ不評ナル同盟政策ヲ独逸ニ鵜呑セヨ 以テ「ベル ニ於テ大体各紙 冗漫消極的 ・ナリト セ サイユ」強制平和維持策ト チ っ オ ル 一致セ 仏案ニ比 ネス ŀ ル 力尚 シ直 • ブ 「ク 口 截 1 独逸ハ米国ヲ支持 ナ P カ ル -ナシ「フ イ 1 米案ヲ 亡 タ -ツ」紙 ラン 優 ォ ハ ν 仏 ŀ ル 1) パシテ ト為 ベル 案ヲ ス ŀ ル ス

論ハ煩瑣ナル法律的議論 政策的考量ノ帰結 米案カ連盟規約、 ヒ・ル ンド シャウ」、 ニシテ独逸回答ノ骨子ナ -7 P 「フォッス」) = カ リ出テ ル ノ 条約 タ ル モ = 抵触セ Ī ŋ = 1アラス実際版セストノ結 $\overline{}$ 「テ 1 グ

論セル 裁判制度ノ拡充ヲ高調 希望ノ表明ニシテ条件ニ非サルコトヲ特ニ付記 裁裁判制度 回答中ニ戦争去斥ノ当然ノ帰結タル軍縮 Ŧ ノ多キ処 ニ関シ回答中ノ字句カ 「フォツス」、「ルンド シタ ルハ時機ヲ得タ 「現在及将来ニ シ + ル 促進 ウ」等 モ Ī セリ ナリ 及 かか 六之 仲 尚 ŀ 裁

> ル 改訂殊ニ「ライン」 「 ク ロ ル コト 国民間 注目ニ値ス イツ」紙カ右 ノ利害衝突ノ平和的解決云 撤退問 ハ連盟規約第十九条ニ 題ヲ暗示セ 々 ル <u>ا</u> ۱ モ 1 依 ア ナ ル ル 心平和条約 ŋ ヲ 捉 ŀ 為 ヘテ

英ニ郵送

53 和3年5月 $\tilde{2}$ 日 田在 中外務大臣 (肇)

不戦条約案に対する新聞論調につい Ť

(5月19日接受)

公第 Ł

昭和三年五月二日

在波蘭

外務大臣男爵 田 中 特命全権公使 義一

肇

印

参考迄左記ノ通リ続報ス 仏国提案発表後ニ於テ論評ヲ 米 国 1 不戦条約案ニ対ス 不戦条約 ニ対スル ル当国新聞論調 波蘭新聞論調 試 3 タ ル モ = ハ既報ノ ノニ三ア 関 ス ル 件 通 ル ナル = 付御

過言 吾人 交涉 乙 ト 本件 然ラスム 々 二、初 ニ参加スル = 対等ノ地位ニ置テ条約ニ参加スル ハ波蘭 いノ方途 メテ独乙ノ平和主義 サ ル . ポ ヘシ故ニ独乙ニシテ波蘭カ直接ニ不戦 ペニ対ス 八唯 様招請セラル ランニー 一アル ル 危険 日 1 ク チ ル ハ之ヲ避止スル ミ即波蘭ヲ大国ノ列ニ 事二 ル 米仏両案ヲ比較研究 モ 同意ヲ与フ ノニ信ヲ置 事ヲ招請スル ア得ス クヲ ル = 条約 於 ニ在 得 ۲ מל ス デ 謂 ~~ 独 \sim ル シ ハノモ IJ =

之カ 持ヲ ガ ·今波蘭 = 国カ国際連盟ニ依リテ受クル ^ ゼ 以テ終止スル 成立 啻二 依リ連盟加入国ハ波蘭防護ノ責ニ任スヘキモ ッ シ = タ ト思考 シテ英国 フ カ独乙 国際連盟ニ 暁ニハ列国 ワ ル ス ヨリ襲撃セラル シ ヲ得 E 7 対 略 フ 同 ヘシ独乙 ハ波蘭防護ノ義務ナキヲ以テ中 ス ス .様ナ ル カ 致 日 ル 命 ク 明的打撃ナ ^ カ米国案ニ好意ヲ有 ル場合ヲ想像 安全保障ヲ全然覆ス ク只伊太利 諸 強国 ル 1 , 米国不 ノミナラ 八仏 スル ルニ連盟規 国 米国不戦 戦 案ヲ支 モ ス 条 欧州 約 ₩. 1 維 ナ

頼 米国案ニ 事ヲ 出 シテ採用セラル 一来サ ル結果其独立ヲ ル ニ至ラハ列 維 持ス ル 国 為二 ハ最早国際連盟 ハ 兵備ヲ拡張

=

シ 云 利害ヲ 々 同 シ ク ス ル 他 国 ŀ 同盟 ス ル 1 已 A ヲ得 サ ル = ル

ヘシ カ 案ヲ審査スルニ 加 ク 而 以上同条約ニ違反スル国家ヲ侵略国ト認メサル 国政府ニシテ欧州諸国ト戦争禁止ニ関スル条約ヲ締結 ル ス 此種宣言ハ重複無用ナルカ如キモ米国モ参加スル 全保障問題ニ付新シキ分子ヲ加フル ル 国ヲ拘束スル ラ チ フル ニ付同案ノ適用ニ関シ予メ -六条ノ活用ヲ困難ナラシメ ル連盟ノ制裁ニ関シ米国政府ノ意向明ナラサ 道徳的価値 制裁 ッ + キ旨ヲ 則 シテ該国ニ対シ国際連盟 サ ル = 国際連盟ト = 当リ 留保ヲ 関ス ジ I. メ得ハ満足スヘキ 米国ハ中立ヲ守ル事ニ依リ 事ナシト雖戦争殊ニ侵略戦争ヲ困 ル • ハ之ヲ有ス国際連盟ニ属スル 為 大体ニ於テ 規定ヲ欠ク不戦条約 ポ ・シテ ス 口 ラ以 ネ ハ新不戦条約 テ 所 Ħ 米国案ヲ採用シ之ニ必要欠ク 載 1 カ其ノ規約ニ規定スル 事態ヲ明瞭ニシ置クヲ要ス米 其効力ヲ減殺スル ゥ ナリ ス イ ^ IJ ク 右ノ見地ニ モ カ連盟規 ナ ア 仏国ノ ノナル ル A の問題ハ解 モ • 国家ニ執 1 7 モ只戦争ニ対 ハ ル 於 保 ヲ得 ル Ξ ヤ 難 かテ米仏 中 為規約第 決 1 プナラシ 律 宣言ハ安 ン ・懸念ア)氏論 = 制 サ セ ij 上 ス ラ ル ス テ \sim ル A

用 Ï モ 1 ア ル ヤ ニ観測 セ ラル 云 々

54 和3 年5月 (3)日 田中外務大臣宛(電報)在米国松平大使より

> 独 拒

> ニ転電シ仏、 ムハ奇怪ナリ

英ニ郵送セシ

ŕ

ノ趣旨ヲ述

~

ダ

1)

55

昭

和3年5

月

4

日

田在中パ

外リ

、務大臣宛(電報)、佐藤連盟事務局長より

米国案と連盟規約との関係に関する連盟事務

局内の意見につい

本パ

5月5日前着

省

独国の 対米回答に関する米国各紙論調に つ

本ヮ

方紐育 処アル 関係ニ ニ関ス 適シ本件交渉ノ 子ナリト報セラル)等ニモ関連シ社説ヲ掲クル 往電第一二五号ニ関 ル処各紙共独逸カ英国ニ逸早ク回答セルハ同国今日 カ同省側ニテハ何等「コンメント」ヲ為ササ ジ「ブルックリン・イーグル」ハ該演説ハ極メテ時宜ニ ノ後独逸回答(四月二十八日国務省ヨリ公表セラ 顧ミ極メテ自然ニシテ右回答カ本件交渉ニ寄与スル ル仏国側 ハ疑ヒナシト述へ居レリ将又往電国務長官ノ演説 「トリビ 成就ニ寄与スル処大ナルヘシト為シ居ル ュ ン」ハ 主張ヲ認メ乍ラ条約中ニ明記スル シ 「ケロッ グ」ハ正当防衛権其 ル ルモ満足ノ様衣セラレタル モノ弗 1ノ国際 コトヲ つ他 々ア __ =

ン

省 5月3日後着

第五六号

真否ヲ問合セタル処左ノ通内報アリタ 米国案ハ規約ト矛盾セス云々ノ一節ニ関シ杉村事務次長 在独大使発閣下宛往電第三八号及在米大使発閣下宛往電第 一二六号中連盟事務局側又ハ連盟側専門家ノ意見ニ依 ル モ

当多数ニシテ テ回答セルカ事務局内部ニ於テハ右意見ニ賛同スル 点ハ解釈上ノ ハ不取敢主義ノ問題トシテハ同案ハ規約ニ抵触セス微細ノ 過般安全保障委員会開会中連盟事務局情報部 」(米人)ヨリ米案ニ付意見ヲ求メラレタ 問題トシテ処理スレハ可ナル 「ドラモンド」モ全然之ト 同意見ナ ヘシト ルニ対シ杉村 \neg ス 'n ゥ ノ趣旨ニ シ モ ィ 由現 ラ相 ッ

米案ニ同意ナル旨明言シタル趣ナリ尤モ米最終案ニ関シテ 式ノ意見決定ヲ見タル ハ目下事務局側ニ於テ折角研究中ニシテ今日迄ノ処何等正 二三日理事会中「ド」ハ其趣旨ニテ独外務次官ニ対シ全然 コト無シ

伊へ転電セ

56 和3年5月 4 百 在米国松平、在仏国安達各大使宛(電報)田中外務大臣より

る旨駐日同国代理大使の申入れについて 米国は専門委員 会及び外相会議開催に反対す

5月4日後発

合第一〇二号

如 在米英国大使ハ「ケロッグ」長官カ外相会議ニ出向キ 不戦条約問題ニ関スル法律専門家会議ニ米国ノ参加スルカ 本四日朝米国代理大使 半 リトノ考ナルヤウ了解シ居ル趣ナルカ右ハ全然誤リナ英国大使ハ「ケロッグ」長官カ外相会議ニ出向キテモハ絶対ニ反対ニシテ外相会議モ其ノ必要ヲ認メ居ラス (大使ハ旅行中) 出淵次官ヲ来訪 シ

第四八号

独逸政府ハ 関係国ト テ 米国案ニ対シ無条件ノ同意ヲ与ヘタ モ同様ノ態度ニ出テ得サ ル事 ŧ 無 ルニ カ ル 依リ ^ シ 他 ŀ

> 英 出ノ次第ヲ説明シ置 之ニ対シ次官ヨリ 在仏大使宛ノ分へ リト申出テタリ ヲ希望スル旨申入 伊へ転電アリ 在仏大使宛往電第五〇号仏国大使 ル ケ 度 ル様二日付本国政府 ジ訓令 Ξ 接 ∄ IJ シ

申

思考スルニ付日本政府ニ於テモ本件会議ニ参加セ

サラ

A タ

 \exists

57 昭和3年5月 5 日 田在 中伊国 務松 大臣宛 (電報)

伊国首相の談話につい 米国を加えた法律家予備会議開催に賛成との て

本口 1 マ 5月6日前着

省

不戦条約問題ニ関シ五月四日首相 トシテ自分ノ意見ハ米国法律家ヲ加ヘタル関係国委員 太利首相)曰ク伊国政府ハ本件ヲ好意的 考ニテ不取敢其ノ旨ヲ通シ置キ 1 会談シタ ダ ŋ ルカ今後 = 考量 ノ ス

首相

伊

ル

ヲ辞セサル

置

会ニ先ツ付議シテ連盟規約

 \neg

口

カル

ノ

其ノ

他既存条約

律家予備会合ヲ召集スルコト

然ルヘシト

思料

ス

置キタ ハ英国 独逸ハ既ニ正式ニ回答ヲ発シタ ヲ過日 集ニ関スル提議ヲ為スナラムカト思ハル云々 国ヲ之ニ加フルコトヲ伊国ニ相談シ来リ異議 会ヲシテ研究セシム 討 関係ヲ篤 議 ,リ従テ他ノ関係国ニ於テ異議ナキ以上仏 「フレ ニを移ス ハ回答ヲ左迄急キ居ラサ ጉ ノカ順 ッ 研究セシメ チャ ルコ アナル ~」ニ機密文書ニテ回答 其 トハ元来仏国ノ発議ナル ノ ヘシト考へ居レリ依テ此 結果ヲ見テ更ニ関係国 , ルモノ ルカ自分ノ察スル処ニ依 ノ如シ又法律家委員 1シ置 ナキ旨ヲ答 国 力過 丰 Ξ 1) 外 タ 1 意味 相間 右 日 ij 米 招 \sim V

依テ本使 ナレ 加 鼻カ付クニ至ル ル 説ニ依レ カ兎ニ角法律家連ニ研究セシメテ見タ上ノコトニテ ク見ユルカ如何 ハ相当ノ時日ヲ要スヘシ其 ハ米仏両者意見ノ相違ハ大部緩和サレタ ハ米国国際法協会ニ於ケル最近「ケ ヘシ ト問ヒタ ルニ首相ハ其ノ辺何 ノ上ニテ 本問題 p ŀ ッ ハ少 - モ言へサ ル グ シ Ŧ Ĺ ソ 1 ハ 1 ゥ 1 眼 演

仍テ本使ハ本件ニ対スル感想如何 以上腹蔵ナキ自分ノ意見ニシテ且伊 アル カ過日 ム ル 「フレッチャ = 躊躇セスト 1 打明ケ 」来話ノ際米国ハ何程ニテ ጉ タリ 問 国 ヒタ ラ 態度 右ニテ解 ル ニ之ハ ナ IJ ル ト 内密 如 言 ク ^ Ŧ 本 IJ 1

> ル云々 ハープ ラ ŀ = ッ ク 1 話 = テ種 々 ・懸引ア ル モ ト思

英、米、仏、独へ転電セリ

昭和3年5月5日 田中外務大臣宛(電空

58

の対英覚書について法律家予備会議開催に賛成する旨伊国外務省

伊国外務省の対英覚書要領

本省 5月6日前着

第五○号

往電第四八号二関

右ト同日付ニテ 外務省ヨリ英大使館ニ送レル回答覚書ノ写ヲ送リ ノ内容ノ 「グランジー」ヨリ半公信ヲ以テ本使ノ参考迄ニ過 提議ノ 大要ハ別電第五一号ノ通ナリ尚右半公信ニ依 自的 ニコ対シ ・「フレ 伊国ノ ッ チャ 同情ヲ表シ伊国ノ政策ト 1 | ニモ公文ヲ与へ「ケ 越セリ其 日 国际1 P V ッ ハ

法律家予備会議 カナリ ル コ ŀ ヲ 述 ヘタ 1 提議ニ ル後前記対英覚書ト同様ノ文句ヲ 伊 国政府ハ賛成ナ ル 旨ヲ申送リ 用 ۲ タ テ

59

昭

和3年5

月

6

日

在田 英中 国外

[佐分利臨時代理大使宛/務大臣より

び外相会議開

|催案を撤回する旨駐日英国代理

米国側の反対意向を受け法律家専門委員会及

大使より通報に

うい

て

本

省

5

月

6

日後発

英、米、仏、独へ転電セリ

(別電)

本 省 5月6日前着

第五

一号

セ 玉 四月二十八日付英国大使館 欠ク サル 間 如 ノ不戦条約ニ関スル米国提議ニ ハヘカラサ + ヲ得サル旨ヲ回答スル 条約 = 一ハ予メ ル モノ 加盟各国間ニ意見ノ ナリト思考ス ノ覚書ニ ノ光栄ヲ有ス他方当外務省 ハ主義 ルヲ以テ前記各国 対 ジ伊 統一ヲ 国外務省 ト シテ同情ヲ 図 ル ハ多 コ 表 法 } ハ 数

尚当外務省ハ右予備会合ハ米国政府 キ行ハ î ッ ナ ル 」氏ト在華府英国大使ト ル 場合ニ初メテ有効ナル ヘキコ ト然 ル \sim シ ኑ ヘシ Ż 間 三行 ト考フ当外務省 ノ法律委員 ハ ν タ ル会談 ノ参加 ^ 「ケ カ確 ハ 引

九二八年五月

日

第五二号

往電合第

〇二号

=

在本邦英国代理大使ヨリ五月五日大要左ノ通リ通報シ来レ

弁法ヲ 長官 = 基キ米国政府ノ意向ヲ詳細 反対ナル旨ヲ告ケ同時ニ 在英米国大使く五月三日 ハ斯ル会議ヲ無用否寧ロ有害ト 試 1カ外 = 構スル 在英仏国大使ニナ 相会議ニ賛成シタリト コ ト ナレ シ IJ 四月二十八日ノ国務長官ノ 「チェ 説明セリ右ニ依 タ ル ンバ ノ報道 両会議開催 認メ亦専門家会議ニ 1 ハ事実ニ非 ν ン 以リ「チ」氏 案ヲ _ 氏ニ 撤 口 ス同 対 演 モ シ シ ハ曩 更ニ 同様 長官 説 玉 =

巴里、羅馬、伯林、「ワシントン」ニ転電アリタシ

60 昭和3年5月 Ē 田在 |中外務大臣宛(電報) |パリ佐藤連盟事務局長より

不戦条約に Ť 関 する連盟事務局に於ける意見に

省リ

5月10日前着 第月9日前発

第五

八号

杉村次長ノ内報ニ依リ何等御参考迄電報ス 不戦条約 案ニ関シ連盟事務局内部ニ於テ行 ル ル意見二三

- ラ出馬シ討議ニ参加スル場合(万一「ケ」自ラ之ヲ希 ナスニ傾キ居リ敦レニセヨ米国上院ハ巴里 ト云ヒ居レ ル重要視シ来レル ル 作製セラレタル条約案ニ対シテハ仮令「 ヘキニ付本件商議ヲ欧州 「ドラモンド」ハ当初ヨリ連盟ト モ米国政界ハ之ヲ欲セサルヘシ)ト雖批准ヲ肯セ IJ カ大体ニ於テ米案ニ賛シ仏案ヲ不可 ニテ行フ事ハ絶対ニ不可 ノ関係上本問題 二八勿論欧 ケロ ッグ Ĺ 州 チ ヺ 自 サ IJ 望 = ト
- 事務局一部ニ於テ 「ロカルノ」条約等現存諸条約ハ存続ス (此ノ点ハ研究ヲ要ス可シ) ハ今次米提案成立ス 戦争発生ス ル 場合ニ ル ル 一於テ 事ト 事ト モ ナ モ

度事件発生ノ場合ニハ随分無謀ノ主張ヲナス事従来其 属事項ヲ除外シ居ラサルモ米国ハ法文ノ如何ニ拘ラス一 ナラ 例鮮カラサルニ付此ノ点特ニ明確ニシ置ク必要アル ル仲裁裁判条約ト異ナリ「モンロー」主義及国内法権所 大ナル故障ナカル ト思考シ居ルモノアリ (此ノ点モ研究ヲ要スヘシ)ニ付米案ヲ承認ス ハ前記諸条約 ヘシ唯米案第二条ハ従来同国ノ締結 関係国 間ニ適用ヲ見ル 事ト ル ^ シ Ŧ

 (\equiv) 味ニテ理事会ハ 大ニ重要視セラレ 事会中ニ何トカ切抜ケノ策ヲ講セムトスル 云フ)アル 点ニ付テハ「グレー」卿ノ発表セル意見ノ影響大ナリ 後英国国論 ンガム」ニ於ケル演説ニテモ大体前説ヲ固 ハ大ナル進捗ヲ見ル事ナカルヘシ 英外相ハ三月理事会中仏外相ノ主張ヲ裏書 ヲ観テ目下大ニ苦慮セルナル お漸ク米案ニ好意ヲ示サムトス ト 居リ ノ観測行 其ノ 前ニ ヘク孰レ六月理 ル傾向 ナラム其ノ意 持 ハレツ セ シ ル 「バ ハ本件 カ其 ・ツア 1

在米大使ニ 一転電シ 英、 独 伊 = 暗送セ

61 和3年5月11日 田中外務大臣宛(電報) 在英国佐分利臨時代理大使より

相の談話につい 英国は米国案に賛成の旨回答するとの同国外 Ť

五月一二日着在英国佐分利臨時代理大使よ に於ける答弁につ 英国政府の対米回答に関する英外相の下院 和中外務大臣宛第八三号 いて

ンド 省 ン 5 5 月 月 712日前着 711日後発

第八二号

ヲ読マレタリヤト 関シ昨日自分カ下院ニ於テナシタ 一日外相ノ求メニ依リ往訪シタ 問ヘルニ付然リト答へ ル答弁(別電第八三号) ル 処 ファケ タ 口 ル ニ外相 ッ グ」提案 ハ 語

次テ要領左ノ如ク述ヘタリ

調印シ差支ナキモ 必要アラハ之ニ字句ノ修正ヲ施シ又ハ説明ヲ付加シタル上 条約等ニ コ米国案ハ (ノ後米国案及之ニ関スル 基ク義務トモ両立シ得ル事明カト 国家ノ自衛権ヲ害) ۲ -認 タリ依テ近ク米国ニ対シ英国 一ケ セス又連盟若 口 ッ グ 氏 ナリタル 1 ハーロカ 演説ヲ考究ス ヲ以テ ルノ ハ

> 旨 リ然ルヘシト思考ス 議ヲ催ス事ハ米国反対ナル モ ル 米国ノ提議セルカ如キ条約ノ締結ニ向テ協力スル 同時ニ調印セシム モ英国トシテハ 「 回答スル積ナリ又調印ハ先ツ六国間ニ於テ之ヲ行フ筈 ル事望 ロカル 以上 ノ」条約 マシト思考ス又本件交渉ノ為会 交渉ハ普通 ノ調印国タル白耳義 ノ外交経路 ノ意ア = =

ヲ以テ之亦別段故障トナラサルモ 攻撃ヲ受ケタ 得ヘキモノハ仏国モ調印シ得 点ニ関シ仏国ノ意向ニ付如何ナルヘキヤト 遭遇スル事ナカルヘシト思考スト答ヘタリ又本官ヨ 於テ協議シテ可ナルヘク既ニ 外相ハ修正又ハ説明ヲ加フルヤ否ヤ 右ニ対シ本官ヨリ ハ仏国ハ大体英国ト同様ノ立場ニアルヲ以テ英国 ノ儘ニテ差支ナシト認メラレ居ル次第ナリヤ 場合例 修正ニ異議ナキ意向ヲ示セル次第ナルヲ以テ別段困難ニ へハ波蘭ノ保障条約ノ如キ 独 ル場合ニ姶メテ援助 ニ転電シ連盟事務局 御研究ノ結果ハ場合ニ依 「ケロッ ヘシト考ヘラル又仏国ニ特殊 ノ義務ヲ 1 八一国 ト考へ得 ノ問題ハ追テ関係国 ^ 暗送セ グ」氏ニ於テモ字句 生スル [カ挑発 問ヒタ リ大体米国 ጉ ト尋ネタ 答 [ノ調印シ モノ ナク ル こ外相 リ右ノ タ シテ ルニ [案其 ナ =

戦争抛棄に関する条約 (不戦条約) 締結問題

発

62

昭和3年5月12

H

在英国佐分利臨時代理大使宛(電報)田中外務大臣より

省

第八三号

ーデ」亦之ニ賛意ヲ表ン司寺・マー・・・リーロイドヂョリ」本件外相ノ説明ニ対シテハ盛ニ拍手起リ「ロイドヂョリ」本件外相ノ説明ニ対シテハ盛ニ拍手起リ「ロイドヂョ 発ス 各自治領ニ照会中ナルヲ以テ右返答アリ次第米国ニ回答ヲ ヲ英国政府ニ於テ期待スルモノナルコトヲ言ハントス米案 留保無シニ承認シテ スル処アリタ ラレタル如キ条約ノ締結ニ協力シ且其ノ目的ノ為ニ関係国 十日下院 ハ既ニ研究ヲ了シ米国ヘノ回答ノ要領ニ付テノ意見ハ既ニ タル処ナルカ本日更ニ進ンテ本条約締結ノ成功スヘキコト 「英政府ハ米案ヲ熱心ニ歓迎スルモノナル ルコト ニ於テ「マ トナルヘシ而シテ回答ノ要旨ハ米政府ノ提案セ 八如何 クドナル <u>۱</u> ド ノ質問アリタ Ė 1) 米国 コト ル 不戦 ニ対 ハ既ニ述へ ハシ外相 条約 案ヲ ハ

米ニ転電 セ 1)

5月12日前着

英国の対米回答の時期及び趣旨突止め方訓令

省

5月12日後発

第五四号 松平大使宛往電第九五号ニ

関

3

発スル運ヒトナルヤニ見受ケラルル処其ノ時期並趣旨 方ニ於テ重要視シ居ル 新聞電報ニ依レ ハ英国政府ヨリ近ク米国政府ニ対 ニ付至急貴任国政府ニ就キ御突止 ジョ ヲ

昭和3年5月 12 日 在仏国安達大使宛田中外務大臣より

63

回電アリ度シ

提案について事情突止め方訓令 不戦条約に対する仏国の真意及び法律家会議

5月12日後発

第六七号

松平大使宛往電第九五号ニ 関 シ

仏国政府表面上ノ主張ハ従来ノ公文ニ依 モ同政府カ其ノ主張ヲ固執スル政治上其ノ他ノ真相 リ大体明カ ナ

二、法律専門家委員会開催ノ仏国提議ニ関シテハ関係国間 ニ誤解ヲ 来シ タ ルモ 1 ノ如キ処其ノ事情並其ノ後ノ成行

御突止 メ 回電アリ を度シ

64 昭和3年5月12 日 在米国松平大使宛田中外務大臣より (電報)

大使の申出につい 我が方の速かな対米回答方希望する旨の米国 Ť

省 5月12日後発

第九五号

旨申出テタリ 越シ米国提案ニ対シ成ル可ク速ニ帝国政府ノ 五月十二日米国大使 (長文ノ同文電報) ヲ参考トシテ非公式ニ出淵次官ニ送付 ヨリ 不戦問題ニ 関ス ル .回答ヲ得度 国務省来電写 +

約ヲ希望スルモ関係国ノ特殊ノ立場ヨリ必要ト 府ノ到底受諾シ得サル処ナリ米国政府ハ無条件 仏国草案ハ戦争ヲ抛棄スル代リニ之ヲ正当視 右電報ハ本件ニ関スル = シテ結局一種ノ軍事同盟ヲ結フコト 米国ノ立場ヲ開示セ ۲ ナル ル モ セ **セムトスルモ** ス :無留保ノ条 ヘク米国政 1 ル適当ノ = ーテ先ツ

> 在英、 65 明セルモノナリ 主張二付貴電第一二五号国務長官 修正ヲ考慮スルヲ辞ス 仏 独、 伊 大使へ至急転電ア ル モ ノニ非スト述ヘタル後仏国側 ノ演説 ij 度 ŀ 同趣旨ヲ敷衍説

昭和3年5月13 日 田中外務大臣宛(電報)在英国佐分利臨時代理大使より

各紙の論調につい 不戦条約に関する英国外相答弁に対する英国 ċ

インドン

5月13日

第八五号

シモ英国ノ ニ言及シタル 右諸点ヲ強調シ外相ノ演説ヲ敷衍スルニ止マリシモ 力スヘキコトヲ期待スト為シ居レル処「タイ 疑無ク斯テ英帝国全体挙ケテ米国案ヲ支持シ平和建設ニ協 弁ニ満足ノ意ヲ表シ自治領カ本国政府ノ意見ニ賛成スル 不戦条約問題ニ関シ主要新聞ハ何レモ社説ヲ掲ケ外相 ラフし ハ「マクドナルド」カ単純ナル受諾ヲ慫慂セル点 回答ニ此点カ言及 後 「外相ノ答弁 ヘセラル ハ留保スルカ否カニ触レサリ ル 否ト ニ拘ラス此単 ムス」ハ特ニ 「テレ

ŀ

不可 ナル 条約 有ス 戦争ヲ否認 純ナル ヲ遷延セサリ ル ヲ採リ居レル 英国ノ回答ノ後ハ五国中其意見ヲ発表セサル 院ニ提出スルコト妥当ニシテ其批准ヲ得タル後始 ケル困難ハ米国政府ノ地位ニ在リト 之ヵ違反ニ対 ラル 立場ニテ交渉ヲ為シ得ヘシ」ト論シ「ガ 交渉行ハル 平和確保ニ到達シ得 筈無キコト 全 シク存スル ヘシ日本ハ目下支那ニ於テ可成リ大規模ニ軍事的行動 カ ŀ ク同様ナ (上院 ル政府トセラレサル政府トノ間ニ条約締結ノ公平ナ ハ信 ナラシムト ノ批准ヲ得サリシ経験ニ照シ「自身決定ニ拘束 ス ス 1 ・「ケロ モ之カ為日本カ米国案ノ一般的受諾ヲ遷延ス ル ル ル シ制裁ヲ規定ス シニ同シ最モ熱心ナル賛成者モ本案カ戦争ヲ ヘシトモ見エス「ケロッグ」カ其案ヲ先ツ上 コト明カナリ吾人ハ何レ 考カ米案ノ意味ヲ解釈 ヲ欲セス」ト論シ ヘシ 公文ニ調印スルニ当リ調印後 ハ思ハサリシモ之ニ依リ将来一層有効ナ ッグ」カ ŀ ヘキ ノ考ヲ以テスル如キ皮肉ナル ハ 確力 ル 「ニカラガ」事件ニ依リ提案 コ ኑ ナリ 「ポ ナシ 無ク純粋ナル道徳ヲ基 ス 米案ハ主義ヲ確認 1 ル スト」ハ 各国政府 「ヴェルサイ 政府タルヲ問 ーディアン」 ジル地位 ハ日本ノミト 本交渉ニ於 メテ同 ラ 態度 八従前 크 **>** ハ ス F シ ___ =

> モノト 陥ハ寧ロ スル特殊ノ平和ハ米国ノ不参加ニ依リ今ヤ実際ニ適セ ル 国間条約ヲ提議シタル 主義ヲ闡明スル ル受諾ヲ力説シ居レ 根拠薄弱ナリ而シテ仏国ノ維持セントスル 関係ニ依 トス ナ モノ 規約ニアリト論シ「デイ リタルカ故ニ若シ IJ ナ 米案ノ無条件承諾ニ反対シ居ル コト ル カ IJ ハ価値アリト述へタ 何等ノ留保又ハ説明ヲ付 点ヨリ見レハ数国間 米案ト IJ 連盟規約ト衝突セ <u>-</u>-ュ ル後仏国 ノ条約ニ反対 えし 連盟ヲ基礎 モ其仏米間 セスシ 又単 ハ連盟 ハ其欠 テ斯 サ ル ጉ ス ŀ

米、 独、 伊、 連盟 ニ郵送セ 1)

昭和3年5 月 (16) 日 田在 中英国 務大臣利 宛臨

66

英国の対米回答見込につい

٠

ロンド

月 16 日

第八 七号

回答ハ「ドミニオン」 知ノ通ナルカ十五日「ウエル 貴電第五四号ニ関シテハ往電第八二号及第八三号ニテ御 ŀ ノ協議済次第発 ズレ 八一」氏 ルセラル ノ 、談ニ依 ^ ク レ / 右協議 ハ対 米 承

ニ右回答アル ナリ尚十四日当地米国大使モ遅ク ナル ヤニ 問題生セサル 聞 及 ヘク独逸ノ回答ニ ニリ 限リ 1 内話 一両日中ニ セ 似 タ ١ E モ ル 結了ス Ŧ 一週間又ハ十日以 ノニテ相当長 ヘシ ト コ

伊ニ転 電 セ 1)

和3 年5月 16 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使 食り

67

米国案に対する仏国主張の真意及び専門委員 会議開催の事情に うい Ť

本 IJ 5 月 16 5 月 17 日 日 前着 発

貴電第六七号ニ関ン第一二〇号

モノニ 関係 国 逸 テ 米国案ニ対スル 不取敢電報シ置キタ = モ 戦争ス シテ察スルニ将来例 IJ 来ル 間 = 戦争 ル 戦争状態発生ス 心配ナキ国ト仏国 仏国側主張ノ底意 1 可 能性ア ル通り要ス \sim ル国 ル ハ波蘭等仏国 場合ニ仏 <u>}</u> 7 ル 如キ独波、独仏 1 = ハ往電第九 国 米国ノ如 国 情 ノ差異 ጉ 1 ,同盟国 シ 四号 テ + ズニ基 何 ハ 援 ト独 等 ヺ ν ブ 以 助 ク 1

> 二、専門委員 戦争」 約等 四個ノ 出テタ ヤ又漫然不戦条約ヲ締結スル場合ニ不戦条約国ハ連盟規 求ムル必要アルヘキ所英国カ所謂不戦条約ヲロ実ト 争ノ場合ニ仏国ト 戦条約成立スル場合ニ於テ仮ニ仏国 ニ違反スル ニ所謂不戦条約カ 口口口 ジ得 義務ヲ 第十六条ノ封鎖 戦争ニ参加 カルノ」条約 ニ限 ハモノト カル 作用ヲ麻痺セシム 留保ヲ為シ 履行スル為戦争ニ参加 公開催 ヘキニ至ル事 ノ謗ヲ受クル事無キヤ特ニ六国ノミ無条件不 ル ヘシ シ得ルトスルモ英国等ヨリノ 解セラル之レ仏国カ先ニハ戦争ヲ ラ件 ヨリ タ ト 義務ヲ免ル シテハ米国ハイザ知ラス英国 「ヴェルサイ ル 主張シ次テ之レヲ換骨奪胎 生スル . 関 所以ナリ ルノ惧無キ ナキヤ更ニ独逸ト仏、 シテ ルニ 義務ヲ免レントス -ユ」条約 ハ十五日 セン ト思考セ 至ル事 ŀ ヤト ハ援助ノ為独、 セ _ 仏国外 ラ ノ政治的考量 無 援助 ロカ ル 丰 一見不戦条約 ヤ等要スル 『ノ援助ヲ 白等ト 務省 ル ル ハ シ 事ナキ 之ヲ 一侵略 ノ テ 波間 ・シテ 所謂 政 条 戦 期 =

局長ハ 催方ヲ提議シ ル ニ依リ 本使ノ問 米国ヲ タ ル = 加 対 モ英国政府ヨリ ^ シ当初仏国 タ ル 専門委員会開 政 、米側参加方ヲ提議シ来 府 ハ五国専門 ニモ 変更セ 委員会開

積リナ 米国国務長官ノ意向ヲ誤解シタルモ ニ依リ ニモ反対ナルコト判明シタル為所謂法律家委員会ハ立消 IJ ト シテハ英国ノ正式対米回答出来ヲ待チテ更ニ措置ス タ ・ナリタル次第ニテ仏国政府モ今後ハ通常ノ外交手段 ル次第ナルカ其ノ後米国政府ニ於テ斯ル委員会開催 セハ右ハ貴電合第一〇二号ノ通リ在米英国大使 リト答へタリ従テ本件ニ関シ関係国間ニ何等誤解 本件交渉カ行ハル ルコトト解シ居レリ従テ仏国側 1 ナル 可 ル カ

夕

ル原則ノ受諾ヲ声明スヘシ」トノ決議案ヲ提出シ

ーセ

シ

ノナリトノ意見ナリ政府ハ米国ニ対シ該条約案ニ含マレ

ヲ認メ本案ハ厳粛ニ好意アル考慮ヲ加

ヘラ

ル

 \sim

希望アル

へ転電シ 英 伊、 白へ暗送セ

68 昭和3 年 5 月 (17) Ħ 田在 日中外務大臣任英国佐分利 宛臨 (電報)

不戦条約米国案を原則的に受諾する旨の英国 上院決議につい 7

本口 ンド 着 発

省 5 月 17 H

不戦条約問題ニ 関

提案ヲ衷心 十五日上院ニ於テ「リ ヨリ歓迎シ且政府カ世界平 ì ディ ン グ」卿 和二 Ξ IJ 協力セ 「本員 ムト . /\ 米国 ス ル 1

第九六号

米、 ルハ不合理ニアラスト述へタリ メラレタル何等カノ方法ニ依リ記録ニ留メ 米、独、英各政府ノ表明セル見解ヲ外交上正式且一般 コトハ之ヲ避クル要アルモ調印スヘキ条文ノ 意義 ニ関 躇シ居ラサルヲ声明シタルカ其ノ 討議中政府側「カッシェンダン」 後全会一致可決セラレタリ ル | 卿「カンターベリ 独 伊、 連盟ニ郵報セ ー」大僧正等熱心ニ之ヲ支持シ 1) 卿 際該条約ニ留保ヲ付ス ハ 政府 ム カ米案賛成 コトヲ希望 心ニ認 タ = シ ル ル

69 昭和3年5月 (20) 日 田中外務大臣宛在英国佐分利臨 型報)

英国の対米国回答在英米国大使に手交につ

て

ロンド

本 省 5 月 20 日前着 発

手交セラレタリ 不戦条約 ニ関ス ル英国政府 1 回答 八十 九日当地米国大使 =

右 ーテ キス ト」ハ二十日ノ 新聞ニ 発表

英国の対米回答の概要について 和3年5月 (20) 日 田中外務大臣宛在英国佐分利臨

70

本口 ンド シ 5月20日後着 発

九八号

項ョリ 往電第九六号英国回答ハ 成ル各項ノ 「テキ 「フル スト」電報ノ要アラハ御来示ヲ スカ ッ プ」七頁ニシテ十三 請

独ノ本件 三 関 ス ル提案回答等 ラ 考 慮 シ タ 1)

原則ヲ定メムトスル 目的トスル処ハ戦争ヲ政策ノ具トシテ使用 右ハ「ケロッグ」ノ演説ニ依リテ一層明ナリ 仏国 不戦条約締結ノ件 仏両案ヲ研究スルニ両者ノ間ニ重要ナル差異 国 一カ此 ノ原則ヲ破リ ニ在リ英国政府ハ全然之ト同意見ナ ハ英国極力支持ス タ ル場合ニ付提案ス セ 米国 サ ル 政 コ 府 ル ŀ 7 , ラ シ

> 六、 乓 四、英国政府 務ヲ免ルヘキコトヲ示セリ ル ムコト 諾シテ可ナリ メス「締約国間ノ争議」ナル字句カニ締約国間 ノ点ニ付テハ原案ニ何等追加スル アリ英国政府ハ之ニ対シ慎重ナル考慮ヲ加 一国ノ条約違反ノ場合他ノ国 モ包括スルカ如キ広キ意義ヲ有スルモノト ノニ非スト解ス右ハ「ケロッグ」ノ演説ニ明ナリ故 第二条ニ付テハ米、仏両案ノ間ニハ左シ 仏国ハ一国カ条約 コト無用ナリトハ言ヒ得サルモ「ケロッグ」ノ演説 ヲ提議ス本条約丈ケヲ考フ ハ米案第一条ヲ以テ自衛権ノ行使ヲ妨ク ニ反シタ ル ハ違反国ニ対 場合ノ為一条項ヲ V ノ要ナシ ハ斯 ル条項ヲ付 タ ^ シ条約上ノ セハ米案ヲ受 タ ル ノ争議ヲ 差異ヲ 1) 付 加 上此 加 ル 義 認 モ ハ ス

七、右ノ原則ハ特ニ本条約ニ ニ止ムル ナシ而シテ此ノ点ニ関スル諒解ヲ適当ノ方法ニ依リ 一致ヲ見ハ英国政府ハ之ニ満足シ何等修正 コ ኑ 困難ナラサ ル ヘシ 1 ミ適用セラル 両国 ラ求 ム = 意見 ル 記録 1 意 1

、之ヲ重 此点ハ英国カ既ニ有スル条約上ノ義務ニ 大視セサ ル ヲ得ス連盟規約 及 \neg 口 影響ス カ ル 7 ル ヲ 以

ラサレハ本条約ハ既存条約ト ノ関スル限リ条約ノ効力ヲ停止スルトノ諒解存スル ハ単ニ戦争ヲ否認スルノミナラス進テ違反ノ場合ノ制裁 規定ス従テ或条約国ニ対シ戦争行為ニ出テタリ締盟国 抵触スルノ虞アリ ニア

約及「ロカル 解ス現ニ「ケロッグ」ハ其演説中ニ於テ新条約ト連盟規 規定ヲ欲ス此点ニ関シテハ何等異議ナカルヘキコト スルコトハ独逸ト異ナル所ナク欧州平和ノ基礎タル スルコトヲ得ス故ニ英国トシテハ寧ロ仏案第四条ノ如キ ノ約束ヲ弱メ又ハ覆ヘスカ如キ如何ナル新条約ヲモ受諾 英政府カ連盟規約及 ノ」条約トカ抵触セサルコトニ言及シ居レ ヘ「ロカル ノ」条約ヲ尊重セ ン · ト 諒 此等 ト欲

国政府ハ世界ノ或地域ニ於テ其防衛及保全カ英国ノ為特 英国政府 撃ニ対シテ防護スルコトハ英国ニ取リテハ自衛手段ナリ ルコトヲ明瞭ナラシムル為努力シ来レリ之等ノ地域ノ攻 別且緊切ノ利害関係アルコトニ注意ヲ喚起セントス英国 ハ過去ニ於テ之等ノ地域ニ対スル干渉ハ容認スルヲ得サ 政策ノ具トシテ戦争ヲ否認スル第一条ノ用語 ハ此点ニ於ケル行動ノ自由ヲ害セスト云フ明瞭 = 一顧ミ英

> ナル ニ当リ米国政府ノ見解ヲ表示シツツアルモノト信 宣言シタルコトアリ従テ英国政府ノ其ノ立場ヲ明ニ 他国ノ之ヲ無視スルコトヲ以テ非友誼的行為トスヘシ 明ニスルヲ要ス米国政府ハ之ト比スヘキ利害関係ヲ有シ 諒解ノ下ニ新条約ヲ受諾セント ·ス ルモノナルコ ス ス ŀ ル ヲ

十一、英国政府ハ世界ノ総テノ国家カ条約ニ加盟スル 題ナリ 持スルコトヲ得スト認メラルル国家ノ存スル以上世界全 係ニアル欧州ノ或国家カ加盟国ニ包含セラレサルコトハ 家ノ加入条件ハ将来更ニ考究スルコト便宜ナルヘキモ 国ノ加入ハ実現困難ニシテ且却テ不都合ナルヘシ之等国 府ノ承認ヲ受ケサル国家及自己領域内ノ秩序及安寧ヲ維 ンテ条約ノ条項ヲ受諾スルコトヲ疑ハス未タ各国ヨリ政 厄介ノ事態ヲ生スヘシ英国政府ハ固ヨリ之等ノ国家カ欣 表示スル迄条約ノ効力ヲ差控フルノ必要ナシト認ム トモ他方加入ノ提議ヲ受ケタル国ト既ニ密接ナル条約関 ハ当面ノヨリ重要ナル目的ノ到達ニ比スレハ軽微ナル 然レ 意思 ソ

十二、提案ノ条項及之ニ関連シテ生スル諸点ノ審議ノ後英 国政府ハ平和ノ基礎ヲ強固ニセントスル新ナル運動ニ 衷

商議ニ入ル用意アリ 結二欣然協力シ且関係諸政府ト共ニ此目的ノ為必要ナ トヲ知ルヘシ英国政府ハ提案セラレタルカ如キ条約ノ締 心協力ス ル コトヲ妨クヘキ何等現存ノ支障ヲ認メサ ル ル コ

十三、以上ハ英国政府ノ見解ヲ表示セルモノナリ米国提案 協議シタルカ何レモ提案ノ一般原則ニ対シ熱心ニ賛同セ リ依テ本条約ノ締結参与方ニ関スル招請ハ之等政府 ハ自治領及印度政府ニモ関係アルヲ以テ之等ノ政府ト シク受諾スル所ナルヘキヲ確信ス Ŧ

71 和3年5月 21 日 田中外務大臣宛在米国松平大使より

不戦条約に関する英国の対米回答テキスト送

紙 英国の対米回答テキ ż

(6月15日接受)

普通公第二六九号

昭和三年五月二十一日

在

特命全権大使 松平 恒 雄 印

外務大臣男爵 田中 義一殿

> 対米回答「テキスト」送付ノ件 不戦条約問題ニ関スル五月十九日付英国政府

本件ニ付キテハ不取敢往電第一六三号ヲ以テ報告申進メ置 丰 タル カ右回答「テキスト」一部送付ス

別 紙

ICAN FROM THE TEXT OF NOTE, ALANSON B. TEN CHAMBERLAIN, AFFAIRS OF GREAT BRITAIN, AMBASSADOR SECRETARY FOR HOUGHTON DATED IN TO LONDON MAY 19, THE SIR FOREIGN AMER-AUS-1928,

Your Excellency:

treaty, has been receiving sympathetic copies of correspondence between the draft treaty for at the hands of His Majesty's Government in Your note of April 13th containing the text of a French Governments renunciation of war, on the subject United together consideration of States with this

- 2. The suggestion for the conclusion of a treaty for renunciation of war as an instrument of national policy has evoked widespread interest in this country and His Majesty's Government will support the movement to the utmost of their power.
- 3. After making a careful study of the text contained in Your Excellency's note and of the amended text suggested in the French note, His Majesty's Government feel convinced that there is no serious divergence between the effect of these two drafts. This impression is confirmed by a study of the text of the speech by the Secretary of State of the United States to which Your Excellency drew my attention

shall not be used as an instrument proclaim without restriction or qualification that war embody in a treaty a broad statement of principle United States Government, as I understand it, of International Law on April 28th. The aim of the and which he delivered before the American Society therefore precision as Government. The exact fulfilment of treaty engage-Majesty's Government appreciate the scruples which consistent with the terms of the proposed pact. others to take action seeming at first sight to be certain exceptional circumstances in which the same purpose this aim His Majesty's Government are wholly in acprompted these of that principle The French proposals equally imbued with the ıs. of importance. а matter which affects national honour; to the scope have merely by one party suggestions Each of the of such engagements added an indication of ofby may oblige policy. the suggestions French viothe in-

made by the French Government has been carefully considered from this point of view.

- 4. After studying the wording of Article 1 of the United States draft His Majesty's Government do not think that its terms exclude action which a state may be forced to take in self-defence. Mr. Kellogg has made it clear in the speech to which I have referred above, that he regards the right of self-defence as inalienable and His Majesty's Government are disposed to think that on this question no addition to the text is necessary.
- 5. As regards the text of Article 2 no appreciable difference is found between the American and French proposal. His Majesty's Government are therefore content to accept the former if, as they understand to be the case, a dispute "among the high contracting parties" is a phrase wide enough to cover a dispute between any two of them.
- 6. The French note suggests the addition of

an

article providing that violation of the Treaty by one of the parties should release the remainder from their obligations under the Treaty towards that party. His Majesty's Government are not satisfied that if the Treaty stood alone, the addition of some such provision would not be necessary. Mr. Kellogg's speech, however, shows that he put forward for acceptance the text of the proposed Treaty upon the understanding that violation of the undertaking by one party would free the remaining parties from the obligation of observing its terms in respect of the Treaty-breaking State.

so understanding on record in some appropriate manner doubt Majesty's Government are satisfied and will not ask for the insertion of an amendment. will apply in the case of this particular that it may have equal value with the terms of the 7 be If it is agreed that this is the principle which found without difficulty ofMeans Treaty, placing His no

Treaty itself.

Majesty's Government are already bound. The preserinstrument of national policy just as it is the purpose embodied in the Locarno Treaty. and why they have undertaken the burden of guarantee given ungrudging support to the League of Nations, their endeavours. Majesty's Government and the prime object of all vation of peace has been the somewhat further than a renunciation of Covenant and of the Treaty of Locarno, however, go Majesty's Government have already accepted and the tagonism between the object of both is the same that there is no real anall these engagements is the elimination of war as which is peace pact now proposed. The point is one of importance because of its on the treaty engagements by now proposed. The It is the Treaty engagements which His reason why they have chief concern of It The sole object of machinery is because which war of His His the the an

policy in that they provide certain sanctions for a breach of their obligations. A clash might thus conceivably arise between existing treaties and the proposed pact unless it is understood the obligations of the new engagement will cease to operate in respect of a party which breaks its pledges and adopts hostile measures against one of its co-contractants.

would for their part, prefer to see some such provision this country in scrupulous fulfilment of these engagefundamental. ments is so great that His Majesty's Government the peace of Europe rests. weaken or undermine these ment could not agree to any new Treaty which would their note of the 22th of April His Majesty's Governwith that of the German Government as indicative in League of Nations and out of the Locarno treaties is for the obligations arising out of the Covenant of the 9 For the Government of this country, respect Our position in this regard is identical Indeed public interest in engagements

as Article 4 of the French draft embodied in the text of the treaty. To this we understand there will be no objection. Mr. Kellogg has made it clear in the speech to which I have drawn attention that he had no intention by the terms of the new treaty of preventing parties to the covenant of the League or to the Locarno Treaty from fulfilling their obligations.

Great Britain accept the new treaty upon the distinct clearly understood that His Majesty's Government in British Empire a measure of self defence. be suffered. Government have been at pains to make it clear vital interest for our peace and safety. His Majesty's welfare and integrity of which constitute a special and lency that there are certain regions of the world the renders it desirable that I should remind Your Excelation of war as an instrument of national policy past that interference with these regions cannot The language of Article 1 as to the renunci-Their protection against attack is to the It must be Ħ.

understanding that it does not prejudice their freedom of action in this respect. The Government of the United States have comparable interests, any disregard of which by a foreign power they have declared that they would regard as an unfriendly act. His Majesty's Government believe, therefore, that in defining their position they are expressing the intention and meaning of the United States Government.

accept its terms. reason however to doubt that these States will gladly already in close treaty relations Europe hand, it would be embarrassing if certain their willingness to become parties. to wait until all the nations of the world have signified Majesty's Government agree that it is not necessary the new treaty before it would come into the parties. with whom the proposed participants are As regards the measure of participation Universality would in any case His Majesty's Government see no were On not included force, the other States bе

further attention may perhaps be devoted with advan-The conditions for the inclusion of such States among of good order and security within their territories. are scarcely in a position to ensure the maintenance not yet been universally recognized and some for there are some States whose Governments have difficult of attainment and might even be inconvenient with the attainment of the more important purpose in parties to the new treaty is a question to It is however a minor question as compared which which

Government find nothing in their existing commitproposed treaty ments which prevents their hearty cooperation in this such a pact as is proposed and are ready to engage 12. movement for Your Excellency will realise that His Majesty's They will gladly cooperate in the conclusion After this examination of the terms of the and of the points to which it gives strengthening the foundations of

> which are necessary for the purpose with the interested Governments in the negotiations

the receipt of the invitation to participate in I am happy to be able to inform Your Excellency proposed treaty. cordial agreement with the passed, it has been ascertained that they are all in been in and the Government of India. They have therefore with His Majesty's Governments to participate otherwise than jointly and simultaneously concerns His Majesty's Government in Great Britain posed treaty from its very nature is Britain. It will however be appreciated that the on behalf of His Majesty's Government arguments in the foregoing paragraphs are as a result of but is one in which they could not undertake communication with those Governments Your Excellency will observe that the detailed I feel confident, therefore, that on the communications which have general in the principle not one Dominions Ħ. expressed the conof pro-

Majesty's Government in Great Britain, will be clusion to accept the ы invitation. treaty, they, no less that pre-His

昭和3年5月 21 В 田在 中仏 外国 務大臣臨 宛時 死(電報) 時代理大使より

72

は同趣旨との新聞論調につい 不戦条約案に対する英国の回答と仏国の主張 て

本 省リ 5 5 月 月 22 21 日 日

英国ノ主張モ当然ナリ 英国回答ト仏国側留保ノ四点ニ 危機ヲ脱スルヲ得タリトノロ吻ヲ漏シ居レリ」又英国回答 外交組織ハ米国提案ニ依リ一時危殆ニ瀕シタルモ今ヤ ツルモノナリトシテ之ニ賛意ヲ表シ殊ニ「アブニエール」 不戦条約ニ関スル英国政府ノ対米回答ニ関シ当地重ナル新印第一二五号 如キハ「国際連盟及諸同盟条約ヲ基礎ト 紙ハ概ネ右回答カ根本ニ於テ仏国側 項ニ付テハ米国カ ト言フニ例外ナク一致シ居ル 「モンロー」主義ヲ唱フル以 関スル重ナル観察左ノ ノ主張ト セル現在欧州 同 趣旨 上本件 処今次 幸二 旦出)

「デバ」

ルヲ多トス云々 英国政府ノ意見ハ仏国ノ主張ニ接近シ居り且世界諸国中 分満足スヘキナリ又条約ノ普通性ニ関スル部分ニ付テモ 如キハ全ク仏国案ニ賛成セルモノニシテ違反ノ場合ニ関 力ナキモノヲ不戦条約ニ加入セシムルノ不都合ヲ スル条項モ仏国トシテハ英国回答第七項末段ノ通ニテ充 英国回答中不戦条約ト現存条約 (ノ政府未タ各国ヨリ承認セラレス国内ノ秩序維持 トノ関係ニ関スル 部分 指 ジル能

「タン」

シ仏国ト諸条約ヲ締結シ居ル諸国 大体「デバ」ト同説但シ条約 ハ自然解決トナル ヘシト述フ ノ普通性 カ速 ニ 加 Ξ 関スル 入セ ハ本条約 部分 Ξ

=(3) ± ¬ 1 ٠ ٢ ・パリー

関スル 留保中正当防衛ニ関スル部分ハ「ライン」非武装地帯 英国回答ハ仏国ノ主張ト同様ナリト言フヲ得ス 閑ニ付シ居リ又右回答第九項ハ英国政府カ独逸政府ト モノナルニ英国回答第四項ハ斯クノ如キ重要ナル ー ヴェ ルサイユ」条約違反ノ場合ニ 備へム トテ仏国 点ヲ等 ŀ - スル

様国際連盟規約 ス ル モノナルヲ示セリ ノ義務ヲ極 ጉ - ノ趣旨ヲ X テ局限シ消極 述 的 = 解釈 セ 厶

へ転電シ英、 伊 ^ 郵 送 セ IJ

昭和3 车 5 月 (22)日 田在 中英外国 形大臣和 宛臨 元(電報) 臨時代理大使

73

系新聞論調につい 不戦条約案に対 する保守 Ť 自由及び労働三党

月22日前

九 九

スル 体 成立ニー歩ヲ進メタ 殆ト実質的相違ノ存在セサル 聞 電 ロカルノ」条約ト 一致シテ熱心ニ米案ヲ支持セル 研究ヲ適切ナリ |八何レモ社説ヲ掲ケ居ル処保守党系主要新聞 第 セ 九 ルモ其ノ従来主張シ来レ 点ヲ遺憾 八号不戦条約英国回答二関 セ ŋ ŕ ノ関係並ニ特殊利害ヲ有スル地域 ト述へ居リ自由党系新聞 シ英国回答ニ依リ米、 ル モ 1 モアリ労働党紙 コトモ明確ニセラレ不戦条約 ル コトヲ賞揚シ カ如キ単純ナル受諾 シ二十日及二十 仏両案ノ ハ英国 (八大体回 連 ハ英国 盟規 回答 日 間 = 約 三 答 関 = 全 1

> **一**⁽²⁾ ノ 所論要旨左ノ通 各種留保ノ為米案ヲ空文ト ナ ス モ 1 ١ 揶揄シ居 1)

「タ ムスし

帝国一致ノ言明ハ本回答ノ重要性ヲ一層高ムヘシ本件商 今回 ニ依リ著シク米案ノ目的達成ヲ進捗 ハ会議成功ノ為米国内ニ之ヲ開 ハ普通ノ外交手段ニ依 一ノ回答 ロハ米案ニ 対 ス ル リ可ナル ル困難ヲ除 クコ モ ኑ 列国会議ヲ セ 去シ英米協力 シメ得 必 一要ナ \sim ク尚 必 1 全英 更新

「テレグラフ」

英帝国各政府カ米案ニ

依

ル

ノ締結

三参加

ス

ル

1

用

立ノ可能性ヲ甚タ大ナラシ 態度ヲ以テ其ノ米案ヲ重 ス アルコトハ米政府ヲシテ米案ニ不安ヲ抱 ・ナル受諾ヲ与フルコト ル 上ニ大ナル援助タ ル 生大視セル ヘ シ ー ハ容易ナラムモ外相 条約 メ タ 玉 'n カ概括的ノ コ ۲ ヲ 蚏 ケ カ ル 八周密ナ 語調 仏国ヲ説服 ニシ条約 = テ簡 ル

三⁽³⁾ 「ガ ーディアンし

適切ナリ 項ヲ提議又ハ説明ト 1 回答カ簡単ニ シナラム英、 米案ヲ其ノ儘受諾 独 シテ付加シタリ 米諸政府ノ解釈ノ シル シナラムニ 要ト 一致シ居 認 ハ メ 一層 タ ル

理由 中米及南米 限 モ \sim ル ヲ ル カ ij コ シテ英米二国 追求セラ 以テ自衛ノ為緊要ナリトス此ノ仏ノ軍事同盟ニ ナラハ仏自身ヲシテ之ヲ述ヘシムルコト必要 、独逸カ波蘭ト交戦シタル場合後者ヲ援助セム 「ケロッ ナ リ ト必要ナラハ案ニ是等同盟カ自衛ノ合理的手段 シナリ仏カ波蘭ノ保全ヲ望ムコト英ノ埃及、 カ ル ナル = 一対ス レハ グ」案受諾ノ障碍タルコト カ ヲ以テ仏カ実質的 調印 コモ ル ጉ ス ン 同様ナリ英ハ婉 ロー」主義ヲ留保スヘク斯 ル 以上仏国カ こ二異 曲 ij 調 調印ヲ為シ得サル留保スヘク斯ノ如田ニ之ヲ留保シ米 ナキヲ述へ置 タ ル解釈ヲ チ 言及 ル ŀ 米 置ナ及シへ有クルス之シス チ 有 ノ

往電第九 八 号 共 一米、 独 伊 (巴里連盟) 白 波

チ エ コ <u>ニ</u> = 郵送 セ 1)

74 和3 不戦条約案に対する英国の留保に関する米国 年5月(22)日 田在 中米 務大臣宛(電報)松平大使より

各紙論調につい 本ヮ

ハ異存無キ

[条ハ

右以上ニ更ニ

欧

州大陸

=

ル

[ノ軍事

同盟組織ヲ是認 モ仏案第四

スル惧アリト

為シ居レリ

其ノ かか 言分ニ

ン

`」ハ連盟!

規約並

カ

ル

パノ」条約

ニニ関スル 下述

英国側

ハ公式ノ文書ノ

形ト 7 1

為ス可キナリ

 \sim 居

V

ル

カ

ーサ

省

5月22日後着

育 国

「タ

A

ス

及費府

7

V

ッ

ヂ

7

英国カ米案

電第一六三号ニ

華府 次ニ「インクワイアラー 不戦義務ヲ免レ 極メテ肝要ナリト説キ猶日 ムル自国外ノ地域ヲ明確ニスル趣旨ノ公文交換ヲ行 条約成功ノ為ニハ大国間ニ各国カ其 日 戦条約ヲ締結スルモ価値無シト ヲ述へ居レル モ アラー」ハ英国カ特殊地域ニ対スル自由行動ヲ留 [本ノ回答モ英国同様此ノ点ニ言及ス可シト思 右ノ如キ自由行動ヲ認メサ ニ言及シ米国ハ「モンロー 「ポスト」、 カ只「ポスト」カ何ノ道此ノ ンコト 「バルチモア・ ヲ欲スヘシト述フ 」ハ往電第 本 ル訳ニ行カサル 」主義ノ関係上英国 ハ露国カ満州 為シ居ルニ反シ「 サ ン」、費府 アノ防衛 一二五号国務長官 際留保沢 三侵 = 関係ア 可シ イ 入ス ハル サ ኑ = 保 ン シーハ - ノ趣旨 ij 対 セ ル ル フ in h 処本 シテ ラ 1 ル ワ 認 コ

側ノ 義務ニ悖リ又其ノ重大利益ヲ保障セサル新義務負担ノ意無 旨ヲ受諾 キ事ヲ示シ居レリト為シ「レッヂャ モ 態度ヲ強硬ナラシムル懸念アリト述フ 「タイムス」ハ英国回答ハ同国カ仏国ト等シク既存ノ セル コト ヲ欣ヒ各国間交譲妥結ノ要アルヲ述ヘタ ー」ハ英国回答ハ仏国

75 昭 和3年5月22日 田中外務大臣安在仏国河合臨時 E宛(電報) 四時代理大使よ 英ニ転電シ仏、

独、

伊ニ郵送セシ

不戦条約に対する仏国政府の態度について

IJ 5月23日前着 5月22日後発

一二七

ジェー」ヨリ内聞スル所大要左ノ通 不戦条約ニ 関スル 仏国政府ノ態度ニ関 シ ヿバ ッ セム カ 国留 \neg ν

反国ニ対スル他締約国ノ義務解除) 保ノ第一点 仏国側トシテハ英国回答ノ次第モアリ今後 為スモノナルヲ以テ不戦条約ノ前文中ニ又ハ最終議定書等 形ニテ明カニ規定シ置度ク此ノ点ハ第三点 (正当防衛) ハ之ヲ固持セサルヘク第二点 ハ国際公法上ノ新例ヲ ノ交渉ハ仏 (現存条約 (違 1

> ナリ云々 次英国回答ニ付テハ其ノ発送前既ニ「ハー 結方ニ異存無キ由ナルヲ以テ此ノ点ハ固執セサル 右諸国政府ノ内意ヲ質シタルニ何レモ米国案ノ如キ条約締 国ト政治条約ヲ締結シ居ル諸小国ノ参加アレハ充分ナル所 スル事トシ度シ第四点(条約ノ普遍性)ハ仏国トシテハ仏 上ノ義務ヲ実行シ波蘭ヲ援助シ得ルニ至ルヘキヲ以テナリ 果仏国モ締約国ト 見解ニ依レハ例 大体満足シ居リ兹暫クハ徐ニ形勢観望ノ態度ヲ持ス ジョウ」間ニ私見ノ交換アリ仏国側トシテハ右英国回答ニ 又留保第三点ニ付テハ同様何等カノ形式ニ於テ明カニ規定 関係)ト 共ニ仏国側ノ最モ重キヲ置ク所ニシテ仏国側 へハ独逸カ波蘭ヲ侵撃スル場合本留保ノ結 共ニ不戦条約ノ義務ヲ免レ仏波同盟条約 スト」「フロマ ヘシ尚今

在英、 米 独 良 伊 大使ニ転電セ IJ

76 昭 和3年5 月 22 日 田中外務大臣宛在米国松平大使 (電報)

米国による英自治領及びインド宛不戦条約 加招請につい Ť

ワ シン トン 5月22日後発

本 省 5月23日前着

第一七

往電第一六五号ニ関シ

inal parties タラン事ヲ 慫慂スル趣旨ノ招請ヲ 二十二日付 筈ナル旨ヲ報シ居レリ ヲ以テ発送スル様電訓スル旨二十一日国務省ヨリ発表セラ 使並在英大使ニ 対シ 用意アリト信ストアルニ顧ミ米国政府ハ在加奈陀及愛蘭公 英国回答中ニ自治領及印度ハ不戦条約参加ノ招請ニ応ス ル尚各新聞ノ華府通信ハ日本側ヨリ 自治領及印度諸政府へ本条約ノ orig-モ両三日中ニ回答ア ル ル

英ニ転電シ英ヲシテ仏、 独ニ郵送セ シ メ 又「オ タ ヮ = 郵

送ス

77 和3 年5月 22 日

田在 中外務大臣 宛使

米国政府による英自治領及びインド

宛招請状

につ いて

別 米国国務長官書簡及び招請状

機密公第二七四号

昭和三年五月二十二日

特命全権大使 松平 恒 雄 (印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

知相成度此段申進ス 別紙国務長官書翰並ニ加奈陀政府宛招請状各写ニ依リ 領及印度政府宛ノモノモ同様ナル旨報シ来レリ就テハ委細 同趣旨ノ加奈陀政府宛招請状写ヲ送リ越スト共ニ他ノ自治 シ置キタルカ二十二日付国務長官書翰ヲ以テ右往電所報ト 本件招請状発送ノ次第ハ不取敢往電第一七一号ヲ以テ報告 印度政府宛五月二十六日付招請状ニ関スル 不戦条約問題ニ関スル米国政府ノ英国自治領及 件 御 承

間ニ打合中ノ由ナリ 追テ本件招請状ハ五月二十五日公表ノ コト = 関係政府ト

剜

DEPARTMENT OF STATE

Washington

May 22, 1928

dear Mr. Ambassador:

informed of developments In order that your Government may be currently in the negotiations for the

conclusion of a multilateral treaty for the renunciation of war, it gives me pleasure to transmit herewith the text of a note which is being delivered today by the American Minister at Ottawa inviting His Majesty's Government in Canada to become one of the original parties to the proposed treaty. Similar notes are today being communicated to the other Dominion Governments and to the Government of India.

am, my dear Mr. Matsudaira, Sincerely yours,

(Signed) FRANK B. KELLOGG

Enclosure:

Text of note, as above.

is Excellency
Mr. Tsuneo Matsudaira,
Japanese Ambassador

Text of note delivered May 22, 1928, to His

Majesty's Government in Canada.

146

Government of the United States. conclusion of such a treaty as that proposed by fident, therefore, that His Majesty's on April 13, 1928. Sir Austen added that he felt conall in cordial agreement with the general principle of had been Chamberlain was good enough to inform my Govern-Ambassador at London on May 19, prepared to accept an invitation to the Dominions and the Government of India were which the Government of the United States proposed the multilateral treaty ment of India, and had ascertained that they Governments in the Dominions and with the Government that His Majesty's Government in Great Britain In the note which he addressed to the American Ħ. communication with His Majesty's for the renunciation of war participate in 1928, Sir Austen Governments were the the Ħ.

I have been instructed to state to Your Excellency that my Government has received this informa-

note of May 19, 1928, to the American Ambassador suggestion contained in ernment, for its part, is most happy to accede to the dividually and as original signatories, nunciation of war which my Government proposed on ed States to learn that His Majesty's Governments over, most gratifying to the Government of the Unittions that the Governments of the Dominions and the has hoped from the outset tion with the keenest satisfaction. April 13, 1928, as to wish to participate therein inso favorably inclined towards the treaty for the parties to the suggested anti-war treaty. It is, more-Government of India would feel disposed to become Dominions and the Sir Government of India are of the present negotia-Austen My Government Chamberlain's and my Govre-78

Accordingly I have been instructed to extend to His Majesty's Government in Canada, in the name of the Government of the United States, a cordial

it has been acquainted with the views of all the Govinvitation to become one of the original parties to addressed ernments to which it may make on the subject of the treaty stance is contemplated, any further communications participation in the same manner as to the other Governments whose Government in Canada, at the same time and in the of the United States will address to His Majesty's have the honor to inform under consideration. Pursuant to my instructions I also the treaty for the renunciation of war which is which its note proposed treaty in the first inyou that the Government of April 13, 1928, after now

昭和3年5月3日 田中外務大臣宛(電報)

外相の内話について米国案に対するベルギーの態度に関する同国

本 省 5月24日後着ブラッセル 5月23日後発

第一八号

安達大使ヨリ

儀上右回答ノ趣旨ヲ 要スヘキ旨ヲ右三国政府ニ回答シ英国政府ノ特殊留保ニ関 リ生スル権利義務ハ適当ナル形式ヲ以テ之ヲ確認シ置クヲ 日付ヲ以テ右同意ナル旨並連盟規約及「ロカルノ」条約ヨ 国政府ノ意見ヲ問合セ来レルヲ以テ閣議ヲ経タル後二十二 手シ居リタル 二十三日暇乞旁々白国外相ニ面会シタルニ不戦条約米国案 英国大使ヲ経テ同日通報セル趣内話セリ シテハ何等言及セサリシ次第及米国政府ニ対シテモ国際礼 ハ其ノ当時米大使ヨリ「インフォー カ其ノ後英仏伊三国ヨリ右条約案ニ関スル白 「インフォーメーショ メーション」トシテ入 ン」トシテ当地

在米大使へ転電シ英、 仏 在米国松平、在仏国安達各大使宛田中外務大臣より 伊 、へ暗送 七

IJ

昭和3年5月25

日

五月二十五日付田中外務大臣より在米国松 不戦条約対米回答(英訳文) 在仏国安達各大使宛合第一八六号

不戦条約に関する我が方の対米回答について

付

記

不戦条約対米回答

本 省 5月25日後発

合第一八五号

以下安達大使宛ノ分へ追加 独、伊各大使ニ対シ回答写送付同日夕刻新聞へ公表ノ筈 六日午前十時半在京米国大使ニ手交、同日仏国大使並英、 不戦条約対米回答(英訳文)別電合第一八六号ノ通明二十

英、独、 伊各大使ニ転電シ連盟帝国事務局長ニ転送アリ

別 電

本 省 5月25日後発

合第一八六号(至急)

Department of Foreign Affairs Tokio, May 26th, 1928.

Monsieur l'Ambassadeur,

ernment of the United States, transmitting to me, under instructions from the Your Excellency's have the honour to acknowledge the receipt of Note No. 336 the $^{\mathrm{of}}$ preliminary April 13th last, draft Gov.

of war. a copy modifications in the text would make which you enclosed a draft—and if not, what specific tion to the conclusion of such a treaty as that of ment were in a position to give favourable consideradesired to be informed whether the Japanese Governtimated that the Government of put forward by M. Briand in June, 1927: and you inthe French between the Governments ernments and any other French, British, general way a the United States a proposed with the object of of the At the same time Republic form of treaty which the Government multilateral treaty representing correspondence German, is prepared to commencing Governments similarly Italian and Japanese Govsecuring of the United States and Your Excellency enclosed recently the United the with Ħ. sign with the renunciation acceptable. а exchanged proposal States Ħ. dis-

ernment of Japan sympathize warmly with I beg to inform Your Excellency that the the high Gov-

> bе abolition of the institution of war, and that they will the United States, which they take to imply the entire and beneficent aims of the proposal now towards the attainment of that end. glad to render their most cordial cooperation made

in the discussions with the purpose of securing what they are persuaded is the common cussion between the six Powers referred to, contemplated on a mutually acceptable text for ernment firmly believe Treaties of Locarno. guaranteeing the public peace, such as are embodied is incompatible states the right the Covenant of the League of Nations and the contain nothing that would refuse to independent The proposal of the United States is understood be happy to collaborate with cordial good will is with the obligations of agreements of self-defence, well capable of Accordingly the Imperial Govthat unanimous agreement and realization by such a treaty as is desire nothing of all the and they which dis-

and the definite establishment among the nations peoples of the world-namely, era of permanent and universal the cessation of wars peace. of

7

my highest consideration avail myself of this occasion to renew to Monsieur l'Ambassadeur, the assurance Your

Signed: Minister for Foreign Affairs. Baron Giichi Tanaka

Excellency

Mr. Charles MacVeagh,

Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of the United

States of America

不戦条約対米回答

テ合衆国政府ノ訓令ニ基キ合衆国政府カ戦争ノ廃止ヲ実現 以書翰啓上致候陳者本年四月十三日付第三三六号貴翰ヲ以 ル目的ヲ以テ仏蘭西国、 英国、 独逸国、 伊太利国及日本

> 何ナル修正ヲ加フレハ受諾シ得ヘキヤ 慮ヲ加フルヲ得ヘキヤ若シ然ラスト 閣下ノ伝達セラレタル草案ノ如キ条約ノ締結ニ付好意的 交換往復文書ノ写ヲ封入セラレ且合衆国政府 提案ヲ以テ始マル合衆国政府及仏蘭西共和国政府間 相成敬承致候之ト同時ニ閣下ハ客年六月 国政府並ニ賛意ヲ有 トヲ希望セラル ル条約ノ形式ヲ大体表示セル多数国間条約草案ヲ御伝達 ル旨開示セラレ候 スル他ノ諸国政府ト共ニ署名ス セハ右条約文ニ特ニ如 ニ付通知ニ接セ 「ブリアン」氏 ハ帝国政府カ ノ最近 ル シ 用意 コ 考 i

実ナル協力ヲ致スヲ欣快トスル旨閣下ニ通報致候 仁慈ナル 帝国政府ハ戦争ノ全廃ヲ企図スル合衆国今次ノ提案ノ崇高 目的ニ衷心同感ノ意ヲ表シ右目的達成ノ為最 E 誠

ト 丰 ニ付各国相互ニ受諾シ得ヘキ条文ノ一致協定ヲ実現シ得ヘ 了解致候仍テ帝国政府ハ前記六国間 般平和ヲ保障スル約定ノ義務ト何等抵触スルモノニ非スト 連盟規約及「ロカル 合衆国提案ハ独立国家ニ対シ自衛ノ権利ヲ拒否セス且 信ス コトヲ確信シ且帝国政府ハ世界全国民ノ共通ノ願望ナリ ル戦争ノ 廃止及各国民間ニ恒久普遍ナル ノ」諸条約中ニ包含セラルルカ如 ノ討議ニ依リ本件条約 平和時代 丰 国

樹立ヲ確保スル 幸トスルモノニ有之候 目的ヲ以テ右討議ニ於テ誠意協戮ス ル ヲ 欣

右回答旁本大臣 和三年五月二十六日 ハ茲ニ重テ閣下 ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

外務大臣男爵 \mathbb{H} 中 義

在本邦米国大使

t ル ス・ 7 ク ヴ ェ 1 閣下

昭 和3 年5月 (26) 田在 英国 .務大臣宛(電報) .佐分利臨時代理大使より

日

80

米国の対英自治領参加招請に対する英国各紙

論調に う Ñ て

ンド 省 5 月 26 日 発

本口

第一〇四号

セ 関スル仏国側 於テ人気アル 二十五日「テ 米国ノ英国自治領ニ対スル不戦条約参加招請ニ ハ自治領及印度政府カ此ノ重要ナル問題ニ付本国政府 ニ至レルノミナラス調印国ノ寡少ナル事等 、レグラフ」社説ハ之ニ依リ米案ハ欧 ノ反対意見モ緩和セラレタリ英国ノ立場ヨリ 関 州以外 = =

> 商議 州、新西蘭及印度ハ均シク埃及及蘇士運河ニ対ス 於ケル特殊且緊密ナル利害」ノ意味ヲ明確ニ了解シ居リ濠 ル干渉ニモ反対スルモノナリト論シ スル コト ハ特ニ望マシキ事ニシテ彼等 ハ 「特定区域 ル 如 何 = ナ

意見ヲ 当ス ナリ ヲモ包含セシメ居 スル地域中ニ埃及ノミナラス「アフガニスタン」ノ如キ国 トシテノ戦争ヲ厳密 ナリ「ケロッグ カ外交上ノ重大問題トナリタ スヘキヤ又従来米国自身ノ 「マンチェス 」主義ナル一寄書ヲ引用シ外相ハ セサリシナリ提案セ ト論セ 」主義ヲ正式ニ承認セムトス ルモノヲ提言ス キ留保ヲ付 (脱) シメム ター ス 」ハ自衛権ヲ承認シタルモ争議解決 ル • ルラシク英国ニ付 ルモノ ガーディアン」社説 トシタル コ ニ否認スルノ効果ヲ害セムコト ラレタ ŀ ハ 其 政策ニ基クニ過キサリシ ト解セラル 外相ノ 1 ル条約ニ対シ外相 ルカ「ケロッグ」ノ漠然タル 道徳的価値ヲ減殺ス ルモノナリヤ此 特殊緊密ナル 努力ノ 「モンロー ル所英国カ之ヲ承認 ハ 英国 不幸ナル ノ提議 」主義ニ相 ノ 利害ヲ有 ノ種問題 ーモ ハ之ヲ ジノ方法 「モン ル 結果 ン

昭 和3年5 月 26 日 在 仏国外 [安達、在米国松平各大使宛/務大臣より

81

駐日 米・仏国各大使に我が方回答手交につい て

記 在本邦米国大使宛回答文写送付について 国大使宛欧二普通第四〇号 五月二十六日付田中外務大臣より駐日仏

五月二十八日付田中大臣の米国大使との

省 5月26日後発

合第一八九号

往電合第一八五号二関

申送レ 以テ之カ写ヲ送付シ在仏大使宛往電第四五号公文ヲ了承シ 米国 本件ニ関スル帝国政府ノ意向ハ右写ニテ了知アリ度キ旨ヲ 大使ニ回答ヲ手交スル ト同時ニ仏国大使ニ対シ公文ヲ

シ置ケリ 大使館 \sim ハ 出淵次官ヨ ŋ ノ私信ヲ以テ写ヲ送付

以下安達大使宛 グ分 \sim

伊各大使へ転電シ連盟帝国事務局長ニ転送アリ

付 記

欧二普通第四 **一号**

報

試案トシテ御伝達相成敬承致候 スル目的ヲ以テ貴国政府ニ於テ起草セラレタ ヲ目的トスル四月十三日付米国提案ニ対シ国際連盟規約 以書翰啓上致候陳者四月二十一日付貴翰ヲ 「ロカルノ」条約ノ如キ国際約定締約国ノ 以テ戦争 , 立場ヲ明 ル 条約草 Ż 案ヲ 廃止 確 又 =

本件戦争廃止問題ニ関シテハ帝国政府ニ於テ慎重審議

Ĩ

添付ノコト) (名略) (別紙五月二十六日付在本邦米国大使宛書翰及同訳文写取 此段申進旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具 送致候帝国政府ノ意郷ハ右ニテ御了 果本日付ヲ以テ在本邦米国大使宛別紙写ノ通回答公文ヲ発 知相成度候

付 記二

大臣会見録 六十

ラ 五月二十六日午前十時半田中大臣 ハ 米国大使ノ 来省ヲ

先般貴大使ヨリ手交アリ タ ル 米国政府ノ不戦条約提案ニ 対

シテ 斯ク了解スル the proposal·····is 必ズ米国政府ノ満足スル所ナリト思考スト述へ 米国大使ハ一読ノ後本回答ハ文句誠ニ結構 シトテ右我方回答並其英訳文ヲ手交セラレタ ヲ 以テ回答スルコトトシタ ハ其然ル旨ヲ答 ハ大体ニ於テ賛成ナル旨御話致シ置キタルカ今日 ノ意ナリ ヘラルルト共ニ自衛権 ŕ ŀ 問 Ł ルニ付詳細ハ之ヲ御一読アリ シテ内乱闘争ノ絶エ understood (7 ニシテ内容モ ·問題 第三項 ル 日 本政 = *>*> + ___ 般問 ル支 Ź 府 ハ 書 亦 カ

面

ニアラサ 大臣 題トシテハ勿論手近カノ問題ト ニ予見シ置カサル ν 如 度シト付言セラレ キ隣国ヲ持ツ日本トシテハ ルモ自衛ノ必要上適当ノ手段ヲ取ルヘキコ ヘカラサル 所 ナル 固ヨリ戦争 ニ付此 点良ク了 ・ハ其欲 ۲ ス ル所 ハ常 置

米国 大使 良ク之ヲ了解セ ル旨答 ロヘタ 1)

ニ於テ テ = コ 1務卿 大臣 ノ報告ニ カ ノ所言ヲ誤報シ来ルモノモアリタ ヨリ支那問題ニ関シ日本ノ新聞通信員等ニ ŀ 良ク日本政府ノ立場ト態度ヲ了解シク ナ 3 1) ν 自分ニ於テモ欣 ハ右ハ全ク通信員等ノ誤解ニ ٤ 居 ル次第ナ ルカ其後松平 1) , レ居ラル シ 抑 テ シ 々 テ 先 玉 米 日 務 大

ン

為メ今

回

中入ヲナ

シタ

ル

モ 1 ニシ

テ之ヲ切掛

ケ

Ξ

満

於テ新タ 沢ン

特権利権ヲ獲得セントスル

日本ト 之等見地ヨリ我方態度ヲ 全ニ行ハルル地域タラシメ以テ其経済的発展ヲ完カラシメ 支、外人ノ為メ安住ノ地タラシメ又機会均等主義ノ最 へハ右ノ如クシテ秩序ヲ維持セラル 日本政府ノ到底認容シ得サル所ナリ之ヲ積極的見地ヨ 直ニ我朝鮮統治ノ上ニ重大ナル影響ヲ及ホスコト等ニ 業ノ被ル経済上ノ損害多大ナルヘキコト及ヒ其秩序紊乱 我政府カ支那南北交戦当事者ニ対シテ覚書ヲ送リ ニーノ安全地帯タラシメ置ク必要アル シテハ満州ノ秩序ヲ常ニ全カラシメ以テ之ヲ露 ハサル所ニシテ同地方ノ治安乱ル ント欲シ居レリ尚特ニ貴大使ノミニ御話申上クル 間ニ紛争ヲ誘起スルニ至ルヘク此見地ヨ ル 今迄モ屢々貴大使ニ話シタル通リナ ルコト シテハ満州ヲ隔テテ露西亜アルコト ハ我在留民ノ多数ナルコト 支那南北ニー層明瞭ナラ ルトキ ル満州 ナ 及ヒ満鉄其他我方企 ルカ満州ノ治安ノ乱 六必 ij リ言 ハ常ニ忘ル ハ以テ之ヲ日、 スヤ露 西 フモ日本 が所ナルカ シ 亜 タ ル真意 茜亜 メ ト り言 ル能 でモ完 鑑ミ 置 1 州 1 ハ カ

意図全然

ナ

シ

ヤ

·満州 ナル 1

Ξ

我カ保護領ヲ設定セ

ン

ŀ

- 云フカ カ如キ

如

牛

=

伊

・二郵送セ

IJ

力ノ程切望ニ堪エス テ 、タヤ 共ニ此上トモ本国ニ対シテ之ヲ徹底セシメラル 依テ貴大使ニ於テハ右我方真意ヲ十分了解 ト述ヘラレタル = 七 ル様御尽 ラ ル ル

土曜日ニモ團氏及山本満鉄総裁ト自分ト三人丈ケニテ二時 米国大使ハ国務卿ノ所言ノ誤伝セラレ 間半ニ亘リ談話シ益々良ク日満ノ関係ヲ理解シ居レ ヒニ堪エス満州ノ問題ニ付テハ今日マテノ閣下ノ御話ニヨ ニ於テ其ノ誤リナリシコトヲ了解セラレ 機 É サ ルヘシト答へ続イテ 会アル毎ニ日本ノ真意ヲ他ニ説明スル 本政府ノ憂慮シ居ラル ル所ハ好ク了解シ居タ タ ・シヲ聞 ル コト コ ŀ キ自 ニ付 = ハ ル 労ヲ リ従ツ カ先週 分モ キ閣 欣 下

○一今朝外国通信員ヨ タ ト信スルモ如何 ル密約ナルモノヲ示サ リ紐育電報ト V タ ル シ カ テ芳澤張作霖間 右 ハ 素 = IJ 無根 = 成 ラ コ 立

(二) 在留外 還シ以テ北支ノ政権平穏裡ニ南方ニ帰ス タ撤退ノ兆ナキヤ 1本今回 入 ノ為ニハ最モ望マ ノ申入ニ因 ij 張作霖若シ大人シ シ 丰 コ ŀ ト存 ル ŋ ス ル コ シ テ満州 ŀ カ張作霖未 ト ナラ = ハ帰

> 大臣 3 IJ

→ニ付テハ全然無根ノ説 チ ル コ ኑ

コト ヲカケシメ居ルモ今日マテニテ 様子見エサル旨ヲ答ヘラレタ ハ諸般ノ関係上望マシキコト IJ ハ 未タ北京 ト認メ張ニ 及ンテ関外ニ去ル Ξ IJ 対シ色々謎 腰ヲ上ク

(昭和三年五月二十八 一八日澤 田電信課長口 述

和3 年5月 29 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使

82

我が方対 米回答に関する仏国各紙論評に

第一三三号

本パ

省リ

月30日前着 30日前着

5

5 月

不戦条約ニ タルモノ極メテ少数ナル 関スル我対米回答ニ 処 関 シ当地新聞 紙中論評 ヲ 加

二十八日「タン」 防衛及現存条約上ノ義務ニ関スル仏国ノ留保ヲ認メタ ニシテ今ヤ日、 ハ日本ノ 独 回答 伊 四国何レ ハ事実上英、 モ米、 仏両国 独 ト 同 様正 主張 ル Ŧ 当

望 重 ヲモ考慮ノ上各国政府ノ受諾シ得ヘキ形式ヲ案出 タル ムト論シタ |クコト必要ニシテ米国政府ニ於テ前記関係国政府ノ意見 大問題ニ付テハ今後一切ノ誤解ヲ避クル 実際上矛盾スル処無ク仏国側ノ留保ハ元来当然 モノナリト思考セルモノノ如シトテ不戦条約 ル カ 為明確ナラ ジョ セ ジー如 A す云 シ X + Ť

如何 回答 同日ノ = ナ ルヲ承知シ居ル為何等明示スル処無キモ日本ト 関シ今後討議ヲ行フヘキ旨ノ希望ヲ付シタル主義上ノ ナリ而シテ右討議ノ方法ニ付テハ米国 ハ無条件受諾ニ非サ 「デバ」亦大体右ト同様ノ趣旨ヲ述ヘタリ但日 方法ニテモ差支無キ意向 ルト同時ニ条件付受諾ニモ非ス本 ナ ル ^ シ ኑ カ会議開催 評 セ 1) シ 本 テ 三反 *>*\ ١

83 昭 和3 年5月 (30)日 田中外務大臣宛(電報)在英国佐分利臨時代理大使より

我が 方対 米回答に関する英国各紙論調に 6

τ

本 p ンド 省 5月30日前着 発

一〇五号

掲ク 及セルハ注意スヘシト付言セリ ト述へ二十八日「テレグラフ」ハ同様ノ趣旨ノ外 キヤ否ヤハ問題トセラレ居タル ナリ日本カ其ノ回答文中ニ於テ満州 ァ 米回答ノ全文又ハ抜萃ヲ掲ケタルカ二十七日「オブザー 二十六日及二十七日ノ主要新聞ハ不戦条約ニ ー」外交記事ハ日本ノ回答ハ米案ノ無条件且友好的受諾 ルト共ニ署名国ニ非サル日 伊 連盟ニ郵送 セ 本 モ遂ニ右ニ言及ス 1) カ -ノ特殊利益ニ言及スへ p. カ ル 関スル 条約ニ言 ル 交記事ヲ 処無シ 我方対 ヴ

84 昭和3 我が 年5 月 (30)日 田在 田中外務大臣宛任米国松平大使为 により

方対米回答に関する米国各紙論調に

て

ワ

本 省 5 月 30 日 前

二九三号

全文掲載セラレ 不戦条約問題ニ関スル我方対米回答ハ二十七日ノ各新聞 大体好感ヲ以テ迎ヘラレ 居 ル モ 1 ノ如キ

レル ヤラー 答ハ之ヲ要求シ居ラスト為シ又紐育 答ノ 条約 費府 ハ日 進行シッ 極ヲ要ス 保ニ顧ミ ナ ij バ ン」ハ日本回答 通信員ハ日本回答ハ独逸ノ夫レニ比シテ其ノ調子冷淡 カ右 トシ ル 本回答中公安ヲ保障スル 如ク仏国案第四 文中ニ含マシム ル П イ 山 チ _ カ ス満州 又 ツアル モア・ シト ト述へ其ノ他費府 米国案ヲ修正スル ハ是ニテ各国回答出揃ヒ本件交渉カ予想外 ル ン ククワ) 「クリスチャン -信セラ ヲ喜フ旨ヲ述へ尚在華府 サン」亦同趣旨ヲ記シタ 1 租 ハ独逸ノ夫レニ最モ近シト ルト述 借地等ニ 条ヲ挿入スル ル ラ 7 関スル カ又ハ アレッヂ ハ • 望 関ス サイ 日 取極云々トア 件ハ米国側 タ マ 一本回 シキヤモ知 1) -エンスモ 其ノ意味ヲ明瞭ニ ル ハ広キニ失スル Ŧ 日 ・「ヘラ 答中自衛権連盟規 支条約 1 亡 及 ル 「バルチモ モ 異存無シ ル = ル レサ 上是等 ۴ ハ注目ヲ タ シ尚 ヺ 7 意 ĺ ル - 」通信員 各国 処日本 モ英国 ン ŀ ク ス ア ス ij 事 き急 ኑ 約並 惹 • ワ 項 ル ル 1 ピ 述 Ź 留 サ 取 그 🗇 Ŧ カ = 回 \sim \sim

ル

和 3 年5月 31 日 田在 中米国 務松 大臣宛使 電り 報

伊

~

郵

送

セ

IJ

A

使ニ面 支無 テ仏国 於テ テモ セル ヺ Ŧ 可 ヘヘタ 自己ノ利益ヲ保護スル為必要ノ措置ヲ採 ハ之ニ賛成スル キ次第ナル ナリ 処ナ [会ノ際本件ニ言及シタル処同大使ハ楽観 ノ主張ス ル = ١ ル 至 -思考ス ニ依リ ル ヲ以 ル ^ 実質 シト 事ト テ日本ハ他国ニシテ米案ニ ル 個 人人 · 信 = 上ノ問題ハ米ニ於テモ主義 -信ス 依 スト云ヒ尚日本カ何 ij シ テハ必 本 ル旨ヲ述ヘタ 件 :ハ結局纒 スシモ 条約ニ挿 リ尚同日仏国 マ ル ル ν 一同意ス 事 事 1 上之 態度ヲ 場所 ナ ハ 何等 :入セ ル ^ Ξ = ス同 以天 シ = 差

= 電 シ 英、 伊 = 転 電 セ シ A

和 3 年 6 月 (1)日 田在 中英外国 務大臣和 [宛(電報) |臨時代理大使より

不戦条約に関する する英国各紙の ク ij 'n ジ大統領の演説

論調について

ンド

省 6 月 1 日 前 着 発

分 ク ニ付三十 1 リッジ」<Gettysburg 日日 「タ 1 A ス 演説中ノ不戦条約ニ /\ 『ケケ 口 ッ グ 3 IJ 関スル部 他各 関

き米国国務長官との会談につい 不戦条約に関する我が方及び各国の Ť 回 答に っ

ワシント 省 ン 6月1日後着 5月3日後発

九 九号

電第一九三号ニ 関

於ケル 他調印 ス事不可能ナルヘキモ之ニ依リ少クトモ戦争ヲ困難ナラシ テ之ヲ規定スル必要ナシ由来本条約 望アリ仏国提議ノ如キ自衛ノ場合及一国カ条約ニ反セ 請ヲ受諾 本ノ回答ニ付感謝ノ意ヲ表シタル後愛蘭及新西蘭 三十一日国務長官ニ会見 スヘキ模様ナリト述へ尚英国ハ結局米国ノ主張 薄弱 ル精神的効果アリト信スル処諸種 ヘ ク アナラシ 演説中述ヘタル通 国カ義務ヲ免除セラル 一方波蘭及 「チェッコ セル旨回答アリ ナリ ム ロル虞ア 仏国ニ対 ル シ 二付 加奈陀 ラ (往電第一二五号) テ 際同長官 スロバ ハ英国政府 米国案ノ儘ニ ル事ハ自分過般国際法学会ニ ョリ = 八不 ノ留保ヲ モ明一日同様 キア」、 依り絶対ノ平和ヲ齎 ·戦条約 3 IJ テ各国 為ス 当然 白耳義 勧説 = = ぶノ事 ラ ハ 同 対 シ \tilde{j} ハ 承 右 既 意 モ参 回 ス 一効果 諾 = ル ス 答 = ル シ ヲ 時 ル ァ H

認 意見ノ ヲ 府通信ヲ掲ケ 提案ノ内容ハ恐ラク此ノ点ニ ハ = ヲ 「ハ 此 ス ナラス却テ不戦 知 説 前文ヲ適当ニ有力ナ 以テ条約 ニテ 本文ニ関 案中修正 国 ル 明 ノ各国 = 公開 ノ ጉ ジ居 1 対シ新条約ヲ包含スル ハ足ラスト ナリ モ夫ハ戦争否認問題ノ解決 チ」「ニカ フ ル ノ意見ヲ採リ入ル 7 ニ当リ自衛権及既存義務ノ尊重 セ 連盟 <u>ن</u> ۱ 夕 サ モ右軍隊派遣 効力ヲ弱ムル 程度及様式 ルカ ルコト殆ト 条約問 ^ ノ意見他国側ニ存スル ノ趣旨ヲ 郵送 ラグ 「テレグラフ」論説 ルモノトス 題 ハ不明ナ ア」支那ニ軍隊ヲ派遣シ置 カ甚 コト 述 カ要請及公然 明ナルカ如シ今日迄行 関ス 再次 ルコト望マシ此 \sim 居 一タ複雑 ナクシテ ル V ル ル 1 いヲ 容易 モノナ モ変更 ノ必要ア 同文通牒発セ セ 出 コト明ト ル ノ同意ニ依 ハ パナラシ ル ラ点 (ハ前文 **『**ク 来得ル丈ヶ充分 モ ヘシ』ト ij 1 自的 米国 ナ ハ黙視ノ承 A ナリ 六 Ξ ラ ル IJ ν コ ル ル ク 1 1 ッ コト ・ノ華 次ノ 為二 ジ条 ト 資 タ タ ヲ ル ル

87 昭 不戦条約加入招請に対するカナダの対米回答 和3年6 月 3 日 田在 日ナタ ・ 務大臣宛 解決ス

ル

ノ権利ヲ均霑セムトスルヲ妨ケム

トスル英国ノ

右ノ態度

ハ不可解テアル如此

事情ノ為メニ埃及

>>

っ ア ビ

二十世紀ノ今日埃及カ特典タル

一切ノ紛争ヲ調定ニ依テ

那等ノ

連盟加

入国或

ハ英国殖民地ニスラ及

ハナ

イ劣等ノ

シニヤ

□ 「ペルー

「キーバ」「エクアド

ル」波斯、

支

地位ニ置カレテイ

・ル而シ

テ「ヘヂャ

ス

及

「アラビヤ」

半島ノ諸邦モ今ヤ同様ノ権利ヲ得ントシテイ

ハ英埃関係カ未決

1

ナッ

ŕ

居

ル

以

上又英国軍

ル

処埃及ノ

につい Ť

本省 6 月 5 6 月 3 Ē 日

第四 三号

シタ シ五月三十日当地米国公使ニ 点奈陀政府 ル カ其ノ ハ不戦条約加入ニ 要旨左ノ通 回答ヲ 関ス ル 交付シ右六月二日 米国政府ノ招請状ニ対 発表

ナル 検討 不戦条約締結こ ニ勧奨ス 前掲連盟規定ト何等矛盾無カ 加奈陀政府 制 IJ 印国ニ何等義務ヲ課 不戦条約 裁ニ セリ 事ヲ主張シ来リ右ハ第四回連盟総会ニ於テモ認メ 関シテハ各国憲法上ノ機関ノ決定ニ委ス 加奈陀ハ戦争ヲ挑ミタル連盟所属国 八連盟規約及不戦条約 ハ不調印国又ハ 協力スルト同時ニ いセサル 調印国ノ条約違反行為 ルヘシ之ヲ以テ加奈陀政府 様認メラルル 本条約承認方加奈陀議 カ相抵触ス ヲ以テ右条約 = ル 対 事無キ ヘキ シ 三関 加 ラ Ŧ フ t シ V 1 ハ ハ \sim ヲ

仏 伊、 独 = 郵送ス

6 ij ァ 横山 (正幸) 総領

和3 年 月 12 日 田中外務大臣宛在アレキサンド

ジプト紙の社説につい エジプトの地位につき英国の保留に関するエ て

公第一五五号

昭和三年六月十二日

在アレキ + ンド IJ t

帝国総領事 Щ

正

幸

外務大臣男爵 田中 義 2一殿

ニ於テ本件ニ関シテ左ノ通リ述ヘタ 「カイロ」発行埃及語新聞 埃及ト不戦条約案ニ対スル 「シャツサ」 英国 ノ留 紙 保 ハ = 関ス 今般其ノ社 ル

説 在

英国ハ米国ノ不戦条約提案ニ大体賛成シ 細目協議ニ入ルニ先チ次ノ二事項ノ保留 ンコトヲ求 メタ ヲ タ 列 カ (国カ承 条 介約締 認 結

テアル 対シテ 即チ第一ハ該条約 コトヲ要望スル 本条約ニ拘束サレ モ 1 案カ英国 ・テア リ第二ハ英国 ス任意ノ行動ヲ採 ノ各殖民地政府 ~ 或 ル = 一定地域 Ŧ ル 提示 トノ趣旨 セ = ン

定ノ地域カ何処ヲ指スモ 右ノ内第二ノ 留保ニ 所謂英国カ ノテア ル 自由行動ヲ カ 明言 ハシ 取り得 テ イナ ^ 1 牛 カ

ヲ 意味シテイ 「英帝国交通線 ハ英国ノ 極リ文句テ ルコト 上」ニ存在スル埃及及近東ノ カ容易ニ観取サレ Ź ル 「印度ニ到 ル途上」換言 或 ル 諸 ス 国 ν

認セシ 問題 円満 右希望モ水泡ニ帰シタ斯ル英国ノ態度ハ英埃関 国カ埃及ニ於テ自由行動ヲ取ラン 応シテ同会議ニ於テ決定サレタ諸原則ニ準拠シテ英国 先頃埃及 如 ク 2トスルヲ好マス或ハ之ヲ永久不問ニ付スル ナ協定ニ到達セムコトヲ希望シテイタノテア ム ナ ルカノ二途ノ何レカヲ目的トスルモノテア ルカ又ハ埃及ニ対シ自国ノ見解ヲ ハ「ロカルノ」会議後ノ世界ノ平和的 ト欲シタノテ埃及側 強要シ之ヲ 8係ヲ国際 **|**大勢 \exists ኑ ル 今回 カ英 ル Ξ 容 9 順 1

右何等御参考迄ニ報告ス

際シ得ル処アルヨ

ウニ

一努力シ

ナ

ケ

V

ハ

ナ

ラヌ、

云

々

注意シ此

ノ際最善ノ方策ヲ考究シ以テ国際政策ノ変動

立タネハナラナイカラ埃及国民

(ハ英国ノ

不可解ナ態度 モ劣等ノ地位

ヺ =

張カ通レ

ハ埃及

ハ英国ノ委任統治領ヨリ

享有スル

コト

カ出来ナイ加之埃及ニ関ス

ル英国今回ノ主 ノ人道的権利

ヲ

脅威ニ依テ其ノ見解ニ同意セナイ以上コ

89 昭和 3年6月 14 日 田在 田中外務大臣宛はアレキサンド IJ to 横山総領事より

ョナリスト 不戦条約案に対する英国の留保に関するナシ 機関紙の論調につい

昭和三年六月十 应 公第一五七号

月 14日接受)

H

在アレキサンドリヤ 帝国総領事 横 Щ ΙE 幸 印

務大臣男爵 田中 義 一殿

テ報告 本件ニ関スル 1 埃及ト不戦条約案ニ対スル英国 通り **「**シャ ナ ル 処 「ナ ッサ」紙ノ論調 シ 3 ナ ij スト ハ拙信公第 ') 留保 機関紙 = 関 一五五号ニ 「バラグ」 ス ル 意向

ナ

1)

述

タ

諸国ノ 米国ノ不戦条約案ノ審議ニ関連シテ埃及問題 ル 帝国交通路ノ安全保障ヲ目的トスル政策ニ対シ他 論評ヲ掲ケタト報シテ来タ即チ「ル 種ノ地位ニ基ク特権ヲ有スト 権利ヲ留保スルト同様ニ英国ノ占領地域ニ於テ英国ハ特 タン」紙カ米大陸ニ於テ米国カ 吾人ノ論議未タ渇カサル 列強ノ参与ヲ求メ之ヲ国際問題化スルノ利害如何 モノテアル ノ干渉ヲ排除シ得ルコト 干渉ヲ非友誼的行動ト ニ当リ外国電報 ハ恰モ米国カ米大陸ニ 看做シ得 ノ主張ヲ是認スル 、「モンロ ・タン」紙 ル ト同様タト 1 八仏国 」主義ニ基ク ラ ノ趣旨 Ţ, 解 ハ英国カ 対ス ジ諸 コル = 決 関 論 ニ諸 ス ル 外 1 シ

鑑ミ 同シ利益ノ交換ヲ計 ル 伊太利ノ輿論モ亦仏国大新聞ノ右ノ意見ト ヘキコト 亜細亜及阿弗利加ニ於ケル伊国ノ領土拡張ノ運動 ル モ当然テアラウ伊太利ハ欧州植民国間 ハ過去数次ノ ルヘキ地位 伊国新聞論調ニ 徴スルモ こ在ル 大同 ノ陰謀ニ賛 小異 又欧 ハテア =

ナラヌ何ント ノ次第テ埃及問題ヲ国際化スルコト ナ v ハ諸外国 ハ埃及人カ自国領土内ヲ支 ハ最早無益ト見 ネ

> テア 対ス 帝国主義的植民政策ヲ実行ス ヲ以テ英埃問題ヲ国際問題化スルコ 与シ英国ノ政策ニ対スル自国民保護ヲ要求ス 配シ得ヘシ ナラハ彼等ハ何時ニテモ在埃公使ニ命シテ国内問題ニ干 シ諸外国ニシテ従来埃及問題ニ容喙ス ル然ニ今日迄一回モ斯 ル埃及ノ屈服ヲ是認スヘキ立場ニ在ル ŀ スル自然的権利ヲ無視シ英国 ル ル コ ト 1 利益ヲ ナキ ŀ ハ各国ハ共謀シテ ルヲ得策ト ハ容易テアッ 認 一ノ帝国 > カラテア タ ル 如 カ ラ 十手段 認メタ 主義 テ タ ル 筈 若

云々 ラ彼等ノ 埃及 欧米各国 ル コ ኑ *>*\ 今 力確認サ 植民政策ノ努力ヲ出来得ル限リ 1 ヤ欧州諸 輿論 ル ニ対シ ヘキ 植民国間 充分ナ 危険ノ秋ニ際会シ居 ノ利益分配ニ ル 宣伝ヲ為 関 減殺スルヤ ス ^ ル ス キテア 1 ル テア 犠牲テ ゥ ル ル カ 7

右報告ス

本信写送付先 在英大使

90 和3年6月 16 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使 (電り

不戦条約に対する仏国留保の諸点に関 しべ

との会談につい て

本パ 并 17 月16日後発 日前着

一六〇号

十五日 ラ シアリテ其ノ精神迄モ撤回ス 仏国政府ハ正当防衛ニ関スル国務長官ノ解釈ニ満足シ居ル 自分モ承知シ居リ敢テ之ヲ規定シ置カムトノ心算 長官ノ演説ト仏国政府案トノ間 正当防衛ノ解釈 回セラレムトス 言及シ新聞報ニ依 上仏国側 ル セ ハ ノニアラス仏国政府 シ 議 ル 」ハ素ヨリ正当防衛ノ定義ヲ定ムルコト A 処貴見如何トテ 「べ 定書中ニ記入シ ル ニ於テハ其 為本文中ニ ١ こ付テモ米国国際法協会ニ於ケ ルヤニ伝ヘラル 口 レハ ノ留保 仏国政 パノ解釈 必要ノ 之ト条約本文ト 「テキスト 会見ノ際本使ヨ ノ諸点ヲ維持シ其ノ精 府 字句ヲ挿 ル次第ニ ハ既ニ過般ノ仏国案中ニ ハ其 ニハ相当差異アル様見 ル処右ハ事実ナリヤ例 | ヲ示シタ (ノ留保 · ノ 間 ハアラスト答 入 IJ ス ジノ或 不戦条約 ル ニ法律的連鎖ヲ シルニ「ベ コ ノ 困難ナ ŀ ル ル ル米国国務 が部分ヲ ハナ 神ヲ ト 問題 シ ^ 明記 キモ 受ケ 前 ル ル 度 ^ 撤 ハ 文 ル ハ 卜

> 次テ 入スル 必要ニ応シ右英国側ノ意向ヲ支持スル考ナリト述ヘタ ナリシモ米国側反対ノ次第モアリ現在ニ於テハ前文中ニ 言及シ英国側ニ於テハ当初之ヲ条約本文中ニ掲ケ度キ希望 名 ルニ顧ミタ ・「ベルト 米国ニ於テ条約ノ コトトシ度キ意向ナリト承知スル 1 ル趣ナリ) 」ハ英国政府ノ特殊地域ニ 効力ハ本文ノミ 処仏国側 = 限 関 ル ス ŀ ጉ ル ノ 留保 説有 シ テ IJ 揷 力 ハ

等ニ付テモ何等聞 国其ノ他関係国政府ニ提出セラルル 報道アル処右ハ事実ニアラス新草案ハ近ク米国政府 約ニ関シ 尚右会談ニ際シ「ベ ハ手続ノ 問題ハ米国側 米、仏両国政府共同ノ新草案提出セラル 知スル処ナシ ルトロ ニー任シ ー」ハ最近新聞紙上本件不戦条 アリ条約 ŀ 語 筈ニシテ仏国側 ν IJ 調 印 時期及場所 ヘキ旨ノ ヨリ ŀ シテ 仏

白 伊 ^ 転電 セ

田在 外国 務大臣宛置澤田(節 (電報) 臨時代理大使

91

和3

年

6

月

23

日

会談に 米側新提案提出に関する米国国務長官等と つい

ワ

シント

ン

6月23日後発

今般大要左ノ通リ論

セ

本 省 6月24日前着

二十三日国 西欧部長臨席ノ上今般関係諸政府ニ対シ不戦条約ニ関スル 官ニ手交シタリ テハ在本邦米国大使館ヨリ今朝之ヲ交付シタル筈ニシテ右 同文ノ「ノー 十三日国務長官ノポニ依り往訪シタル処同長官ハ 明後二十五日発表ノ積リナリトテ其ノ写ヲ参考トシテ本 」並付属条約案ヲ送レルカ日本政府ニ対シ 次官及

思考スト述へ尚本官ノ質問ニ対シ自衛権ノ件ハ自明ノ理 リ又連盟規約ノ件ハ本条約案ト矛盾スル ヘタ 7, ネタル 処長官ハ (イ)「ロカルノ」 条約調印国タル ニシテ之ニ関スル条項除外方ハ仏国側ニモ異存ナキ筈ナ キカ原案ニ比シ新提案ノ異ナル主要点何レニアリ 依テ本官ハ其ノ好意ヲ謝シタル上右ハ帰庁後熟読 レリト答へタルヲ以テ 、ルコト殊ニ印条約違反ノ件ヲ前文ニ挿入シ置キタル ナルカ前者ニ付テハ日本ニ於テモ御異存ナキコト 波蘭及白耳義ヲ本条約ノ Original Signatory ニ加 コト ・ナシ 「チェ ት ヤト尋 認 ス メ ŀ \sim

二、右新提案ニ付テハ英、 仏ト 削二 ハ全然話合著キタ N

> テ纒マルナラムト希望シ居レリト述へ サル様ノ口吻ヲ洩ラシタルカ米国側トシテハ結局該案ニ 上提議セラレタル次第ナリヤト尋ネタル処必スシモ然ラ

三、 何等決定シ居ラス タル次第ナルカ何レニスルモ右期日及場所ニ付テハ未タ ノ地ニ在ル 調印ノ件ニ付テハ今朝仏国大使ト面会ノ際日本 ニ付其ノ点ハ考慮ニ容ルルコト ヲ要スト話 ハ 遠隔 シ

fice ノ字句ヲ使用スル事ヲ避ケタリ唯 in the names of 側ニ意見アルヤモ知レサル処右申出ノ節ハ米国側ニ於テ 法上ノ困難ニ付懇談シタルモ長官ハ前説ヲ繰返シ居タル リ他ノ関係国孰レモ異存無キ次第ニ付右ハ原案ノ儘ト為 respective peoples ノ字句ニ関シテハ日本ノ天皇モ人民 次官ヨリ聴取シタルカ考慮ノ結果御希望ニ従ヒ high of-シ置キタリト述ヘタルニ付本官ハ右字句ニ関スル日本憲 シト考へラルル上同字句ハ客年七月ノ「ブリアン」当初 ニ依リ本官ハ右字句ノミナラス其ノ他ノ点ニ付テモ日本 ノ提案中ニ使用シアリ且過日次官ヨリ説明セル事情モア ノ為ニ条約ヲ締結シ給フ訳ナルニ付右字句存置シ差支ナ 将又条約字句修正方ニ関シ長官ハ日本ノ申出ニ付テハ

英ニ転電シ英ヨリ仏、 日本側ニテ意見アレハ承ハルヘシト述へ居リタリ 分トシテハ米国案通リニテ妥結ヲ希望シ居ル次第ナ シムル懸念モアリ旁余リ之ヲ喜ハサル如キ気色ヲ示シ自 モ素ヨリ考慮ヲ加ヘラルル事ト思考スト述ヘタルニ長官 ハ比ノ上各国ヨリ種々意見ノ申出アル時ハ事態ヲ紛糾セ 良 伊、 波蘭、 「チェ ッ コ ルモ ス

p バ キア」ニ転電セシ L

92

和3年6月25

日

田中外務大臣宛在米国澤田臨時代理大使より

米国新提案の 及び条約案テキスト写送

付について

普通公第三五号 米国新提案ノ ト及び条約案テキスト 写

和三年六月二十五日

7月 14 (日接受)

臨時代理大使 澤 田 節蔵 印)

外務大臣男爵 田中 義一殿

不戦条約ニ関シ米国政府ヨリ関係政府ニ対シ新ニ交 セル同文「ノ ト」及条約案「テキスト」送付

六月二十三日国務長官ヨリ参考ト .」及「テキスト」写別添送付ス シテ受領セ ル 本件

ラレタリ 尚本「テキスト」ハ曩ニ電報致置 タ ル 通リ二十五日発表

本信写送付先 在英、 各大公使 仏 伊、 独 良 波蘭、 チ エ ツ

別

DEPARTMENT OF STATE

TEXT OF IDENTIC NOTES TO

GOVERNMENTS

BELGIUM

AUSTRALIA

CANADA

CZECHOSLOVAKIA

FRANCE

GERMANY

GREAT BRITAIN

INDIA

ITALY

THE IRISH FREE STATE

JAPAN

NEW ZEALAND

POLAND

SOUTH AFRICA

TILATERAL TREATY FOR AND ACCOMPANYING DRAFT MUL THE RE-

NUNCIATION OF AT THE RESPECTIVE FOREIGN WAR, DELIVERED

OF.

FICES, JUNE 23RD, 1928

"Excellency

ments to which they were respectively accredited the Tokyo transmitted on April 13, 1928, to the Governand the Government of the United States, the Amerstanding reached between the Government of France "It will be recalled that, pursuant to the under-Ambassadors at London, Berlin, Rome and

> sign, and inquired whether subject of a multilateral treaty for the renunciation bassador at Paris. of the Government of France by the American Ammitted therewith, April 13, 1928, and a copy of the draft treaty transsideration thereto. addressed were in a position to way the form of treaty which it was prepared to liminary draft of United States also submitted for consideration a of war. At the exchanged by France and the United States on the 1927, together with copies of the notes subsequently text of M. Briand's original proposal of June same time the a treaty were also brought to the attention The text of the identic notes of representing in a general the Governments thus Government of give favorable conpre-20,

cluding the Government of the United States, an allated among the other interested Governments, 1928, the Government of the French Republic circu-"It will likewise be recalled that on April ij. 20,

Government: placed by my Government upon the treaty proposed of the tions emphasized by France Society of International Law, ternative draft treaty, it, referring as follows to the six major consideradelivered on April 28, 1928, before the American and prior diplomatic correspondence with my United States explained fully the construction and that in an address which in its alternative draft the Secretary of State

decide whether circumstances attack nation is free at eign state and is implicit in every treaty. Every defense. That right is inherent in every stricts or impairs in any way the American draft of an anti-war treaty which reor invasion and it alone is competent to provisions to defend Self-defense. in self-defense. all times and regardless of There is nothing in If it has a good case its require recourse territory right of selfsoverthe

> same agreed definition. tion of that a treaty should stipulate a juristic concepof self-defense, it is no treaty provision can add to the natural right approached from the other side. define aggression. inalienable right, however, action. Express recognition the world will applaud and difficulty encountered self-defense since easy for the ō mold events It is the identical question not in the interest of peace to accord with an by treaty gives rise to the not condemn its in any Inasmuch as effort to unscru of

submitted for example, and attaches only go to war. The obligation, if any, is secondary imposes no affirmative The League Covenant. to been the Article ten of the Covenant has when Fourth Assembly interpreted by a resolution primary obligation deliberately The Covenant but not

in what degree the member is bound to assure mean that "it is for the constitutional author formally adopted owing to one adverse vote to positive requirement. construed as authorizing war in certain circum nant and the idea of of its military forces. "There is, in my opinion. and the integrity of the territory to the obligation of preserving the independence ities of each member necessary execution of this obligation by employment of war. but it is inconsistency between the The covenant can, an authorization an unqualified renunciaб decide, of , it is Ħ. and members. reference true,

(3) The Treaties of Locarno. If the parties to the treaties of Locarno are under any positive obligation to go to war, such obligation certainly would not attach until one of the parties has resorted to war in violation of its

treaty stance or by immediate accession to the treaty should become parties to its proposed anti-war commitments. tions thereunder and free to fulfill their Locarno law be automatically released from their obligaeral anti-war treaty and the other parties treaties would also be a breach of the multilatto war by any state in violation of the Locarno arms. In such event it would follow that resort treaties would not be violated by recourse would be war treaty proposed by the United States, there treaties become parties to the multilateral antivious that if all the parties to the Locarno solemn pledges thereunder. It is therefore obsoon as it comes anti-war treaty would thus as a either through signature that all a double assurance that the Locarno parties The United States is into to the Locarno force in the manner in the first inmatter of entirely treaties

provided in Article III of the American draft, and it will offer no objection when and if such a suggestion is made.

treaty ð of the treaty-breaking state freeing France and the other Powers in respect could attack the neutralized states without viguaranteed are France and the states whose neutrality she has discuss their provisions. It is not unreasonable tions of the anti-war treaty. not informed as to the precise treaties which suppose, make it possible for France to persuade such done proposed by the United States. to Treaties of neutrality. the has adhere seasonably however, that the relations between no party to the treaty in mind sufficiently close and intimate and and cannot thereby The United States from the obliga-If the neutralized to the anti-war automatically therefore anti-war If this treaty

> the anti-war treaty, the latter treaty states were attacked course have no a multilateral treaty be regarded anti-war treaty. It is difficult to perceive, thereneutrality as if she free to act under the how treaties guaranteeing neutrality bу as necessarily preventing the con-France bearing and France would be were by a state not a party for the or any other treaties not a party renunciation guaranteeing power would ð can of of of

As I have already pointed out there can be no question as a matter of law that violation of a multilateral anti-war treaty through resort to war by one party thereto would automatically release the other parties from their obligations to the treaty-breaking state. Any express recognition of this principle of law is wholly un-

necessary.

of such a treaty and cause it to be ratified. into force of an anti-war From a practical standpoint it is provision therefore was made in the draft sub proposed multilateral anti-war treaty should be nations of the world ferable, mitted to the other Governments on April 13 world-wide in its application, been the hope (e) Universality. however, not to postpone the of the United States that its From the beginning it has can agree upon the text treaty and appropriate until all the clearly precoming

For one reason or another a state so situated as to be no menace to the peace of the world might obstruct agreement or delay ratification in such manner as to render abortive the efforts of all the other Powers. It is highly improbable, moreover, that a form of treaty acceptable to the British, French, German, Italian

or almost universal acceptance into force of the treaty which it has made by conditioning the coming jeopardize the practical success of the proposal manity and the United States is not willing to itself would guaranty against a second world war. their observance thereof would be a six Powers of an effective anti-war treaty and the coming into force among the above-named world. Even were this not the case, however, United States would not be equally acceptable and Japanese Governments as well as most, if not all, of the other Powers of be a tremendous upon prior service to huuniversal practical This in to the

"The British, German, Italian and Japanese Governments have not replied to my Government's notes of April 13, 1928, and the Governments of the British Dominions and of India have likewise replied to the invitations addressed to them on May 22, 1928,

for its veyed therefore necessary or desirable. It is no less evident of the text of its posal of the United States for the promotion of world least disapproval of the principle underlying above-quoted construction, and none has voiced the Governments by my Government pursuant to the suggestion Government of the United States suggested any right of legitimate interests of any nation. the renunciation of war is necessary to safeguard modification of the text of the draft treaty to and implicit in every treaty. Government in Great Britain. in the note of May 19, 1928, Neither has any of the replies received by the part, remains convinced that no modification by it on April 13, 1928, and my Government, that inalienable attribute self-defense is has expressed any dissent from proposal for a inherent in every sovereign multilateral treaty of sovereignty No specific referfrom His Maj-It believes that None of these the proconpro spethe is

signed pation for the renunciation of among the original signatories of the proposed treaty all parties to the concerned. ment of the United thereto free, so far as the ing the anti-war treaty, thus leaving the other parties of the Locarno treaties without simultaneously violatsuch event no state could resort to war in violation nature in the first instance or thereafter, would meet Government has felt from the very first that partici-So far as the belligerent state. This principle is parties from their obligations under the treaty towards that resort to war in violation of the proposed treaty one of the parties thereto would release the other practical requirement of the situation, since in the Locarno agreements, either in the anti-war treaty by the powers which the Locarno treaties are concerned, As Your Excellency knows, the Treaties of Locarno States has welcomed the idea that war and provision therefore treaty-breaking well recognized. through should state Governsig-

honor herence to the proposed treaty by all parties to these which the Government of France would has been made in the draft treaty which I have the any party to the anti-war treaty other treaties would completely safeguard their rights an arrangement would meet with any objection on war treaty, and it has no reason to believe that such should be original signatories of the multilateral anti-Government would be entirely willing, however, to leave the other part of present negotiations. subsequent resort to treaty as well as the neutrality treaty, and thus cover the treaties that as the treaty-breaking state is concerned. My to transmit herewith. the other Governments now the parties parties to the anti-war treaty free, ť guaranteeing neutrality war by any of them or by such neutrality The same procedure would violate the has referred. Adconcerned in treaties to

"While my Government is satisfied that the draft

properly accepted by the Powers of the world withtreaty proposed by it on April 13, 1928, could be signatories the British Dominions, India, out change except for including among the original identical with that of the draft proposed by the Unitsince it appears that by modifying the draft in form to the precise phraseology plicate the present negotiations by ment of France, it has no desire to delay to the neutrality treaties mentioned by the Governrenunciation of war. The text of this revised draft is tions a revised draft of a other Governments now concerned in these negotia-States has therefore decided to submit to the fourteen agreement upon the text of the treaty to be Governments can be satisfactorily met and general though not in substance, the promptly reached. The Government of the United treaties of Locarno and, it may be, all parties the points raised by other multilateral treaty of that draft particularly rigidly adhering all parties or for

ed States on April 13, 1928, except that the Preamble now provides that the British Dominions, India and all parties to the Treaties of Locarno are to be included among the Powers called upon to sign the treaty in the first instance, and except that the first three paragraphs of the Preamble have been changed to read as follows:

'Deeply sensible of their solemn duty to promote the welfare of mankind;

'Persuaded that the time has come when a frank renunciation of war as an instrument of national policy should be made to the end that the peaceful and friendly relations now existing between their peoples may be perpetuated;

'Convinced that all changes in their relations with one another should be sought only by pacific means and be the result of a peaceful and orderly process, and that any signatory Power which shall hereafter seek to pro-

mote its national interests by resort to war should be denied the benefits furnished by this treaty:'

ferred to by the Government of the French Repubsignatories the parties lic, although it believes would be willing to have included among treaties but also the other signatories to the anti-war lease not only the other signatories of treaties wolud also violate the present treaty and reit certain that resort to war in violation of the Locarno by all parties to the treaties of Locarno, thus making released from their obligations under the treaty to that lation of the treaty, the other contracting parties to the principle that if a state resorts to war in vio-The revised Preamble thus gives express recognition from their obligations it also provides for participation in the treaty Moreover, as stated above, to that the interests of those the neutrality to the treaty-breaking my Government the the original treaties re-Locarno are

New Zealand, Great Britain, United tion, in the form of treaty readiness to accept, without ment of will be able promptly to indicate posed, and to express the fervent hope that the Governis ready to sign at once a treaty in the form herein proconnection that the Government of the United States outlined above. I have been instructed to state in this for the renunciation of war containing the changes cellency's Government a draft of a multilateral treaty transmit herewith for the consideration of Your ExuI" Canada, can now States. If the these circumstances Poland, South Africa and the United India, the Irish Free State, Italy, Japan, Czechoslovakia, agree Governments of Australia, to conclude now suggested by the qualification or I have the France, this Germany, honor anti-war reserva-Belits to

> of the practical fulfillment than ever before age-long aspirations and that this simple procedure will dent that the other nations of the world will, as soon treaty among themselves, my the treaty comes into force, world. for universal peace Government is gladly adhere bring in the history mankind's nearer thereto, confito

> > 172

mitted herewith. treaty for the renunciation of war in the form transwilling to join with the United States and other simvenient whether to be informed at as early a date as may Government of "I have the honor to state in conclusion that the disposed the United States Governments Your Excellency's Ħ. signing a would be Government be condefinite pleased ıs:

TEXT OF DRAFT TREATY TRANSMITTED WITE ABOVE NOTE

The President of the United States of America
The President of the French Republic

His Majesty the King of the Belgians

The President of the Czechoslovak Republic

His Majesty the King of Great Britain, Ireland and the British Dominions beyond the Seas,

Emperor of India

The President of the German Reich

His Majesty the King of Italy

His Majesty the Emperor of Japan

The President of the Republic of Poland

Deeply sensible of their solemn duty to promote the welfare of mankind;

Persuaded that the time has come when a frank renunciation of war as an instrument of national policy should be made to the end that the peaceful and friendly relations now existing between their peoples may be perpetuated;

Convinced that all changes in their relations with one another should be sought only by pacific means and be the result of a peaceful and orderly process,

and that any signatory Power which shall hereafter seek to promote its national interests by resort to war should be denied the benefits furnished by this treaty;

tional policy; mon renunciation of war as an instrument of their nauniting the civilized nations of the world in within the soon as endeavor and by adhering to the other nations of the world will join in this humane Hopeful that, encouraged by their example, Ħ: scope of its comes into beneficent provisions, force bring the present treaty as their ы peoples thus

Have decided to conclude a treaty and for that purpose have appointed as their respective Plenipotentiaries:

The President of the United States of America
The President of the French Republic

His Majesty the King of the Belgians

The President of the Czechoslovak Republic

His Majesty the King of Great Britain, Ireland and the British Dominions beyond the Seas, Emperor of India

For Great Britain and Northern Ireland and all parts of the British Empire which are not separate members of the League of Nations

For the Dominion of Canada

or the Commonwealth of Australia

For the Dominion of New Zealand

For the Union of South Africa

For the Irish Free State

For India

The President of the German Reich

lis Majesty the King of Italy

His Majesty the Emperor of Japan

The President of the Republic of Poland

who, having communicated to one another their full powers found in good and due form have agreed upon the following articles:

ARTICLE

The High Contracting Parties solemnly declare in the names of their respective peoples that they condemn recourse to war for the solution of international controversies, and renounce it as an instrument of national policy in their relations with one another.

ARTICLE II

The High Contracting Parties agree that the settlement or solution of all disputes or conflicts of whatever nature or of whatever origin they may be, which may arise among them, shall never be sought except by pacific means.

ARTICLE III

The present treaty shall be ratified by the High Contracting Parties named in the Preamble in accordance with their respective constitutional requirements, and shall take effect as between them as soon as all their several instruments of ratification shall have been deposited at

It shall be the duty of the Government of.......
to furnish each Government named in the Preamble
and every Government subsequently adhering to this
treaty with a certified copy of the treaty and of every

instrument of ratification or adherence. It shall also be the duty of the Government oftelegraphically to notify such Governments immediately upon the deposit with it of each instrument of ratification or adherence.

In faith whereof the respective Plenipotentiaries have signed this treaty in the French and English languages both texts having equal force, and hereunto affix their seals.

Done at the day of in the year of our Lord one thousand nine hundred and twenty

第三七六号仮訳文昭和三年六月二十三日付在本邦米国代理大使来翰

抛棄ヲ目的トスル多数国間条約ニ関シテ其後仏国及合衆国年六月二十日付「ブリアン」氏原提案ノ正文ト併セ戦争ノ二十八年四月十三日各其ノ駐剳国政府ニ対シ千九百二十七了解ニ遵ヒ倫敦、伯林、羅馬及東京駐剳米国大使ハ千九百以書翰啓上致候陳者仏国及合衆国政府間ニ到達セラレタル以書翰啓上致候陳者仏国及合衆国政府間ニ到達セラレタル

条約 代案及 四月 約 且. ル 六個 = ジ条約 仏蘭 会致候又千九百二十 ニ交換 前記各政府 有之候同 有之候 三十 共 = ij 形式ヲ大体表 対ス / 米国政府 仏 ハニ伝達セ 1 西 国政府 ハセラ 亢 代 共和国政府 主要点ニ対 ル 時 日米国国際法協会ニ於 案ヲ送付セ 其 '三合衆国政府 カ ν ラレ ニー申達 ŀ 之 夕 1 ノ之以 解 ル 示 nカ合衆国 シ タ 対 七 左 セラ iv ル ヲ 亢 シ ル 詳 前 好 次第並国務長官 条約草案ノ 年四月十三日 条約草案ヲ考 ラ ノ写ヲ伝達 $\dot{\nu}$ 細 如 \ddot{j} 意的考慮ヲ ^ 同政 [政府ヲ 候尚 説明 外 ク バ交文書ヲ 一言及シ米国 千九百 セ ケ 府 含み他 写 ル カ署名 ル セ 演説 次 Ň ij 加 慮 ル 二十 八巴里駐剳 以 1カ千九百 第 同 フ = コ 政 デ仏 中 ラ 文通牒 付 ル ス ŀ モ 関係諸 |文御 府 ・三於テ スル 亢 ヲ ル 御 (年四 国 得 用 承 ノ 提案 米国 三十 為伝 承 意 1 1 \sim 力 右 É 丰 知 政 月 ア 七説 条 三十 大使 文及 T 1 八府 達 ル 加 t_{\square} ルセ約 年 9 シ = 条 ク

白

戦 ル 於テ 中二 条約 モ 1 ナシ 黙示的ニ包含セラ モ又条約規定ノ 米国草案中 該 権利 ハ各主 = ハ 何等自 有 権 無 ル 国 二拘 ル モ 固 衛 ハラ 1 有 1 ナリ ラ モ 利 ズ攻撃又 7 各国民 ヲ = 制 シ 限 テ ハ シ ハ 如 若 且. 何 入 _ ハ 三対 ナ 切 毂 ルノ損

> 面 ル 然 於 困難 能 \exists コ レ テ 戦争 ヺ IJ ŀ 世界 観 ヺ モ 1 ハ侵略ヲ定義 タ 此 ス若 生 七 ノ譲渡 ル ハ 、之ヲ賞讃 モ シ シ右国 ヲ フ 防 1 A ル ・ナリ ル シ得 ヲ 衛 要ス モ セ 家 ス 1 ン サ シ = ル 其 シ テ 正 ル ナ ት ル 1 情勢 Ų, 権 自 ス ノ ル 利 行動ヲ罪悪 由 右 ラ条約 当ナ 三ア = ヲ 当リ 有 ハ 同 ル IJ シ 理由 常 且 t __ = 1 依 否 右国 __ 卜 [ヤヲ 問 遭 ij 認 ヲ 邁 題 明 メ 有 家 決 ヲ セ白 # ス Ż 反 定 ル ル = ル 対ノ 承認 場合 7 ^ ス カ 同 シ、 自 ル 方様 ス

ナル 此 ラ 何 ||者ヲ ν ノ点 2 カ タ 為利益 故 ル モ 三於 定義 こ条約 加 デ フ 4こ適合ス ル ハ = 如何 ヺ コ 以 ト ス 能 テ ナ 自 ル /\ ル 様事 ス 条 衛 無法) 件ヲ 法 規定 律的 ナ 揑 ル 作 概 Ŧ E 自 念ヲ ス 1 ル 二 衛 規定ス \exists **}** 1 ŀ IJ 自 極 テ 然 ル メ ハ 1 が協定 テ コ 容易 ት セ ハ

連盟 規

非ス = 連盟 ij 若シ義務アリ ハ テ特 何 等戦 ?三受諾 争 Ì ŕ セ ナ ラ ス ス V V 1 タ /\ 肯 第二義的 ル場合 定的第 三限 _ 義 1 ij モ ノ 拘束 1 義 = 務 ス シ F 課 テ 或 ス ル モ 玉 1 家 =

Œ 例 式 = ハ 規約第十条 セ ラ ν +}-ハ第四回総会ニ付 IJ シ 決議 = 依 議セ IJ 左ノ ラ 如 ν 反対 ク 解 釈 セ ラ 1 V

シ 争った 1 度 1) ・合衆国ハ 加 之カ締約 国 不 -戦条約 丰 案第二条規定 案ヲ 国 = 見 下 先 ノ義 П ナ ルツ署名ス カ ル ル ル ŀ Ī 務 方法 2 対多遂行 I 丰 卜 ハ - ヲ衷 ル 条 何 = 依 等 \exists 約 ス <u>}</u> り直 心 反 1 ル 一切 対 欲) 一依リ 三之ニ 自 セ シ 居 + 由 1 締約 文へ ラ N ル 加 へモ 1 其 入 国 ル = ス カ コ ノ 合衆国 効 ŀ シ ル 力発 テ \exists ŀ 若 } ナ 生後 提議

シェ

斯依

四 中 立条約

何 ク = ル 右 シ テ ス 合衆国 従テ其 \exists 厶 右 中立ヲ保障 = 諸国 シ ル ル ス = ナ テ コ ハ 不戦 実現 仏 障 ク ኑ [ヲ合衆国提案ノ ル 1 ,規定ニ付 シテ従 条約 ナ = \exists Ħ 玉 ク 依 } 条 能 セ セ ノ ラレ シ 能 約 念頭 1) ル = ナ テ (テ同時ニ 諸国 テ ij ハ 1 ん仏国 論議 攻 義 丰 サ ン 1 = 思惟 トノ 行 墼 ル 務 カ不戦条約 7 不戦条約 ヘシ 動 ハ セ ス 彐 ル 不 仏国及 IJ 関係 ス ラ ス ル 具 若 解放 戦 ν 体 ル \exists ル 条約 タ シ ŀ 的 /\ 1 ハ 充分密接 不 自 中 能 条約 ル ス 他 締 = 締約 - 合理 適当ナ 場 立 約 ル 1 由 ハ ヲ 合 玉 コ 国 ス Ξ 国 ŀ 然 付 有 カ = 玉 ハ Ξ 該条約 非 ヺ ル 通報 ス = ハ 不 ナ = V 違反 非 該 ク 時機 シテ 卜 \sim 戦 サ 条約 ・モ仏 シ サ 条 シ ル = 故 ル 約 テ 玉 14 接 = ^ = 中 違 シ 締 加 カ ハ = 玉 玉 シ 立対国シ 泛 若 盟 [及其 中 1 勿 約 ヲ 加 4 論 国 シ ス シ セ

何等必 迄兵 連盟国 1 意見 容 的 Z 然 方 ハ各国家ノ 要 ル 的 = ラ 1 使用 求 モ 依 独立及領土保全維持ノ ブ 矛盾 Ė 1 V 非ス ŀ ~ = 規約及戦争ノ 解 ナ 憲法上ノ主権ニ ź, リ此 釈 セ ラ 規 氵 約 義務ヲ実行ス ル ル *>*\ 無制限 或 コ 属 義務 1 ル スト 事 真 情 Ŧ 抛 = 関 ル 1 棄 ル モ右 下) 1 シ 義務ア 如 観 = ハ許容 於 念 何 テ 1 ナ ij ハ間 ル 戦 ヤ 程 = =

P カ ル 1 /」諸条約

[義務ヲ コ シ 条約 国間 ト明 粛 ナ p. 不 三係 有ス 7 ハ カ ル カ ナ 誓約 Ŀ 戦 ル ij 争 反 \exists ル ル 1 / 条約 多数国 シ 1 故 = = モ テ 訴 = -的 1 ト 違 ノ 違反 或 ナ = フ 反 ト 切 同 間 シ ル ル ル セ 締 .条約 不戦 1 ___ ^ コ Ĩ テ ハ 約 ーナリ 戦争 シ 国 ŀ 右 \neg 玉 条約 斯 = 義 カ 1 口 = 不戦 シテ 義 戦 7 依 カ = 務 務 争 如 ij 訴 1 N ハ 条約 締約 テ 2 締 戦 Ħ = 丰 フ 犯 訴 場 1] ル 約 争 条約締 二非 解 1 合 # ŀ 国 ラ フ 放 他 ル + ル = 1 ナ 於 ラ セ ŀ ル + __ ス ラ 締 丰 テ \exists */*\ 約 ν カ 1 約 レ ハ \neg ŀ \neg 玉 ハ 該 何 右 生 国 p ナ 口 カ 条 --合 ハ カ 丰 カ 七約 積 口 ハ 斯 立 ル 又ル カ 衆サ Ŀ.

障条約 困 条約ヲ締結 難 ナ カ仏国又 ス ル 八他 ヲ必然阻 ノ 国 害ス 1 戦 争抛 ル モ 棄 ナ P 目 IJ 的 ŀ 思惟 1 ス ス ル 多 ル 数 コ 国 ኑ

五、条約違反国トノ関係

白ニ認 シテ右 Ė ル 訴 既 \exists ラ 4 ŀ Ξ 条約違 指摘 ル ル ハ 法律上何等問 コ コ ኑ ኑ セ 泛国 ニ依リ該条約ニ ハ ル 全ク必 カ Ξ 如 - 対シ其ノ ク 多数国間 要ナ 題 アリ シ 、義務ヨリ 違反ス 得 不戦 ス 此 ノ ル 条 自働 法律 コ約 ኑ 1 的 Ė 力 __ 他 二解除 締 1 原 7 約 崱 締 国 ヲ 約 カ セ 明シ国戦

六、最初ヨリノ普偏性

定ヲ挿 合衆国 ,政府 ヘキ こ送付 入 コ 7 提議 セ ト 1) *>*> 百 セ セ ラ 国 ル 多数 ν) 希望 タ 国 ル 間 条約 ニシテ従テ四月十三日付ヲ 不 案中 一戦条約 = ハ カ 之 其 = 1 適用 関 ス ル 上 世界 大体ノ 以 テ 的 他ナ 規

然シ実際的 ?等世界平和 ヲ 可 合意シ之ヲ批 ŀ ス 見地 シ ^ 丰 メ ノ 脅威 ___ ハ 彐 切ノ他国 明 准 IJ グタリ カ ス ハ ナ ル 世 得 ĺ) 界 ヲ /何等カ 得 J. +) 努力ヲ無効ナラ ル ル _-迄其 切 国家カ合意ヲ ノ理由 1 ノ効力発生ヲ延期 玉 民 = カ 不戦条約 依 が害シ若 シ ij ム 其 ラ ル 位 コ ノ 置 Œ トハア批 ŀ 也 カ サ文

> 効 大部 コ ヲ ル = = シ 提案ノ 対スル ŀ 以 対ス ナル ル 与言該条約 · ヲ欲 卜 不戦条約 シ尚英、 7 丰 ル \exists 実際的 偉大ナ 実際的 ロナリ 条約 玉 ス ル = モノ Ի 1 ノ形式カ世界 若 効力発生ノ 成 1 ル 1 以功ヲ事前 貢 保障 . 効 = 同 シ然ラスト アラ 操受諾 献 力発生並 タ タ ル IJ 伊、 ス 得 ヘク而 ジ得 条件 1 1 他 世 \sim ニ其ノ遵守 ス 日 、 シ 右 ル 界 サ 1 及 ŀ 的 Ŧ 総 ル 米 ス シテ合衆国 若 上記六国間 テ ラ ル ハ \exists 其 1 各 ٢ コ ハ 殆 V 国 ト ハ ハ 玉 自 第 甚 三非 政 卜 = 三ノ 依 世 身 ア 府 ハ 界的 其 IJ ス IJ = Ξ Ξ 世界戦 於 得 ŀ 於 ŀ 妨 1 1 ナ テ ケ ^ ス IJ 受諾 シ 人 カ 受諾 ス ル ル タ 類 争 有 ラ Æ

今ヤ英、 合衆国 ス ル カ千九百二十八年五月二十二日付ヲ以テ右諸 年五月十九日付公文中ニ述ヘラレタ ブグ 付 招請 ル ニ対 米国 ν 合衆国提案ノ [政 シ何等 対対 1 政府公文三対 独、 府 ŀ シ ・ブリ 伊、 領承 同 ノ反対ヲ 様回答 /包含スル ŕ 日 セ رِ ک 各国 ル シ 右回答 表明 回 セ ラレ候右諸政府ノ 皇帝陛下ノ 答 政 原則 シ且英国自治領及印 セ 府 ス且世界平 1 ハ 千 何レ = 九 毫 でモ反対 政府 省二十 ル モ千九百二十八 申出 和 3 孰 IJ · 八 年 セ 1 ニ従ヒ米国 ラレ 増進 千 ν 政 -四月十三日 モ 府 九 度 上記 ヺ 置二十 ス 三送付 政 候尚 目 年 的 政府 府 ノ 又 解 セ 八 モ 卜

ナ 有 シ 間 シ ij ŀ ス F \exists Ξ 1 言及 コリ テ IJ 約 モ ナ ル 1 "信致居候 署名ニ 戦争 確信致居 限 要求ヲ 玉 約 1 ヲ 付ヲ以テ合衆国 国 ・ニシテ ヺ え 申出テラレス ij 除 三関 メ 益ヲ ラ シテ Ξ 口. セ カ ル 満足スル カ ス 1 ~ ν シ 百 コ 該条約 条約 一切ノ 合衆国 防護 ム ŀ 'n 百 IJ ル フ ル 候 ルコ ル 約 時 不 1 ハ 従テ右ノ 其 ,」条約 必 コ p. =) ス 玉 = 条約]政府 提案正 候而 |政府 1 ヺ 不 モ 条 カ ト = 違反シテ戦争 要ニアラス ル 其 依リ交戦国 為ニモ戦争抛棄ヲ目 能 約 ル 1 ハ 之又同様! 7.ノ」条約 シテ 中 ハ自衛権 条約 ト思考シ来リ 譲 ハ 1 = ノ署名国 1 加盟 提議セ # 義 渡 Ė 文ニ何等修正 , 米国政府 黙示 シ得 ル 務 = 又望 カ 違 エス \exists **ハ** 故 IJ 反 ル カ 朝 = ÷ サ 的 = ル 解除 対 総テ 条約 シ従 原署名ニ 関シ 訴 = コ カ 7 ル = シカ 主権 包含 F = シ ラ 有之候帝 *>*\ 一有之候此 如 セ テ 何 テ テ ル ノ ヲ 正 = 其 主権 文ニ 依 ラ 加 的 何 シ コト } ハ 1 セ 特質 トス ラ ナル 厶 約 ナ ij 依 米 Ĵ. ス フ 何 情 有 候 ル 国 違 ν IJ 国 = ル 玉 ル ルノア 国民ノ 大ル多数 大川多数 本件 若 | |家 |-政 泛 依 \exists *>*> 勢 政 1 ス = ル 斯 原 国 ル ij 関 モ 7 1 ハ 府 実其ハ則義 条 ジュ」固 ノ 他 ナニ

> カ シト 総テ戦争抛棄ヲ目 条約 ノ見解ヲ歓迎 案中ニ ハ右ニ 致 的 候依 1 関 ス シー規定ヲ設ケ テ玆ニ本使 ル 本件条約 7 1 転達 原署名 置候 ス ル 国 1 中 火光栄ヲ

故 不 ス ル \exists ク 右諸条約締約国 政 戦 ル ŀ ス 様ノ手続 ハ不戦条約 ニ有之候 ル所 条約 限リ 府 = 依リ Ξ 不戦条約 ۲ 1 = 八仏国政 ・リ異議 シテ右 原署名国 然 其 1 ジャラ 並中立条約ノ 諸条約 アを権 ラ 一若 利 ア 1 1 他ノ (府ノ 如 下 斯 jル ハ完全ニ擁護 \sim + ナ 1 八不戦条約 __ 取 シ ル 如 締約 切 言及 違反ト ١ 極 ^ + 1 丰 締約国 ·信 ス カ 中 セ 国ヲシテ自 現在 ル中立保 コト 立 条約 セラ ル ナ 玉 ij カ 理由何等無之候 ラ 1 ハ 米国政府 交涉 カ 本件 1 従テ条約違 ル **於障条約** 締 \sim 由 ク候何 条約 I ナラシ Ξ 約 爾後戦争 関係 国カ 1 Ξ = 衷 反 加 シ 匆 L 1 モ 数 居 心 ^ 玉 = ナ 入 及 国間 之ヲ 丰 = 訴 レ スフ ル 関 カ フ *>*> ル

一切 条約 = 国 [政府 政 府 案力 正 ハ ハ 原署名 該 式 約 分千 条約 、二受諾 玉 玉 ヲ 及 包含 案 国中ニ 九 場 合 百 セ 正 ラ セ Ξ 二十八年四月 依 英国自 ν 確 シ 得 ナ A 1) 仏 ル ~ ル 治領印 措置 丰 ノ外 国 コ 政 何等 十三日 府 = ト 厳 ニ満 度 1 挙 格 1 ---変更 付 = 足 示 P 拘 ナ セ カ ヲ ル 泥 チ 以 ル ル 2 テ ス 卜 ク 中 世 ル 同 立 条約 時 界 条 \exists 約 ኑ = セ

ル

承

知

如

カ

合衆国

政

府

ハ

 \neg

口

カ

ル

約

締

約

& セサルモノニ有之候ニ依リ現在ノ交渉ヲ遅滞セシメ若ハ複雑ナラシムルコトヲ

名セラ カ 文ハ合衆国 間 Ŧ 関係シ居 / 一条約 ナ セラ 条約ノ ノ如ク変更セラ ト同様ニシテ唯タ前文ニ於テ英国自治領印度及 = ノ如ク ル ハキ条約 ル IJ 改訂正文ヲ提示ス 仏国政府 ル 1 カ千九百二十八年四月十三日付ヲ以テ提議 ル ル国ノ中ニ ナル 一切ノ締約国 十四国政府ニ対 カ ノ正文ニ付テノ ニアラスシ 故ニ候 レタ ジ提起 含マル ル点 依テ合衆国政府ハ ハ最初ニ本条約ヲ署名ス セ ル ル シ戦争抛 テ形式上該 ルコトヲ規定シ並最 ニ於テ異ナル 諸点 コト 一般的合意 ニ決シ候右改訂 ハ満足ニ解決 棄ヲ目的トス 条約 ノミニ有之候 今ヤ本 ハ 速 ヺ 初 = セ ルヤウ 件 成 ラ 正 _ ル ネノ正 数 v 交涉 立 ㅁ. セ ス カル ス

人類ノ福祉ヲ増進スヘキ其ノ厳粛ナル責務ヲ深ク銘記 和的 シ メンカ為国策 手段ニ 人民間 到 レル 依 結果タ IJ コ ニ現存スル平和及友好 パノ手段ト テノミ之ヲ求ムヘク ト -ヲ 認 ル ジメ其 ヘキ シテ戦争ヲ卒直ニ拋棄スへ コ ノ 相互関係ノ変更 · 且 爾 2ノ関係ヲ 又平和的 後戦争ニ 永久ナ 訴 八八総 = ヘテ シ テテ

> え ノ国家ノ 利益ヲ拒否 利益ヲ増進 七 ラ ル ヘキコト ン ŀ ス ル ・ヲ確認 締約国 シ ^ 本条約 ノ

対 約 テ ブシ明白 卜其 戦争ニ訴フ ヘノ負フ グ改訂 Iナル承認 ト ル セ ラレタ コロ 場合 脱ヲ与フ 1 = ル 義務ヨリ ハ他ノ締約国 前文 ル モ ノニ有之候 ハ若シー国カ 解除 ^ セ ラ 該国家ニ ル 本 \sim 条約 シ 対 ŀ シテ 1 = 違 原 本 泛 劕 = 条 シ

米国 尚又右 名国 ル リニ本条約 締約国カ原署名 対 = ヲ 本条約 規定シ ル 如 ス モ |政府ハ右諸国ノ利益ハ若シ右諸国カ最 ク米国政府ハ仏蘭西共和国政府 ル ノミナラス尚不戦条約 ノト確信致居候 其ノ義務ヨリ解除スル ハ 一切 ニ違反スルコ \neg 。 ウ カ ニ加入スル) 「ロカ 国中ニ ル ノ」条約ニ違反シテ戦争ニ コ ۲ 包含セラル ル ŀ ・トナリ ノ」条約締約国 j 1 択 他 コト 「ロカ) フニ於テ ル 署名国 ヲ明確ニ致居候更ニ上述 \ddot{j} コ 一言及セ ト ル ノ」条約 [ヲモ ハ = = 正当 同意可 初二 条約違 訴 ル ル ル中立条約 署名 = フ 本 致候尤 擁 ル 条 1 護 反国 他 約 ス ハ セラ代 ル .)ノ署 同 חל モ 1 =

包含スル 加 丰 事 戦争ノ拋棄ヲ目的 考慮ノ為玆ニ伝達スル 情 ノ下ニ於テ本使 <u>٦</u> ハ 右 ス こ大体述 ノ光栄ヲ ル多数国間 有シ \sim 条約 タ 候此 ル ノ草案ヲ 如 ノ点 丰 変更

署名ス 接シ候若シ / 用意ア 対ス ニ於テ = 1 セラレタ 相互ノ間ニ於テ此 欣然之ニ加入シ而シテ此ノ簡単ナル ・ ジ 1 ル 逸、 ル 人類多年ノ冀望ヲ世界歴史上未曾有 ハ世界ノ他ノ諸国民モ本条約 ル ノ用意アル旨並ニ帝国政府カ今合衆国ニ依リ ハ合衆国政 英国、 - ランド」、 ヲ示サレンコトヲ熱望スル旨陳述スル様訓令 ル条約ノ形式ヲ制限若ハ留保無ク速ニ受諾 印度、愛蘭自由国、伊太利、日 白耳義、「チェッコスロヴァ 府 ノ不戦条約ヲ締結スル 波蘭、 **八** 兹 ニ提議ス 南亜弗利 ル形式 カ効力ヲ発生ス 加及合衆国政府カ其 手続 コトニ合意シ得 ノー条約 \ddot{j} ハ キア」、 世界 実際的達 本、 1 ヲ 仏蘭 平和 ル _ = テ 直 ス ル 提 成 ヤ = =

直 テ近ッカ ハ最後ニ帝国政府カ合衆国政府並 府ト シム ニ兹ニ伝達スル ヘキヲ確信致 形式ノ 候 戦 争 ニ賛意ヲ ・抛棄ヲ 自有 的 ス 1 ル ス他 可ルノ

デ 条約 ニ重テ敬意ヲ 知 ニ署名ス 述 接ス ス ル ル 、表シ候 ヲ得 ル ・光栄ヲ コ トヲ欲 ハ (合衆国 有 いセラル シ 政府 候 右 申進旁本 \ddot{j} ル · 欣快 ヤ否 ጉ t 使 ス = 付 ハ ル 閣下 敬具 ŀ 成 = ル = p

> 皇帝陛下、 ン」海外領土皇帝印度皇帝陛下、 ブリテン」「アイ 「チ 日本国皇帝陛下並ニ波蘭 ェ ッ コス 口 ヴ ルランド」及 ァ 丰 ァ 独逸国大統領、 共 共和国大統領 和国 「ブグ v I |大統 ト 領、 伊 ハ • 太利 ブリ グ 国 テ レ

セ カ 人類 其ノ国民間ニ現存ス レルコト 為国策ノ手段ト 7 福祉ヲ増進ス ヲ メ シ テ戦争ヲ ル ^ 丰 平和及友好ノ 其ノ 厳粛ナ 卒直 ニ拋棄ス ル 関係ヲ永久ナラシ 責務ヲ ヘキ 深り感銘 時機ノ 到 メ シ 来 ン

ኑ A 其 = 対シテ 後戦争ニ ヲ確信 ヘク又平 相互関係 ハ 本条約 訴 和的ニシテ秩序ア こへテ其 ノ変更 į. 供与ス ラ ハ /国家ノ 総テ平 ル 利益ヲ増 ル 和 利益ヲ拒否 過程 的手段 ラ 結果 進 = ス 依 セ ダ ^ ン ij 丰 ŀ テ ル ス ~ / モ ル 丰 ミ之ヲ 1 ナ 締 \exists ト ル 約 且 求 コ 国

= 其 = ラ ラ 界 範例 玉 加 ジ且 民 ノ文明 セ ヲシテ本条約 = 立本条約 ン 促 コ 諸 + ۲ 国 レ - ヲ希望 世界 民 ノ実施後速 ヲ 結 ノ仁慈 ブ他 合 シ 1 テ チ ニ之ニ加入ス _ 切 玉 ル 策 規 1 ポノ手段 国民 カ 此 用 ト ル シ ヺ コ 1 人道 受 テ ŀ ケ = 前 シ 依 メ ヲ IJ 努 以 力 テ

ヲ締結スルコトニ決シ之カ為左ノ如ク其ノ全権委員ヲ

亜米利

加

合衆国大統

領、

14

蘭

西

共和国大統領、

自耳

義国

皇

キ直

ニ前記各国政府ニ電報ヲ以テ通告スヘキ義務ヲ

有ス

政府ハ各批准書又ハ

加入書カ自国政府ニ寄託アリタ

ル

卜

加入ス

加入書ノ

認証謄本ヲ交付スヘキ義務ヲ有ス

一切ノ国ノ政府ニ対シ本条約及一切ノ批

准書又

国政府ハ前文ニ掲ケラル

ル各政府及爾後本条約

任命セリ	
亜米利加合衆国大統領	南亜弗利加連邦ノ為ニ
仏蘭西共和国大統領	「アイルランド」自由国ノ為ニ
白耳義国皇帝陛下	印度ノ為ニ
「チェッコスロヴァキア」共和国大統領	独逸国大統領
「グレート・ブリテン」、「アイルランド」及「グレート・	伊太利国皇帝陛下
ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下	
「グレート・ブリテン」及北部「アイルランド」並ニ国	日本国皇帝陛下

際連盟 メ

ノ別個

連盟国ニ非サ

ル英帝国

ノ

一切ノ部分ノ為

波蘭共和国大統

領

=

ヲ各其ノ国民ノ為厳粛ニ 宣言 Z

__

ュ

ジ 1

ランド」

ノ為

且其ノ相互関係ニ於テ国策ノ手段 締約国ハ国際紛争解決ノ為戦争ニ訴フ

ኑ

ル

 \exists

ト ・ヲ罪悪

1

認

シテ戦争ヲ抛棄スル

コ

マオ

ス

トラリ

ア

連邦

() 為

=

ナ

ル

ヲ認メタル後左ノ諸条ヲ協定セリ

因テ各全権委員ハ互ニ

其ノ全権委任状ヲ示シ之カ良好妥当

カ

ナ

ダ

一自治

領

1

為

Ξ

カ 其 、ノ性質又ハ起因ノ如何ヲ問 約 処理又ハ解決ヲ求メサ 国ハ相互間ニ 起ル コ ŀ ル コ 7 ኑ ^ ル ス平和 · ヲ 約 ^ 丰 一切 ス 的手段ニ依ル 的手段ニ依ルノ外之のノ紛争又ハ紛議ハ

第三条

本条約 約国ト 本条約ハ前項ニ定ムル所ニ依リ実施セラレタルト …ニ於テ寄託セラレタ 本条約 他ノ一切ノ国ノ加盟ノ為必要ナル間開キ置カル ここ従ヒ批准セラル 加入ヲ証スル各文書 1 ハ前文ニ掲ケラ 間ニ実施セラルヘシ ハ右寄託ノ時ヨリ直ニ ヘク且各国ノ批准書カ総テ……… ル後速ニ締約国間ニ実施セラル ル ル締約国ニ依リ各其ノ憲法上ノ 該 加 ……ニ於テ寄託 入国ト 本条約ノ セラル ヘシ + 他ノ ハ世界 国 ^ シ 要 締 ^

> 右証拠 上之ニ調印ス セラレ両本文共ニ同等ノ効力ヲ有スル本条約ニ署名シ トシテ各全権委員 ハ仏蘭西語及英吉利語ヲ以テ作 タル

月 日…… ……ニ於テ之ヲ作

和3年6月26日 田中外務大臣宛(電報)公使より キア国木村 (鋭市)

93

臣との会談につい チェコの原調印国としての 加入に関し外務大

二三号

友誼上右両国ニー応渡リ 於テ自分ノ要請ヲ容レ尽力セ 実ハ本条約 度シト述へタ 等異存無キモ原調印国トシテノ正式回答ハ数日ノ猶予ヲ得 無キヤヲ尋ネタル処同外相 説明ノ上「チェッコスロバキア」国政府トシテ本件ニ異存 貴電合第三六二号御 ノ原調印国トシテノ加 ルニ付 電訓 :本使ハ其ノ理由ヲ突込ミタ ź ニ基キ本日外務大臣ニ会見シ委曲 ツ ハ前回ノ通自分ノ関スル限リ ケ ル結果ナルニ付自分トシテ 同一歩調ヲ 入ニ関シテ 採 ハ英仏両国 ル要アリ ル 処外 自分 相 何 = ハ

Ť

本 プ ゥ

月26日前

条項ヲ条約中ニ規定スルノ困難ナル

ハ巳ムヲ得

サ

ル

処

=

シテ従テ条約

文ハ現在ノ儘トスル

コト致方無カラムモ各

側二

於テモ条約ノ付属書中又ハ条約自

身

ŀ ŀ

7 シ

効力

シメ又ハ戦争ニ訴ヘル

へキ義務ヲ締約国ニ課スル

カ如キ

シテハ上院ノ承諾ヲ得ル為米国ヲシテ軍事的干渉ヲナ

条約中ニ規定セサリシ点ニ関シ「デバ

Ĺ ハ

米国

ト

ル手続ヲ採ルモノナル事ヲ諒解アリタシト答へ ハ右両国ニ於テ異存無キ事ヲ確信スル 回答シ得ルハ明カナリ只前述ノ特殊(脱?) ヲ以テ自分ノ意見通 タ ノ為必要ナ 1)

独 枃 波蘭ニ転電セリ

昭和3年6月 26 日 田中外務大臣宛(電報)在米国澤田臨時代理大使

米国新提案に対する米国各紙の論調について

ワシントン 省 6月27日前着 6月26日後発

害及立場ヲ考慮スヘキ ル 留保ニモ適フ次第ナリト論シ或ハ英仏ハ更ニ明確ヲ要求ス 旨ノ字句ヲ挿入セル 的利益ヲ伸張セムト 日発表セラレタ 不戦条約ニ関ス 品カナル [及立場ヲ考慮スヘキモノニシテ国務長官モ本条約ヨリ不点有ラムモ本条約ノ如キ重大問題ニ就テハ各国ハ其ノ利 ス 点ヲ除去スル 費府 ルカ諸新聞ハ条約前文中戦争ニ訴ヘテ国民 ル 米国政府ノ新 イ コトハ重大ナル修正ニシテ右ハ英仏 スル締約国ハ本条約ノ利益ヲ受ケサ ノ意アル ンクワイ ラーし) ヲ明カニシ居レル \neg ブ 1 ト」及条約案二十五 条約本文ニ モ 付 紐 米国 7 育 ル

> 尚紐育 セ テ 否トヲ問ハス多数ノ留保事項アル ル ハ 加 政府カ出 シメタ 事項ハ条約ヲ以テ是ヲ承認シ将来各国ノ解釈 ヲ免レス国務長官カ「ノー 米国当局カ各国ノ主張ヲ聴キ本件交渉ヲ此 関係国ノ受諾ヲ得ル見込ヲ甚タ大ナラシメタ ン」) トセ ヘサ ル 「ヘラルド・ト ルハ慶スヘシト云フニ一致シ居レリ コトヲ固執シタ 来得ル限リ字句 ルカ今次提案カ原案ニ比シ妥協的 リビユーン」ハ新条約案 ル ヲ簡潔ニシ正文原案ニ何等変更ヲ ハ賞讃スヘシ ト」中ニ於テ条約ニ ヲ認メ居レル ・(「バル ラ 程 カ何故是等 ル ጉ ハ 程度迄進展 現 -ナリタ チモ 尚 モ 相違ヲ防 漠 ノニ ハ ァ ル 然 ŀ タ シ ル

英ニ転電シ仏、 独 肖 伊 = 郵送セ シ

カサルヤト論シ居レ

IJ

95 昭和3年6月 26 H 田中外務大臣宛(電報)在仏国安達大使より

不戦条約米国新提案に関する新聞論調の主要

点について

第一七六号

6月27日前着 6月26日後発

面 リ」ノ如キハ中米諸国ニ干渉ヲ事トスル ニテ解決セムトス ニ対スル英国ノ態度ニ留意スルト共ニ「エコ ル英国側ノ [ヨリ英国側ノ要求ヲ拒否スルヲ得ス楽屋 諸新聞共ニ一定地方ニ対スル干渉 留保ニ対シ何等言及スルコト ル Ŧ 1 ナル ヘシ 1 評 権利ヲ認 ス 米国 無キヲ指摘シ之 内 1 ŀ 相談 シテ メ • ۴ () 正 トス ッ パ

不戦条約米国新通牒ニ

関スル当国新聞論調ノ

主ナル点左ノ

类 伊 ニ郵送セ 1)

、シヲ不可トシ殊ニ「エコー・ド・パリ」ハ国際司法裁

(ニ依レハ条約ノ前文ハ拘束力ナシト

1

点ヲ指

ハ米国側ノ譲歩ハ多トス

ル

| 中ニ述ヘタルニ過キスシテ条約丿

本文中ニ規定セサ

·
,

1

判所

(ノ)意見

ナル 認シタ

ル

=

於テ満足ノ意ヲ表セル

モ其ノ説明猶不充分

ニ米国

一カ仏国側ノ

留保条項ヲ考慮シ其

ノ多数ヲ承

ノミナラス之ヲ条約ノ前文又ハ「カバリング

約成立迄ニハ猶ホ関係国間 摘シ猶ホ「タン」其ノ他

ニ於テ充分ナル

交渉ヲ

要

ス モ

へ条

ク未タ之ヲ以テ終局ト見做ス能ハスト論ス

右ノ

96 昭和3年6月27 日 田在 中英国 、務大臣宛(電報) [佐分利臨時代理大使よ

米国新提案に対する英国各紙の論調について

ロンドン 6月28日前着 6月27日後発

一二九

ý

不戦条約ニ関スル米国新公文ニ関 シ

場合ヲ挿入セル シ シ 二十六日ノ主ナル新聞ハ大体ニ於テ新案ニ賛同ノ論調ヲ示 緩和シ且英国側 テ既存条約 「タイムス」及 1 コト等ヲ指摘シ之ニ依リテ仏国側 1 意見ヲモ採納シタ 関係ヲ調節スル事及前文中ニ条約違反 「テレ グラフ」ハ現署名国ノ範囲ヲ拡張 IJ 1 為ス コ Ի ノ懸念ヲ ニ於テー

ヲ有スヘキ公文中ニ其ノ解決ヲ

明記スルコ

ŀ 同

米国側

同様ノ

態度ニ出ツ

 ν

ハ

可

ナ

ル

シ

ŀ

ス

セ

97 昭和3年6月27 日 在英国佐分利臨時代理大使宛田中外務大臣より (電報)

米国新提案に対する英国の態度査報方訓令

6 月 27 日

第六九号

ナリヤ 向御突止メノ ク 問題ニ関シテハ従来英仏間ニ相当密接ナル意見ノ交換行ハ 保)ニ付言及ナキカ右ハ英米間ニ何等カ話合付キタル 答第九項(仏国案第四条挿入) 特ニ第十 レ居ルモノノ 処ナルヘキカ此点ニ関スル両国ノ話合乃至仏国政府ノ 目下御内査中ノコトト存スル処一、 ・戦条約米国第二次提案ニ対ス (澤田代理大使来電第二一○号因参照)又二、 上回電アリ度シ 如ク仏国案第四条問題ハ同国ノ相当重キヲ置 ル 貴任国政府ノ 同提案中ニハ英国回 項(特殊地域留 態度 三付 不戦 結果

本大臣ノ訓令ト を度シ シテ仏ニ、 参考ト シ テ 独 伊、 米 ニ転電ア

域アル

事恰モ米国ニ中、

南米アルカ如キ事実ヲ篤ト了

解

シ

「テレ

グラフ」ハ

「特殊地域ニ関シ言及ナキ

ハ吾人ニ右

地

直ニ署名シ得ル程度ニ進捗セリ」ト論シ

(功ヲ確信シツツアリ要スルニ本件条約

居リ之ニ言及ノ必要無シトスルモノナリ」ト付言セリ

-本件ニ関シ二十五日下院ニ於ケル質問ニ対シ外務次官ヨ

:ハ米新公文ヲ以テ著シキ進歩ヲ示セル

困難

トスル事情アリ得ヘキ事ヲ能ク承知シ居ルモ之ニ遅疑

ハ比較的軽微事項ナリ「ケロッグ」ハ欧州諸国ノ

ルモ是等

セ

ス依然新条約ヲ簡潔ナル

モノタラシメム事ヲ希望シ其

ハ全権カ集マ

 ν

ハ ij. カ如キ

足セシメ得ル

ヤ目下

ノ処猶ホ疑アルモ本文ノ修正

エヲポム

ル

問アルヘク英公文中ニ提示セル特殊地域ニ付何等言及セサ

事ハ無カルヘシ又用語ニ就テハ英国側ニモ恐ラク疑

論シタ

ル

事アリタル

ニ顧ミ其ノ書振ノ点ニ付仏国政府ヲ満

「タイムス」

ハ更ニ

「条約違反ノ場合ニ

関

ニ巴里諸新聞

カ

文ハ条約本文ノ有ス

ル拘束力無シ スル前文ノ修正

ト

98 昭和3年6 月 29 日 田中外務· 大臣宛時 元(電報)時代理大使より

メ且之ニ対シ深甚ノ好意的考慮ヲ加

 \sim

ッ ッ

アリ

」ト答弁

セ

ルモノト認

IJ

リ「英政府

米国新提案に対する各国の動静につきキ 国務次官補の談話について

国側

ル

モ米国当局ニ於テハ大統領選挙ノ関係上本件ニ関

スル =

ノ思考スル如ク本件速急取運フ可キヤ予断ノ限リ

本 ワシント 省 ン 6 月 6 月29日後発 730日前着

共和党ノ政綱ヲ示サムトノ底意アル

ニ非スヤト察セラレ

旁

成ルヘク速ニ本件条約ヲ成立セシムルニ熱心ナルモノト認

メラル然ルニ in the names of their respective peoples

第二三〇号

国外相間ニ於テ何等カ話合行ハレ居ル事ト察セラ 閣議ノ決定ナキモ自分トシテハ条約案其ノ儘ニテ受諾シ得 昨二十八日夜招宴ノ席上「キ ニ対シ不戦条約ニ関スル米国新「ノ モノ (キ様見受ケラレ仏国新聞 |国ニ於ケル新聞論調 ノ政府ヨリモ回答ナキモ「ベネシュ」ヨリ本件ニ付未タ ト考へ居ル旨 ラ 来電アリ又英仏側ニ於テハ恐ラク両 ヨリ祭スルニ新提案ニ対ス 八良ク官辺ノ意向ヲ反映スル 4 ッ ス ル」次官補 ŀ し ニ付テ ハ 本官ノ ル ハ ル気受ケ 未タ何 ルモ右 問 様

> ク 国側 正

=

申入レ

置ク事然

ル

可キヤ

=

思考ス右思付

虚申

四号ノ通ナル

ニ付テハ此等ノ点ニ付日本ニ於テ是非ト

. モ修

ノ必要アリトセラル

ルニ於テハ事情ヲ具

、シ早キニ及ヒ米

ノ字句削除方ニ付テハ米国側ニ頗

ル難色ア

ル事往電第二二

99 昭 和 3 年6月30 日 田中外務大臣在英国佐分利的 宛臨 (電報)

米国新提案に対する英・ 仏国大使の内話につい 仏の 動静につき在英

本口 ンド 1 7月1日前着 6 月30日後発

貴電第六九号ニ関シ

モ思考シ居ル旨語リ居タ

部長モ東郷ニ対シ或ハ七月半ハ頃迄ニ

ハ

話

[合纒

ル

可

シ ノ

ŀ 西

一三一号

儘受諾スル

事ト

ルヘシト考へ居レリト

述へ尚同席

ル而

シテ若シ英仏ニ於テ承諾

ノ場合ニハ他ノ諸国ハ

其

シ居ルヲ以テ多分仏政府側ニ於テモ異存ナカ

ル

ヘシ

ト

ス

ル

ニ英仏側ニ

於テ

ハ尚何等カ ル趣ナ

, 意見ア

ル

ヤ

モ

知レ

ス

米

不戦条約米国第二次提案ニ付テ ハ英国外務省 ハ目下研究中

187

186

至ラサ 重キヲ置クヲ以テ米国以外 由ナリ尚同大使ノ談話ニ依レハ仏国ハ依然既存条約 ク 対シ急速ニ回答セサラム事ヲ希望スル旨ヲ申入レ 「チェ メ居ル趣ナリ 間 ヲ以テ(例へハ「ソヴエット」露国ト或ル連盟加入国 節 テ ノ戦争ノ如シ)一層研究ノ必要アル旨ヲ述へ居リ 「チェンバレン」氏ハ既存条約ト \neg ンバレン」氏ニ面会シ英国政府ニ於テ米国新提案ニ 趣ナリ仏国大使ノ内話ニ依レハ同大使ハ二十九日 ス 」寿府出張中ノ為未タ意見ヲ纒 ノ諸国ト ノ意見交換 ノ関係ハ尚明 ム ノ必要ヲ認 タ ル 療ヲ欠 ノ点 ル ノ タル カ其 運 = ጉ =

帰米中ノ 使館ニ於テハ以前ヨリ当国輿論カ不戦問題ニ好意ヲ有ス 又ハ英仏間ニ充分ノ諒解付キ居リタル 右ノ次第ニテ今回 題全体ヲ破壊スル結果トナル虞ア モ当地米国代理大使ト 鑑ミ本問題全体ヲ楽観シ居リ殊ニ英国ハ第十項特殊地域 タ 件ハ強テ之ヲ問題トスル事ナカル可シト予想シ居リ モ 大使モ英国側カ強テ本項ニ重キヲ置ク場合ニ ノ如シ尚仏国「ベル |米国カ其ノ第二次案提出ニ先立チ英米間 ノ累次ノ談話ニ依リテ察ス ኑ p ル ヘシトノ意向ヲ示シ居 一」氏先般来当地仏国 ル = ハ問 目 百 下 ル 大

> ν 大使館ニ滞在シ居ル為本件ニ関係アル タルモ同氏来遊ハ全ク公務ニ関係ナキ趣ナリ 如ク新聞紙 = 伝 ラ

米ニ転電シ、 仏 独、 点 連盟事務局ニ 暗送セリ

100 和3 年6 月 30 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使 (電り

米国新提案に対 話につい 対米回答を見合せられたしとのコル Ť する仏国意見内報まで我が ババンの

内 方

二七 八

本パ

IJ

月

30日前発

省

7 6

月1日前着

処大要左ノ通 不戦条約ニ関ス ルニ十九 日 $\overline{}$ ル バ と カ 本使 Ξ 内話 セ

府ニ於テ尚深ク研究ヲ要スルニ付不日何等意見ヲ内報ス 諸国大使ヲシテ各任国政府 ル迄米国政府 仏国政府 八今次米国公文接到後直二在 ニ回答セラレ サ 三対シ本件 ル様申込ミ方訓令 Ξ 関シ 旦 テハ仏国政 英 シ 置 独 7 タ

仏国政府ノ意見ハ未タ確定セサ ル カ米国政府ニ於テ本

関シテ 条約 本文ト 件ヲ取急キ居ル内情ヲ良ク諒解シ且米国ヲ何等カ 而 信シ折角工夫中ナリ英国 於テ欧州政治ニ引込ミ置クノ得策ナルヲ認メ居 意見ヲ聴ク処ナシ シテ正当防衛及不戦条約違反国ニ対スル制裁 ኑ 1 ハ今次米国政府ノ公文ニテ略満足ナルカ是ト条約 カシテ本件成立ノ運ニ至リ度キ希望ヲ有シ居レリ ノ関係及連盟規約ノ解釈ニ関シ一層明定ヲ要スト 関係ヲ明白ナラシムル事ニ付工夫シ居リ又既 政府モ研究中ト 見エ未タ何等其 グノニ点 ルヲ 1 形式 以 存 =

伊 白 ^ 転電 シ ---チ 工 ッ コ • ス P バ 丰 ア

更スル意志ヲ有セサルコトヲ確言ス」ト

1

趣旨ヲ記述シ度

ク日本政府ニ於テモ之ニ同意アリ度シト述ヘタル

関係諸国ハ連盟規約

(又ハ「ロカルノ」条約)

ノ規定ヲ変

書二通ヲ 作成シ

「ロカルノ」条約関係国代表者調印シ「本条約調印ニ当リ

一通ニハ 関係連盟国代表者他ノ

一通

=

ハ

此点ヲ明確ニスル為条約案ハ其ノ儘調印スルモ同日付議定

之等諸条約ニ無関係ナル米国限リノ解釈ニ過キ

サル

ラ以テ モ右

ル

ハ ル

」条約カ不戦条約ト抵触セサルコトヲ説明シ居

六月二十九日仏国大使来省仏国政府

対シ大体満足シ居ルモ既存条約ト

モノアリ即今回ノ米国公文中ニ

ハ連盟規約及

 \neg

p

カ

ノ関係ニ付尚意ニ満 ハ不戦条約米国修正

タ

^ 暗送セ

101 和3 年 ·6 月 30 日 在仏国安達大使田中外務大臣よ 宛り

書作成

ノ必要ヲ認

メサ

ルモ英、独、

伊等

カ

之ニ ル

同意

ナ

ル

=

此点ニ関スル見解

ハ対米回答中ニ述ヘタ

通二

テ右議定

ニ付我方

於テハ賛同スルニ躊躇セス

卜答

ヘタ

1)

定書作成に関 不戦条約と連盟規約等との関連についての し駐日仏国大使申出

付 記 六月二十九日付出淵次官と駐日仏国大使 あ

第

__

〇四号

省 6月30日後発

尚同 大使ニ対シテハ今回ノ修正案ハ前文ニ於テ相当ノ ト 述 デ 閣議 ヘタ 大使 ル」ニ対シ日本ハ直ニ調印スヘシト語 ル = ハ巴里ヨリノ入電ニ依レハ ー付右 付 ス ル 要ア ハ国務長 ル ニ付回答迄ニ 官ノ誤解ナ 「ケ ハ ル へク過日 猶相当ノ 口 IJ ッ タ グ ル Ĺ 模様ナ 時日 相違アリ |米国代 ハ _ ク ヲ IJ 理 P

引取 回 コ 等ヲ出シ抜キ米国ニ対シ魁 答 ハ英仏等 v 無力 キ旨ヲ述へ置 IJ ル \sim シ 態度ニ ト 答 ケ ル ^ 関シ タ カ 日 ル 本政府 = 大体ノ見据エッ ノ功名ヲ争フカ如キ 同 大使 ŀ ハ頗 シテ ル ハ 満足 ク迄 本問題ニ付英仏 意無ク ノ意ヲ これ発送ス 表 対 ル 米

参考ト リ度 シテ 英 米 独 伊 Ξ 転電 シ 連盟帝国事務局長ニ

約

旨 カ _

記

戦

条約問題

=

関

ジム国

大使来訪

1

件

p コ

述 述

=

戦条約 案ニ対 ヲ来訪 チ既存条約ニ対スル 等牴触ス 仏国 是等 和三年六月二十 ハ過日米国政府ヨ ク 1 ラ シ大体満足 ジ昨日本国政府ヨリ受取リタ ハ 条約 ル 国 シ 要ヲ [際連盟 テハ何等カ モノニアラサル ニ無関係ナル 痛感シ -九日仏国 ノ規定ニモ将又 シ居ルモ尚一点意ニ満 関係ナリ米国政府ハ今回ノ リ関係各国ニ送付シタ 篤 1 方法ニ依 ト詮議 米国限 [大使 コトヲ説明シ居 ド ヘ「ロカ 結果今次米国 IJ リ今少シ明確ナル ノ ル電報 解釈 ピ ル タ 1 三過 ゙゙゙゙゙゙゙゙゙ ル不戦条約 ノ」条約 i ル = 依レ Ŧ ル <u>__</u> 、公文中 右ハ モ 氏 丰 Ξ j 出淵 IJ サ *>*\ 要ス 提議 仏 解 ル = 7 モ何 ÷ 釈 修 次 ヲ 1) 玉 以 不 即 ヲ ル Œ 政 官

> プロ 付致置キタル対米回答書ニモ 国際連盟規約ニモ将又 非スト ヘタリ ŀ ŀ 通 印ヲ ル ス コ 1 へ日本政府 ル ハ大要「本条約ヲ調印スル コ N ŀ 諸大国ニ於テ仏国ノ提案通リ「プロ ヲ玆ニ確言ス」ノ意味合ヲ記述ス 不戦条約案ニ対 ノ」条約関係諸国代表者調印シ両 モ = ኑ ル ハ国際連盟関係諸国代表者調 為スト共ニ別ニ同日付 カ ノニ Ħ 」ニハ勿論米国代表者ヲ加 ノ 之ニ対シ出淵次官ヨ 同意スル ル ル 見解ヲ持シ居リ 従テ特ニ之カ 非 | ヲ作成スルノ必要ヲ認 ノ」条約)ノ規定ヲ変更ス ニ於テ右仏国政府ノ提案ニ同意アリ スト答へ置 ニ於テハ日本ト シテ ヘーロカ ゝ 其 丰 タ ニ当り ルノ」条約ニモ 明記シア リ日本政府ト つ プ ロ ノ儘何等修正ヲ施 1) シ テモ ヘサ 関係諸 印 ŀ シ他 「プロ メ ル ル \exists 之 ŀ サ 通 ル コト ル ル 為 意思ヲ シテ コ ル ij コ 国 ッ 不戦条約 二通ヲ: 賛同 メ 牴触 一通 ル モ英、 ト ŀ ŀ ハ国際連盟規 レヲ 関係国間 ハ ト シ コ ス ル 右两 度 ・シ度シ 有 コ 先般御送 ス ス = 作 独、 子旨 しノ趣 作 ル ル セ ハ 1 案 成 = モ サ \neg 成 ス 1 ヺ ŀ ヹ ル

会談 中仏国大使 国務長官 ハ最近本国ヨ **一**ク 口 ij 入手シ デ ル _ 大使ニ タ ル 電報 炆 ジ 目 = 依 本 V ハ ハ

シ ナ 更ニ ス ル テ 7 ル 不戦条約 日ヲ要ス 前回 誤解 時期 調印 ニシテ英、 対シ キモ 今回 ラ 回 ニ異存無キニ於テ = ル 答 答 議 ナ 夶 ス = 表シ引取 ル 魁ノ功名ヲ 日本政府ト こへ置 ハ [ノ修正 調印セ い如 = ル シ \sim 英 ヘキ \exists 付ス ヘシト 直 シ + チ 何 仏等ノ 案ハ ナカ タ モ ル É ラ チ ル通 日本 必要ア 1) ル 伊等ノ賛同ス 告ヶ過日来訪 ル IJ 争フ 前回 ル ・シテ タ 印ス 場所 ^ タ 態度ニ ^ ハ ナ 丰 ŀ ル カ 条約調 ルコ シ シテ 一ノ分ト ヘシ ヤ不明 ハ N 二於テ如 本問 如 (様ナ ニ付回答ヲ為ス迄 関シ キ考 ハ ŀ 即ヲ見 題 ケ ル 主義上本条約 シタ ヲ 前文ニ於テ相当ノ 答 チ ĺ) 大体 と二付英、 タ 無シ 所 付言シ仏国政府今回 ル 何 フ ト ル 7 N **今**日 ナル 述 N :ノ見据 従テ日 = 米国 ル ナ 筈無ク右 仏国 コト リ英国 / 方法ニ タ = 仏等 当リ 代理大使 こ異存無 大使 遠 エ Ξ <u>_</u> ッ Ť 丰 = 依 付次官 25 日 ハ 一於テ (猶相 相違 国務 ク 出 Ξ 本 ij ア 国 抜 = ŀ 加

次官 П 述速記

> 102 昭 和3年7 户 3 日 田中外務大臣宛(電報) 在英国佐分利臨時代理大使より

英国は自 ウ エ ズレ |衛権問 の談話について 題も含め 米国新提案を研究中

ンド ン 7 7 月 3 月 日 日 ī前着 後発

項 ス 答第一〇項特殊 ハ 要ス 一一自衛 カ如何 如 ル 言及シ居 二日本官 問題 問題 IJ 丰 御参考迄 殊 ル点少カラス連盟規約及 二然 八直接ニ *>*> 1 ノミヲ意味スル 如 何 問ヒタ ルモ つウ IJ 右 地域ニ関シ何等言明 = 工 self-defence 成 英国領土ノ /\ ル ル 目下 ニーウ IJ ス 行 ν 法律家 如クニモ見ユ ク イ カ 는 ト エ 白衛 自 」ハ米国新案ニ付テ of its -談話中 分 Ξ 口口 於テ研 } ŀ シ カ ハ云ヒ得サ ス territory テ ル ル ル 米国新公文 究中 1 処例 ハ 所ナク唯自衛 見 条約 据 ÷ \sim ツ IJ ル ハ ኑ 文第 様思 埃及 カ ハ尚 ハ英国 卜 7 ij ス 1 関係 0 研究 テ領 } = ハ 権 関 ル 回

米大使 転電 シ 仏 独 伊、 露、 良 蘭 連盟事 務局

103 昭 和3年7月7 日 田在 |中外務大臣宛||独国長岡大使より

米国新提案に関する独国当局者の談話に

(7月30日接受)

昭和三年七月七日

一四七号

特命全権大使

印

義一殿

シ置クノ必要アリ アリ之等ヲモ合セテ本問題ニ対スル独国政府ノ意向ヲ承知 回答振モ大体推察シ得サルニ非サルモ尚仏国ヨリノ提案モ 国政府ノ回答ハ曩ニ往電第四一号及本年五月一日付本第八不戦条約ニ関スル第一回ノ「ケロッグ」氏覚書ニ対スル独 一号ヲ以テ及報告タル通ニテ当国政府ノ態度ハ極テ明瞭ナ 外務省法律局長「ガウス」氏往訪ノ節其ノ所見ヲ質サ タル処其ノ談話ハ モノアリ之ニ依リ這次ノ第二回米国政府ノ覚書ニ対スル 務大臣男爵 不戦条約問題ニ関スル独国当局者談話 関スル第一回ノ「ケロッグ」氏覚書ニ ト存シ本月三日重光参事官本件主任者タ 田 要領左ノ通ニテ以テ第二回覚書ニ 中 ラ件 対ス シ

重 査閲相成度此段報告申進ス 光参事官ノ質問ニ答へ「ガウス」氏 重光参事官 「ガウ Ź 法律局 長対 ハ 談要

当国政府態度ヲ窺フニ足

ル

E

1

ァ

ij

卜

思考ス

ル

付右御

存ナキコトハ前回ト変ルコト リ今回 回米国提案ニ対シ独逸ハ明白ニ之ニ異存ナキ 不戦条約ニ対スル独逸ノ態度ハ極メテ簡単 ノ米国新提案ニ対シテモ独逸トシテハ何等之レ ・ナシ = \exists シ テ既 ŀ ・ヲ回答 = = 第 セ

独波関係ナルヘキモ万一若シ独逸カ波蘭ヲ攻撃スル場合 意味ノコトニシテ又実際上恐ラク仏国ノ最モ懸念スル所 別ノ議定書ニ明記シ参加連盟国カ之ニ署名スルコト及 戦争行為) ニシテ法律的及実際的見地ヨリ見ル ハ独逸ハ「ケロッグ」不戦条約ノ違反国トシテ其ノ条約上 スル趣ナルモ余ノ見解ニ依レハ右ハ法律上ヨリ見テ全ク無 カルノ」条約ニ付テモ同様ノ議定書ヲ作製スル 聞ク所ニ依レ 援助ヲ全ウシ得ヘシ 利益ヲ失フヘク随テ仏国ハ国際連盟規約其他ニ基キ波蘭 ガ 「ケロッグ」不戦条約案ト矛盾 ハ仏国政府ハ国際連盟規約 ¬ カル ノ」条約ニ付テモ同様ノ理 モ仏国ノ斯ノ (殊ニ セ サ 第十六条 コトヲ提案 如キ ル旨 ラ特

ノ解 スル ニ苦シム所 ナリ前記仏国修正 案ハ到底成功ノ

見込ナカ ル ベシト云ヘルニ対シ

「ガ」右回答ハ何分内閣成立早々ノコトニモアリ ニ其ノ準備ニ着手シツッアリヤト 重光ハ独逸ハ今回ノ米国新提案ニ対シ速 -問ヒタ ル ニ回答スベ 処 未 丰

ダ

其

1

モ 一 日 モアリ尚幾分時日ヲ要スヘシト云ヘルニ依 準備ノ運ビニ至ラザル ノ早キヲ争フベキ問題ニ非ズ而モ閣議ニ ガ其ノ内容ハ想像ニ難カラザル ij 提出ノ必要 モ尤

ナリヤト問ヒタルニ 重光ハ然ラバ独逸ハ本件ニ 関シ英仏ノ態度ヲ顧 慮 ス ル 心 算

ス 回答発送ノ ナシ居ルモ余リ長引ク 「ガ」ハ独逸ハ前記ノ通リ本件ヲ審議中ニシテ素ヨ ル 態度ヲ充分酙酌シ度キ為メ種々英仏大使等ト ガ如キ意向ヲ有スルモノニ コト ŀ ナル ベシ但シ英仏ニ抜馳シ ハ如何カト思ハル 非ス ŀ ルニ付何レ其ノ内 タ テ性急 ニ 意見交換ヲ リ英仏 П

本信写送付先 米

104 和3年7月8 日 田中外務大臣宛在英国佐分利臨 (電報)時代理大使より

米国新提案中には既存条約との関係上問題あ

کے 英当局の見解について

ロンド

本 省 7 月 8日

申越シタルヲ以テ往訪 旨外相ニ申入レ置 米国新提案ニ対スル英国ノ態度ニ付テ キタル処六日米国部長ヨ いシタル = ハ 随 IJ 時内報 內話 シ = 接シ 度シ

一、部長ハ米国案中最モ注意ヲ要ス 仏顧問 触セスト ョ」両法律顧問最近寿府滞在中此ノ点ヲ研究シ米国案文 ノ関係ナルカ前文第三項ニハ ニ今 不取敢右内報スル次第 場合ヲ生スルノ惧アリ英「ハースト」、 解釈次第ニテ抵触スル場合アリトノ意見ニ一致セリ然 ハ法律家ノ会合ヲ催シタ qualificationヲ付セス従テ連盟規約第十六条ト抵触 回寿府ニ赴カサリシ独逸「ガウス」法律顧問ハ抵 ハ伯林ニ赴クコトト \exists ノ意見ナル趣ナリシヲ以テ同氏ト会見ノ為英、 ኑ ナ キ様注意ア ナ ル 1) ŋ ナリ六日同地ニ到着 度 カ本件世間 resort to war -シ ノ誤解ヲ招 ŀ ٢ 認ム 言 ノ問題 ル 仏 ク惧 ハ 既存条 つ フ 7 1 セ アリ 口 ル ナ ル 筈ナ テ何 マチ ヲ ル 以 ኑ ス

二、右抵触ノ点ニ関スル部長ノ説明ニハ 居ル 条約 アリ今一度懇談ノ上必要アラハ再電スヘキモ先方カ抵触 戦争ヲ為スコトハ不戦条約ニ抵触セサル ヲ生スト認メ居ル ニ両条約ニ加入セル他外国カ右攻撃国ト連盟規約ニ依 モ不戦条約ニ加入シ居ラサル ト連盟規約ト ノ双方ニ加入セ ハ左ノ点ニアリ 、ト想像 ル 一国ヲ攻撃シタ 一国カ連盟ニ 聊 ヤ否ヤ セラル即 カ明瞭ヲ欠ク処 パチ不戦 ル場合 加 入シ ル

ルヘシト言ヘリト」ノ目的ヲ有スル戦争ニアラスト解釈スルモ一方法ナト」ノ目的ヲ有スル戦争ニアラスト解釈スルモ一方法ナー、談話中部長ハ前記抵触ヲ除去スル為ニハ連盟規約ニ基三、談話中部長ハ前記抵触ヲ除去スル為ニハ連盟規約ニ基

四、本官ヨリ英国ノ 二号 ナル 元来第十項 意向ナリヤ ニハアラスト述ヘタル後尤モ政府カ本件ニ関シ結局如何 拡張ト 態度ニ出ツヘキヤハ全ク見据付カストテ往電第一三 「ウェ ル次第ナル ルスレ ŀ モ見ラル ハ他国ノ領土ニ於テ行動スル場合ナレ 問ヒタ カ日本ニ取リテモ同様ノ場合アル イ」ト同様ノコトヲ内話セリ尚同氏ハ 対米回答第十項 ルカ故ニ特ニ ルニ同部長ハ決シテ放棄シタ 明言シ置ク ハ英国ニテ固 ノ要アリ 執 ハ自衛 ル セ 次第 ヘシ サ ኑ ル

> 上多少 ヲ執 ŀ 別ニ之ニ対シテ先方ノ積極的確認ヲ求メタ 府ノ新条約受諾ハ特殊地域ニ於ケル自由行動ヲ害 防衛ストアルヲ以テ多少ノ疑ヲ生スヘシ尤モ同公文中ニ 取リテハ自衛権 即チ露国カ満州ヲ侵ス場合日本 ノ了解ノ下ニ之ヲ為ス次第ナリト闡明シタルモ グ」ノ新公文ニハ攻撃又ハ侵入ニ対シテ其ノ「領土」 「戦争ヲ為スノ用意ハ国家カ之ヲ決定ス」トアリテ解釈 モ解シ得 ル ノ遊隙ナキニモアラス尚英国回答第十項ハ英国政 ノ必要アル ヘシト付言セリ ノ発動ナリ ヘシト言ヘルニ依リ ト述へタ ハ同地方ニ進出シテ行動 ル ニ同氏ハ 本官ハ右 ル = 「ケロ ハアラ ノニシテ 八日本 セ スト ヲ Ė

米へ転電シ仏、独、伊、露、白、蘭、連盟へ暗送セリ

昭和3年7月1日 田中外務大臣宛(電報) 田中外務大臣宛(電報)

105

レーの内話について英国政府は近々対米回答発出予定の旨ウェズ

本 省 7月13日前着ロンドン 7月12日後発

第一三七号

往電第一三三号ニ関シ

取ラサル 答ハ大体何日頃トナル可キヤトノ本官ノ問 ケ 米ニ転電シ仏、 規約第十六条ニ抵触セストノ意見ニ一致シタルニ付英国政 ment of national policy トシテ 戦争ヲ否認 スル事 十二日「ウェズリー」ノ ル英、 ハ近々米国政府へ回答スヘシト内話セリ尚 ヘキモ 独三国法律家ノ研究ノ結果米国提案ノ 的確ナル日取リハ未タ予報シ得ス 独 伊、 露、 求メニ依り往訪シタルニ伯林ニ於 白 連盟事務局ニ ニ対シ余リ手間 「ウ」ハ右回 ト言へリ 暗送セ ハ連盟 instru-

昭和3年7月1日 田中外務大臣宛(電報)

106

ドイツの対米回答について

宛第六五号 電 七月十二日付在独国長岡大使より田中外務大臣

· >) † ;] ; ;]

-ツの対米回答要領

本 省 7月13日前着ベルリン 7月12日後発

第六四号

十一日夕刻外務次官ノ求メニ依リ往訪シタル処(外相ハ引

取扱相成度 回答文ハ十三日朝発表ノ手筈ナ キヲ以テ今日回答ヲ発 シ 続キ転地療養中)別電第六五号対米回答写ヲ手交シ既ニ第 テ 回回答ニテ不取敢留保承諾ノ意ヲ表明シタ ハ今回ノ提議ニ対シテ何等回答ヲ遅延セシムル理由 シ (シ)タル次第ナリ ル趣 三付其 ト付言シ 御含ミ ル独逸政府 タ ニテ 1) ナ 卜

米へ転電シ英、仏、伊へ暗送セ

IJ

別雷

独逸対米回答要領第六五号

本べ

省

ル

ij

ン

7月13日前着 12日後発

印 独逸政府ハ米国新提案ヲ慎重考慮シタ = 米国公文中ニ記載セラレタル処ヲ了承シ条約案中ノ ニ付テモ亦同意ナル シタル独逸側見解ト根本ニ於テ一致シ新提案中全部ノ ラレタル米政府ノ立場ハ既ニ四月二十 ス 対スル説明ニ同意シ従テ今回提案ノ形ニ於ケ ル ノ用意ア ル コトヲ声明シ得 ニ依リ独逸政府ハ兹ニ六月二十三日付 ル ヲ欣幸ト 七日付回答中ニ ルカ右提案中 ス ル 条約 各条項 = 変更 二調 明ニ 掲 第在巴里日本大使館ヲ経テ又ハ在東京仏国大使館ヲ経テ帝仏国政府ノ見解ヲ敷衍記述スル積リナリ尚右公文ハ発送次

巴里米国大使ニ公文ヲ送リ該公文中ニ右六月二十三日付米

・提議シタル条約案ニ調印スルコトニ決定シ一両日中ニ在

満足シ何等ノ留保又ハ修正ヲ求ムルコト無シニ其ノ儘米国 シタル自衛権自由行動其他ノ点ニ対スル米国政府ノ説明ニ

国政府公文ニ列記シタル主ナル事項ヲ適宜指摘シ之ニ対シ

問題ヲ審議シタル結果六月二十三日付米国政府公文ニ列記

電訓ニ依レハ本国政府ハ去ル十一日ノ閣議ニ於テ不戦条約 昭和三年七月十三日仏国大使出淵次官ヲ来訪シ本国政府

1

記

^

転電

不戦条約問題ニ関シ仏国大使来訪ノ件

107 昭和3年7月13 日 田中外務大臣宛在仏国安達大使 (電報)

会談について 仏国の対米回答に関するレジェー官房長との

記 仏国の対米回答に関する七月十三日付出淵次官 と駐日仏国大使との会談要録

7月14日前着 13日後発

第一九五号

触ス 十二日 要左ノ通 大臣官房長「レジェー」ニ付問合セタル処同人ノ述ル 回答ヲ決定 リ不戦条約ニ関スル ルモノニアラスト 「エリオ」ヨリ十一日ノ閣議ニ於テ「ブリア セル趣内話アリタルニ依リ早速河合ヲシテ外務 米国案ハ連盟規約其ノ他現存条約ト抵リ十一日ノ閣議ニ於テ「ブリアン」ヨ ノ意見報告アリ閣議ハ之ヲ認メ対米 処 大

─十一日閣議ニ於テ対米回答ノ骨子ヲ決定シタ 仏国大使ニハ右回答全文ヲ電報シ十四日之ヲ日本政府ニ 通報スル様訓令シ置キタリ ハ十四日午後当地ニ於テ米国大使へ手交ノ筈ニテ在日本 ル カ右公文

> 口嚢ニ仏国側ヨリ日、英、独等ニ提議セ 滞在シ居ラサリシニ依リ日本側へハ倫敦ニ於テ「ハー 下ニ米国案ニ賛同スル次第ナル旨ヲ記載スル筈ナリ 関スル諸点ヲ「テークノート」シ仏国政府ハ右ノ諒解 果ヲ通告スル事ト為シ伊国側へハ当地ニ於テ「フ 防衛現行条約 ョウ」ヨリ通報済ミナリ ト」ヨリ伊国へハ「フロマジョウ」ヨリ各々右会合ノ結 ル様極メテ内密ニ行ハレ又寿府ニハ日本及伊国ノ専門家 ル為巳ムヲ得ス之ヲ断念シタルカ今次ノ対米回答ニ付テ ハ過般ノ米国公文及新条約案「プレアンブル」中ノ正当 ハ英国政府ニ難色アリ独逸政府亦米国ニ気兼ネシ反対 1 ノ関係、違反者ニ対スル行動ノ自由等ニ ル議定書作成 口 グノ件 マ ス サ セ

四不戦条約調印ノ場所及時期ニ就テハ極メテ内密ノ話ナ カ仏国政府トシテ未タ何等公式ニ申出タル次第ニハ非 十五日頃ナ ニテ独ノ「ストレゼマン」亦巴里出馬ニ異存無シト承知 ルモ仏国ヨリ巴里ニテ調印方提議セハ米国ハ異存無キ筈 ス但シ右調印ハ「ス」氏ノ ル可シト思考ス 健康ノ 関係モアリ多分八月二 +

 \sim 案ハ如何ナ セサルヘシト答へ置キタルコトアリシカ右「プロトコル 重ナル関係国ニ於テ同意スルニ於テハ必スシモ同意ヲ躊躇 タ ヤト 1) 質問 シテハ斯カル ル シタルニ其ノ 事情 ノ下ニ仏国政府ニ つ プ ロ 辺ニ付テハ何等報道ニ接セ ኑ コル」ヲ必要ト 於テ見合セタル ハ認 メサ スト 次第ナ

出淵次官口述速記

108 昭和3年7月14 日 田中外務大臣宛(電報)在英国佐分利臨時代理大使より

につい 英国の対米回 て 一答の概要につき英当局者の内話

本ロンドン 省 7 7 月 月 15 14 日前着 日後発

第一三九号

往電第一三七号ニ関シ

ル上新聞

ごん

右通報ニ対シ出淵次官ヨリ一応謝意ヲ述ヘタ

ル所

、ニ依レハ仏国政府ニ於テハ明十四日ノ国祭日ニ於テ

国政府ニ通知スル筈ナリト語リタリ

十四日米国部長ノ本官ニ対スル内話左ノ

二、三国法律家会合ノ結果米国政府ノ意思ハ前文第三項ノ

過日 ネタ

ープ

 \Box

コ ル

案ニ付貴大使ヨリ

御話アリ

タ

ル 際日本 ルニ或ハ然ラムト答ヘタリ次イテ出淵次官ヨリ自分ハ

政府ニ只今御話ノ回答ヲ発セラル

ルル趣ナル

カ如何ト尋

一、英国政府ハ尚「ドミニオンス」ト往復 頃ニハ米国政府ニ回答シ得ル見込ナリ 中 ナ ル Ŧ 来週

初

resort ス又右十六条ニ依 ノ意見 コト明カト instrument of national policy to war ニ一致シタ ・ナリタ ハ不戦条約加入国ニ対ス national policy ノ為ニスル戦争ニ非ス(ル戦争ハ不戦条約案前文及第一条ニ所 ル次第ナ ルヲ以テ連盟規約第十六条ト抵触 ル戦争ノ ミヲ 指 セ

Ę 米へ転電シ 単ニ英国政府ノ諒解ヲ 英国回答第一〇項特殊地域ニ付テ 仏 独、 伊、 白 remind ス 露、 蘭、 ルコトト 連盟事務局 ハ新回答中ニ ・ナル ~ ^ 暗送セ 於テ シ 簡

109 和3 年 7 涥 16 В 田在 中伊 外国 務松 大臣宛使 (電り

米国新提案に対 する伊国の回答について

本 p 省 7 7月17日前着 7月16日後発

七四

不戦ニ関スル米国提案ヲ慎重研究セル伊国政府ハ右不戦条 キ回答文ヲ在当地米国大使ニ手交セ 不戦条約 Ξ 関シ 米国政府カ去ル六月二十三日付 「ケ ロッグ」提案ニ関シ十五日伊国政府 ル旨公表セラル 「ノ 1 | 二記載 (人左) 加

> 提ノ下ニ右条約調印ニ合意スヘキ旨声明 セ ル解釈 ラ 「テー ク 1 1 ト」シ之ニ同意ヲ表シ ス 併 セ テ右

米ニ転電シ **英**、 仏 独、白、 波蘭、 「チ ı ッ コ L__ = 郵送

昭 和3 年7月 16 日 田中外務大臣中在独国長岡大統 宛使 て

110

独国の対米回 答提出の経緯につい

機密 本第一五八号

> (8月6日 接受)

昭 和三年七月十六日

特命全権大使 長 印)

外務大臣男爵 田 中 義一殿

不戦条約問題ニ関スル件

成案ニ同意セシメント努メタル テ伯林ニ来リ \neg ニ対シ英仏両国側ハ独逸側ヲ説得シ仏ノ希望スル議定書作 ハ嚢ニ本月七日付本第一四七号ヲ以テ及報告タ ハ 本問題ニ関スル第二回 プロ 不取敢及電報置タル通ナル処本問題ニ対スル マジョ」ハ「ジェネヴァ」ニテ会合協議ノ ガ ウス」 法律局長 ノ米国覚書ニ モノノ如ク 1 対ス 談合ヲ試ミ ル \(\frac{1}{1}\) 当国 |政府 タ ル通ニテ之 独逸ノ態度 後相携 スト」及 ル モ 1 ーガ 口 ~ 答

果独国 ヲ詳細聴取シ大ニ独逸ノ態度ヲ諒解スルモノアリタルモノ 国ノ 門家モ 如 Ĺ. ク 、兹ニ三国専門家ノ意見ハ遂ニ一致スルニ至リ其 関係セル諸保障条約ト ハ初ヨリ報告スミナル自己ノ見解ヲ変更セス又仏英 ハ 直ニ既報ノ対米回答 「ケログ」条約案カ連盟規約「ロカルノ」条約将又 ノ ヲ発スル 関係ニ関スル独逸側 コト ١ ナリタ パノ見解 ル 次第 分結

承知 独三国 致シ各自国政府ニ此ノ旨報告スル シ居ル局次席 右ニ付重光参事官ヲシテ 経緯ヲ タ ヤピニ休暇ヲ取 シ ル 居 カ 政府専門家ノ 聞出サントシタ $\overline{\nu}$ ハ聞カサルモ其ノ IJ 1 「マルチウス」氏ニ面会シタル処同氏 述へ大体上記 リ不在中ニテ本件事務ニ関シ同氏ヲ 間 ニ具体的ニ如何ナル意見カ交換セラ ル処同局長ハ右対米回答ヲ決定ス 「ガ 結果三国専門家ノ意見カ ウス」 局長ヲ往訪 如 キ内情ヲ談話シ コトニ決 シタ ルコ セシ ヌ 全然合 ハ英仏 ŀ メ ル 代理 詳細 趣 丈 ハ

本信写、 英 米 仏

111 昭和 3 年7月17 日 田在 宛使 (電報)

Ξ

対シ

右

如

キ攻撃的意図ヲ

有

セ

サ

ル

事ヲ公ニ

声

明 国

セ

仏国カ無留保

ニテ

ーケ

ログ

Ĺ

案ニ賛同セ

ル

事力

仏国の対米回答に関する独外務省当局 者 の

話について

本べ ルリ ン 7 - 月18日前着 - 月17日後発

省 7

不戦条約3 今⁽²⁾ ニ 回 対 局長 通ナルカ仏国モ終ニ米国案ニ賛同ス ヲ発スル 会議ニ於テ三国法律家ノ意見一致シ各国政府ニテ速ニ 之ニ対スル感想ヲ問 家会議後休暇ヲトリ不在)先ツ仏国ノ対米回答ニ付 公信ヲ以テ報告済ナル処尚十六日重光ヲシテ外務省 ニ於ケル英独仏三国専門家会合ニ関シ入手シ得タル ントセル 戦条約問題ニ関ス シテ非常ニ満足シ居レリ蓋シ仏国カ本問題ニ付留保 シ攻撃的性質 「ケプケ」(代理次官)ヲ往訪シ コトト 小協商其 ナリタルハ曩ニ法律局長代理ヨ ノモ ノ他ノ仏国ノ有ス ハシメタル処曩ノ伯林ニ於ケル ル当国専門家 ノ ト - 独逸側ハ 「ガ 解シ居ル ルニ至レ ル条約 (「ガウス」 ウス」ノ意見及伯林 ハ孰 処 ル リ説明セ ハ独逸政府 V 専門家 内容及 ハ専門 欧羅巴 情報 モ 回答 ラナ ル

四号ノ

テ

右ニ反スル

シキ結果トナ

(1

本パ 省リ

7

·月18日前着 -月17日後発

仏国の対米回答に関する仏国諸紙の論調につ

IJ

一九九

ノ

案

十六条及「ベル 当防衛ノ権利 益擁護ノ為ノ各国共同ノ戦争ハ之ニ属セサル 依り否認セラル ル 米仏両国政府ノ意見一致ニ至レルモノ 新聞紙ノ多数ハ之ヲ以テ仏国側ノ立場ヲ害ス 不戦条約ニ関スル十四日付仏国政府ノ対米回答ニ ハ不戦条約ノ為何等ノ影響ヲ受ク シ居ルモ中ニ 者無キニ非サ ハ連盟規約ト ハ依然認メラレ居ルヲ以テ連盟規約第十五、 サイユ」条約第四十二乃至四十四条ノ規定 ヘキハ利己的征服的ノ戦争ニシテ一般的利 ル処右ニ関シ十七日「タン」ハ不戦条約ニ ノ関係ニ付依然不満ノ意ヲ述フ ル事無シト説明 ト為シ慶賀ノ意ヲ表 ノミナラス正 ル事無ク 関 セ IJ シ シテ 当地

伊 へ郵報セ IJ

ル旨 ゼ

7

113 昭和3年7 月 18 日 田中外務大臣宛(電報)在英国佐分利臨時代理大使より

英国の対米回答要領報告

サル 答へタリ ン」自身ノ出馬不可能ナリ フニア 右協定ニ付テハ同局長ハ重光ニ対シ仏ノ意向ハ巴里 疑念ヲ釈キタル点多キニ依ルモノナル事ヲ察 事情ハ仏国カ専門家会合ノ結果独ヲ動カシテ「ケロ 同局長ノ談話等ヨリ見ルニ専門家ノ会見ノ一致セ 独乙国民トシテハ鮮カラス安心ヲ得ル次第ナリト 国ニ関シ何等攻撃的態度ニ出ツル考ナキ事ヲ諒解シ ニ対シ仏ノ議定書作成案ニ賛成セシムル事不可能ナルヲ悟 「ラインランド」 撤兵問題解決セサル今日「スト ハ別ニ 定見ナキモ 若シ巴里ニ於テ 行ハルル タ ル ヘカラサ ŀ ルモ米国側ノ意向ハ今日迄明カナラス又独乙トシテ 同時ニ独乙ニ「ラインランド」又ハ波蘭等東欧諸 ル地位ニ立ツヘシ是仏国ノ無留保参加 ト自分一己トシテ 場合ニ ハ考へ **ルセシメ** V ル 語 一於テモ 、従来ノ 他面 居 タリ尚 グ 1 一ニテ行 レリ尚 三依

米 仏 伊 転電 セ 1)

112 昭和3 年7月17 日 田在 中仏 外国 7務大臣宛

别 雷 田中外務大臣宛第一四四号 七月十八日付在英国佐分利臨時代理大使よ ŋ

英国の対米回答要領

本 ロンドン 省 7 月 7月18日後発 19 日

一四三号

付言シ 二十日公表ノ筈 印スヘシトノ趣旨ヲ冒頭トス)ハ本十八日在英米国代理大 不戦条約二 ニ手交セラレ 回答文外務省 関スル英国政府 コナル タル趣ヲ以テ日本政府へ転達ア ニ付ソレ \exists 1] 送付シ ジノ回答 迄ハ機密ト 来 ν (米案文ヲ其ノ儘 Ŋ 本要領別 セラレ タ 'n タキ 電 丰 第 コ ニテ ト 旨 調 ヲ 及

在米大使へ転電シ仏、 独、 伊、 露、 白 蘭 波 蘭、 「チ

コ 連盟事務局へ ・暗送セリ

本 P ン 省 7 月 19 **7**月 18 日 日 I前着 1後発

四 四号

往電第一四三号ニ関シ

英政府ハ六月二十三日付米国公文ノ条約新案文ヲ其ノ

加

シ

A

=

<u>ج</u>

儘受諾シ米国政府ノ指定スル 時期及場所ニ於テ之ヲ 調

印

以テ読了セリ 及是迄関係国政府ノ提示セ 英国政府ハ米国公文所載 ル意見ニ ノ条約案ノ意味ニ 関ス ル見解ヲ興 関ス ル 休り 説 明

如キ如何ナル条約ニモ同意シ得サ 規約及「ロカルノ」条約ニ依リ負 政府ノ政策ノ基礎ナル事及是等ノ約束ヲ弱メ又ハ覆 則ノ承認カ英国政府ニト 五月十九日付 ノ英国回答中条約違反 リ重要ナル事ヲ説明 ヘル義務ノ尊重カ英国 ル旨ヲ指摘 ノ場合 七 セ = 1) リ又連盟 スル ス カ 原

約 ラ 府ノ満足スル処ニシテ前項第一点ヲ満タスニ充分ナ セストノ四月二十七日付独逸政府公文中ノ意見 国タ 英国政府 ル 英国政府ハ熟(考) 新条約案前文ノ条約違反国ニ対スル制裁規定ハ英国 ニ依リ負 総テヲ ルモ ^ ノト思考セス又是等ノ義務カ何等本条約 ク ハ「ロ ヘル義務ノ履行ハ条約ノ受諾 入 勧誘セラレ セ カ ル ノ結果連盟規約及「ロカル ル タ 」条約国ノ総テカ新条約 在ル ル事及米国政府ノ希望カ連盟 事ヲ 知り ニ依リテ阻止 ニ満足ス此 ルニ賛同ス ノ」条 1 1 原調 ·抵触 IJ セ 政

招請ノ発セラルヘキ事ヲ信ス 新運動ニ能フ限リ多数 ノ国家ヲ 参加 セ シ A ル 為一 般的

一、五月十九日ノ公文中ノ特殊地域ニ 関ス 下ニ新条約ヲ受諾スルモノナル事ヲ再言セントス ル行動ノ自由ヲ本条約ニ依リ妨ケラレスト 関 シ英国 ノ諒解 府 八之 1 =

ス グ」演説中ノ意見及各国家ノミカ自衛戦争 本条約ハ 何等自衛権ヲ 制限シ 又ハ 害セスト ル ノ権能アリトノ同氏ノ意見ニ全然賛同 ス ラ , 必要ヲ 1 「ケ 決定 p

盟事務局へ暗送セリ 米へ転電シ仏、 独、伊、 露、 白 波蘭、 チ エ <u>_</u> 連

114 昭 和3年7月18 日 田在中外ル が新大臣国 宛栗 (電路 鬼報)
臨時代理大使よ

べ ル ¥ I 政府の対米回答につい て

本 ブラッセル 省 7月19日前着 1日後発

居レ 白国 共ニ該案カ連盟規約及「ロカ ルモノ 政府ハ十七日在白米大使ニ対シ不戦条約案ヲ受諾ス ト認ムル旨回答セリ ル ノ 条約ヲ完全ニ支持

シ ル 第二一号

英 仏 米 独 伊 \neg チ ェ \exists Ц 巴連 ^ 、郵送セ IJ

115 昭 和3 年7月 19 日 田中外務大臣在米国澤田臨時 宛時 光(電報) 時代理大使より

るとの米国紙の報道について 米国国務長官は 我が方の速か な回答を懇望す

本 ワ シ ン ŀ 省 ン 7月20日前着 7月19日後発

第二五五号 (至急)

往電第二五一号ニ関 シ

日 済ニ付之亦多分二十日発表シ得ルナラント考 ッコスロバキア」ノ回答モ既ニ同国駐在米国公使館ニ交付 リニ本件取纒メ方急キ居ル模様ニ見受ケラレ ントノ趣旨ノ情報掲載セラレ右ハ如何ニモ国務省側 IJ ク旁当局ニ於テハ本条約調印ノ手筈ニ付折角考慮ヲ遂ヶ居 答出揃フヘク日本モ週末迄ニ 両日来ノ当地各新聞ハ官辺ノ消息ト ハ B 本以外関係国全部ョ ·他国ノ外務大臣出席セハ恐ラク国務長官モ渡仏ス 本側回答ノ遅延セサラン事ヲ懇望セラレ居レリ IJ ノ回答出揃フ次第ニ付長官ニ於テ ハ具合善キ回答ヲ為スナ シテ今週中ニ タル処 ヘラレ之ニテ 各 ・「チェ ジニテ頻 ル 卜 国 述へ ナラ ル 1

仏ニ転電シ仏ヲシ テ英、 独 伊 = 転電 シ連盟帝国事務局

長

ニ転達セシ

٨

タ

1)

チ I コ政府の対 米回答につい 116

和

3

年7

亨

19

日

田り在

チ

£

ッ

コ

ス

p

ヴァ

キア国木村公使

中外務大臣宛

(電報)

7月20日前着 19日後発

ДЦ 号

近ク外相ニ面 公使ニ与フル件ニ付同意ヲ得タル 招致ニ関スル報告ヲ為シ右承諾ニ関スル回答ヲ二十日米国 態度 ·ベネシ 次第追報ス ハ既報ノ通外相ノ議会演説中ニ要ヲ尽シ居ル 2 ル 外相ハ十八 談 事 ン上詳細電報致ス ・致シ タ 日ノ閣議ニ於テ米国不戦条約 ル趣ナリ ヘク又右回答文ハ公表ア 本件ニ関ス 処ナリ ル当国 加盟

117 和3 年7 户 20 H 達在田 大国学院 (電報) 田臨時代理大使及び在仏国安大臣より

戦条約案に対する我が方の対米回答提出に

つい Ť

別 電 代理大使及び在仏国安達大使宛合第二七二号 不戦条約対米回答英訳文 七月二十日付田中外務大臣より在米国澤田臨時

付 記 七月二十日閣議決定の不戦条約対米回答 七月二十日大臣会見録

本 省 7 月20日後発

合第二七一号

= 三時在京米国臨時代理大使ニ手交シ 不戦条約対米回答英訳文別電第二七二号ノ通本二十日午後 (安達大使宛ノ分へ追加) 回答写送付明二十一日正午新聞へ公表 同日在京関係国大公使 筈

務局長ニ転達アリ度シ 別電ト共ニ英、 独、 伊、

良

波

智、

ニ転電シ連盟帝国

事

別

本 省 月 20 日後発

合第二七二号(至急)

Department of Foreign Tokio, July 20th, 1928 Affairs.

204

your Note of the 23rd ultimo in which you recall the 20th of April the Government of the French Rein a position to give favourable treaty, and inquiring certain correspondence, the preliminary 13th of April of this year, enclosing, together my attention your Government's identic Note of the matter emphasized in the French alternative that Government on their own draft, in view of an alternative draft treaty, and that on the 28th public circulated among the America explained fully the construction placed by April the Secretary of I have the honour to acknowledge the receipt of Your Note under reply further whether this Government were State of the United States interested consideration to the recalls that on Governments draft of a with the ö $^{\text{of}}$ of

You now further inform me that the British, German, and Italian Governments have replied to your Government's Notes of the 13th April last, and

> Dominions and of India have likewise replied to inthat the Governments of the British self-governing underlying the proposals: nor have they referred expressed any dissent and you observe that none of these Governments has Britannic Majesty's Government in Great Britain: vitations addressed to them on the suggestion of nations made by the Secretary of State in his speech specific you proceed to reinforce in detail the explaţo, modifications of the or any disapproval of the from the construction above text of the draft: suggested principle

You then transmit for the consideration of this Government the revised draft of a multilateral treaty, which takes in the British self-governing Dominions, India and all parties to the Locarno Treaties, as original parties, and in the preamble of which is included a statement which is directed to recognizing the principle that if a state goes to war in violation

of the 28th April.

of the treaty, the other Contracting Powers are released from their obligations under the treaty to that state.

ernments in signing a definitive treaty the United States and other similarly disposed whether my Government are prepared to desire of the Government of the United States to know tion or reservation. You conclude by readiness to accept it in this form without qualifica-Government will be able promptly to indicate their at once, and instructed transmitted. Such a multilateral to state your Government are ready to sign you express the fervent treaty as so revised, you are expressing the hope that this in the form join with Gov-

In reply, I have the honour to inform you that the Japanese Government are happy to be able to give their full concurrence to the alterations now prorosed, their understanding of the original draft submitted to them in April last being, as I intimated

in my Note to His Excellency Mr. MacVeagh dated the 26th May, 1928, substantially the same as that entertained by the Government of the United States. They are therefore ready to give instructions for the signature, on that footing, of the Treaty in the form in which it is now proposed.

I cannot conclude without congratulating your Government most warmly upon the rapid and general acceptance which their proposals have met with. The Imperial Government are proud to be among the first to be associated with a movement so plainly in unison with the hopes everywhere entertained, and confidently concur in the high probability of the acceptance of this simple and magnanimous treaty by the whole civilized world.

I beg you, Monsieur le Chargé d'Affaires, to accept the renewed assurance of my high consideration.

Signed: Baron Giichi Tanaka,

Minister for Foreign Affairs.

Mr. Edwin L. Neville, Chargé d'Affaires, States ot of the America

付 記し

和三年七月二十日 閣 (議決定)

不戦条約対米回

詳細 米利 共 以書: 同文通牒ヲ指摘セラレ候右貴翰中ニ於テ四月二十日仏 草案ヲ同封シ帝国政府ガ右草案ニ好意的考慮ヲ 敬承致候右貴翰中ニ於テ貴下 国 丰 和国政府ガ関係諸国政府ニ条約代案ヲ送付セル旨 説明セル旨更ニ申述ベラレ候 加合衆国国務長官ガ自国案ニ対スル 代案中ニ力説 ヤニ付照会シ越サレタル本年四月十三日付貴国政府 翰啓上致候陳者客月二十三日付貴翰ヲ以 セラレタ ル事項ヲ考慮 ハ曩 Ξ 関係公文ト 同国政府 シ四月二十 テ 共 加 御 ラ フ = 申 解 条 八 並 ル 越 八日亜 立っ右 約 蘭 7 釈 ヲ 得 ヲ 西 ノ 1 趣

政府 貴下 英本国政府 ル旨通報 \ddot{j} ハ尚英国、 書翰 にセラレ 対対 ラ 意向ニ基キ発セラレタル 独逸国及伊太利国政府ガ四月十三日付貴国 ジ回答 候右諸政府中前記解釈ニ異議ヲ唱 セル旨並ニ英国自治領及印 招請ニ対シ同様回答 度 \sim 政府 又 ハ モ

> ヲ詳細ニ亘リ V 案ノ案文ニ対シ特ニ修正ヲ申出デタ 本提案ノ基礎 且四月二十八日ノ演説中ニ ,再説セラレ タ ル 原則 ベニ不同 於テ :意ヲ表明セ 国務長官ノ為シタ ル モノ無之旨陳述セ ル モ ノ無ク又右草 ル ラ

慮ヲ求メラレ ラレタル多数国間条約 訴ヘタル場合他ノ締約国ハ右国家ニ対シ本条約上ノ義務 締約国ヲ原締約国トシ且若シ一国カ本条約ニ違反シ戦争 次デ貴下ハ英国自治領、 免ル ベジト 候 ノ原則ヲ認ムル趣旨ノ字句ヲ ノ 印度及 修正案ヲ御伝達相成 -P カ ル 1 前 Ĺ 条約 帝 文中ニ挿入 国 政 1 総 府 テ ノ考 セ 3

国政府 用意アリ 共ニ玆ニ伝達セラレタ ル ガ 直ニ署名スル 貴下ハ右ノ如 旨ヲ直ニ開示センコトヲ熱望セラレ候貴下 制限若ハ留保無ク該条約ヲ現案文 ハ帝国政府ニ於テ合衆国及他ノ賛意ヲ ヤヲ承知シ度キ旨申述ベラレ グル修正 ノ用意アル旨訓 也 ル案文ヲ確定条約ト ラ ν タ 令ニ依リ ル 多数 《国間条約 ノ儘受諾 • 陳述セラ 候 シ テ署名 ハ最後 有スル政府 ス = 貴国 ル ν ノ用意ア 帝 ハニ合衆 政 ス 国 政府 ル 府 1 1

帝国 陳述 政府ハ本年五月二十六日付「マク セ ル 如 での去ル 四月提出 [セラ ν ヴェ タ ル 条約原案ニ 1 ட 閣下宛書翰 対 ス

条約 帝国政 ル ル ナル 帝国政府ノ了解 コトヲ欣快ト ニ署名方訓令ヲ発スル (府ハ右ノ了解ノ下ニ今般提示セラレタ ヲ以テ今般提議セラレタル修正ニ対シ衷心賛同シ得 スル旨貴下ニ通報スル ハ亜米利 1 加合衆国政府 用意有之候 ノ光栄ヲ有シ候 ノ了解 ル 案文ノ 1 - 実質上同 仍 儘 本 テ

最 国政府 = 最後ニ本大臣 此 対シ貴国政府ニ慶賀ノ意ヲ表セザルヲ得 ス 初ニ参与スベキー国タ ル モ 条約ガ必ズヤ全文明世 *>* 広ク ノニ有之候 一般ノ抱懐スル ハ貴国政府ノ提案ガ速ニ一般 ルヲ欣快トシ且簡潔ニシテ 界 願望ト明白ニ合致ス ラ 受諾 ス ル 所 ザ Ī 受諾 ル タ モ ル ベ ル ノ ヺ 企図 高遠 、二候帝 得 牛 ヲ B 確 = チ ル

右 回 [答申進旁本大臣 ハ 兹二 重 テ 貴下 = 向テ敬意ヲ 表シ候

敬具

和三年七月二十 $\dot{\mathsf{H}}$

務大臣男爵 H 中 義

亜 米利加合衆国 臨 時 代理大使

「エド ゥ 1 ン 工 ル • ネヴィ ル

付 記

大臣会見録 六十七

タ

IJ

来訪ヲ求メラ 七月二十日午後田 ν 中大臣 ハ 米国代理大使 「ネヴ 1 ルレ

交セラレタル 本日御来訪ヲ煩 提議ニ対シ御 = 回 ハ [答申 シ タ 上ク ル *>*\ ル 不戦条約締結 為ナリ ŀ テ右回答 = 関 ス 1 ル 書翰 貴国政 ラ手

モ 米代理大使ハ之ヲ 知 満足スル所ナラム グラシム 「ヘシト述 一読 ኑ \sim 認 シ タ メ ラ ル V 後同回答 唯 今 \exists 1) ハ 直 米国政府ニ = 華府 = 於テ 電 信 =

言葉伝 大臣 \exists 代理大使ハ国務卿ノ言葉ニ付其 = ŀ 際自分ニモ出席方ヲ希望セラレタ ŀ 添ヒ兼ヌ テー寸国務ヲ離レ ナラハト思フモ何分御承知ノ通リ自分ハ総理ヲモ ヲ聞ク ハ尚過日国務卿ヨリ へ置ク ル旨然ル ヘキ ミニテ国務卿 ・ヲ約 ヘク御伝言アリ 難キ事情ニアル シ 我方代理大使 モ 悦フ んと程 コ ル ・度キ旨陳ヘラレ ヲ以テ遺憾ナ 趣ニテ自分モ出 ŀ マテニ御考へ下 ナ Ξ 対 ル \sim シ本条約 ク従 アテ カラ貴意 兼ネ居 サ タ 来 調 速御 ν ル ル 印 シ = \exists

其上 大臣 Ξ ハ テ 更ニ右帝国政府回 関係国 代 表者 = モ 答 写ヲ送ル ハ 明二十 積リ 一日正午発表ノ ナ ル 旨付言 セ ラ = テ

207

(昭和三年七月二十 __ 日 澤田(廉三)電信課長 口 述

和3 **年**7 月 20 H 田在 |中外務大臣宛(電報) |米国澤田臨時代理大使より

118

我が方対米回答手交に際し 官補との会談に うい て ŧ スル国務次

7月21日後着 7月20日後発

第二五六号

貴電合第二七一号ニ

承セリ又自Our Lord ノ字句ニ付テハ自分モ気付キ 大臣渡仏不可能ナル趣ニ付テモ同大使館ヨリ電報ア 報接到シ長官ハ頗ル満足シ居レリ 考トシテ手交スルト共ニ右貴電御訓令ノ趣旨ヲ申 ニ付過日長官ニ話シ置キタルカ御申出 ル処同次官補ハ台日本回答ハ在東京米国大使館ョ 二十日「キャ ニ付右削除方取計フヘシト云ヘリ ッ スル」次官補ヲ往訪シ我方回 ト述へ次ニ二田中外務 ノ次第尤ト思考 |答写ヲ リモ電 入レタ タ IJ 了 スル

右会談ノ序ヲ以テ本官ヨリ本条約原調印国タル 国 [ノ参加 如何ナ ル 方法ニ依ラル ル考ナリ 十五 ヤ ŀ ケ

> シテ 尋ネタ 場合露国側ヨリ進ンテ巴里ニ於テ加入方ヲ希望スル場合 入 ル 生ヲ遅延セシムル惧アルニ付原調印国ハ従来話合来リ テハ自分ト 方ヲ招請 タリ依テ本官ヨリ シムルコトト 国数ノ余リ シ居ルモノモアル ハ是ヲ加入セシメ然ルヘシト考へ居レリ又支那ニ ヘセシムルコト タ 申上兼ネル次第ナリ 十五ヶ国ト ル ハ米露間ニハ国交関係ナキニ付米国側ヨリ其 ハ原調印国ノ調印ト同時ニ別個ノ文書ヲ以テ是ニ加 コトヲ切望シ居ル趣ニテ其ノ他ニモ同様ノ希望ヲ ル処 考案モナキ次第ナル スル訳ニハ行カサ ・シテ未タ攻究ヲ遂ヶ居ラサ ニ増加スルコト 一つキ シ右二国及此ノ際直ニ加入方ヲ望ム国ニ対 シテ可成速ニ其ノ批准ヲ得テ効力ヲ発生セ トセ 、露支両国加入ノコトニ言及セルニ同次 ナランカト ス ハ可ナラムカト思考シ居レリ ル ト述へ居リタ ,ルモ例へ 処西班牙及匈牙利ハ原調印 ハ右ニ付テハ当方ニテ ハ批准ノ関係上条約 察セラル 'n ハ前記ノ方法ニ依 ル ル処此ノ際原調印 ニ付此ノ 2ノ効力発 際何 ラ加入 ト述へ ハ 関シ ル タ 有 玉

仏ニ転電シ仏ヲ 転報セシ シテ英、 伊、 独ニ転電シ連盟帝国事務局

119 昭和3 年7月20 日 田中外務大臣宛在チェコスロヴ (電キ 報ア (型) (国本村公使より

I \exists の 対米回答要領報告

本プラハ 月 月 21 20 日日

第一五号

往電第一四号ニ関 シ

郵送スへ 二十日当国外務省ヨリ 伝達方依頼越ノ次第アリタ シ 回答文ノ写ヲ送付シ来リ右帝国 ル ニ付左ニ要領電報シ 全文ハ 政 府

平

和二貢献

ス

ル

1 機ア

ル

ヲ欣

フ

点ニ関シ協議セル次第アリタルカ今回米国政府カ右見解 諸国ノ参加ヲ必要ト認メ既ニ英、米、 ヒ其 ヲ容レテ現調印国 当国ハ本件交渉ノ当初ヨリ其ノ (ノ成果ノ重大ナルニ鑑ミ特ニ ノ範囲ヲ拡メタ ル 「ロカルノ」(脱?) (マご) ハ当国ノ最欣快 仏ノ代表等ト此 ŀ ス ラ

存条約 今回 本条約違反国ニ対ス ノ精神ニ背馳セ 1 提案 ハ連盟規約 サル ル 他国 __ モ P 1 カ ト認ム 責任解除 ル <u>ノ</u> 諸条約 7 外二 其 三国家ノ 他 自 既

チ

条約 答ニ依リ直ニ調印スル ク」ニ利益ヲ満足セムトスルモノヲ指シ之ヲ忌避ス シ侵入ヲ防禦スルノ自由アルコト 衛権カ新条約ノ規定ニ依リ何等ノ拘束ヲ受ケサ 勿論ニテ各国ニ自己ノ意志及必要ニ応シ外国 如上ノ見解ニ基キ当国 国家政策ノ具トシテノ戦争ト 八出 来得 ル限リ世界 1 , 準備ア ハ 的 本条約 ノ性質ヲ加味スル ル ハ 国家カ「エ 旨ヲ披瀝シ併 1 ハ当然ナリ 新提案ニ確定的 様希望 ゴ 1 攻撃 セテ イ コ ス セラ ル ኑ П 対 本 ッ

120 和 3 年 7 月 20 日 田中外務大臣宛はポーランド国際 元(電報)

松島公使より

ラン ドの対米回答につい

ワ ルソ 7 月 20 日後発

本 省 7月21日前着

↓正当防衛権ニ影響セサ 波蘭ハ左ノ諒解ノ下ニ米国案ヲ承諾 波蘭ハ不戦条約案ニ 対 シ十七日左ノ ル 趣旨 1 回 答ヲ発シ 第一五号

タ

ャ

ッ

二戦争ニ依リ国民的利益ヲ実現 利益ヲ喪失スル事 セ A ١ ス ル 国家 ハ本条約 ij

|||本条約ノ規定ト連盟規約 務ト セストノ規定ニ依リ ノ間ニ抵触無キ事 此 (戦争ヲ以テ国家政策遂行 = ノ結論ヲ 依り 連盟 (生み) 加 入国 ij. 負 担 ス 手段表

121 和3 年7月 20 日 田在 田中外務大臣宛任伊国松田大使、

-タリア の対米回答につい

別 1 ・タリ Ź の対米回答書和訳文

七三号

和三年七月二十日

伊

在

特命全権大使 松 \blacksquare 道 印

務大臣男爵 田 中 義一殿

四号ヲ以テ及報告置キタル処右回答書写当国外務省ヨリ「ケロッグ」最近ノ提案ニ対スル伊国政府回答ハ往電第 伊国外相ヨリ在伊米国大使ニ送付シタル不戦条約 不戦条約 ニ付玆ニ送付ス御査閲相成度シ ニ関スル 伊国回答書写送付 ジ件 介注電第七次約二関スル 入

手シタ

ル

(8月11日接受)

122

昭

和3

年7月(21)

日

田中外務大臣宛(電報)在英国佐分利臨時代理大使より

る英国各紙論調につい

ンド

第一四六号

政府カ前文ノ或ル句 処何レモ従来ノ論旨ヲ繰返スニ止マリ唯「タイムス」カ英 阿、新西蘭及印度ノ回答文ヲ掲ケ又概ネ社説ヲ 二十日ノ当地新聞ハ ノ効力ニ関スル法律的穿鑿ヲ拋棄シ 不戦条約ニ 関スル英本国及濠州、 掲 ア居レ タ ル

存セ 丰 ル ハ軍縮及仲裁裁判ニ進ム事 Ξ ・ヲ説キ ヲ 値セ 賢明 サ ル ・「ガー ナリ ル批評無シ ノミナラス緊要ナル ۲ デ シ其ノ回答 、ィアン」カ本条約ヲ価値アラシムル為 ヲ要スル ノ文意簡明ニシテ疑問 利益ヲ保護スルニ欠 旨ヲ述 ヘタ ル ハクル処無 外格別注 ノ余地ヲ =

米ニ 転電シ 仏 独、 連盟ニ 一郵送セ 1)

123 和3 年7月 21 日 田在 中チ 外務大臣 宛ヴ (電報)

Ť

会談に っ Ċ

、エコの

対米回答に関するベネシュ外相との

盟規約及「ロカル

ノ」条約ニハ何等影響ヲ及ホササル事

条約以外ノ方法ニテ確保スル事最モ良策ナル可シ将又連

ノ結果諒解ニ達スレハ我々ノ目的ハ達シタルヲ以テ之ヲ

外相ニ暗ニ本案ヲ何等カノ理由ニテ拒斥スルカ又ハ拒斥 化ノ最中ニシテ本条約ノ運命ノ危機ト思ハレシカ先ツ仏

仏訪問ノ際ハ仏ノ第一回回答ノ後米国

7 ル

対仏感情悪

白

独旅行中ノ活動ニ付尋ネタ

二同

外

相

スルト思ハルルハ甚々面白カラス本案ハ其ノ儘トシテ先

ツ独、仏

コリ

本案条項ノ解釈トシテ米国ニ質問ヲ発シ其

プラ 本 省 ハ 7月22日後着 21日後発

テ智ニ関ス 二十一日午前 不戦条約案ニ対スル我回答文仏ヨリ 左ノ通 ル 回答文ニ関シ 「ベネシュ」 外相ヲ 会談シタ 、訪問シ右ノ次第ヲ 、転電未了 ルカ要点何等御参考迄 ナ IJ シ が、年本使

原調印国 回答文第 ጉ 一項ニ関シ先ツ智国外交ノ シ テ招請 ロセラ ル ル ニ至リ 大成功ヲ祝シ同国 シ事情殊ニ 同外 柏

別

文

府 右前提ノ下ニ本条約ニ 中ニ記載セル同条約ノ解釈ヲ了承シ之ニ同意ヲ表シ併セテ ハ右不戦条約ニ関シ米国政府カ去ル六月二十三日付公文 Ξ 関スル 米国政府ノ最近ノ提案ヲ慎重審議セル 調印ス ル ノ用意アルコトヲ声明ス 伊国政

ムッ ソリー =

於羅馬 九二八年七月十五 H

て

英本国及び英国自治領政府の対米回答に関

本口 省 7 ·月21日前着 発

≓ 足トスル処 第二項 = 関 ナリト得意ニテ述へタ シ 「中立条約並 一般ノ 1) 既存条約ト 本案ト

テ

モー ナ

i

危機ヲ救フニ力アリタ

IJ

セ ラ ハ

分

1 カ

最 多

モ 少 カ

解決ニ達セントス

ルニ付自分ノ

此

斡旋 自

=

英二

テ米国大使ニモ右ノ点ヲ懇談シタリ今回本条約

ヲ避ケテ問題ノ

円満解決ニ利スル

処アル可キ旨ヲ主張シ

ニ参加セン事ヲ主張シ同調印国ノ全部之ニ参加

ガセハ議論

[モ亦之

ミナラス「ロカルノ」条約ノ調印国トシテ智国

表シ更ニ独外相ニモ同様進言是亦賛意ヲ表セリ依テ連盟

ヲ明白ニセハ妙ナリト進言シタルニ仏外相

ハ之ニ賛意ヲ

伊

=

郵送

也

1)

125

昭和3年7

月

25

日

田中外務大臣宛在ポーランド国松島公使より

?·並精神ニ付論スルヲ辞セサル旨当初ヨリ米国ニハ素ヨ^(ママ) ト疑ヲ挟ム点アラハ何時ニテモ条約文ハ素ヨリ其ノ解釈 触ス 此ノ点ヲ言明シ置キタリ リ英、仏等ニモ言明シ居リ従テ今回モ特ニ米国公使ニ 立条約、「チェッコ・スロバキア」羅馬尼、「チェッ 一致スル以上当然ノ解決ナリ若シ米国政府其ノ他ニ於 一致シ何等之ト抵触セサルモノニシテ連盟規約カ本案 ル スロバキア」「ユ」間ノ条約其ノ他一切ヲ包含セシメ 中立条約ノミナラス「チェッコ・ ル ハ是等ノ条約カ悉ク本案ノ条項、精神殊ニ連盟規約 モノニ非ス 1 スート ノ字句ニ付質問セ スロバキア」波蘭 ル ニ白耳 コ 中 ハ

三、第三項自衛権ニ付英、 原案ノ此 見解ヲ支持スルモノト信スト賞揚シ置キ且国家政策ナ モ同点ニ付予メ打合セアリタルヤト尋ネタルニ別ニ打合 ト述へ右二点ニ付智国ノ提議ヲ掲ケタル動機並英、仏 用語ノ甚タ曖昧ナルニ対シテモ政府部外ニ於テ同外相 「利己的利益ノ満足ヲ目的トス」トノ註釈ヲ付シタル 解釈ヲ掲揚セラレタル点ハ関係列国ニ於テモ同外相 |.ノ曖昧ナル点ヲ一層明瞭ナラシメタル効果アリ 仏ノ 回答ヨリ ŧ 一層明瞭 = 智 国 ۲ ハ カ ル 1

府モ充分諒解スルナラント付言シ置キタリ諸点ニ付大胆ニ最モ明瞭ニ意義ヲ決シタルコトハ帝国政タル迄ナリトテ又大ニ得意ナリキ本使ハ同外相カ以上ノ当然爾ク諒解スヘキモノトシテ一個ノ責任ニテ明白ニシセモ為ササリシカ右ハ当初関係列国ト自分ノ会談ニ於テセモ為ササリシカ右ハ当初関係列国ト自分ノ会談ニ於テ

関係諸国へ暗送ス

12 昭和3年7月24日 田中外務大臣宛(電報) 在米国澤田臨時代理大使より

不戦条約に関する米国各紙社説について

本 省 7月24日前着ワシントン 発

第二五八号

趣旨ヲ述ヘタルモノアルモ多数紙ハ本条約ノ成立ニヨリ直、日本各国回答ハ実質上当初ノ留保ヲ其ノ儘持続シ居レリトノハ米国ハ本条約ニ依リ損失スル処ノミ多シトナシ其ノ他ニハ米国ハ本条約ニ依リ損失スル処ノミ多シトナシ其ノ他ニノ各新聞ニ全文又ハ主要部分掲載セラル尚今日「チェコ」ノ各新聞ニ全文又ハ主要部分掲載セラル尚今日「チェコ」ノの答案約問題各国回答出揃フニ付ケ(我方回答ハ二十一日不戦条約問題各国回答出揃フニ付ケ(我方回答ハ二十一日

会ニテ採用セラレタル両党ノ政綱カ不戦問題ニ賛意ヲ表ス 官辺ニテハー般輿論ノ賛成並ニ本年六月共和党及民主党大 為シ上院ノ反対ヲ予想スル向アル趣伝へ居ルモノアル一方 尚本条約ハ米国ノ大陸外交問題ニ対スル超然主義ニ反スト 前記「トリビューン」ハ本条約成立ノ暁ト雖モ米国ハ海軍 グ」外交ノ勝利ナリト為スモノ少カラス尚華府 聞中ニモ 本件交渉ノ 円満且迅速ナル 進行ヲ 以テ「ケロッ 達スル為ノ大進展ナリト述へ居り尚共和党新聞ハ勿論紐育 ル旨報セラ ル事実ニ顧ミ上院ニ於テ左シタ ノ充実其ノ他国防ヲ忽ニスヘカラスト ニ戦争ノ絶滅ヲ期待シ得サルモ右ハ将来完全ナル平和ニ到 「タイムス」「ブルックリン・イーグル」等ノ反対党系新 ル ル反対無カ ノ趣旨ヲ述へ居レリ ル ヘシ 「ポスト」 ト認メ居

昭和三年七月二十五日

在波蘭

特命全権公使 松島 肇(印

外務大臣男爵 田中 義一殿

国政府ノ不戦条約提案ニ対スル波蘭政府ノ回答,不戦条約案ニ対スル波蘭政府回答ノ件

調ヲ総合スルニ左ノ如シ アルヘキ事ト首肯セシムルモノアリ而シテ波蘭諸新聞ノ論 国政府ノ回答ト異ロ同調ナルハ仏波両国ノ関係ニ鑑ミ然モ 国政府ノ回答ト異ロ同調ナルハ仏波両国ノ関係ニ鑑ミ然モ 本政戦電報シ置キタル処同回答全文ハ別添写ノ通ニ有之仏 米国政府ノ不戦条約提案ニ対スル波蘭政府ノ回答ノ趣旨ハ

ル結果
入レタル第二ノ提案ヲ為スト同時ニ適確ナル解釈ヲ加ヘタリ米国政府ハ其前文ニ修正ヲ加ヘテ仏国政府ノ意見ヲ取リ米国最初ノ提案ニ対スル各国政府殊ニ仏国政府ノ留保ニ依

存条約ニ基ク国家間 失闫国際連盟規約ト抵触セサル事等明瞭 |↑||自衛権ノ存立□||不戦条約違反者ノ条約ヨリ受クル ニ対シ米国政府カ満足ノ意ヲ表シタ 容レサル処ナリ右ノ点ヲ更ニ明言セル仏国政府最後ノ回答 ノ平和関係ヲ確保スル ルニ 鑑ミ仏国政府ノ ì モノ ナリ ナ 本条約 ル 事疑ヲ .利益喪 ハ現 回

公第一○九号

るポーランド各紙の論調につい

ポーランド政府の対米回答及び同回答に関

(8月18日接受)

127

和

3

年

8

月

6

H

田在 中ソ

中外務大臣・連邦田中

伊

 \sim

転電

セ

チ

ij

ン外相の

インタビュ

記事について

不戦条約はソ連邦包囲政策の一部なりとのチ

ラレ カ右ニ 本条約 セ ル ・テ只異 事 サ ナル ル ス 回 、国ニ先ンシテ米国提案ニ賛成シタ 毫 ケ タ ル ル モ 答 ハ タ ル 依リ本条約ノ道徳的特質ヲ曲解セシムヘキ疑義ヲ排 ī モ ヲ得タリ斯テ本条約 今日迄ノ外交文書ニ依ル交渉ニ依リ 限リ仏波両国 ヘカラス本条約加入ノ動機乃至思惑 ニシテ既得権及政治的現状維持 ハ独乙ノ政策ヲ脅威スル 波蘭 アル ル点ニ ル処へ前者カ国際連盟ナル 米国提案ノ趣旨ヲ超越スル ノ非戦宣言案ト全然内容ヲ同 ハ誠ニ不可解 1 、ミ存ス ハ之ニ署名スルモノニ非サル $\dot{\lambda}$ ナリ独乙国権党機関 第八回連盟総会ニ於 モ ノナリトテ不満 字句ニ触 ル独乙ノ一部 モ 三対 ノニ非 シク 蚏 八国ニ依 シ疑義ヲ挿 ル サ ニセラレ ル ス ル ハ宜敷若 事ヲ かテ採用 事ヲ 事 ル ノ声 Ξ 右仏 モ ij ナ テ異 記憶 故 タ ゚ヺ 1 A ル = モ 举 意 セ ル シ 国 処

テ排斥 然リ 右報告申進 平和 ト雖 ス } **ŀ** -協力ス ルモ 本条約 安定ト ス) ナ = ル ゝ 対スル ノショ 今日迄国際連盟ト離レタ ル 事ヲ 文証ス 開 保障ヲ確保シツツ戦争ヲ罪悪ト カ ١ ル 同時ニ大多数ノ国家 Ŧ 1 ナ 1) ル 米国カ平 ハ既得 和 シ 1

セ

ス サ

126 昭 和3 年8 月 4 日 田中外務大臣宛在独国長岡大使力

国各紙の論調に 英仏軍縮協定は不戦条約に対する牽制との うい

本べ ル 1) ン 8 8 月 月 5 4 日 ·後着

芒

第

今

= モ ケ

ノモア 付テハ仏国ノ 定ナルモノハ大体海軍ニ付テ ニ付進ミタル態度ヲ採レ 定ヲ以テ独カ不戦条約問題ニ於テ又寿府ニ於ケル 上院ノ 米国 ル ラレ居レル 束縛セラル 一般 回 シテ欧州 モ兎ニ角本協定ハ単ニ海軍縮少ノ ノ英仏協定ニ付テ 一八内政 ル処右ニ関シ外務当局 批准困難ナルヘシト論スル者モアリ ニ不満ノ意ヲ表シ或 カ独逸政府ハ何等協定ノ 主張ヲ容レタル ル事ナカ 上ノ関係ヨリ英仏ノ間 般問題ニ ル ハ モ 当国新聞紙 ルニ対スル ヘシ且英仏ノ態度ニ依リ ハ仮令 関係ヲ有ス モノトシ ハ英国ノ主張容レラレ陸軍 八八月三日「今回 「ケ 一ノ反動 = ハ 作ラレ ル 3 「テ 詳 テ種々新聞紙ニ報道 口 モ = ッ 細 関ス ・キス 文今回 グ 1 1 二 巴里 記事論 ナ ナ タ ル ル ጉ ý ノ英仏ノ協 ル 軍縮問題 事確 ・」ヲ有 Ŧ テ 既 ۲ ノ英仏協 シュ 、八米国 見 ニ来 説 成 カ 事 ヺ ル セ = モ 実 ル

要スル 目下 爾後 多牛 国従来 鞏固 = 題ニ付テモ其ノ対償ト 一対スル IJ <u>_</u> カ ス ショ 当地通過ノ際露国参加 居レ ニセセ } 種 処 ν 々 牽制ト認メラル独逸ハ米国今後 =) ク 「ケロッグ 斡旋 <u>一</u>ノ 今回 ン リ尚往電第六六号末段ニ 主張承認セラレタ アリ イゼマン」モ遂ニ巴里ニ赴ク事ニ目下 ノ討論アリ ト努メタ チ不戦条約 「セッ 1ノ協定ハ 中 ģ トノ事 ij 」来巴ノ結果ハ目下 尚又不戦条約 ト、バ ル 夕 ハモ米国 ¬ p ナ シテ戦債ヲ独逸ニ転嫁セ モ = ī 対スル 1) ック カ ル ニシテ「ライ · 事ヲ ル モノト思ハルル節アル 留保 ´」ニシテ且不戦条約ニ対ス ト ニ付テハ 話合セ当国政府ニ 」以来ノ各種ノ諒解運動 ノ関係ニ鑑ミ 関シ其ノ後外務当局ヨ = 関連シ英仏ノ フ ノ処予想困難 態度ニ期待ス ンランド 過日 ント ヮ 大 ノ処極リ - 」撤兵問 局 於テ オナリ カ之ヲ ・スル 立場ヲ ŀ Ħ Ľ. ル 14 処 タ 1) 1) ŀ 1

ル

第三三一

モ

スク

ワ

8 月 6

日後発

8月7日後着

調印ニ 値ヲ少 外国 備セ ム シテ 連邦政府ヲ招請ス ム セ 二月以来列国間ニ行 チチ 意向ヲ仄 ル ^ サ 包 テ五日ノ紙上 ス シ 為 モ応スヘキモ ンカ為ニシテ同条約ハ蘇連邦包囲政策ノ一部 ル ル 新聞殊二独逸 参加 ı ヘク カ ト カ其ノ趣旨 不充分ナモ ハ蘇連邦ヲ孤立ニ陥ラシメ蘇連邦ニ対スル戦争ヲ 論スル IJ ラシメタ 交涉 シ得 カ ン セ ハ 1) ~ 1 モ ニ不戦条約 シ 結果如何 ル ル 新聞記者 1 「ケ 1 新聞中ニ ハ 「ケ ナ 7 1 ヲ以テ蘇政府 カ至当ニシテ斯ル招請アラハ ハレ ・ロッ 云フ ルニ英仏等ノ ル タ 口 処列国ニシテ真ニ平和ヲ欲 ッ 三関スル蘇連邦政府ノ = = グ」案テサへ戦争ヲ絶無ナラシ ハ蘇連邦ヲ本件交渉ニ参加 ル = ルモノ 在 依 対ス グ ij ル 」ノ不戦条約交渉 テ列国 ハ必要ト ナ ル *>*> 勿論 附帯条件出テ益其 ル処之ニ蘇連邦ヲ招 「イ ン ナ ,招請ヲ 思考ス タ ル モ 1 不 ヴ 蘇政 ハ客年十 ・態度ヲ 希 戦 ル ナリ ュ 訂正 望 セハ蘇 条 最近 セシ \vdash ス 約 ラ 府 価 潍 表 ヲ 請 1

蘇連邦

諸国 根底ニ於テ社会主義国家ノ仇敵ナリ 議ヲ為シ「ブルジュア」列国ノ企画ヲ画餅 ミ容易ニ洞察シ得ル -」セムトスルニ在ル事軍縮会議ニ対スル フ 政府ヲ其ノ 労働階級ノ 目前ニ 於テ「ヂスクレ 処ナリ ŕ ・ナス 同国ノ態度 **「ブルジュ** 二帰七 シ メ 7 ヂ 以 三鑑 ッ テ

在欧米各大使ニ転電セ

128 和3 年8月7 日 田在 中ワ ·外務大臣宛 ·連邦田中大: 元(電報)八使より

連邦不戦条約に参加との情報について

モスクワ 8月8日 8 月 **7** ·日後発

往電 国政府ニ取 榜スル当国ノ主義ヨリ云フモ亦大国タル面目 = 真意ハ列国カ同条約ニ露国ノ参加ヲ慫慂 白トナリタル為国民ニ対ス ト雖モ同条約 敵対スル為ナリト宣伝スル素地ヲ作ラントスルニアリ 第三三一号不戦 リ苦痛ナ ノ性質ニ鑑ミ露国カ 条約 ル ヲ以テ独逸ヲ通シ参加慫慂方極力秘 ニ対スル ル 弁解トシテ同 「チ 除外サ チェ セ ル 一条約ハ サ IJ ョ ル ル ン コリ云フモ当ルハ平和ヲ標 `」会見談 コ ハ専ラ露国 ト 漸ク 然 明 ノ

> 在独大使へ転電シ同大使ヨリ英、 モ 使ニ語リタル所ニ依レハ同条約ノ文句ニハ多少ノ 密運動中ナリ 若シ慫慂アレ ١ ハ甘ンシテ調印スル意向ナル 情 報ア リ尚最近「リト 仏 伊、 ピ 米ニ転電 ノフ」カ某国 カ如シ 不満ア セ シ A ル 大

129 和3 年8 Ă **7**日 田中外務大臣宛な仏国安達大使より

仏国各紙論調に 不戦条約に関するチチ うい て I IJ ンの声明に対する

公第四八四

(8月30日接受)

和三年八月七日

仏

特命全権大使 安達 峯 <u>.</u> 郎 印

外務大臣男爵 田中 義一殿

不戦条約ニ関スル 「チチェ IJ ン Ĺ...

声

対スル新聞論調

テ 八 ル ス 処右ニ関シ 「ソヴィエット」一流ノ宣伝ニ過キスト為シテ取合 ル 月五日付「タス」通信ト 「チ チェリン」ノ声明ニ対シ当地 「タン 」ハ右ハ本件交渉ニ ・シテ伝 ハラ 諸新聞 レ 何等相談ヲ受ケ タ ル ハ概ネ之ヲ以 不戦条約 *>*\ = サ

本信写送付先 リト言ヒタル点ニ対シ「ラコウスキ 来モ本条約ニ加盟ヲ勧誘セラル 「チ」カ 「デバ」ハ「チ」ノ宣言ハ出鱈目ノ甚シキモノ ナ 、挙ケテ反駁ヲ加ヘタル上大ナル国際問題ニハ ル ハ フ」ノ遣口 シ テ右ニ関ス · ヲ 窮余ノ策ニ出テタ 不戦条約ニ署名シ得サリシ同連邦ノ 容喙セシメサ シ紛 「ソヴィエッ ル新聞切抜御参考迄ニ玆ニ送付ス(省略) ŀ v ・同様事件ノ真相ヲ誣フルモノナリト 在 ノ泣言ニシテ軍縮会議ニ於 「ソ /ルモノ ヴ ト」政策ノ根本目的 ル ノイエッ カ最良策ナリ ナリト評シタル ۲ ルコトナカル - 」大使 ・「」」事 ኑ 立場ヲ明ニセ 件等各種ノ 八平和維持ニ在 ァ セ ヘシ 後同連邦ハ ル リ コソ IJ ŀ シ ヴ 論 ۲ 例証 ント ッ ヴ イ シ 将 シ 1

エ

展シツツアル深キ歴史的

「プロセス」ニ依リテ決セラルル

モノナリ従テ資本主義国ハ社会上経済上相異ナル二様ノ制

事実ヨリ必然ノ帰納ヲナスヘキ

ナリ此ノ

点

=

突ニ依リテ決セラルルモノトハ思考セス此ノ争

ハ各国ニ発

主義ノ上ニ立ツ事ハ認ムルモ此ノ両制度ノ争カ国家間ノ衝 テハ吾人ハ米国ト「ソ」連邦トカ人類社会ノ全然相異ナル 「インタービュー」ニ対スル 世界ノ 態度ヲ 詳述シ 華盛頓

「ポスト」カ「ソ」連邦ト米国ト

ハ敵ナリト云ヘル事ニ付

約ト列国及「ソ」連邦」ト

題スル社説ヲ掲ケ「チチェ

1)

Ý

ル ン

モノアリ八月十一日ノ「イズヴェスチィヤ」ハ

タ

ービュー

| ニ付極メテ冷淡ナル

態度ヲ取リ期待ニ反ス

「不戦条

同政府類似ノ遣口並ニ同国現下ノ政情等ノ為列国ハ右

世界ノ輿論ヲ動シ自己ノ地位ヲ有利ニ転回

当国政府ハ往電第三三一号ノ

「イン

タ

1

ピュ

IJ

セ

ムト

・シタ

ルモ

「イ

130 和 3 年8月 11 日 田中外務大臣宛在ソ連邦田中大 元(電報)(使より

記事につい 不戦条約に関するチチ · ての イズヴ I エ スチヤ紙の社説 リンのインタビ

付米国外交カ充分考量ヲ払ハサル

ハ重大ナル欠点ノーナリ

評

シ独逸ノ

態度ニ付テハ伯林カ華盛頓ノ機嫌ヲ損

7

参加ヲ

可

ス セ

ル

サラ

度ノ共存スル

本 モスクワ 省 8 月 8月12日後着 日後発

第三四三号

之カ実現ノ為実際的方法ヲ講セサル トスル 内容 結果独逸ハ主義上 こけ条約 建前 3 「ソ」連邦 リ云 ^

ヘタ

ル }

後不戦

ハ締約国 ナリト述

ゝ

不参加

題ニ付更ニ慎重考量スヘキ スル 邦ニ対シ戦争セスト 等ノ立場ニ立チ交渉調印セム 条約参加 又ハ東欧ノ平和ヲ紊乱スル事ヲ「エンカレジ」ス 希望ヲ述へ現ニ其ノ同盟国波蘭ヲシテ 障条約ヲ有スル独逸ヲ指スノミナラス曽テ保障条約締結 ニ拘ラス之ニ冷淡ナル ヲ除外セストテ修正 対シ何等ノ 加奈陀政府ノ声明ニ言及シ最後ニ 確言スル仏蘭西ヲモ指ス ノ外無シ斯ル解釈ヲ欲セサル国ハ「ソ」連邦 ヲ希望セスト 義務ヲ負 ノ義務ヲ負フコトヲ欲セサル 後ノ条約前文締約国ノ承認セサ ハス換言スレハ不参加国ト戦争ノ ハ仮令形式ナリトモ列国カ ノ英国政府ノ附帯条件並ニ之ニ類 モノ モノト思考ス之「ソ」連邦ト保 トスル ナリ ŕ 用意アル事ヲ表明セ 「ソ」連邦カ列国ト 「ソ」連邦ヲ \sim IJ ルノ参加問 ソ モノト ル 事無 文撃シ 可 解 連 Ź ス 1 ル 対

131 和3年8月 23 日 田在 一中外務大臣宛(電報)「パリ佐藤連盟事務局長より 在欧米各大使ニ転電セ

IJ

杉村連盟事務次長との会談について不戦条約に関するドラモンド連盟事務総長と

八月二十二日付杉村連盟事務次長より田中外務

大臣宛

不戦条約に関する連盟政治部員との会談につ Į,

8月24日前着 8月23日後発

第一三四号

関シ 往電第一三〇号「ドラモンド」杉村公使会談中不戦条約 「ド」ハ

- 承認シタリシナラン ス フヘシ議定書モ若シ当時米国カ主張セシナラハ ヘク是ニ依リ規約第一五条ノ欠陥 本条約ハ実施ノ 上 ハ先年寿府議定書ト同 八消滅 セ 様 ル 7 各 モ 効果ヲ生 !国是ヲ) ۲ 云
- 三、英国政府ノ有ス 二、英国ノ対米回答ニ所謂特殊地域ト サル為説明セサリシナリ 点米国政府ニハ説明セルモ他国ニハ事態ヲ面倒ナラシ テ右ハ二十年前ノ英国声明ニ言及セル ル情報ニ依 レハ本条約ニ対スル米国上 ハ埃及及波斯湾 ルモノニ過 キス = シ
- 院ノ形勢不利ナルヲ以テ連盟総会又ハ理事会ニ於テ事件 論議ハ此 際可 成之ヲ避ケ米国上院批准後ニ譲リ 度キ

右英、米大使ニ転電 意向ナリト述へタ 記 シ仏、 ル 趣ナリ何等御参考迄 独、 伊、 白各大使ニ暗送 セ IJ

杉村連盟事務次長

不戦条約問 題

戦条約ニ対スル 二十日政治部員会合ヲ催シ タ ル 時 「ケ p ッ グ」 提案不

半開国若ハ支那ノ ハ不合理ナリ又行動ノ自由ニ関スル英ノ留保ノ如キ モ 各国政府ノ 於テハ連盟規約以上ニ重大ノ関係ア リ況ヤ不戦条約ト云フカ如キ国防上政治上或 交渉ア 国ノ全部ニモ適用アルヘキ筈ナルニ若シ之無シト 対スル仏ノ留保ノ如キ リト ノナリトノ説出テタルモ然ラハ中立条約及現行条約 ナリ留保ハ之ヲナシタ ,或国 述ヘタルニ対シ夫ハ条約解釈論上普通認メ 1 ル 3 他ノ国モ当然之ニ均霑シ得 留保 カ特種ノ 如キヲ目的トスルモノナレ ハ締約国全部之ニ均霑シ得 権利ヲ保 ハ仏ノミナラス斯ル条約 ル国ノミ其利益ニ浴シ得 有シ他国ニ之ヲ認 こへキ筋 ル 条約ヲ結 が斯 合ノ ^ + ル フェ モノ ル国 ノ締 メ サ ヘキ モ ス モ 也 ル

ナスハ不都合千万ナリト述

(n) 赴キ不在ナリ) 二十一日「レンテフィンク」独外務省ノ電話 トテ内話スル所次ノ モ独人「レンテフィ 対シ伊国人「ロドロ」ハ真先ニ其通リナリト述ヘタ 留保ニ依リ依然容認セラルヘキモノナリト云へ 且ツ連盟カ寛容スル戦争ノ場合 如 ンク」ハ之ニ反対シ其儘別レタリ シ(目下 「ヂュフー こ、仏、 白ノ留保及英 ル」伯林 17結果ナ ル =

平和議定書ト異ラス曽テ熱心ニ議定書ヲ支持セル 独ノ見ル処ニテ カ将来続々条約ニ加盟スルニ至ラハ遂ニ「プ ル」復活ト同一ノ効果ヲ収 八不戦条約 ハ実際上ノ ヘムヘシ 結果ニ於テ寿府 П 小国 1 コ

- 英カ「プロト 此点事実上妨 ハ制裁ニ関スル規定ナケレハコノ点ニ不満ヲ有ス然 仏ハ本来ハ「プロトコー モ仏ト其盟邦トノ間ノ現行条約ヲサヘ留保シ置 1 ナキヲ得 ル」ニ不賛成ナル ヘシト思惟ス ル」ニ賛成ナル ハ欧州 ル モノ モ不戦条約 大陸ニ対 ノ如 シ 力
- 務ヲ課 「ロカ セ ラ ル ル ル 」協定ニ依リ負へル義務以上ノ参戦ノ義 \exists ŀ ヲ 好 マ サ ル ŀ 欧州以外ニ ハ不戦

定ナキヲ以テ欧州大陸ノ関スル限リ之ニ賛成シ欧以外 義務ヲ及ホスヲ欲 セサ ル 為ナル モ不戦条約ニハ制裁規

対 シテ ハ自由行動ヲ留保ス

義務的 判所ノ応訴義務ヲ応諾シ 「プロ メテモ 第一条ハ自国領土ニ外国軍カ侵入スル 規約第十五条第七項及第八項ノ欠陥 方針ニテ今回ノ不戦条約モ之ヲ「プロトコー 衛権行使以外ノ戦争行為ニハ凡テ適用セラレ得ト ナリ 飽迄其効力ヲ主張スル考ナリ即チ第二条ニ依 独ハ軍縮ノ関係上不戦ヲ利 クモ独 トシテハ 実際上妨 ナケレ 「モンロー」主義ノ名ノ下ニ或程度ノ自由行動ヲ 可 ナラシムルコトモ賛成ニテ巳ニ常設国際司法裁 尤モ欧州大陸以外ノ問題ハ暫ク之ヲ考慮ノ外 ナリトナス次第ナリ ŀ シ紛争ノ . = 1 ハ英、 ハ補塡セラル 場合ニ対スル ルーニモ 平 米ニ 対シ所 和 ルト 的 賛同 |解決ヲ ij ヘク 連盟 ノ意 考 認 自 = 1

盟条約 去リナカラ仏カ中立条約ノ名ノ下ニ留保セ モ不戦条約 極力反対スル考ニテ独ト ハ主ト ト中立条約又ハ現行条約ト シテ独ヲ仮想敵 シテハ仏ノ最後ノ公文ニ依 成トナスモ ・ノナレ ノ両立ヲ単 ン ハ之ニ ト ・スル Ξ 確 ル ハ同

> 意向ナリ云 認スル意味ノ 文句 ኑ ナ 1) 居 V ハ之ヲ留保 ጉ

ンテフィ ンク」 更ニ語ヲ次 1 テ \exists

- = 国上院批准拒否ノ可能性一層多キヲ加フカ ナリ尤モ露加入ノ結果不戦条約ノ政治的性質一変シ米 盟国ノ連盟ニ対ス 後ハ此ノ虞全然ナキニ至ルヲ以テ露ノ不戦条約参加 先般「ハースト」及「フロマジョ 付伯林ハ熱心ニ其利益ヲ指摘シ之ヲススメ居 連盟規約第十条及第十七条第三項 ル地位甚タ不利ナ オ」カ ルニ不戦条約 ノ規定ニ依 ハーモ思ハ ー ガ ウ ル ź 次第 加 ル
- 会談シタ 合米国之ニ加ラス又若シ理事会ニ於テ全会一致ノ決 ス之ニ反シ条約国タル他ノ連盟国カA 不戦条約上妨ナカルヘキカ条約 他ノ条約加盟国タル連盟国カAヲ膺懲スルハ果シテ 不戦条約ニ加入スル連盟国タルAカ条約ニ加入セ 力アリ従テAカBヲ攻撃スル 連盟国タルBヲ攻撃シタルカ為規約ノ規定ニヨ ス従テ各国何レ ル際最モ問題ト ・モ規約 ナリタル点ハ次 ハ条約ノ規定ト牴触セ 精神ヲ体シA ハ締約国間 ガラ膺懲ス ノ如 ニノミ効 ヲ膺懲 シ ル場 IJ サ

望全ク失 カ 於ケル パノ手段 モコ カ如キ必 場合ニ米 時ニハ果シテ不戦条約違反ニアラサ ハル 米ノ中立問題等ニカラミ不戦条約 国際戦争カ或連盟国数国ニ依リ行 ŀ ハラサ シテノ戦争ト スシ ル ノ好意的中立ヲ確保 虞ナキ ń ハ勿論ナリ)タル モ一般国際的制裁ト 'n - 認メ得 ル可能性ナキ セ 時ハ之ヲ国 ン -見做 ۲ ス ル = ハ ル シ 依リ 英 レ カ カ 海上 [家政 ラ (米 少 サ カ ク

(1) 致 英ノ留 戦争ノ 右ニ 一条第一項、 以テ ニモ及 コ モ 対シ 国際的性質ヲ有スト見テ可ナラン又カカ 決定シタル 決定ナキ時 形式ハ防禦的ニシテ其目的ハ国際的性質ニア サ タ へ明カ 「ガウ ハサル ル 自 L由行動 戦争ハ 十六条第二項ノ場合ニ理事会全会一 ヘシト ŀ ス」ハ少クト ・ナレ 自由行動並 タト 1 ハ一概ニ之ヲ条約違反ト ノ意見ニ一致シタル 解釈ヲ へ米ニ於テ之ニ加 モ理事会ノ全会一致ヲ 広 ニ第十三条第四項第 ムメ 規約 第 十条、 趣 でナリ ル場合 ハラス 認 第 A

> モノトナスハ之ヲ承認シ得ス(英人「アブラハム」モ請ヲ拒絶シタル非連盟国ニ対スル戦争迄ヲモ意味スル 英国政府ノ真意ハココニ在ラスト云フ) 会一致ノ報告ニ従ハサル国ニ対スル戦争及理事会ノ招 十五条第六項第十七条第三項即 仲裁判決又ハ理事会全

 ν ナル字句ヲ避ケ「規定」ト漫然述へ白カ連盟規約ニヨ 「権利」ナル字句アリ又仏国政府最後ノ公文ハ「義務」 リ連盟国カ保有スル権利ノ全部ヲ留保シ仏カ連盟規約 右ニ対シ 白国政府ノ 公文 ニハ「義務」ノ ンク」ハ二十二日伯林ニ招致セラ 規定全部ヲ留保シ居ル ハ独外務省モ頗ル狼狽シ居ル ゼマン」ニ同行スル 筈 如ク解シ得ヘシト モノ v 巴里 如ク フレ = ノ点ニツキ 3 モ ンテフ ナラ ¬ ス

以上ノ カ如 メンカ為研 丰 口吻 ニッキ 究スル 含置 ハ毫モ之ヲ漏ラサ ラ 当方ヨリ帝国 乞 ノ態度ニ テ議論ヲ上下 政府 ス唯問題ノ実体ヲ正確ナ ノ御見解等ニ累ヲ シタ ル 次第 ナ 及 ラ

シ ス